奈良市埋蔵文化財調査概要報告書

平成４年度

１９９３年

奈良市教育委員会

奈良市埋蔵文化財概要報告書　平成４年度　正誤表

ページ	行	誤	正
本文目次	23行目	十二坪	五坪
図版目次	17行目	十二坪	五坪
〃	11行目	左京	右京
平成4年度発掘調査一覧	247	大宮七丁目	大宮町七丁目
〃	257-3	月 八坪	月 二坪
〃	267	~~376.5㎡~~ 545㎡	555㎡
1	第236次	宝京	宝京
5	30行目	SK04	SK03
10	32行目	1は加賀藩、2は二条口藩邸	1は二条口藩邸、2は加賀藩邸
19	18行目	蔵少	蔵小
~~23~~ 22	16行目	小郡丸底壺	小郡丸底壺
25	1 8行目	蔵少記字が、両端とも欠損しもとの形状は不明	蔵小記字が、もとの形状は不明
〃	9行目	4は現存長18.7cm、幅1.7cm、厚さ1.3cm	4は現存長14.0cm、幅1.5cm、厚さ1.2cm
〃	10行目	肥手	肥手
35	図版タイトル	(1/4 12・23・27 1/8)	(1/4 12・23・27のみ1/8)
37	23行目	ルビと我仏及び	心及びと形
41	No. 64	解読不可能	解読不可能 ・
〃	No. 72	文不鮮明	文鮮明
〃	No. 91	「例」記字	焼文と重文が足 「例」記字
42	No. 125	文判可三蓋	文判三蓋
〃	No. 131	A-	A-1
〃	No. 131	No. 132	No. 133
〃	No. 133	No. 133	No. 131
45	3行目	十個	十個坪
46	10行目	SA14～SA20	SA14・SA20
〃	34行目	古墳	古墳
46右図	東西断面 (Y軸)	-17, 060、-17, 070、-17, 080 -17, 090、-17, 100、-17, 110 -17, 120、-17, 130、-17, 140 -17, 150、-17, 160	-18, 060、-18, 070、-18, 080 -18, 090、-18, 100、-18, 110 -18, 120、-18, 130、-18, 140 -18, 150、-18, 160
50	1行目	小郡丸底壺	小郡丸底壺
〃	〃	小郡脚台	小郡脚台
〃	19行目	小郡丸底壺	小郡丸底壺
〃	22行目	小郡脚台	小郡脚台
64	本文タイトル	平城宮左京五条六坪十五・十六坪 第252次	8 平城宮左京五条六坪十五・十六坪 第252次
65	5行目	SK12	SK09
〃	10行目	暗土出土	暗土出土
67	19行目	文角宝 [illegible]	文入永宝
71	1行目	住居寸法寸法出	住居寸法出
72	33行目	第3発掘区	発掘調査区
〃	平面図	10cm	10m

ページ	行	誤	正
74	4行目	7/ 第74次調査	7/11 第74次調査
79	24行目	白磁皿(17)、青磁皿(18)	白磁皿(17)、青磁皿(18)
82	図1)	1) 表土部分	1) 表下部分
83	本文タイトル	13 平城宮左京三条三坪十二坪 第259次	13 平城宮左京三条三坪五坪 第259次
〃	4行目	十二坪	五坪
〃	12行目	十二坪	五坪
〃	周辺発掘図	1m	100m
83	周辺発掘図		(1/5000)
84	図1)	十二坪	五坪
〃	図2)	十二坪	五坪
85	5 6行目	幅12.5cm	幅125cm
85	土層図	3. 黄褐色土(床土)	3. 黄褐色土(床土)
87	7行目	図2	図1
89	11行目	深さ0.6-0.5	深さ0.3～0.5
〃	19行目	東南角部	東南角部
90	4行目	巻から約26.8m	巻から3分の2
〃	16行目	になる	にする
100	土層図	3. 暗赤褐色土(床土)	3. 暗赤褐色土(床土)
107	5行目	545cm ~~376.5m²~~	555cm
111	22行目	安良井-D)	安良井-D
112	発掘図		(1/200)
115	4行目	7月11日	7月20日
118	15行目	6m	1.6m
〃	18行目	0.3m	3.0m
〃	遺構平面図	第252次調査 遺構平面図	第252次調査 遺構平面図(1/200)
121	14行目	基盤する	基盤として
122	4行目	寺板	寺院
〃	21行目	塑地	宅地
130	13行目	黄水門のことである。	黄水門のことである。
〃	24行目	ほとんどのことであるから、	ほとんどのことであるから、
〃	26行目	少なからず	少なからず
〃	図2)	橿原考古学研究所1985	橿原考古学研究所1985巻
140	14行目	3は	6は
146	No. 103	平城宮北方	平城宮北方
図版3		7. 土器埋納土坑SX156	7. 土器埋納土坑SX164
図版33		6. 井戸SE08 (さから)	6. 井戸SE01 (さから)
図版34		(右ぶち)	(左ぶち)

奈良市埋蔵文化財調査概要報告書

平成４年度

１９９３年

奈良市教育委員会

第258次調査出土石製合子

第249次調査出土石鏃・石杵

第266次調査出土銅鏡

序

本報告書は、奈良市教育委員会が平城京跡をはじめとする市内の遺跡で実施した発掘調査について、39件の概要報告を集録したものです。調査の規模に大小がありますし、取り扱った時代も様々ですが、いずれの調査も相応の成果を得ることができたと考えています。

ふりかえると、ここ十数年来、民間主導の開発に対応すべく多くの発掘調査を実施してきたのですが、昨今の急激な経済情勢の変動の中で、調査の主だった動機が大規模な公共事業に伴うものに変わってきたと考えます。このような動きの一方、歴史的都市における景観論争や町並み保存運動に代表されるような文化遺産継承の問題が盛んに論議されているところでもあります。こうした中で、遺跡をいかに保全し、市民生活のなかに位置付けるのか、どのようなかたちで後世に引き継ぐのか、これまで以上に先を見据えた真摯な議論が必要かと考えています。

さて、本年度の調査のうち近鉄西大寺駅南およびJR奈良駅周辺の区画整理事業に伴う調査は、いずれも昭和63年度以来継続して行っているものです。本市教育委員会が実施した調査中で、最も大規模で、まとまった成果をあげつつあります。今後、調査を継続して行く中で、こうした成果をいかにまとめ、活用するかが課題になると考えます。旧市街地では寺院関係の遺跡のみならず、太平洋戦争中の防空壕跡を検出するなど、市民生活の一端を跡付けることができました。また、史跡大安寺旧境内では杉山古墳地区の保存整備計画にそって鋭意調査を進めてきたところです。その他、本年度実施の調査成果については本文中に詳述しておりますが、まだまだご批判の余地もあろうかと存じます。今後のご鞭撻を乞う次第です。

最後になりましたが、調査から本書の作成にいたるまでご指導、ご鞭撻をいただきました奈良国立文化財研究所、奈良県教育委員会、奈良市文化財保護審議会をはじめとする関係諸機関の各位、調査にご理解とご協力をいただきました土地所有者の皆様方に厚くお礼申し上げます。

平成5年3月

奈良市教育委員会

教育長　久保田　正一

例　　言

1　本書は、平成４年度に奈良市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の概要報告を集録したものである。また、昨年度に実施した発掘調査のうち平城京第236次調査、第246次調査、南紀寺遺跡第３次調査の概要報告を併せて掲載した。

なお、本年度の発掘調査のうち平城京東市跡推定地第13次調査は別に概要報告書を刊行した。また、史跡大安寺旧境内第53次調査（史跡大安寺旧境内保存整備事業に関わる発掘調査）については整備事業完了時に報告する予定である。

2　発掘調査は下記の体制で実施し、各調査の担当者は発掘調査一覧に示した。

社会教育部文化財課　　課長　小林謙一

埋蔵文化財調査センター　所長　福本健司

主任　蔵内康良　主任　森下恵介

技術吏員　西崎卓哉　中井　公　篠原豊一　立石堅志

三好美穂　森下浩行　鎌方正樹

技術員　松浦五輪美　武田和哉　安井宣也　秋山成人

関野　豊　原田憲二郎　池田裕英　久保邦江

久保清子　宮崎正裕　中島和彦

3　発掘調査と本書の作成にあたっては奈良国立文化財研究所、奈良県教育委員会、奈良市文化財保護審議会など関係諸機関からご指導とご協力をいただいた。記して感謝いたします。

4　発掘調査と出土遺物整理作業には、下記の方々の協力があった。

浅田直美　安達志津子　荒川　茂　有馬三喜子　有吉文子　岩下和江　上原康子

梅木繁一　浦元由紀子　鮫原啓介　恵良恭子　大久保洋子　大倉真規子　太田景子

太田圭郁　奥田維子　奥田秀吉　岡崎あき子　加奥　勝　角谷和美　金戸康子

河岸美幸　喜多美寿子　北村　進　木村喜代之　木村嘉宏　小西綾子　近藤詔子

西条利男　斎藤和子　榊原正美　塩野谷八十布　澁谷富子　島軒　満　杉岡克子

杉岡雪子　杉本奈津子　鈴木佐希子　瀬尾真由美　芹川順子　芹野恒代　瀧田　勧

多久裕三　田口奈津江　竹村あいこ　辰田吉弘　玉林尚子　辻　俊浩　辻川哲郎

徳岡香恵　仲井光代　中岡泰子　中川　憲　仲川裕美子　中島満寿江　長原　巨

中宮博文　仲村繁夫　中村容子　根上直子　西山　治　信里芳紀　花岡京子

原田章英　林　健太郎　坂東剛子　福田米光　藤沢辰雄　藤本博子　前坂尚志

松尾史子　松岡愛子　松田繁春　松田幸男　松田十三日　松村茂治　松本和彦

松山径子　水上佐保　村松京子　山前智敬　山原　明　山村光子　吉川直子

渡辺典子

5　各発掘調査の次数は、奈良市教育委員会が実施した調査に付した、遺跡ごとの通算次数である。

6　本書の執筆は埋蔵調査文化財センター職員が分担して行い、文末に文責を明らかにした。

7　平城京第246次調査、第249次調査、第256次調査、第262次調査については、下記の方々から科学分析の報告をいただいた。記して感謝いたします。

金原正明（天理大学附属天理参考館）　金原正子（環境文化研究所）

安田博幸　金杉直子（武庫川女子大学）

清水　晃（奈良女子大学）

中野益男（帯広畜産大学）

中野寛子　明瀬雅子　長田正宏（株式会社ズコーシャ総合科学研究所）

8　平城京第236次調査出土木簡の釈読にあたっては舘野和己氏（奈良国立文化財研究所）のご教示とご協力をいただいた。平城京第247次調査出土の柿経について、経典の検索にあたっては藤澤典彦（元興寺文化財研究所）、木下密運（奈良大学）、保存処理にあたっては岡田文男（京都市埋蔵文化財研究所）の各氏のご教示とご協力をいただいた。また、史跡大安寺旧境内第54・55次調査で検出した杉山古墳外堤の葺石についての岩石種鑑定にあたっては橋本清一（京都府立山城郷土資料館）、横山明生の各氏のご協力をいただいた。記して感謝いたします。

9　本書で使用した遺構の分類記号や遺物の名称、型式は奈良国立文化財研究所および奈良市教育委員会の刊行物に準拠している。ただし、遺構番号は各調査ごとに付した仮番号である。

10　本書の遺構図、土層図に示した座標値は国土調査法に定める国土方眼第Ⅵ座標系によっている。標高は海抜高である。

11　本書の編集は、小林謙一の指導のもとに埋蔵文化財調査センター職員の協力を得て、西崎卓哉が担当した。

本文目次

Ⅰ　平城京跡・菅原東遺跡・柏木遺跡の調査

1　近鉄西大寺駅南土地区画整理事業に伴う調査……1

(1)　平城京右京三条三坊三坪・菅原東遺跡の調査　第236・236－2次……4

(2)　平城京右京三条三坊二坪・菅原東遺跡の調査　第256次……16

平城京右京三条三坊二坪ＳＸ162内堆積土の花粉分析……26

2　平城京朱雀大路の調査　第246次……28

平城京朱雀大路東側溝内堆積土の微遺体分析……30

3　平城京左京三条三坊三坪の調査　第247次……32

4　平城京左京一条四坊四坪の調査　第248次……43

5　平城京左京五条一坊十三・十四坪・柏木遺跡の調査　第249次……45

柏木遺跡から出土した石杵に付着する赤色顔料物質の微量化学分析……52

平城京左京五条一坊十三・十四坪・柏木遺跡の微遺体分析および樹種同定…54

東一坊大路西側溝採取の珪藻遺骸……58

6　平城京右京三条四坊四坪の調査　第250次……60

7　平城京左京四条六坊一坪の調査　第251次……62

8　平城京左京五条六坊十五・十六坪の調査　第252次……64

9　ＪＲ奈良駅周辺地区土地区画整理事業に伴う調査……69

(1)　平城京左京四条四坊十五・十六坪　第253次……70

(2)　平城京左京四条五坊五・六坪　第268次……74

10　平城京左京八条三坊三坪の調査　第254次……76

11　平城京右京三条三坊五坪の調査　第255次……77

12　平城京左京五条七坊六坪の調査　第258次……78

13　平城京右京三条三坊十二坪の調査　第259次……83

14　平城京左京二条四坊三坪の調査　第260次……85

15　平城京右京三条二坊一坪の調査　第261次……87

16　平城京左京三条二坊十六坪の調査　第262次……88

平城京左京三条二坊十六坪から出土した土器に残存する脂肪の分析……93

17　平城京左京六条二坊九坪の調査　第263次……99

18　平城京左京二条五坊八坪の調査　第264次……100

19　平城京左京八条一坊十六坪の調査　第265次……102

20　平城京左京四条四坊五坪の調査　第266次……103

21　平城京左京二条四坊十六坪の調査　第267次……107
22　平城京左京三条六坊五坪の調査　第269次……109
23　平城京左京四条三坊十二坪の調査　第270次……112

Ⅱ　寺院跡の調査
1　史跡大安寺旧境内の調査
(1)　第49次の調査 ……114
(2)　第50次の調査 ……115
(3)　第51次の調査 ……116
(4)　第52次の調査 ……118
(5)　第54・55次の調査 ……119
(6)　第56次の調査 ……123
2　元興寺旧境内の調査
(1)　第35次の調査 ……125
(2)　第36次の調査 ……126
(3)　第37次の調査 ……127
3　新薬師寺旧境内推定地の調査
(1)　第４次の調査 ……132
(2)　第５次の調査 ……133

Ⅲ　その他の調査
1　南紀寺遺跡の調査　第３次 ……135

Ⅳ　小規模確認調査・試掘調査・工事立会
1　小規模確認調査・試掘調査 ……143
2　工事立会 ……143

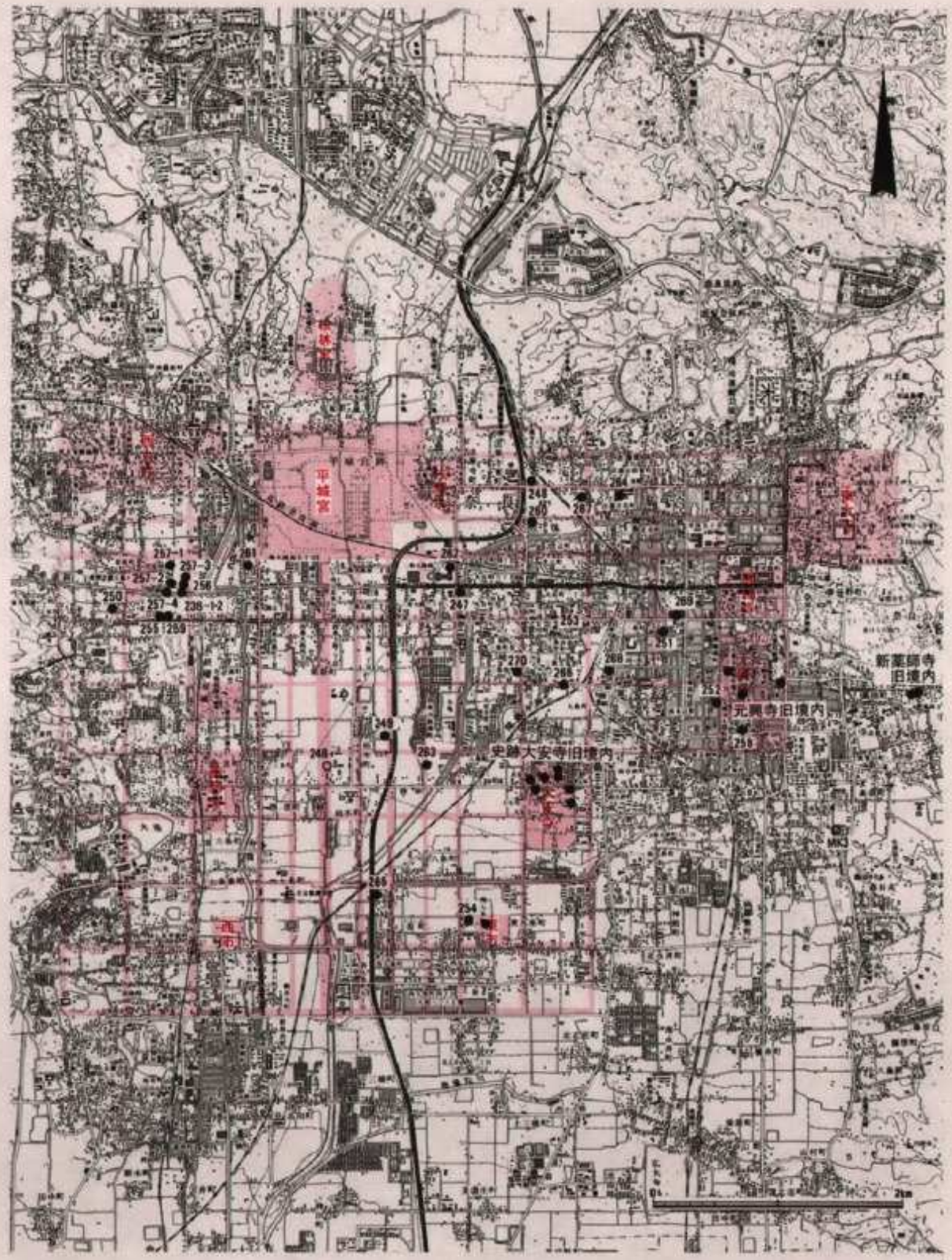
図版目次

巻首図版1　第258次調査出土石製合子
巻首図版2　第249次調査出土石釧・石杵
　　第266次調査出土銅鏡
図版1　平城京右京三条三坊三坪　菅原東遺跡　第236・236－2次　(1)
図版2　平城京右京三条三坊三坪　菅原東遺跡　第236・236－2次　(2)
図版3　平城京右京三条三坊三坪　菅原東遺跡　第236・236－2次　(3)
図版4　平城京右京三条三坊三坪　菅原東遺跡　第236・236－2次　(4)
図版5　平城京右京三条三坊三坪　菅原東遺跡　第236・236－2次　(5)
図版6　平城京右京三条三坊二坪　菅原東遺跡　第256次　(1)
図版7　平城京右京三条三坊二坪　菅原東遺跡　第256次　(2)
図版8　平城京右京三条三坊二坪　菅原東遺跡　第256次　(3)
図版9　平城京右京三条三坊二坪　菅原東遺跡　第256次　(4)
図版10　平城京右京三条二坊二坪　菅原東遺跡　第256次　(5)
図版11　平城京右京三条三坊二坪　菅原東遺跡　第256次　(6)
図版12　平城京朱雀大路　第246次　(1)
図版13　平城京朱雀大路　第246次　(2)
図版14　平城京朱雀大路　第246次　(3)
図版15　平城京朱雀大路　第246次　(4)
図版16　平城京左京三条三坊三坪　第247次　(1)
図版17　平城京左京三条三坊三坪　第247次　(2)
図版18　平城京左京三条三坊三坪　第247次　(3)
図版19　平城京左京三条三坊三坪　第247次　(4)
図版20　平城京左京一条四坊四坪　第248次
図版21　平城京左京五条一坊十三・十四坪　柏木遺跡　第249次　(1)
図版22　平城京左京五条一坊十三・十四坪　柏木遺跡　第249次　(2)
図版23　平城京左京五条一坊十三・十四坪　柏木遺跡　第249次　(3)
図版24　平城京左京五条一坊十三・十四坪　柏木遺跡　第249次　(4)
図版25　平城京左京五条一坊十三・十四坪　柏木遺跡　第249次　(5)
図版26　平城京左京五条一坊十三・十四坪　柏木遺跡　第249次　(6)
図版27　平城京右京三条四坊四坪　第250次　(1)
図版28　平城京右京三条四坊四坪　第250次　(2)
図版29　平城京左京四条六坊一坪　第251次　(1)
図版30　平城京左京四条六坊一坪　第251次　(2)
図版31　平城京左京五条六坊一五・十六坪　第252次　(1)
図版32　平城京左京五条六坊十五・十六坪　第252次　(2)
図版33　平城京左京五条六坊十五・十六坪　第252次　(3)
図版34　平城京左京四条四坊十五・十六坪　第253次　(1)
図版35　平城京左京四条四坊十五・十六坪　第253次　(2)

図版36　平城京左京四条四坊十五・十六坪　第253次　(3)
図版37　平城京左京四条四坊十五・十六坪　第253次　(4)
図版38　平城京左京四条五坊五・六坪　第268次　(1)
図版39　平城京左京四条五坊五・六坪　第268次　(2)
図版40　平城京左京八条三坊三坪　第254次
図版41　平城京左京三条三坊五坪　第255次
図版42　平城京左京五条七坊六坪　第258次　(1)
図版43　平城京左京五条七坊六坪　第258次　(2)
図版44　平城京右京三条三坊十二坪　第259次
図版45　平城京左京二条四坊三坪　第260次
図版46　平城京右京二条二坊一坪　第261次
図版47　平城京左京三条二坊十六坪　第262次　(1)
図版48　平城京左京三条二坊十六坪　第262次　(2)
図版49　平城京左京三条二坊十六坪　第262次　(3)
図版50　平城京左京三条二坊十六坪　第262次　(4)
図版51　平城京左京三条二坊十六坪　第262次　(5)
図版52　平城京左京三条二坊十六坪　第262次　(6)
図版53　平城京左京三条二坊十六坪　第262次　(7)
図版54　平城京左京六条二坊九坪　第263次
図版55　平城京左京二条五坊八坪　第264次
図版56　平城京左京八条一坪十六坪　第265次
図版57　平城京左京四条四坊五坪　第266次　(1)
図版58　平城京左京四条四坊五坪　第266次　(2)
図版59　平城京左京二条四坊十六坪　第267次
図版60　平城京左京二条六坊五坪　第269次
図版61　平城京左京四条三坊十二坪　第270次
図版62　史跡大安寺旧境内　第49次
図版63　史跡大安寺旧境内　第50次
図版64　史跡大安寺旧境内　第51次　(1)
図版65　史跡大安寺旧境内　第51次　(2)
図版66　史跡大安寺旧境内　第52次
図版67　史跡大安寺旧境内　第54次
図版68　史跡大安寺旧境内　第55次
図版69　史跡大安寺旧境内　第56次
図版70　元興寺旧境内　第35次
図版71　元興寺旧境内　第36次
図版72　元興寺旧境内　第37次　(1)
図版73　元興寺旧境内　第37次　(2)
図版74　元興寺旧境内　第37次　(3)
図版75　新薬師寺旧境内推定地　第4次
図版76　新薬師寺旧境内推定地　第5次
図版77　南紀寺遺跡　第3次　(1)
図版78　南紀寺遺跡　第3次　(2)
図版79　南紀寺遺跡　第3次　(3)
図版80　南紀寺遺跡　第3次　(4)
図版81　南紀寺遺跡　第3次　(5)

次数	遺跡名	調査地	調査期間	面積	届出者・届出内容	担当者
236－2	平城京右京三条三坊三坪 菅原東遺跡	菅原東町35－1、39－1 40－1	4・4・13～4・6・30	960㎡	奈良市長／近鉄西大寺駅南土地区画整理事業	西崎　安井 久保薗
247	平城京左京三条三坊三坪	大宮七丁目531－1	4・4・1～4・5・12	900㎡	関電産業㈱／事務所ビル建設	松浦　原田
248	平城京左京一条四坊四坪	法蓮町442－1	4・4・6～4・4・27	230㎡	西田伊三雄／事務所ビル建設	立石　秋山
249	平城京左京五条一坊十三・十四坪　柏木遺跡	柏木町721－1他	4・4・13～4・8・18	2095㎡	奈良市長／奈良市医療検査センター建設	三好　森下㈱ 鐘方　関野 宮崎
250	平城京右京三条四坊四坪	宝来三丁目9－35	4・4・13～4・5・27	280㎡	奈良市長／伏見保育園建設	池田
251	平城京左京四条六坊一坪	下三条町8－8	4・5・20～4・7・2	320㎡	奈良市長／下三条公園造成	三好　武田
252	平城京左京五条六坊十五・十六坪	鳴川町32－1	4・5・19～4・7・8	400㎡	奈良市長／奈良市芸能館建設	立石　秋山
253	平城京左京四条四坊十五・十六坪	三条宮前町242－2他	4・6・1～4・9・18	1700㎡	奈良市長／ＪＲ奈良駅周辺地区土地区画整理事業	松浦　原田
254	平城京左京八条二坊三坪	西九条町4－6・9・10	4・6・1～4・6・05	50㎡	奥村忠司　奥村定子　奥村洋子／個人住宅建設	池田
255	平城京右京三条三坊五坪	宝来一丁目93－3	4・6・15～4・6・29	105㎡	阪口五十四／共同住宅建設	宮崎
256	平城京右京三条三坊二坪 菅原東遺跡	菅原町57、59～61	4・6・16～4・11・17	2403㎡	奈良市長／近鉄西大寺駅南土地区画整理事業	西崎　安井
257	平城京右京三条三坊八坪 菅原東遺跡	菅原町125、126	4・7・4～4・11・19	2210㎡	〃	西崎　森下㈱
257－2	同　七坪　菅原東遺跡	菅原町48、49－1・2	4・10・23～5・3・31	1460㎡	〃	鐘方　安井
257－3	同　八坪　菅原東遺跡	菅原町58～60、63 65、67－2、68	4・11・20～5・3・31	1740㎡	〃	松浦　久保㈱ 池田　久保㈱
257－4	同　六坪　菅原東遺跡	菅原町43－1	5・2・1～5・3・31	850㎡	〃	
258	平城京左京五条七坊六坪	井上町13－1・4	4・7・1～4・8・27	330㎡	奈良市長／仮称奈良国際交流センター建設	中島
259	平城京右京三条三坊十二坪	宝来一丁目97－1	4・7・1～4・7・22	125㎡	奈良信用金庫／店舗ビル建設	立石
260	平城京左京二条四坊二坪	法蓮町157－6、173	4・7・20～4・8・12	125㎡	共立産業㈱／共同住宅建設	立石　秋山
261	平城京右京三条二坊一坪	二条大路南五丁目 404－1	4・8・18～4・8・26	75㎡	杉田信雄　杉田勝弘／個人住宅建設	秋山
262	平城京左京三条二坊十六坪	二条大路南一丁目 1－1	4・8・24～4・12・22	1000㎡	奈良市長／市役所駐車場建設	関野
263	平城京左京六条二坊九坪	大安寺西二丁目288	4・9・7～4・9・18	15㎡	奈良市長／奈良市土木管理センター事務棟改築	久保㈱
264	平城京左京二条五坊八坪	法蓮町280－1	4・9・8～4・10・2	100㎡	奈良市長／佐保小学校給食室改築	秋山
265	平城京左京八条一坊十六坪	杏町275－4、276－4	4・10・1～4・10・9	45㎡	奈良市長／市営駐車場造成	武田
266	平城京左京四条四坊五坪	大森西町216－1・4、219－1	4・10・1～4・11・16	350㎡	大西善次郎／倉庫建設	森下㈱　宮崎
267	平城京左京二条四坊十六坪	法蓮町337－2・3、338 347、348	4・10・13～4・11・25	545㎡	寺田政治　廣岡良太郎／店舗建設	中島　久保㈱
268	平城京左京四条五坊五・六坪	三条本町330－1・2他	4・10・13～4・11・16	123㎡	奈良市長／ＪＲ奈良駅周辺土地区画整理事業	武田
269	平城京左京二条六坊五坪	上三条町18	4・11・30～4・12・24	84㎡	浄教寺住職島田和麿／庫裏建設	中島
270	平城京左京四条二坊十三坪	二条桧町396－1	5・1・11～5・1・22	200㎡	大西基世／共同住宅建設	立石
ＴＩ－13	平城京東市跡推定地	杏町580－1	4・11・10～4・12・18	449㎡	重要遺跡確認緊急調査	三好　宮崎
ＤＡ－49	史跡大安寺旧境内	大安寺一丁目1166	4・4・6～4・4・13	22㎡	楠下重郎／住宅改築	武田
ＤＡ－50	史跡大安寺旧境内	大安寺西一丁目1053－1	4・7・20～4・7・29	38㎡	平尾綱男／住宅改築	久保㈱
ＤＡ－51	史跡大安寺旧境内	大安寺二丁目1145－1	4・8・3～4・8・31	112㎡	増田善一／住宅改築	鐘方
ＤＡ－52	史跡大安寺旧境内	大安寺一丁目1240－1	4・8・17～4・8・29	150㎡	山本　勇／駐車場造成	久保㈱
ＤＡ－53	史跡大安寺旧境内	大安寺四丁目1061 －2・3・4	4・10・9～4・11・20	265㎡	史跡整備	鐘方
ＤＡ－54	史跡大安寺旧境内	大安寺四丁目7－3	4・11・30～4・12・19	24㎡	松本　勝／住宅改築	久保㈱
ＤＡ－55	史跡大安寺旧境内	大安寺西一丁目1097、1117－5	4・11・24～4・12・18	62㎡	中島信男／共同住宅建設	鐘方
ＤＡ－56	史跡大安寺旧境内	大安寺四丁目1051、1053－3	5・2・10～5・2・25	53㎡	大西敬皓／住宅改築	三好
ＧＧ－35	元興寺旧境内	芝新屋町12－1	4・5・6～4・5・13	6㎡	前田功二／個人住宅建設	武田
ＧＧ－36	元興寺旧境内	福智院町2－3	4・10・1～4・10・6	18㎡	奈良市長／都市計画道路	三好
ＧＧ－37	元興寺旧境内	北室町8－1	5・1・20～5・2・5	58㎡	秦　英子／個人住宅建設	武田
ＹＳ－4	新薬師寺旧境内推定地	高畑町1364－1	4・6・22～4・6・26	24㎡	森井義則／個人住宅建設	立石
ＹＳ－5	新薬師寺旧境内推定地	高畑町1349	4・9・18～4・10・1	40㎡	太田頼壽　太田威夫／個人住宅建設	立石

平成４年度発掘調査一覧



平成４年度発掘調査位置図（１／50,000）

Ⅰ　平城京跡・菅原東遺跡・柏木遺跡の調査

1　近鉄西大寺駅南土地区画整理事業に伴う調査

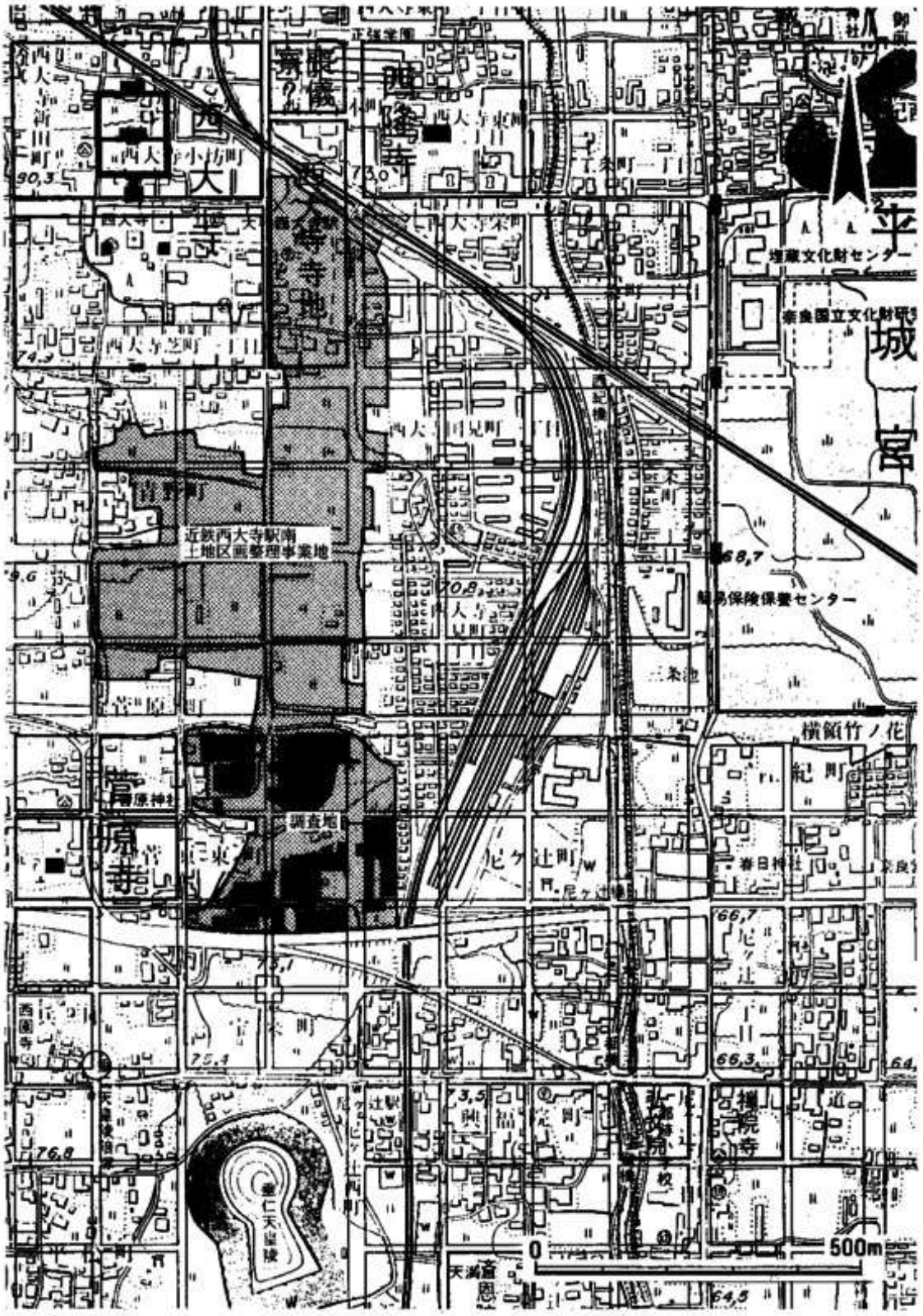
この調査は、奈良市が近鉄西大寺駅南の一帯で実施している土地区画整理事業に伴う発掘調査である。同事業は事業地の面積が約32万㎡におよぶ広範囲なもので、全域が平城京域に含まれている。教育委員会ではこの事業に対応して、昭和63年以来、継続的に発掘調査を進め通算14次、計33,328㎡の調査を実施した。本年度で、事業地を東西に横断する大池川と主要地方道奈良・生駒線（阪奈道路）に狭まれた範囲の調査を、一部を除きほぼ終えることになる。平城京内でのこうした継続的な調査は稀であり、遺跡が弥生時代から中世にかけての複合遺跡であることともあいまって、今後の事業地内での調査計画について関係者間で協議を進めているところである。

本年度の調査は表に示した６件、計9,623㎡である。水田畦畔に関係なく発掘区を設定できたことで、いずれも比較的大面積の調査区を確保できた。調査地は平城京の条坊では右京三条三坊のうち二、三、六、七、八坪の一画にある。また、すべての発掘区で平城京の遺構とともに古墳時代の遺構を検出しており、菅原東遺跡の広がりをあらためて確認した。以上６件の調査のうちここでは昨年度実施の第236次調査を含め、第236－２次調査、第256次調査の概要を報告する。

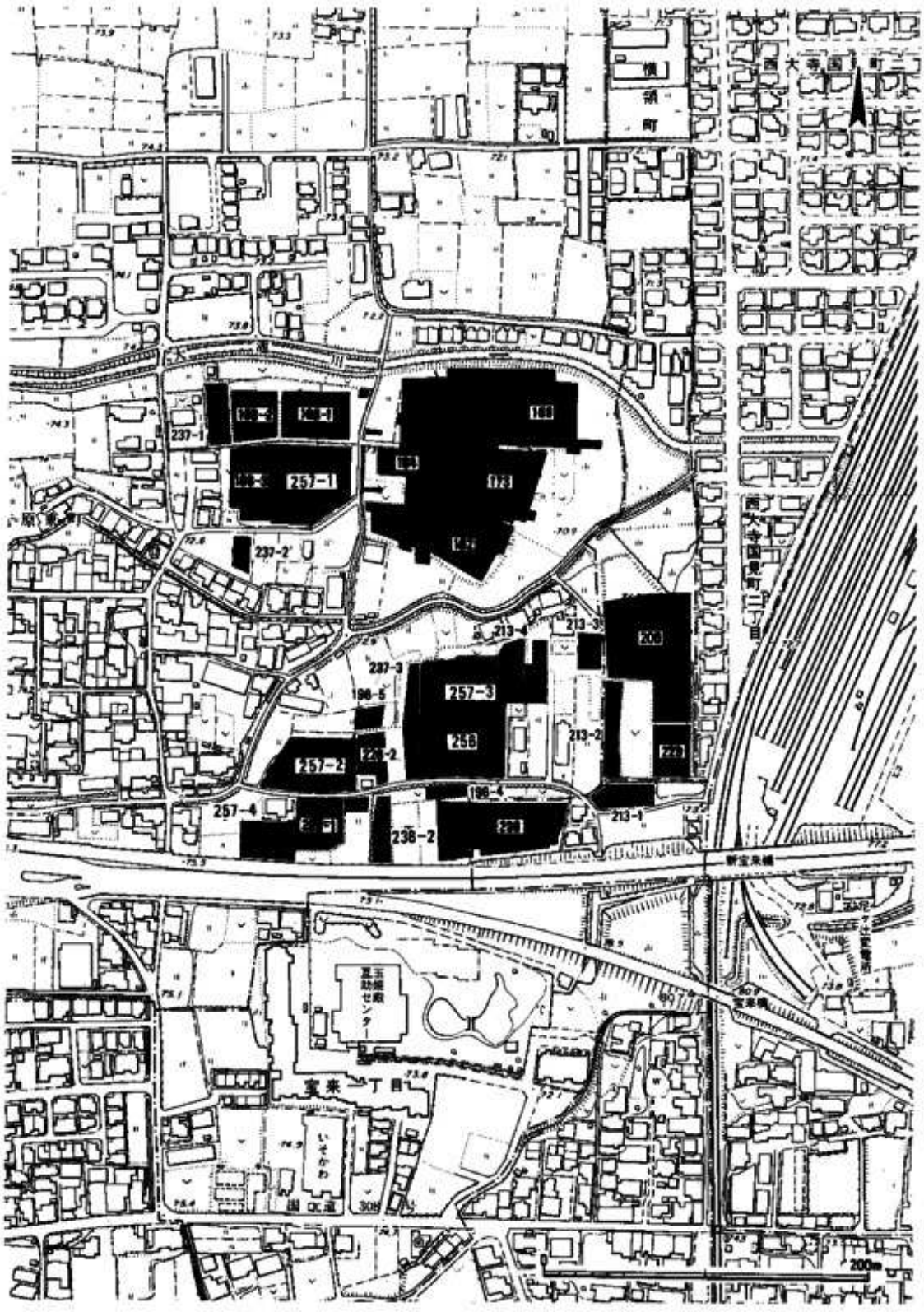
なお、第236次調査と第236－２次調査についてはまとめて報告することとし、遺構番号は坪ごとにこれまでの調査からの通し番号で、古墳時代以前の遺構には２桁の、奈良時代以降の遺構には３桁の番号を付した。

調査年度	遺　跡　名	調査次数	調　査　地	調査面積	備　　考
平成３年度	右京三条三坊三坪 菅原東遺跡	第236次	菅原東町36 宝東町50－１、51－１	2,050㎡	本報告書掲載
平成４年度	右京三条三坊三坪 菅原東遺跡	第236－２次	菅原東町35－１、39－１ 40－１	960㎡	本報告書掲載
	右京三条三坊二坪 菅原東遺跡	第256次	菅原東町57、59～61	2,403㎡	本報告書掲載
	右京三条三坊八坪 菅原東遺跡	第257次	菅原東町125、126	2,210㎡	次年度報告
	右京三条三坊七坪 菅原東遺跡	第257－２次	菅原東町48、49－１・２	1,460㎡	次年度報告
	右京三条三坊二坪 菅原東遺跡	第257－３次	菅原東町58～60、63 65、67－２、68	1,740㎡	次年度報告
	右京三条三坊六坪 菅原東遺跡	第257－４次	菅原東町43－１	850㎡	次年度報告

発掘調査地一覧



調査地と周辺の条坊（1／10,000）



発掘調査位置図（1／4,000　数字は調査次数）

(1) 平城京右京三条三坊三坪・菅原東遺跡の調査 第236・236－2次

Ⅰ はじめに

右京三条三坊三坪では第236次調査で1箇所、第236－2次調査では3箇所、計4箇所の発掘区を設定した。これらにより、二・三坪坪境の三条条間路にそって、三坪の北四分の一を調査したことになる。また、前年度までの二・六・七坪の調査で弥生時代から中世にかけて各時代の遺構を検出していることから、これらの遺跡が広がる可能性もあった。

第236次調査は平成3年度に、第236－2次調査は平成4年度に行なった調査であるが、各発掘区が隣接しているので、以下一括して報告する。

Ⅱ 検出遺構

古墳時代、奈良時代と中世の遺構を検出した。以下、層序と遺構の概要を記す。

層 序 調査地の現状はほとんど高低差のない水田であるが、調査の結果、発掘区は南西から北東へ続く低い丘陵頂部に位置していることが明らかになった。基本層序は、発掘区内の丘陵頂部にあたる部分では灰色粘土（耕作土）、灰色土（床土）、灰色粘質土と続き、地表面下0.3～0.4mで地山である黄灰色粘質土に達する。丘陵斜面にあたる部分では第3層灰色粘質土が徐々に厚くなり、その下層に灰黄色粘質土（奈良時代整地土層）、褐灰色粘質土（古墳時代以前の堆積土）があり、最も深いところで地表下0.7mで地山に達する。第3層灰色粘質土層と第4層灰黄色粘質土には酸化鉄の斑紋が幅2cmほどの帯状に数条沈着しており、乾田の痕跡かと思われる。奈良時代と中世の遺構は灰黄色粘質土か黄灰色粘質土（地山）上面で、古墳時代の遺構は褐灰色粘質土および黄灰色粘質土（地山）上面で検出した。地山面の標高は発掘区南西隅で72.9m、北東隅72.4m、北西隅72.6m、南東隅72.1mである。

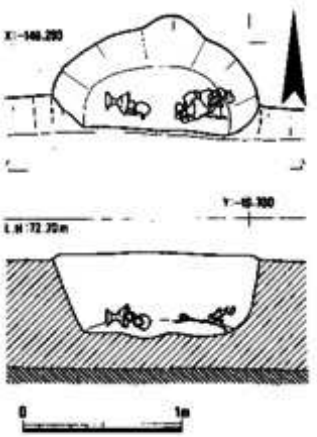
主な検出遺構は、古墳時代の土坑、溝、奈良時代の道路、掘立柱建物・塀、井戸、溝、中世の掘立柱建物、溝、土坑である。以下、時代別に記す。

古墳時代の遺構 土坑7基と溝5条がある。

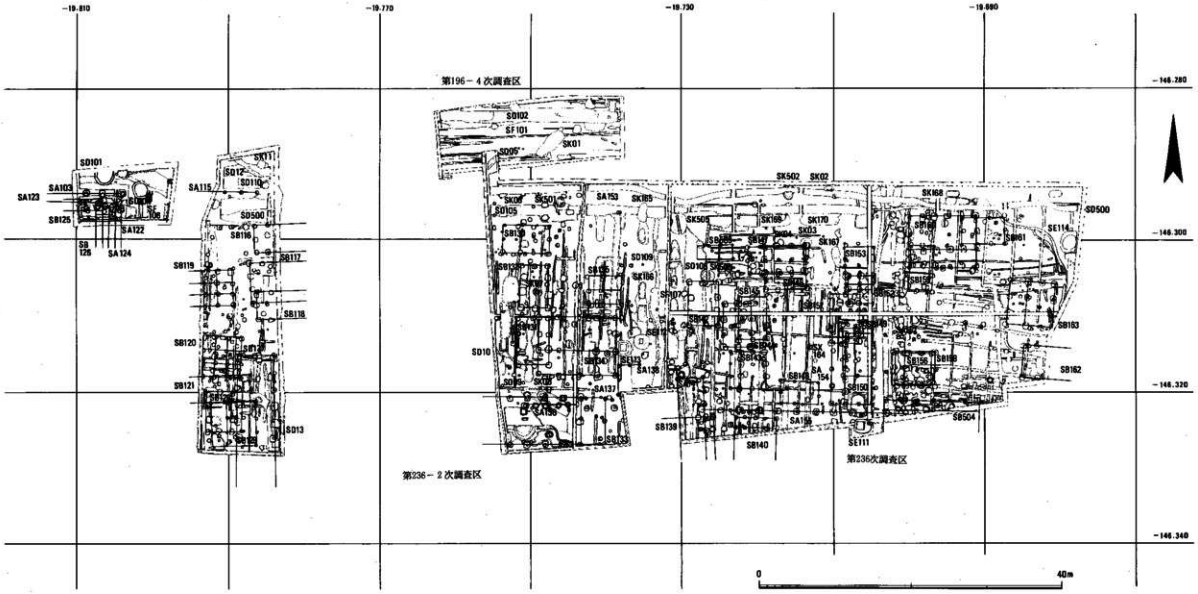
土 坑 第236次発掘区でSK02～04の3基、第236－2次東発掘区でSK06～08の3基、同中発掘区でSK11を検出した。規模や形態の特徴から大きく3つに分けて報告する。

A：掘形の平面が一辺1m前後の隅丸方形で、検出面からの深さ0.5m前後。断面は逆台形。底は平坦である。

B：掘形の平面が径1m前後の円形で、二段掘りになっているもの。検出面からの深さ1～2m。壁は垂直で、



土坑SK02平面・断面図（1／50）



第236・236－2次調査　遺構平面図（1／500）

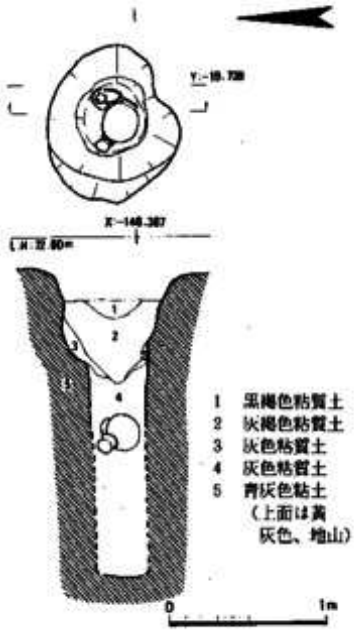
底は平坦である。

C：掘形の平面が径１ｍ前後の円形で、検出面からの深さ１ｍ前後のもの。断面はＵ字形。

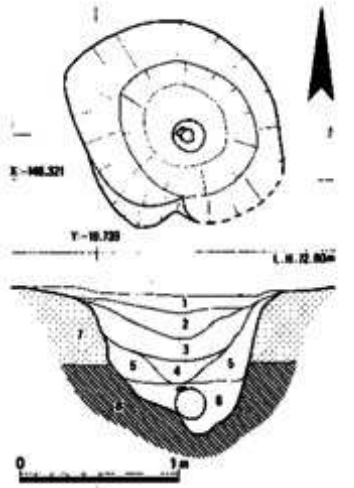
Ａは、土坑SK02・SK06・SK12である。埋土はいずれも暗褐色粘質土で炭粒を含む。各土坑から古墳時代前期の土師器が出土した。そのうち土坑SK02・SK12から出土した小形丸底壺と、土坑SK02から出土した小形丸底壺の器台として使われたとみられる高杯はほぼ完形で、坑底から出土した。

Ｂは、土坑SK04・SK07である。埋土はいずれも灰褐色や灰色の粘質土である。各土坑の埋土から古墳時代前期の土師器がほぼ完形で出土した。

Ｃは、土坑SK03・SK08である。埋土はいずれも灰色や暗灰色の粘質土である。土坑SK03の埋土から古墳時代前期の土師器と中期の須恵器が出土した。土坑SK08の埋土から古墳時代前期の土師器がほぼ完形で出土した。



土坑ＳＫ07平面・断面図（１／50）



土坑ＳＫ08平面・断面図（１／50）

溝　第236－２次東発掘区で溝SD05・SD09・SD10の３条、同中発掘区で溝SD12・SD13の２条を検出した。いずれも国土方眼方位北に対し東また西に斜行する。溝SD05は幅0.7m、検出面からの深さ0.4ｍである。埋土は暗褐色土で炭を多く含む。溝SD09は幅1.6m、検出面からの深さ0.4ｍで、埋土は灰黄褐色粘質土である。重複関係から土坑SK08よりも古いことがわかる。溝SD10は幅0.7m、検出面からの深さ0.1ｍで、埋土は溝SD09と同じ灰黄褐色粘質土である。溝SD12は幅0.7m、検出面からの深さ0.3ｍで、埋土は暗褐色土である。溝SD13は幅0.9m、検出面からの深さ0.4ｍで、埋土は灰黄褐色粘質土である。なお、溝SD05・SD12・SD13の埋土から古墳時代前期の土師器が出土した。

これらの遺構は、出土遺物や重複関係から、土坑SK04は古墳時代中期の可能性があるが、その他は古墳時代前期のものと考えられる。なお土坑の性格については、現段階で言及するまでには至っていないが、これまでの周辺の調査成果を考慮して、形態、出土土器の器種構成と出土位置等の分析を進めることによって解明できるものと考える。

奈良時代の遺構　道路３条、掘立柱建物39棟、掘立柱塀11条、溝６条、井戸４基、土坑６基、土器埋納土坑１基を検出した。建物、塀の規模などは、一覧表にまとめた。

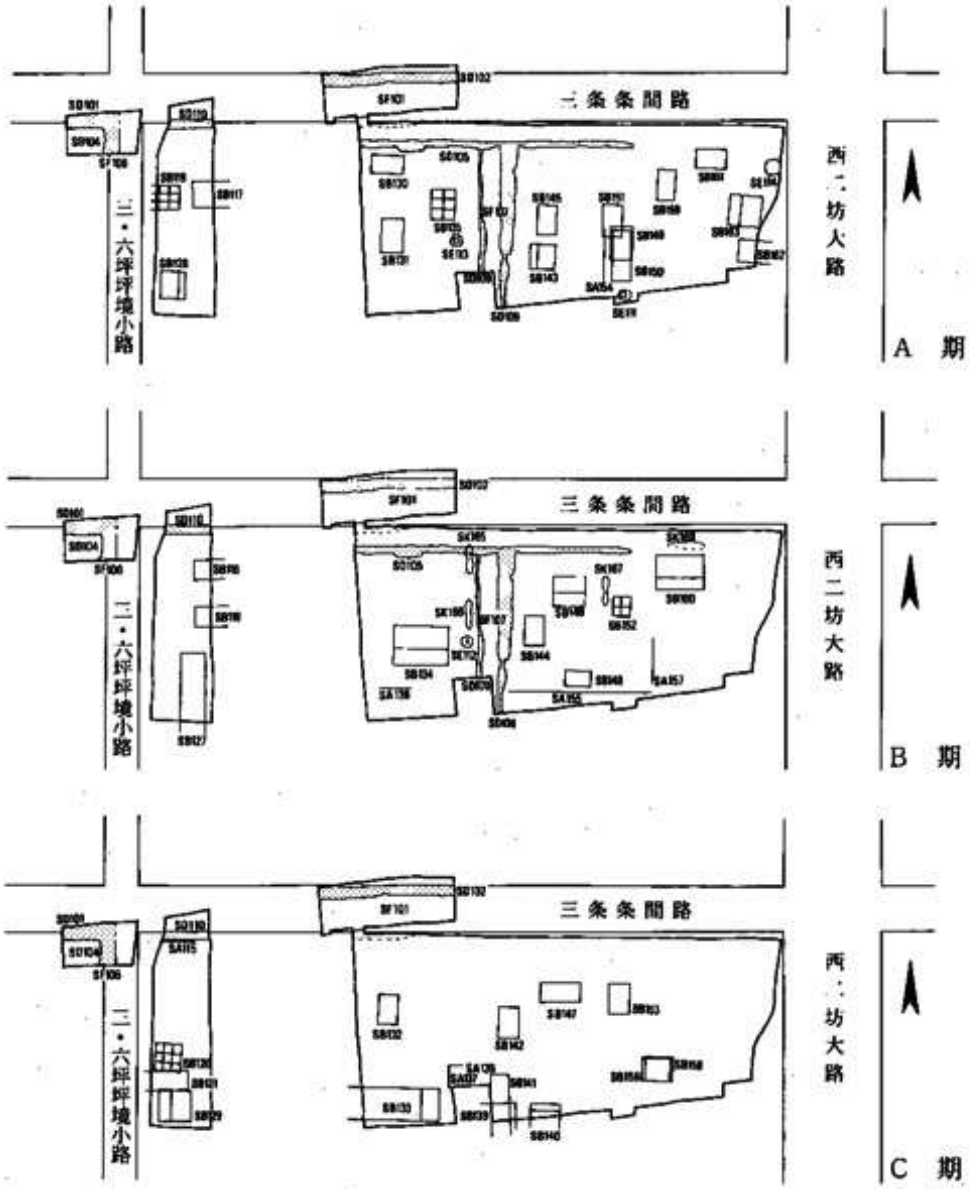
条坊遺構　道路SF101・SF106がある。SF101は三条条間路である。路面の一部と南側溝SD110を検出した。溝SD110は幅3.4m、深さ0.42m。第196－4次調査で北側溝SD102を検出しており、三条条間路の側溝心々の幅員は8.82mである。道路心の国土座標はX＝－146,287.840、Y＝－19,745.350である。道路SF106は三・六坪坪境小路である。三条条間路との交差部を検出した。西側溝SD104は幅2.7m、深さ0.38m。東側溝は発掘区外にあり、小路路面の幅3.25mまでを確認した。第226－1次調査で検出した二・七坪坪境小路調査例から、側溝心々の距離を6.0mに復原できる。溝SD101（第226－1次調査検出）は三条条間路の南側溝である。溝SD104との接続部までを検出した。北肩が発掘区外にあり、幅2.35m以上、深さ0.5m。三条条間路の南側溝が三・六坪坪境小路を横断せず、同小路の東、西側溝に接続されていることがわかった。側溝の残りが悪いことから、どちらの道路も路面が削平されていると考えられ、当初の路面の状態はわからない。

三坪内の遺構　三条条間路南側溝SD110とその南３ｍに並行する溝SD105との間には築地SA153を想定できる。溝SD105は幅0.7～2.7m、深さ0.3mで長さ50ｍ分を検出した。築地を造る際の土取坑であったものが、後に築地の雨落溝とされたと考えられる。重複関係から溝SD105よりも古い土坑SK170・SK171があり、これも土取坑であるとすると築地の改修が行われた可能性もある。

三坪内の遺構配置には綿密な計画性はみられないが、宅地内の分割方法や遺構の重複関係、出土遺物から大きく二時期の変遷があることがわかった。各時期の建物に重複関係がみられることから、さらにそれぞれの時期を細分することができる。

Ａ　期　坪内通路SF107で坪が東、西に区画される時期。通路SF107の西側溝SD109が条坊道路心々の中軸線上にあり、三坪の東辺が西二坊大路に面していることも考慮すれば、東の区画は、西の区画に比べ東西幅がせまいことがわかる。道路SF107の路面幅は３ｍ前後で、両側溝は0.1ｍと浅く、路面はかなり削平されていると考えられる。溝SD105が通路北端を横断していることから、通路はここで終結していることがわかる。

坪内通路SF107の東の区画には、建物９棟、塀１条、井戸２基がある。これらの遺構は配置から、東、西の二群にわけることができる。東群は、建物SB161を北辺に置き、建物と井戸をコの字状に配する。西群は、南北棟建物を東、西二列に配する。西群の建物SB151の後に建てられた建物SB149とSB150は、塀SA154がその目隠し塀とみられることから、建替え後は東群に属したと考える。この時期に属する井戸SE111は平面隅丸方形掘形に方形横板組横桟留の井戸枠を据えている。枠内埋土から木簡、木製品と奈良時代前期から中頃にかけての土器が出土。坪の北東隅にある井戸SE114は平面隅丸方形掘形に方形横板組



遺構変遷図

隅柱留の井戸枠を据えている。枠の上部は抜き取られており、抜きとり痕跡から奈良時代中頃の土器、軒平瓦が出土した。

坪内通路SF107の西の区画には、建物6棟、井戸1基がある。坪内道路SF107のすぐ西にある井戸SE113は、平面隅丸方形掘形に方形横板組の井戸枠を据えている。枠内から奈良時代前期の土器が出土した。

A期に属する建物はいずれも小規模で、計画的な配置ではないこと、井戸SE111から出土した木簡の内容から、三坪にはかなり大規模な宅地であったことが窺えること、通路の北端に門が開かないことを考慮し、SF107は一括の宅地内での区画通路であろう。

B　期　坪内通路SF107による東、西二区画は変わらないが、東の区画に塀が設けられ、西の区画ではA期に比べ建物が大型化する時期。

坪内通路SF107の東の区画には、建物5棟、塀2条、土坑2基がある。塀SA155は、坪の側溝心々間の南北四等分割線上にある。塀SA155とSA157とで区画される範囲には、総柱建物SB152を含む4棟の建物がロの字状に配されている。塀SA157の東には南廂付東西棟建物SB160がある。

坪内通路SF107の西の区画には、建物4棟、塀1条、井戸1基、土坑2基がある。桁行6間以上、梁間2間の南北棟建物SB127や、桁行4間、梁間3間の南廂付東西棟建物があり、東の区画に比べて建物規模が大きい。東西棟建物SB116とSB118は柱筋を揃えて南北に並列する。通路SF107の西にある井戸SE112は、平面隅丸方形掘形に方形横板組の井戸枠を据える。横板を井籠に組み、木釘で留めていた。

土坑SK165・SK166・SK167・SK168はいずれも平面長円形掘形の土坑が縦に連結した形状で、深さ0.7m埋土は灰褐色土で奈良時代中頃から後半にかけての土器が少量出土した。土坑SK165・SK166は坪内道路SF107の西脇にあり、土坑SK168は建物SB160の北で、溝SD165を延長した位置にある。土坑SK167が建物SB146西脇に位置する以外は、それぞれ区画の縁辺にあることから、塵介処理用の土坑であると思われる。また、重複関係から土坑SK165は溝SD105より新しいことがわかり、土坑掘削時には、築地SA153は倒壊していた可能性がある。

この時期の建物SB144とSB160の柱掘形から奈良時代中頃の土器が出土した。

C　期　坪内通路SF107、塀SA155・SA157がともに廃される時期で建物13棟、塀3条がある。建物は大半が小規模で、配置にも計画性がみられないが、発掘区の南端には他の建物に比べて大型の東廂付東西棟建物SB133がある。この時期の建物SB140の柱掘形から奈良時代後期の土器が出土している。

時期は不明であるが、建物SB148の北東で土器埋納土坑SX164を検出した。東西0.27m、南北0.32m、深さ0.14mの平面方形掘形の底に繊維の痕跡とともに銭貨があり、その上に土師器皿Aで蓋をした土師器甕Aが埋置されていた。甕の内部に充満していた土の残存脂肪酸分析を進めているが、胞衣壺か地鎮の遺構であろうと考えられる。

六坪内の遺構　坪の北辺では第226－1次調査で検出した塀SA103が坪の北東隅まで続くことを確認し、東辺では塀SA103から南へ続く塀SA122を検出したことから、坪の北辺と東辺が掘立柱塀によって区画されていたことがわかった。

中世の遺構　検出した遺構には、掘立柱建物2棟、溝1条、土坑4基がある。時期的には12世紀後半を中心として12世紀前半から13世紀中頃にかけての遺構である。以下に概略を記す。建物SB503は、桁行3間（4.5m）、梁間1間（2.1m）の掘立柱東西棟建物。建

遺構番号	棟方向	規模 桁行×梁間	桁行全長 m（尺）	梁間全長 m（尺）	桁行柱間寸法（尺）	梁間柱間寸法（尺）	廂の出（尺）	時期	
SB116	東西	2以上×2	3.25(11)	3.6（12）	5.5等間	6等間		B	
SB117	東西	2以上×3	3.6（12）	5.4（18）	6等間	6等間		A	
SB118	東西	2以上×2	3.0（10）	3.6（12）	5等間	6等間		B	
SB119		3×2以上	4.5	3.6（12）	5等間	6等間		A	総柱建物
SB120		3×3	4.95(16.5)	4.95(16.5)	5.5等間	5.5等間		C	総柱建物
SB121	東西	2以上×2	5.4（18）	3.0（10）	9等間	5等間		C	
SB125	南北	1以上×1以上	2.1（7）	1.5（5）	7	5	（北）5		
SB126	南北	1以上×1	2.1（7）	1.8（6）	7	6			
SB127	南北	6以上×2	12.6（42）	4.8（16）	7等間	8等間		B	
SB128	南北	3×3	4.5（15）	5.1（17）	5等間	6等間	（東）5	A	
SB129	南北	3×3	5.6（19）	6.0（20）	7−6−6	6−7	（南）7	C	
SB130	南北	3×2	6.3（21）	3.6（12）	7等間	6等間		A	
SB131	東西	3×2	6.3（21）	4.5（14）	7等間	7等間		A	
SB132	南北	3×2	5.4（18）	3.6（12）	6等間	6等間		C	
SB133	東西	5以上×2	12.6（42）	6.0（20）	8等間	10等間	（東）10	C	
SB134	東西	4×3	10.2（34）	7.5（25）	8.5等間	7.5等間	（南）10	B	
SB135	南北	3×2	5.4（18）	4.2（14）	6等間	7等間		A	総柱建物
SB139	東西	2以上×1以上	4.2（14）	1.5（5）	7等間	5		C	
SB140	東西	4×1以上	5.4（18）	1.2（4）	4.5等間		（北）4	C	
SB141	東西	4以上×2	7.2（24）	3.6（12）	6等間	6等間		C	
SB142	南北	3×2	5.4（18）	3.6（12）	6等間	6等間		C	
SB143	南北	2×3	4.65(15.5)	4.5（15）	5.5等間	5等間		A	西土廂（4.5）付
SB144	南北	3×2	5.8（19.5）	3.6（12）	6.5等間	6等間		B	
SB145	南北	3×2	5.4（18）	3.9（13）	6等間	6.5等間		A	
SB146	東西	3×3	5.4（18）	6.0（20）	6等間	6等間	（南）8	B	
SB147	東西	4×2	7.3（24.5）	3.3（11）		5.5等間		C	桁行柱間寸法 6−7−5−6.5
SB148	東西	3×2	5.4（18）	3.0（10）	6等間	5等間		B	
SB149	南北	3×2	6.0（20）	3.6（12）	6−7−7	6等間		A	
SB150	南北	6×2	9.3（31）	3.6（12）		6等間		A	桁行柱間寸法 5−6−5−5−5−5
SB151	南北	3×2	6.3（21）	3.6（12）	7等間	6等間		A	
SB152	南北	2×2	3.6（12）	3.0（10）	6等間	5等間		B	総柱建物
SB153	南北	3×2	5.1（17）	3.6（12）	6−6−5	6等間		C	
SB156	東西	3×2	5.4（18）	4.5（15）	6等間	8−7		C	
SB158	東西	3×2	5.4（18）	4.5（15）	6等間	8−7		C	
SB159	南北	3×2	6.3（21）	3.0（10）	7等間	5等間		A	
SB160	東西	5×3	9.0（30）	6.9（22）	6等間	7等間	（南）8	B	
SB161	東西	3×2	5.7（19）	3.6（18）	7−6−6	9等間		A	
SB162	東西	1以上×2	2.1（7）	4.2（14）	7			A	妻柱掘形未検出
SB163	南北	3×3	5.7（19）	6.0（20）	7−6−6	6等間	（西）8	A	
SA103	東西	2以上	4.8（16）		8等間				第226次のSA103から続く
SA115	東西	2以上	4.2（14）		7等間			C	
SA122	南北	1以上	2.1（7）		7				
SA123	東西	2以上	4.8（16）		8等間				
SA124	南北	1以上	2.1（7）		7等間				
SA136	東西	5	6.0（20）		4等間			B	
SA137	南北	2	3.9（13）		7−6			C	
SA138	東西	2	2.7（9）		5−4			C	
SA154	南北	4	9.3（31）		8-8-8-7			A	
SA155	東西	11	27.3（91）					B	9×3間＋8×8間
SA157	南北	4	8.4（28）		7等間			B	

奈良時代掘立柱建物・塀一覧表

物SB504は、桁行6間（12.5m）、梁間2間以上の掘立柱東西棟建物で、発掘区外に続く。両建物共に、柱掘形は径約0.2m と小さい。柱掘形には12世紀後半の土器類が出土したものがある。溝SD500は、発掘区北辺で検出した東西方向の素掘りの溝で、のべ125m分を確認した。幅0.8m、検出面からの深さ約0.8m。断面V字形である。この溝は、東の第213－1次調査発掘区で検出した溝SD145から続くと考えられ、第236－2次調査西発掘区で幅3m程に広がり、北へ曲がり、第226－2次調査の溝SD131へ続く。溝内からは、12世紀後半の土器類が出土した。土坑SK502は、溝SD500と重複する長径2.1m、短径1.4mの平面長円形の土坑である。検出面からの深さ約0.6m。坑底に底部を穿孔した瓦器椀が上向きに置かれていた。また土坑SK501は径約1.2mの平面円形の土坑で、検出面からの深さ約0.5m。同じく坑底に瓦器椀2個が上向きに置かれていた。両土坑から出土した瓦器椀はいずれも12世紀前半のものである。遺構の性格については不明である。

Ⅲ　出土遺物

本調査の出土遺物には、土器類、瓦類、木簡・木製品、石器・石製品、金属製品がある。以下、古墳時代、奈良時代、中世の土器類と奈良時代の瓦類、木簡・木製品について記す。

瓦　類　遺物整理箱で58箱分出土した。大半が丸瓦、平瓦であるが、奈良時代の軒瓦が18点出土した。内訳は軒丸瓦6225F2点、6278B1点、6282D2点、新型式1点（1）、型式不明2点。軒平瓦6641F1点、6719A1点、6721A4点、新型式1点（2）、型式不明3点である。1は単弁蓮華文で、中房が凹み、蓮子は1＋7、珠文は小さく密に配される。2は均整唐草文で、中心飾りは垂飾りである。1、2はいずれも整地層から出土。6278Bが土坑SK502から、6721が井戸SE114、素掘りの溝から1点ずつ出土した。

新型式(1)

新型式(2)

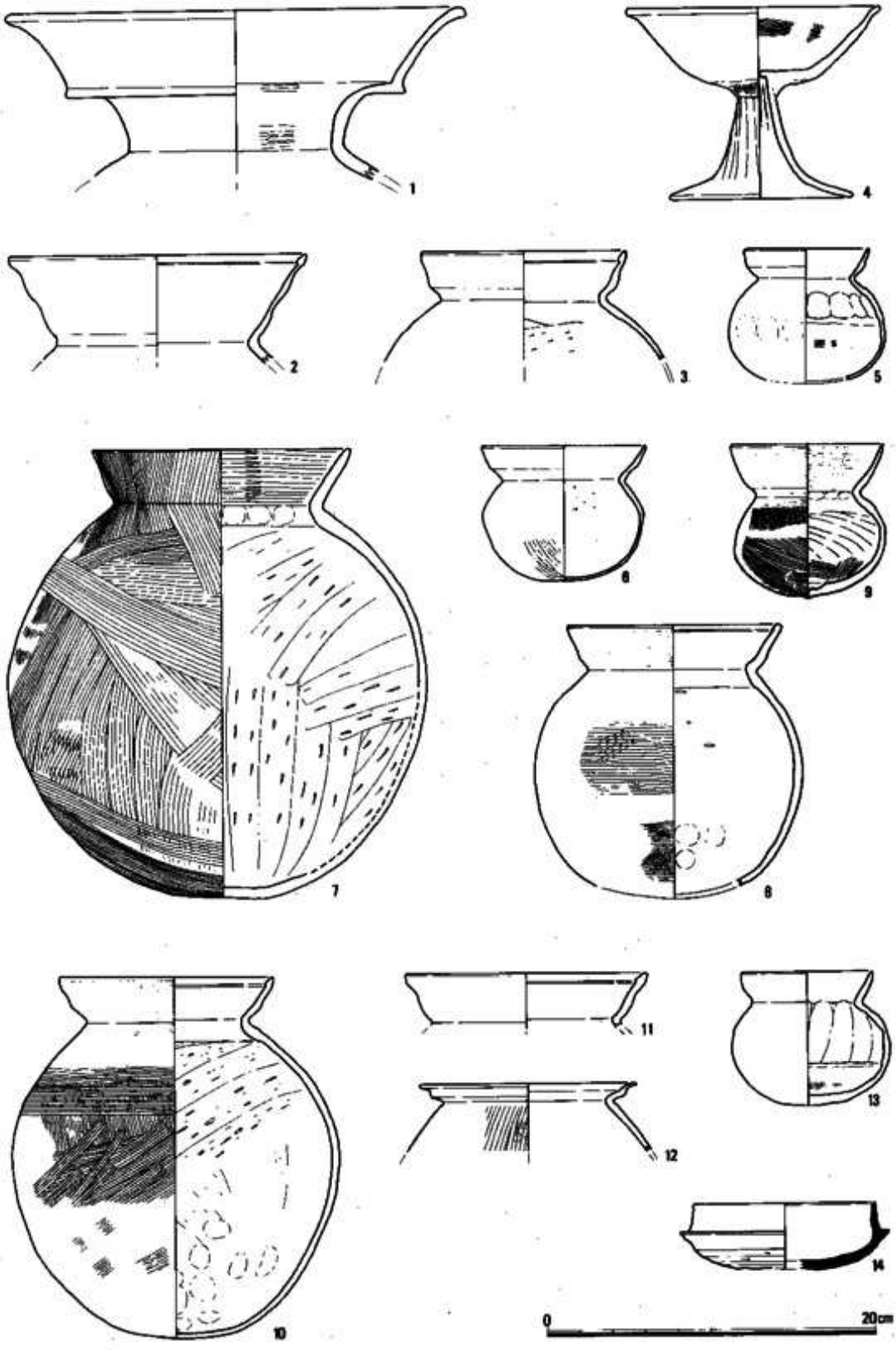
出土軒瓦（1／4）

古墳時代の土器類　遺物整理箱5箱分出土した。古墳時代前期後半の土師器（壺、甕、高杯、小形丸底壺）と中期後半の須恵器（杯身）があるが、大半が土師器である。ここでは土坑から出土した土師器13点、須恵器1点を器種別に報告する。なお、1～5は土坑SK02、6はSK04、7～9はSK07、10はSK08、11～13はSK11、14はSK03から出土した。

土師器甕（3・7・8・10・11）　3・8・10・11は布留式甕である。口縁端部の内面が肥厚し、端面は3・10・11が内傾し、8は丸くおさまる。口縁部は内、外面ともナデが施される。10の体部外面下半は煤で覆われ、底部内面には炭化した米粒が付着する。7は布留式とは異なり、口縁部の内、外面にハケメが施される。底部は平底である。12は東海系の台付甕である。

土師器壺（1・2）　1は短頸壺、2は二重口縁壺である。

土師器高杯（4）　口縁端部が外反し、口縁部と底部の境の稜線は不明瞭である。脚柱



古墳時代出土土器（1／4）

部の外面には粗いヘラミガキが施され、内面にはしぼり目が残る。

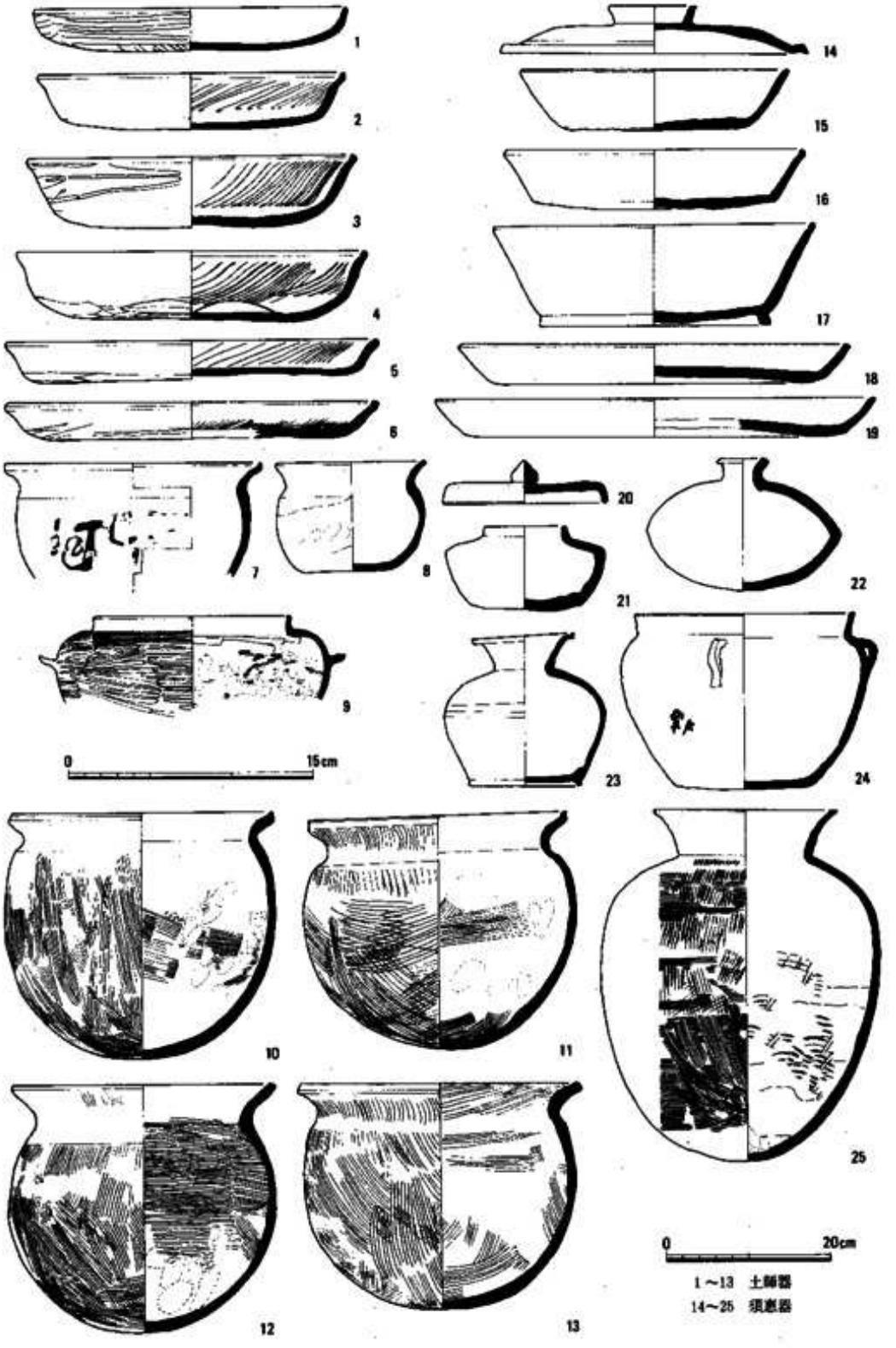
土師器小形丸底壺（5・6・9・13）　口縁部高が器高の四分の一程度の5・6・13と三分の一程度の9がある。前者の体部の内面にはヘラケズリが施されるが、内面上半は未調整である。9は体部外面と内面下半にハケメが施されるが、内面上半は未調整。

須恵器杯身（14）　口縁部が直立し、その端面は内傾する。蓋受け部の端面は平坦である。底部の回転ヘラケズリは右回りである。

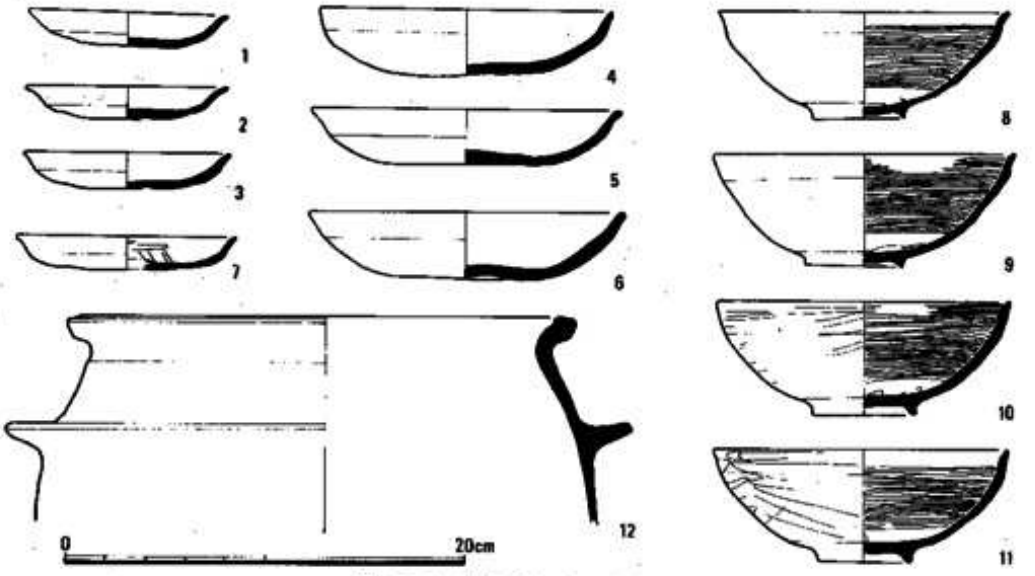
奈良時代の土器類　調査区全体から遺物整理箱70箱分の土器が出土しているが、ここでは井戸SE111枠内から出土した土器をとりあげる。時期的には奈良時代前半の特徴をもつ一群である。

土師器　杯A、杯C、杯E、皿A、皿C、高杯、椀C、壺A、壺B、甕A、甕Bがある。杯A（2～4）は2・4がb_6手法、3がb_1手法。すべてに螺旋状と斜放射状の暗文がある。杯E（1）はb_3手法。内面の調整はヨコナデによる。皿A（5・6）は5がb_6手法で内面に斜放射状暗文が施される。底部外面に「殿」の墨書がある。6はb_1手法で、内面に螺旋状と斜放射状の暗文が施される。壺A（9）は肩部に把手がつき、外面はハケ目調整の後、丁寧なミガキが施される。内面の調整はハケ目による。壺B（7・8）は底部と、体部が内外面ともナデで、口縁部は内外面ともヨコナデによる。7の体部外面に墨痕がみられ、器形から人面墨書土器である可能性もある。甕A（10～13）は体部の内外面をハケ目で調整。10・11は口縁端部をつまみあげている。

須恵器　杯A、杯B、杯C、杯E、杯蓋、皿A、皿C、高杯、壺A、壺C、壺L、壺N、壺Q、壺蓋、横瓶、甕A、甕Cがある。杯A（15）・杯B（17）・杯C（16）・皿A（19）・皿C（18）はいずれも内外面ともロクロナデ、底部外面はヘラ切りの後ナデが施される。15は内面に、16・19は内外面に火襷が残る。17の底部外面には爪形の痕跡がある。18の底部外面に「殿」の墨書がある。杯蓋（14）は杯Fもしくは杯Lの蓋であろう。頂部上面に三重の沈線を巡らせている。調整は内外面ともロクロナデによる。壺蓋（20）は宝珠形のつまみがつく。内外面ともロクロナデし、頂部内面をナデで仕上げる。壺C（21）は内外面ともロクロナデ、底部外面はヘラ切りの後ナデが施される。肩部から口縁部には自然釉がかかっておらず、蓋を被せた状態で焼かれたと考えられる。横瓶（22）は体部の両側面が尖る小型のもの。調整はロクロナデによる。壺L（23）は体部下半をヘラ削り、体部上半と口縁部内面をロクロナデで調整。底部外面に爪形の痕跡がみられる。甕C（24）は体部下半に整形時のものと思われる工具痕跡がみられる。体部上半と内面はロクロナデ。肩部の三箇所に耳を付けている。体部に墨書があり、「播」かと思われる。甕A（25）は外面は叩きをナデで消した後、横方向のカキ目が施され、そののちに縦方向のハケ目が施される。内面のあて具痕は一部には残るが、大半はナデで消されている。



井戸ＳＥ111出土土器（1～22 1／4 23～25 1／8）



溝ＳＤ500出土土器（１／４）

中世の土器類　12世紀後半を中心として、12世紀前半から13世紀中頃にかけての土器類が出土している。ここでは溝SD500出土土器を掲げ、概略を記す。土師器皿（１～６）、瓦器皿（７）、瓦器椀（８～11）、土師器釜（12）がある。土師器皿には大小２種類の口径のものがあり、小皿（１～３）は口径10cm前後。大皿（４～６）は口径15cm前後。瓦器皿は口径11cm前後。瓦器椀は口径14.5～15cm。器高5.7cm前後。見込みの暗文が平行線状のもの（８・10・11）と連結輪状のもの（９）とがある。このうち11の外面底部には木の葉の圧痕が残っている。いずれも12世紀後半のものである。

木簡・木製品　井戸SE111から木簡４点と木製品が出土した。うち木簡１点は墨痕はあるが判読できない。以下、木簡の釈文を掲げたのち、主な木製品について記す。

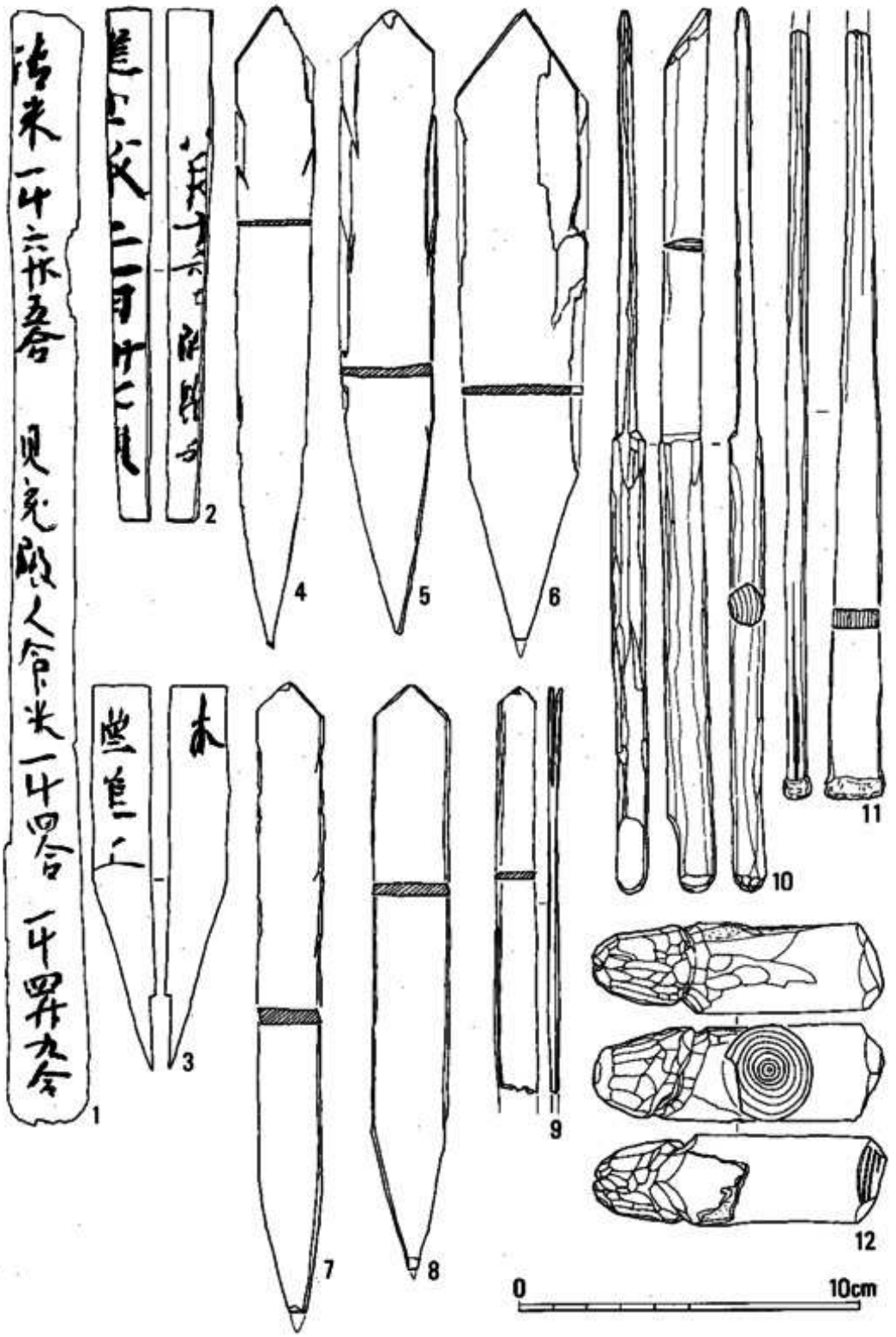
1　「御米一斗六升五合　見充殿人食米一斗四合　一斗四升九合」　32.8×2.24×0.4　011

2
・「進上瓜二百卅七□（顆カ）」
・「　八月十六日附鴨□（手カ）」　15.1×（1.3）×0.3　011

3
・「謹進上［　］
・「木工［　］　11.4×（1.7）×0.1　019

４～９は斎串。側辺に各々２～３箇所の切り込みがあるもの（４～７）と、側辺に切り込みがなく、上端木口を裂くように割れ目を入れるもの（８・９）がある。10は刀形。刀身と柄の区別が明瞭で、柄頭の一部が欠けている。丁寧な削り加工である。11は刷毛。平刷毛で毛は脱落しているが、柄元をしばった糸が残り漆が付着している。漆刷毛と思われる。図示できなかったが、先端に少量の漆が付着した細身の箆もある。12は陽物形。基部には樹皮が残り、亀頭部のみを削り加工している。

（秋山成人　池田裕英　久保清子　立石堅志　西崎卓哉　安井宣也　宮崎正裕）



井戸ＳＥ111出土木簡・木製品（1／2）

(2) 平城京右京三条三坊二坪・菅原東遺跡の調査 第256次

Ⅰ はじめに

右京三条三坊二坪では、前年度までに第213－3次、第213－4次、第226－2次、第237－3次の計4次、1696㎡の調査を行っており、本調査を加えて坪の面積のほぼ四分の一を調査したことになる。今回の調査地は二坪の南半、三条条間路にそった位置にある。また、これまでの調査で菅原東遺跡が、南西から北東方向へつづく低丘陵上に広がっていることが明らかになっており、既述の第236次、第236－2次調査と本調査の発掘区が丘陵頂部にあることから、古墳時代や中世の遺構の確認も目的とした。

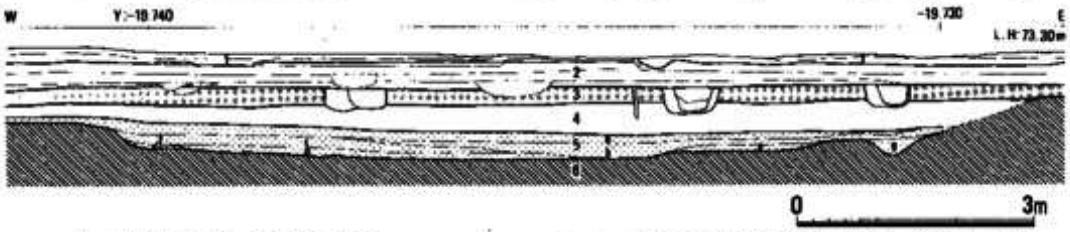
Ⅱ 検出遺構

発掘区の位置は、旧地形では南西から北東に延びる丘陵の北辺にあたる。基本的な層序は、暗灰色土（耕作土）、灰白色土（床土）の下に灰色粘質土（0.3m）があり、黄橙色砂礫や明緑灰色粘土の大阪層群の地山となる。発掘区北西部は周辺より低くなっており、灰色粘質土の下に褐灰色粘質土（奈良時代整地土、0.2m）、暗褐灰色粘質土（古墳時代後期遺物包含層、0.4m）と続き、地山となる。灰色粘質土、褐灰色粘質土と発掘区北西部を除く地山の上面には乾田または半乾田が営まれていたことを示す酸化鉄の沈着がみられる。古墳時代の遺構検出は地山上面（標高71.7～73.0m）で、奈良時代の遺構検出は暗褐灰色粘質土と地山の上面（標高72.4～73 0m）で行った。

検出した遺構には、古墳時代の溝、区画を囲む濠、土坑、奈良時代の掘立柱建物、塀、溝、井戸、土坑、中世の掘立柱建物、井戸、土坑がある。

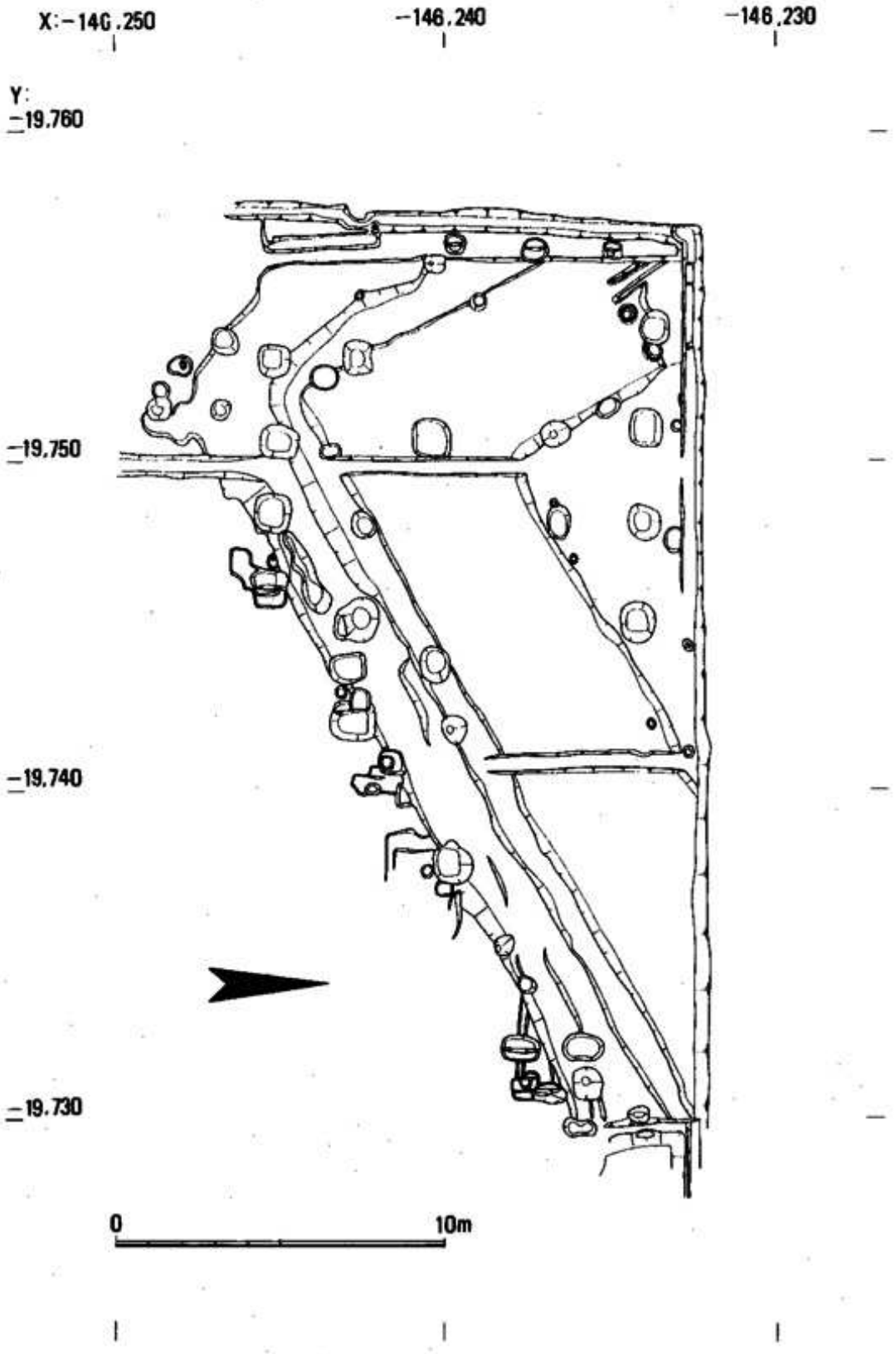
溝 地山上面で古墳時代前期の溝4条SD10・SD11・SD18・SD19を、暗褐灰色粘質土上面で古墳時代後期の南西から北東に斜行する溝5条をそれぞれ検出した。

溝SD10は第237—3次発掘区から続く南西から北東に斜行する溝で、幅1.1m、検出面からの深さ0.2m。発掘区西端から4.0mまで確認した。溝SD11も第237—3次発掘区から続



1 暗灰色土（耕土）・灰白色土（床土）
2 灰白色粘質土
3 黄灰色粘質土・褐灰色粘質土（奈良時代整地土）
4 暗褐灰色粘質土（古墳時代後期須恵器片・土器片含む SD19埋土）
5－a 褐灰色粘質土
5－b 暗褐灰色粘質土（古墳時代前期土器片・炭粒含む）
5－c 褐灰色粘質土（古墳時代前期土器片・炭粒・焼土含む）
5－d 灰白色粘質土
5－e 灰白色粘質土
5－f 灰白色粗砂
5－g 褐灰色粘質土
6 明緑灰色粘質土（上面は明黄褐色 地山）

第256次調査 発掘区北壁土層図（1／100）



第256次調査　濠ＳＤ19平面図（1／200）

く東西方向の溝で幅0.3m、検出面からの深さ0.1m。発掘区西端から5.3mまで確認した。溝ＳＤ18は南東から北西に斜行する溝で幅0.3m、検出面からの深さ0.1m。9.5m分確認した。いずれの溝も埋土は暗褐灰色粘質土で、古墳時代の土師器片が出土した。

溝ＳＤ19は、発掘区北西部で検出した、北西から南東へ向かい、北東方向へ直角に曲がる幅4.8m、深さ0.3mの断面逆台形の溝である。南西辺12m分、南東辺25m分を確認した。各方向とも発掘区外へ続く。地山を一段低く掘り下げて造成された一画をとりまく下り斜面の下端に沿って掘削されている。底面は平坦である。護岸施設はみられない。埋土は上から褐灰色・暗褐灰色粘質土（土層断面図５－ａ～５－ｃ層）、灰白色粘質土・粗砂（同５－ｄ～５－ｅ層）、褐灰色粘質土（同５－ｃ層）は古墳時代前期の土師器片と炭、焼土を多量に含む。また最上層の褐灰色粘質土（同５－ａ層）からは古墳時代中期の須恵器片が出土した。発掘区北西隅の溝内には盛土部分があり、昨年度の第237―3次調査の成果を考慮すれば溝に画される区画の張り出し部とみられる。構築後南に１ｍほど拡幅されており、この部分を南北に横断する幅0.4m、深さ0.2mの素掘りの溝が１条掘削されている。

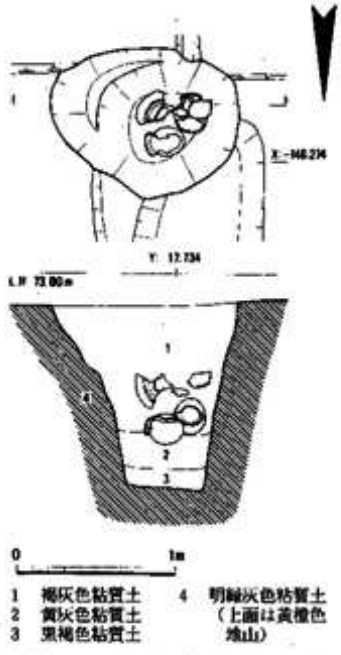
なお、この溝は本発掘区北側で今年度実施した第257―3次調査（次年度報告）で、丘陵の北辺で地山を一段低く掘り下げて造成された古墳時代前期の平面方形の区画の東、南、西の三方を囲む濠であることを確認した。本発掘区で検山したのはその南西部分である。また、第237―3次調査の報告で示した古墳時代整地土の範囲が西辺の濠の一部であることも判明した。この濠は、埋土の堆積状態や出土遺物から、当初空濠であったがその後区画内で不要になった土器や炭、焼土が廃棄されるようになり、古墳時代中期に完全に埋まったものとみられる。

古墳時代後期の溝は幅0.3m、深さ0 2mで断面Ｕ字形。埋土は褐灰色粘質土である。

土坑　土坑SK14～SK17の４基を検出した。規模や形態の特徴を、既述の第236―・236―2次調査報告で示した分類にあてはめると以下のようになる。

Ａ：SK14、Ｂ：SK16・SK17、Ｃ：SK15

土坑SK14の埋土は褐灰色系の粘質土である。坑底から古墳時代前期の土師器片が出土した。土坑SK15の埋土は灰黄色系の粘質土である。埋土から古墳時代前期の土師器片が出土した。土坑SK16の埋土は褐灰色系の粘質土である。埋土からほぼ完形の古墳時代前期の土師器の甕と壺が出土した。土坑SK17の埋土は灰褐色系の粘質土である。埋土から古墳時代前期の土師器片が出土した。



土坑ＳＫ16平面・断面図（１／50）

奈良時代の遺構　掘立柱建物21棟、掘立柱塀10条、溝、性格不明遺構がある。建物、塀の規模などは一覧表にまとめた。以下、種別ごとに概要を記す。

掘立柱建物・塀　桁行1間の建物SB137・SB138・SB141・SB142がある。建物SB141の柱掘形は一辺0.85～1.0m、検出面からの深さ0.5～0.6m、建物SB142の柱掘形は一辺0.95～1.1m、検出面からの深さ0.6mと大きく、それぞれ一方の柱掘形に柱根が残る。建物SB137、SB138はほぼ坪の東西の中軸線上にあり、建物SB142は三条条間路に面する位置にあることから門である可能性がある。控柱がないので冠木門もしくは棟門の型式をとるかと考えられる。これが門遺構であるとすると、これに取り付く築地か塀があったと考えられるが、いずれも桁行の延長線上に柱掘形が認められないため、削平され痕跡を残していない小規模な築地であったのかもしれない。また、建物SB138の西4.2m、建物SB142の北6.6mの位置に柱間2間の塀SA152とSA153がある。目隠し塀になるのであろう。

発掘区南西隅の建物には、重複関係からSB113→SB131→SB132の変遷があったことがわかる。そのうち建物SB131はSB113を同位置で建て替えており、建物規模も同じである。前身建物SB113の柱掘形は検出面からの深さ0.55～0.9mと比較的深く、柱痕跡が残るものがある。SB131の柱掘形は一辺1.0～1.4m、検出面からの深さ0.25～0.5mで、人頭大の石が入れられたものや柱抜取痕跡が残るものがある。建物SB113の柱掘形を再掘削し柱を切り倒したのち、柱掘形に石を据え、SB131を建てたものと考えられる。さらに建物SB131をSB132に建て替えるが、桁行、梁間ともに柱間寸法を短くし、建物規模を縮少している。

発掘区北西隅で検出した建物SB146は、建物SB113・SB131と柱筋をそろえ、建物SB145は建物SB132と中軸が一致することから、それぞれ同時期の建物である可能性が高い。

発掘区北半中央の建物には、重複関係からSB150→SB148、SB149の変遷があったことがわかる。建物SB148とSB149は総柱建物で、棟筋をそろえ南北に並ぶ。塀SA156は建物SB150と桁行の全長をそろえること、塀SA158は位置からみて建物SB150の目隠し塀であろう。塀SA157とSA159は建物SB148・SB149と桁行の全長をそろえることから、建物SB148、SB149の目隠し塀であろう。

発掘区南辺中央の建物SB136は桁行3間（5.7m）、梁間2間（3.6m）の小規模建物である。桁行の西から1間目に間仕切りの柱掘形があり、西に土廂が付く。柱掘形は一辺

建物SB113・SB131・SB132南側柱列断面図（1／100）

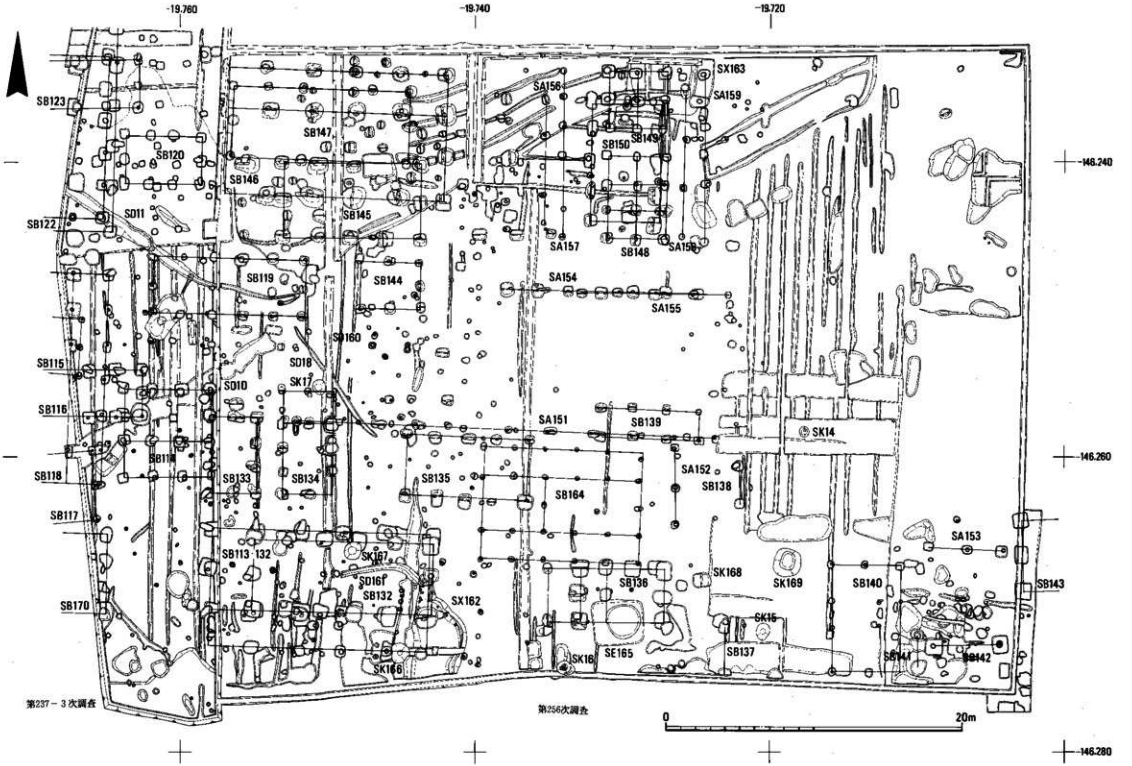
遺構番号	棟方向	規模（桁行×梁間）	桁行全長 m（尺）	梁間全長 m（尺）	桁行柱間寸法(尺)	梁間柱間寸法(尺)	廂の出（尺）	備考
SB113	東西	5×3	14.85（50）	7.95（27）	10等間	9等間	（南）9	
SB131	東西	5×3	14.85（50）	5.35（18）	10等間	9等間		SB113と同位置
SB132	東西	5×2	11.8（40）	4.8（16）	8等間	8等間		
SB133	南北	3×2	5.1（17）	3.0（10）	6－6－5	5等間		
SB134	南北	3×2	7.1（23.5）	3.3（11）	5.5等間	5.5等間		北土廂（7）付
SB135	東西	4×1	8.35（28）	4.15（14）	7等間	14		
SB136	東西	3×2	5.7（19）	3.6（12）	6－6－7	6等間		北土廂（7）付
SB137	南北	1	3.0（10）					門
SB138	南北	1	2.65（9）					門
SB139	東西	3×1	6.75（22.5）	1.8（6）	7.5等間	6		
SB140	南北	3×2	7.3（24）	4.2（14）	8等間	7等間		
SB141	南北	1	2.1（7）					門
SB142	東西	1	4.5（15）					門
SB143	東西	?×2		4.8（16）		8等間		
SB144	東西	2×2	3.9（13）	3.3（11）	6.5等間	5.5等間		
SB145	東西	4×2	9.45（32）	5.05（17）	8等間	8.5等間		
SB146	東西	5×3	14.9（50）	8.3（28）	10等間	9.5等間	（北）9	
SB147	東西	5×2	12.0（40）	4.8（16）	8等間	8等間		
SB148	南北	3×2	5.4（18）	4.1（14）	6等間	7等間		総柱建物
SB149		2×2	3.8（13）	3.8（13）	6.5等間	6.5等間		総柱建物
SB150	南北	4×2	8.4（28）	4.4（15）	7等間	7.5等間		
SA151	東西	9	26.4（88）					柱間不揃い
SA152	南北	2	4.6（15）		7－8			
SA153	東西	2	5.1（17）		9－8			
SA154	東西	6	12.3（42）		7等間			
SA155	東西	4	9.8（32）		8等間			
SA156	南北	4	8.1（28）		7等間			
SA157	南北	6	14.2（48）		8等間			
SA158	南北	3	9.9（33）		11等間			
SA159	南北	6	14.2（48）		8等間			

掘立柱建物・塀一覧表

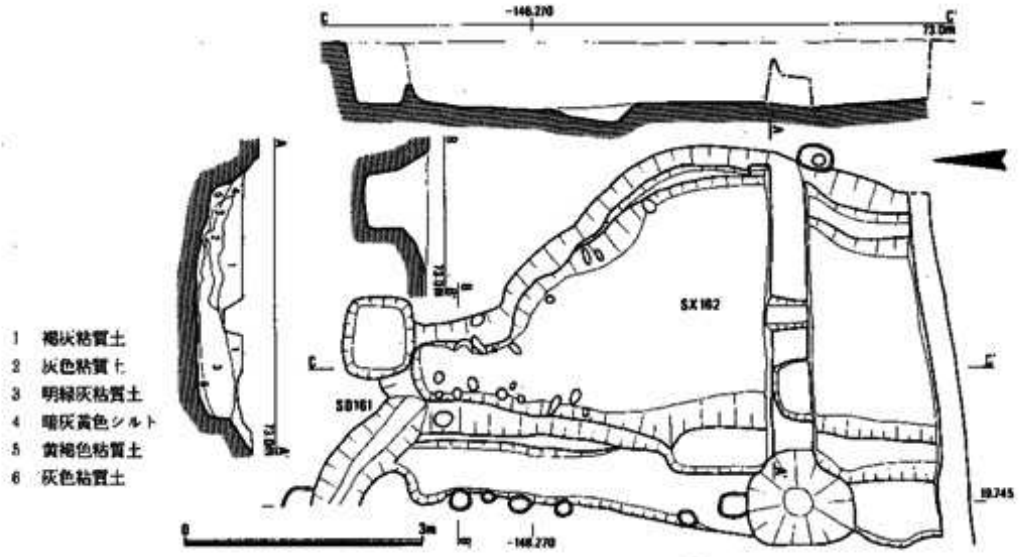
1.1m、検出面からの深さ0.8～0.9mと大きい。土廂の妻柱相当位置には柱掘形がなく梁間2間分を架け渡している。建物SB135は東、西とも妻柱相当位置に柱掘形がなく梁間4.15mを、建物SB144は西妻柱相当位置に柱掘形がなくそれぞれ梁間2間を架け渡している。建物SB139は梁間1間が1.8mと狭い。

SD160　発掘区西半で検出した南北方向の素掘りの溝。幅0.7m前後、検出面からの深さ0.55m前後、18.5m分を検出した。南端は徐々に浅くなり途切れ、北端は発掘区外へ続く。溝底はわずかに北へ傾斜する。重複関係から建物SB132・SB134・SB145、塀SA151より古いことがわかる。

SX162・SD161　SX162は発掘区南辺西よりで検出した性格不明遺構。掘形は平面不整形で東西4.2m、南北6.7m、検出面からの深さ0.8mである。北端には溝SD161が取り付き、南は発掘区外へ続く。溝SD161との接続部では掘形の幅が狭くなり、肩にそって杭の痕跡がある。溝SD161は幅0.5m前後、検出面からの深さ0.2m前後とSX162に比べ浅い。わずかに弧を描き、溝SD160の南端近くにつながる。溝SD160の溝底の勾配からみて、溝SD161はSX162の排水溝であろう。掘形内埋土は上層から埴輪片を含んだ褐灰色粘質土、灰色粘質土、地山である明黄褐色砂質土と明緑灰色粘質土、灰色粘土である。間層に灰色



第256次調査　遺構平面図（1／250）



SX162平面・断面図（1／100）

粘質土があることから2回にわけて埋められたことが窺える。重複関係から建物SB113・SB131・SB132よりも古いことがわかる。最下層灰色粘質土から花粉分析の試料を採取した。

SX163　発掘区北辺中央で検出した不明遺構。掘形は平面不整形で東西4.8m、南北3.05m以上、北は発掘区外へ続く。深さ2.3mまでを確認した。掘形断面は箱型であるが、西辺と南辺は二段掘りになっており、西辺には幅0.8m、長さ2.4m、深さ0.4m、南辺には幅0.9m、長さ3.1m、深さ0.45mほどの段が付く。掘形埋土は均一で、地山である黄褐色砂質土がまざった灰色粘土である。一気に埋められたと考えられる。埋土から奈良時代の土器と木製品が出土した。重複関係から建物SB149・SB150、塀SA158・SA159よりも古いことがわかる。

中世の遺構　掘立柱建物1棟、井戸1基、土坑4基、小穴がある。

建物SB164は桁行5間（10.5m）、梁間4間（7.5m）の南北廂付東西棟建物。身舎桁行の西から2間目に間仕切りの柱掘形がある。柱間寸法は桁行が2.1m等間、梁間は1.8m等間、廂の出は1.95mである。柱掘形は径0.4m前後、検出面からの深さ0.15～0.3mと小さく、なかに12世紀後半の瓦器椀が出土したものがある。井戸SE165は掘形の平面隅丸長方形で、東西3.5m、南北3.0m、深さ2.4m。井戸枠の抜取痕跡がある。掘形埋土から少量の12世紀後半の土器が出土した。土坑SK169は平面円形掘形で、径1.8m、深さ1.1m。坑内の埋土は何層もの灰色系の粘土と浅黄色砂が互層になっている。土坑SK166・SK167・SK168は掘形の径1.0～1.3m、深さ0.4～0.5mの小土坑。いずれの土坑も埋土から少量の12世紀後半の土器が出土した。他に、径0.3mほどの小穴がある。柱掘形かと思われるが建物としてはまとまらない。

Ⅲ　出土遺物

瓦類、土器類、木製品、石器・石製品がある。以下、種別ごとに概要を記す。

瓦　類　遺物整理箱で12箱分の瓦が出土した。大半が丸、平瓦で、軒瓦は土坑SK169から平安時代以降の軒丸瓦２点と、遺物包含層である灰褐色粘土から軒平瓦（6663種別不明）１点が出土した。他にSX162から磚が１点出土している。

土器類　古墳時代、奈良時代のものと中世の土器類がある。

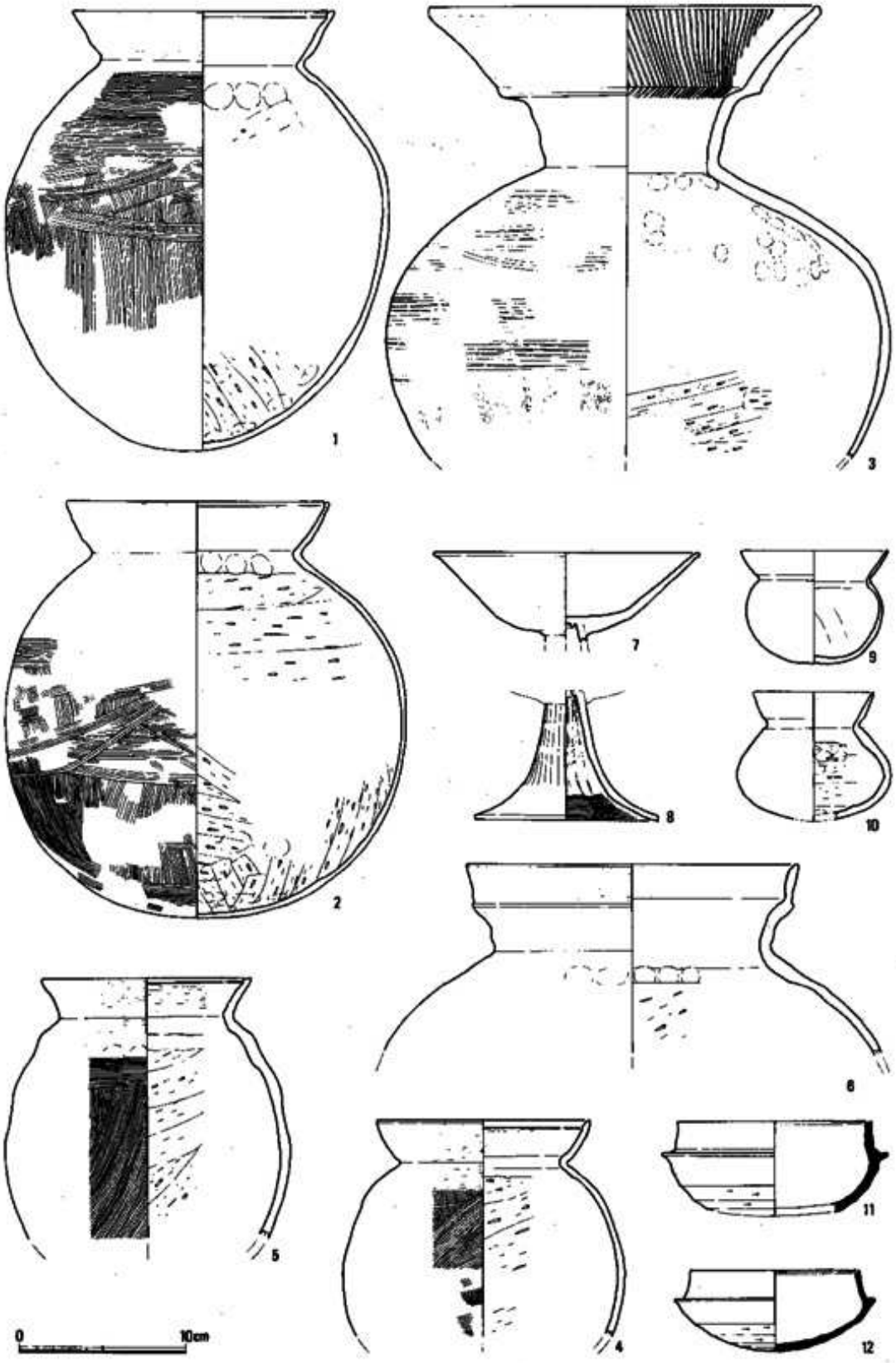
古墳時代の土器類　遺物整理箱で10箱分出土した。大半が古墳時代前期後半の土師器（甕、壺、高杯、小形丸底壺）で、少量の古墳時代中期後半の須恵器（甕、杯蓋、杯身、高杯）もある。ここでは、土坑SK16の埋土から一括して出土した３点の土師器と、溝SD19の埋土から出土した土師器、埋土最上層から出土した須恵器について記す。

土坑SK16出土土器（１～３）　土師器甕、二重口縁壺がある。甕（１・２）はともに口径16cm前後、器高25cm前後。口縁端部は内面が肥厚し端面が丸い。体部外面のハケメは、全面に縦方向を施した後上半に横方向を施す。頸部と底部の内面に指頭圧痕が残る。二重口縁壺（３）は口径23.3cm、体部最大径30.3cm。口縁端部はわずかに立ち上がる。口縁部内面はナデの後へラミガキが施される。体部外面下半はハケメの後へラミガキが施される。肩部内面に指頭圧痕が残る。

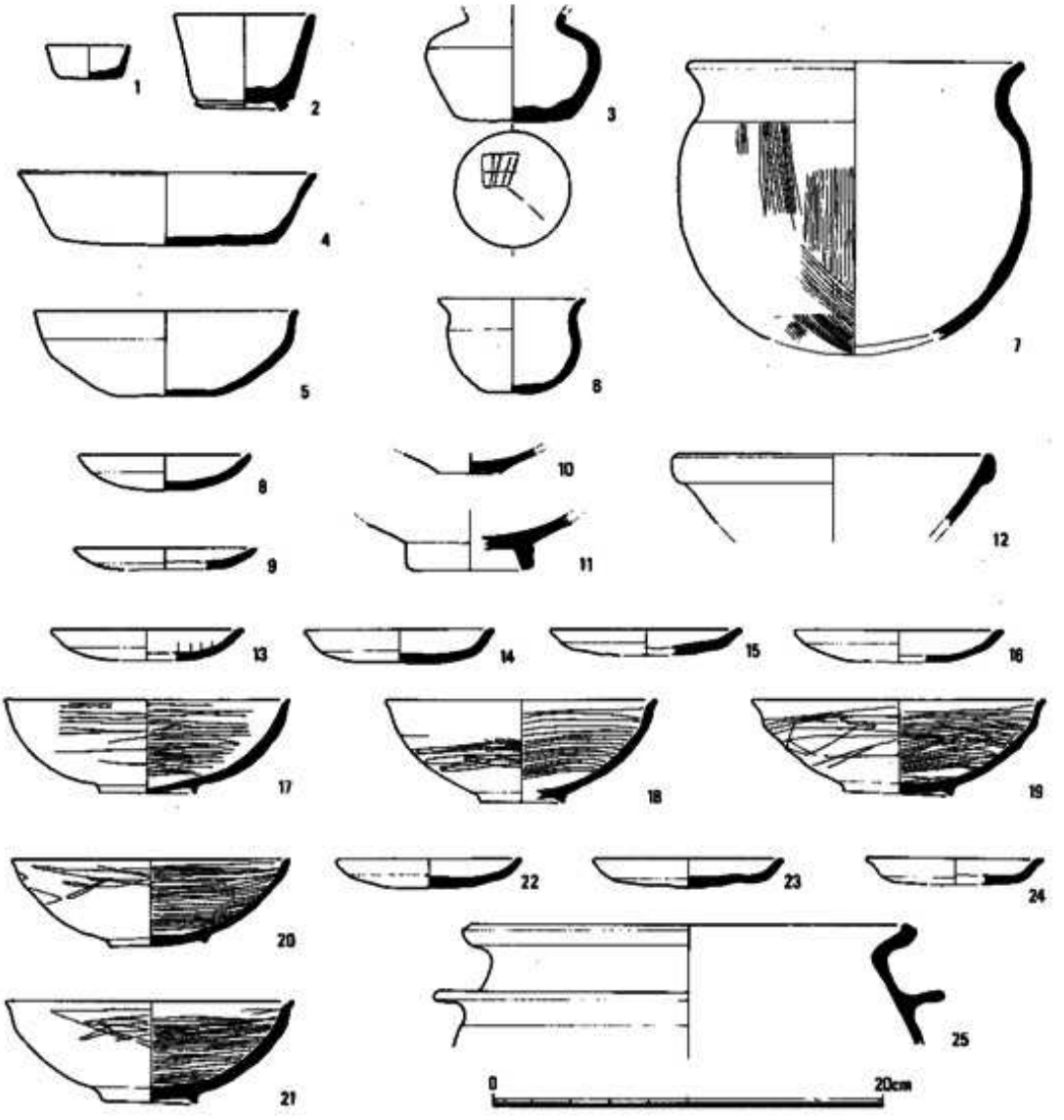
溝SD19出土土器（４～12）　土師器甕・高杯・小型丸底壺、須恵器甕・杯蓋・杯身・高杯がある。大半が細片で全体のわかるものは少ない。土師器甕は球形の体部に内湾気味に外傾する口縁部が付くもの（４）、やや長胴気味の丸い体部に外反する口縁部が付くもの（５）、二重口縁のもの（６）がみられるが、大半が４の形態のものである。４の口縁端部内面は概して肥厚する。これらは先述した土坑SK16から出土したものよりは新しい特徴を示す。土師器高杯の杯部はすべて口縁端部がわずかに外反し口縁部と底部の境の屈曲が緩い形態のもの（７）である。また脚部は大半が中空で裾がラッパ状に開く形態のもの（８）だが、中実のものもみられる。土師器小形丸底壺は体部が扁平な球形のもの（９）と下ぶくれの球形のもの（10）がみられる。須恵器杯身は２点で、口縁部が直立し底部が平底に近いもの（11）と、それより少し時期の下る口縁部がやや内傾し底部が丸みを帯びるもの（12）がある。

奈良時代の土器類　ここでは建物SB136の北東隅の柱掘形から出土した土器について記す。須恵器では杯Ａ（４）、杯Ａ（１）・椀Ｂのミニチュア（２）、壺Ｃ（３）、甕が、土師器では椀Ｃ（５）、壺Ｂ（６）、甕Ａ（７）、高杯が出土している。奈良時代前半から中頃のものであろう。

中世の土器類　ここでは井戸SE165、土坑SK168・SK169出土の土器類について概略を記す。井戸SE165出土土器には土師器皿（８・９）、瓦器椀、白磁皿（10）、白磁椀（11・12）



古墳時代出土土器（1／4）



奈良時代・中世出土土器（1／4）

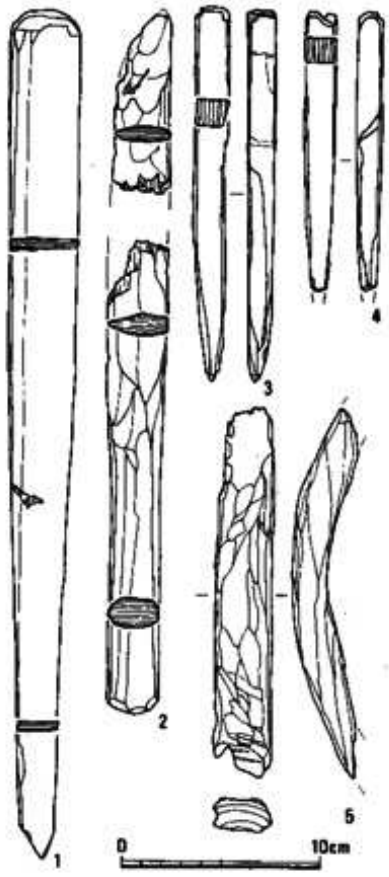
がある。8は口径8.6cm。体部は内湾し丸底状である。9は口径9.2cm。平底である。11は高台径4.6cm。高台は削り出されている。12の口縁部は玉縁状である。いずれも12世紀後半のもの。土坑SK168出土土器には土師器皿（15・16）、瓦器皿（13・14）、瓦器椀（17～19）がある。土師器皿は口径10.5cm前後。瓦器皿は口径9.5cm前後。瓦器椀は口径14～14.5cm程度で見込部に螺旋状の暗文が施される。いずれも12世紀後半のもの。土坑SK169出土土器には土師器皿（22・23）、瓦器皿（20・21）、土師器釜（25）がある。土師器皿は口径9.5cm前後。瓦器皿は口径9.3cm。瓦器椀は口径14.5cm前後で、見込部に螺旋状の暗文が施される。いずれも12世紀後半のもの。

木製品　SX163、井戸SE164、土坑SK169から木製品が出土した。以下、主なものにつ

いて記す。

1は用途不明。材の一端を丸く作り、他端は幅を狭め先端を剣先状に尖らせる。粗い削り加工。最大幅3.4cm、厚さ0.6cm。井戸SE164掘形出土。2は刀形である。柄と刀身の境は不明瞭。刀部中央が欠損し、全長は不明。粗い削り加工。刀部幅3.0cm、柄部長径2.5cm、短径1.4cm。SX163出土。3・4も用途不明。いずれも角棒の一端を尖らせている。他端は欠損。3は残存長18.7cm、幅1.7cm、厚さ1.3cm。4は残存長18.7cm、幅1.7cm、厚さ1.3cm。いずれもSX163出土。5は取手である。湾曲する握部を粗く削り出すが、両端とも欠損しもとの形状は不明。残存長13.4cm、長径2.3cm、短径1.7cm。土坑SK169出土。

石器・石製品　石斧、砥石、管玉、40点あまりのサヌカイトの剥片が出土した。うち石斧は弥生時代前期の特徴をもつ太型蛤刃石斧で、長さ9.4cm、幅6.2cm、厚さ3.8cm。管玉は布留式土器とともに出土した。



出土木製品（1／4）

Ⅳ　まとめ

本年度は、第256次調査に引き続き北に隣接して第257－3次調査を行っている。その成果は次年度に報告する予定であるが、あわせて考察すべき問題が多いと考えるので、ここでは各時代の遺構についておおまかに問題点を記しまとめとする。

古墳時代の遺構では、丘陵斜面を開削した濠SD19の一部を検出したことから、本発掘区の北に濠SD19に囲まれた区画が想定できる。第257－3次調査で区画内の様相を究明するとともに、これまでの調査で区画外の地区でも濠SD19と同時期の遺構を検出しており、地区ごとの遺構の変遷と性格を明らかにする必要があると考える。

奈良時代の遺構は二坪の中央部では密度が希薄で、想定した築地で画される坪の西半に集中する。建物遺構には既述の重複関係から四期の変遷があることがわかった。二坪のこうした建物配置は特異で、坪全体の建物配置計画や中央の空閑地の性格を明らかにする必要があると考える。

中世の遺構では、12世紀後半の掘立柱建物と井戸、土坑を検出した。近接する第236次調査区でも同時期の掘立柱建物や溝を検出しており、従来知られていなかったこの地域の中世遺跡に関わる資料が蓄積されつつあると考える。

（池田裕英　久保清子　立石堅志　西崎卓哉　松浦五輪美　安井宣也　宮崎正裕）

平城京右京三条三坊二坪SX162内堆積土の花粉分析

天理大学附属天理参考館　金原正明　環境文化研究所　金原正子

平城京右京三条三坊二坪SX162内堆積土４試料の花粉分析を行った。試料となる堆積土はSX162の最下層の灰色粘質土（p21 SX162平面・断面図 第６層）で肉眼で観察しえる植物遺体は含まれていない。試料は任意にSX162—1・SX162—2・SX162—3・SX162—4とナンバーを付けた。

分析処理は以下の方法で行った。

i）試料に５％水酸化カリウムを加える。

ii）遠心して水洗した後、0.25mm篩によって大きな粒子を除去する。

iii）25％フッ化水素酸を加え、一昼夜放置する。

iv）遠心して水洗した後、氷酢酸によって脱水し、再び遠心して上澄を捨てる。

v）エルドマン氏液（無水酢酸９：1硫酸）を加え１分湯煎し、アセトリシス処理を行う。

vi）再び氷酢酸を加えた後、遠心して上澄を捨てる。

vii）遠心による水洗を繰り返す。

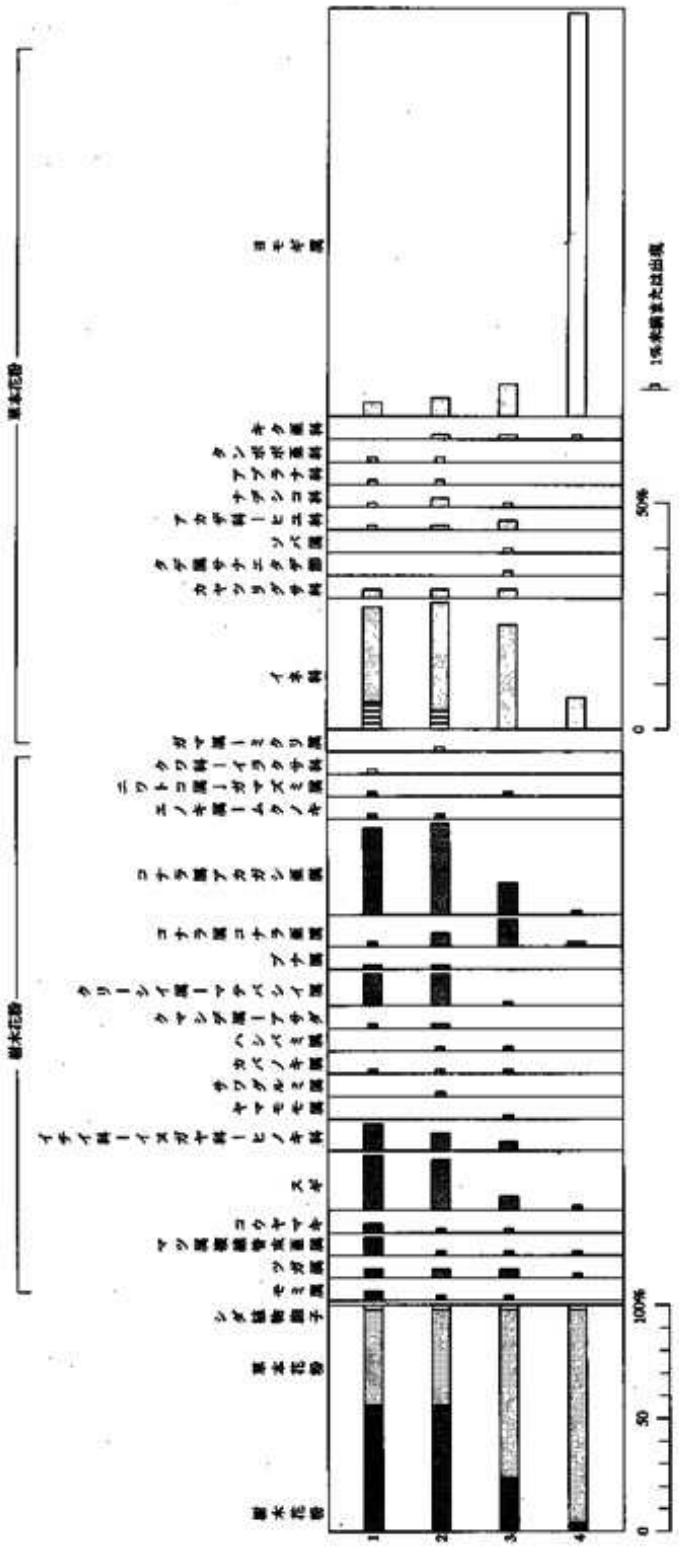
viii）グリセリンゼリーを加え、プレパラートを作成する。

同定は現生の花粉標本との対比によって行い、検境は花粉総数が200～300個以上になるまで行った。

検境の結果、樹木花粉17、草本花粉12、樹木と草本を含むもの１、シダ植物胞子２形態の32の分類群が同定された。結果は花粉総数を基数とする百分率を算定し花粉組成図に示した。SX162—1・SX162—2では樹木花粉の占める割合が草本花粉よりやや多く、SX162—3・SX162—4では草本花粉が優占する。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属とスギが優占し、クリーシイ属—マテバシイ属、そして他の針葉樹・広葉樹と続く。これらの樹木花粉は風媒花の植物が多く、平城京および周辺地域の樹木相を反映したものと考えられる。この結果からみて当時の森林相はコナラ属アカガシ亜属とスギを主とした照葉樹林が周辺地域に分布していたとみなされる。

草本花粉ではイネ科とヨモギ属が優占する。他にアカザ科—ヒユ科やナデシコ科も出現しており、これらは人里の乾陸環境に好んで生育する草本であり、周辺が比較的開けた人里の景観であったことを示している。

SX162—4ではヨモギ属花粉が約90％に達し、数十個から数百個にもなる花粉の塊が検出された。このことはヨモギ属が堆積地に直接影響を及ぼしえる近隣に生育していたことを示す。他に堆積速度が速く、ヨモギ属の開花期である夏から秋にかけての堆積物である可能性がある。また、ヨモギ属は改変地や人里の乾燥したところに好んで生える。他にガマ属—ミクリ属とタデ属サナエタデ節の水湿地草本もわずかだが検出されている。



SX162採取試料花粉組成図

2　平城京朱雀大路の調査　第246次

Ⅰ　はじめに

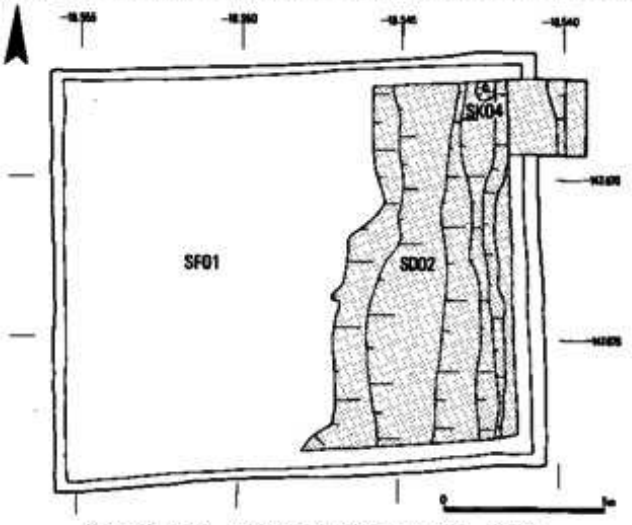
本調査は奈良市柏木町124、125、126番地において、奈良市農業協同組合の育苗施設建設に伴って実施した事前発掘調査である。調査地は平城京の条坊復原では朱雀大路にあたる。調査は建物建設予定地の南、北に二箇所の発掘区を設定して行った。北発掘区は面積199㎡、南発掘区は面積171㎡で、朱雀大路の検出を目的とした。調査期間は平成４年２月17日から同年３月11日である。

Ⅱ　検出遺構

北発掘区内の基本的な層序は、黒褐色土（耕土）、盛土、黒褐色土（旧耕土１）、黒褐色土（旧耕土２）、灰色砂質土と続き、地表下約0.5ｍで黄褐色粘土の地山に達する。南発掘区内の基本的な層序は、盛土、黒褐色土（旧耕土）、灰色砂質土と続き、地表下約1.1ｍで黄褐色粘土の地山に達する。両発掘区とも遺構は地山上面で検出した。地山上面の標高は北発掘区が約57.2m。南発掘区が57.0ｍである。以下検出遺構について述べる。

SF01　朱雀大路である。北発掘区では南北約12ｍにわたり、路面幅約９ｍまでを確認し、南発掘区では南北約11.2ｍにわたり、路面幅約7.4ｍまでを確認した。路面には石敷きなどの痕跡はない。

SD02　朱雀大路の東側溝である。北発掘区では幅6.7m、検出面からの深さ約1.1ｍである。南発掘区では、溝の東半分が発掘区外になるので、全幅は不明だが、幅約6.1m、検出面からの深さ約0.6ｍまでを確認した。素掘りの溝で、護岸施設はない。埋土は上から順に、暗灰色砂質土、燈灰色土、暗灰色土、暗灰褐色砂質土、暗灰色砂、明灰白色土と暗灰色砂の混乱土である。溝内から、須恵器・土



第246次調査　北発掘区遺構平面図（１／250）

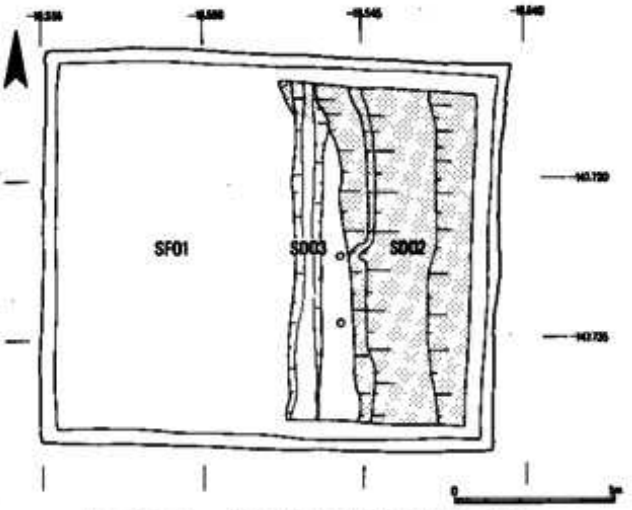
1．黒褐色土（耕土）
2．盛土
3．黒灰色砂質土
4．黒褐色土（旧耕土１）
5．黒褐色土（旧耕土２）
6．灰色砂質土
7．暗灰色砂質土
8．燈灰色土
9．暗灰色土
10．暗灰褐色砂質土
11．暗灰色砂
12．明灰白色土と暗灰色砂の混乱土
13．灰色粗砂（ＳＫ04埋土）

第246次調査　北発掘区北壁土層図（１／100）

師器、丸瓦・平瓦・熨斗瓦、獣骨が出土したが、その量は少ない。また珪藻遺骸の分析をすべく試料を採取したが、珪藻遺骸は含まれていなかった。

SD03　南発掘区中央で検出した南北方向の素掘りの溝である。幅約1.1m、検出面からの深さ約0.15mである。埋土は灰茶色砂質土である。溝内から、瓦片が1点出土した。重複関係から溝SD02より古いことがわかる。

SK04　北発掘区北東隅で検出した平面円形掘形の土坑である。溝SD02の掘削時に、削平されており、溝SD02より古いことがわかる。残存部は径約0.6m、深さ約0.15mある。埋土は灰色粗砂である。



第246次調査　南発掘区遺構平面図（1／250）

第246次調査　南発掘区北壁土層図（1／100）

Ⅲ　出土遺物

溝SD02の埋土から、奈良時代の土器片、瓦片が出土した。瓦は朱雀大路に面した左京六条一坊の築地に葺かれていたものであろう。軒丸瓦、軒平瓦は出土していない。他に溝SD02からは獣骨が出土しているが、種名は不明である。土坑SK04からは古墳時代前期の布留式土器の甕1点が出土した。

Ⅳ　まとめ

本調査では部分的ではあったが、朱雀大路の路面と東側溝を検出した。その検出位置はこれまでの調査成果から復原した位置と合致しており、京の条坊施行の厳密さを裏づける資料を追加できた。以下に今回検出した朱雀大路東側溝心の位置と、これまでの調査成果を整理しておく。

（原田憲二郎）

地　点　名	X	Y	備　考
二条大路朱雀大路東側溝心	−146,008.030	−18,545.500	奈良国立文化財研究所『昭和56年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1982
左京三条一坊一・二坪境小路朱雀大路東側溝心	−146,151.000	−18,548.100	奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書昭和61年度』1987
左京三条一坊二坪朱雀大路東側溝心	−146,255.700	−18,547.700	奈良市『平城京朱雀大路発掘調査報告』奈良国立文化財研究所　1982
左京六条一坊二坪朱雀大路東側溝心	−147,668.000	−18,541.200	今回の調査
左京六条一坊二坪朱雀大路東側溝心	−147,797.000	−18,540.850	奈良市教育委員会『平城京朱雀大路発掘調査報告』奈良国立文化財研究所　1974

朱雀大路東側溝心国土座標値表

朱雀大路東側溝内堆積土の微遺体分析

天理大学附属天理参考館　金原正明　環境文化研究所　金原正子

朱雀大路東側溝SD02の堆積土（p31 第246次調査北発掘区北壁土層図 第7～12層）21試料の花粉分析を行った。

分析処理は試料に水酸化カリウム処理、篩別、フッ化水素酸処理、アセトリシス処理の各物理化学処理を施して分離抽出を行い、プレパラートを作製した。

分析の結果を花粉組成図に示す。樹木では増減の著しいマツ属複維管束亜属（ニヨウマツ類）などが近くに生えていた可能性がある。また、カキノキ属の花粉が出現している。草本ではイネ科が多く、タデ属サナエタデ節などの水湿地を好むものとヨモギ属などの乾陸を好むものとが含まれる。最も優占するイネ科は種類が多く水湿地と乾陸の植物を含み、ガマ属―ミクリ属・オモダカ属・タデ属サナエタデ節・フサモ属は溝周辺に、ヨモギ属・アカザ科―ヒユ科は大路周辺に生えていたとみられる。他に食用となるソバ属の花粉もみられる。

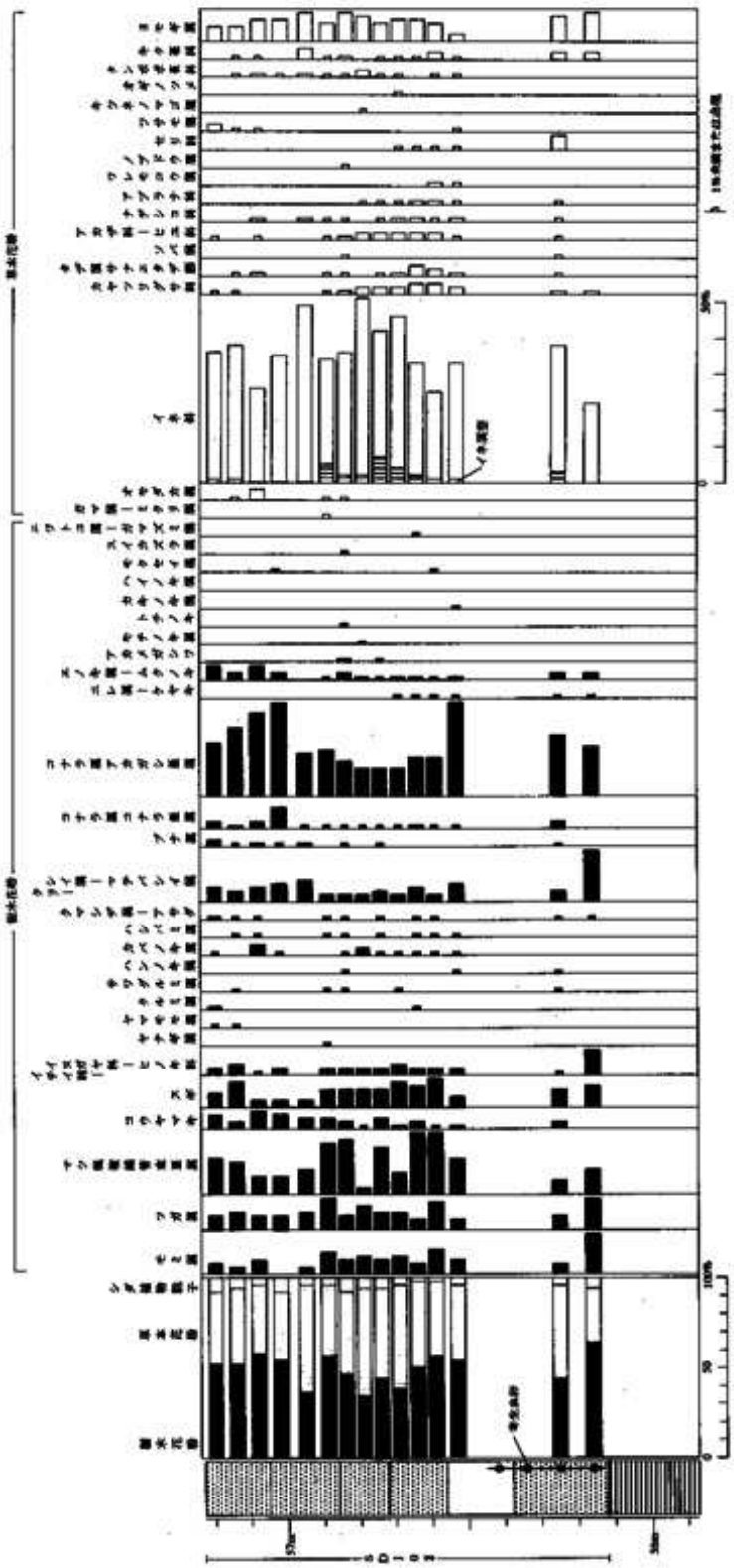
他に寄生虫卵の含まれる層位があったので金原（1992、「花粉分析および寄生虫」『藤原京跡の便所遺構』 奈良国立文化財研究所）に示された方法によってプレパラートを作製し、試料1×$10^{-1}$$cm^{-3}$量について検鏡を行ない同定計数した。

残存する卵殻のみでは、回虫（＊1）は豚回虫と、横川吸虫（＊2）はやや大きく形態の類似する高橋吸虫そして他の異形吸虫と、いずれも形態分類が難しい。ここではこれらの分類群に含めておく。

回虫、鞭虫、肝吸虫、横川吸虫という組成からみて人間の糞便がまじりこんだとみなされる。寄生虫卵の含まれる層位は連続的で限定的であり、一時期、糞便が混ざり堆積したのであろう。

分類群				試料（1×10^{-1}㎤）			
学名		和名	部位	15	16	17	18
Ascaris lumbricoides	＊1	回虫	卵殻			2	1
Trichuris trichiura		鞭虫	卵殻	1	1	2	1
Clonorchis sinensis		肝吸虫	卵殻			1	1
Metagonimus yokogawai	＊2	横川吸虫	卵殻		1	1	
		計		1	2	6	3

朱雀大路東側溝SD02採取試料寄生虫卵計数表



朱雀大路東側溝SD02採取花粉組成図

3　平城京左京三条三坊三坪の調査　第247次

Ⅰ　はじめに

本調査は、奈良市大宮町七丁目531－1他において、関電産業株式会社届出の事務所ビル建設に伴って実施した事前発掘調査である。調査地は平城京の条坊復原では左京三条三坊三坪の北西の一画にあたる。調査は東西20m、南北45m、面積900㎡の発掘区を設定して行った。調査期間は平成4年4月1日から同年5月12日である。なお、本調査地では平成3年2月1日に試掘調査を行っており、今回の調査はその成果にもとづき行った。

Ⅱ　検出遺構

発掘区の基本的な層序は、盛土、黄褐色砂（自然流路）、黒褐色土（旧耕土）と続き茶褐色土の地山に達する。奈良時代の遺構はすべて、地山上面で検出した。地山上面の標高は、概ね60.6mである。ただし、発掘区の西半では中、近世の南北方向の旧河道により、それ以前の遺構は失われていた。この旧河道は当時の佐保川の流れと思われる。検出した遺構には、弥生時代の溝1条、奈良時代の掘立柱建物6棟、土坑3基、井戸1基、中、近世の土堤、木杭列がある。

以下に各遺構の概要を記す。

SD01　発掘区中央で検出した東西方向の素掘りの溝である。幅約0.2m、検出面からの深さ約0.1mである。溝の埋土から弥生時代前期の土器片が出土した。

SB02　発掘区北東辺で検出した桁行3間（6.3m）、梁間2間（4.8m）の南北棟建物である。柱間寸法は桁行2.1m等間、梁間2.4m等間である。

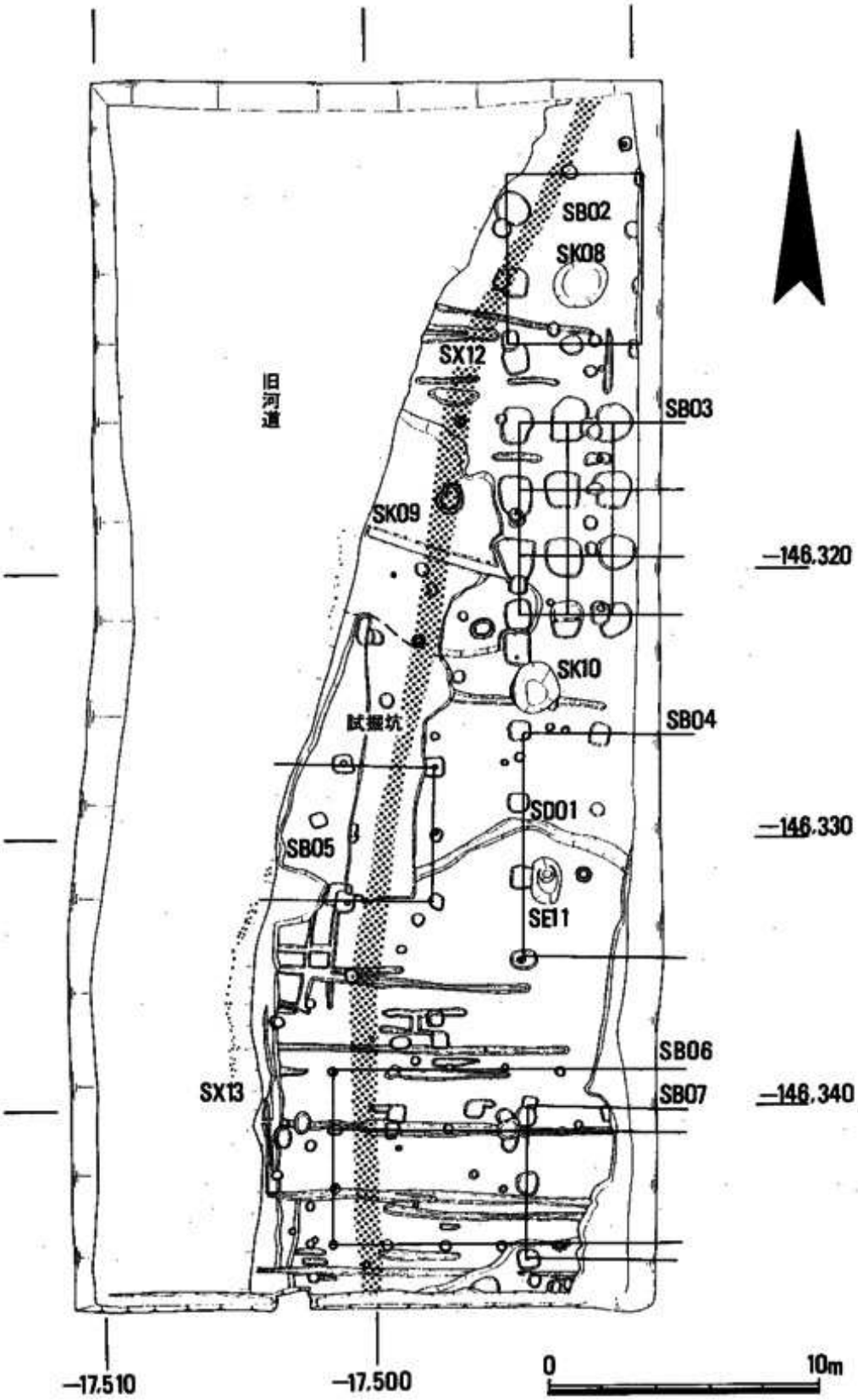
SB03　発掘区中央東寄りで検出した南北3間（7.2m）、東西3間以上の総柱建物である。柱間は南北2.4m等間、東西1.8m等間である。遺構の重複関係から土坑SK09より新しいことがわかる。

SB04　発掘区中央東寄りで検出した南北3間（8.1m）、東西2間（6.0m）以上の建物である。柱間寸法は南北2.7m等間、東西3.0mである。

SB05　発掘区中央で検出した桁行2間以上、梁間2間（4.8m）の東西棟建物である。柱間寸法は桁行3.3m、梁間2.4等間である。

SB06　発掘区南辺で検出した桁行5間（10.5m）以上、梁間2間（4.2m）の東西棟建物で北廂が付く。身舎の柱間寸法は桁行、梁間ともに2.1m等間で、廂の出も2.1mである。

SB07　発掘区区南東隅で検出した南北2間（5.4m）、東西2間（5.4m）以上の建物である。柱間寸法は南北2.7m等間、東西2.7mである。



第247次調査　遺構平面図

SK08　発掘区北東辺で検出した掘形の平面円形の土坑である。径約2.0m、検出面からの深さ約0.8mである。埋土から奈良時代前半の土器片が出土した。

SK09　発掘区中央で検出した掘形の平面が不整形な土坑である。西側部分が、旧河道で削平されており、南北約8m、東西約5m分が残存していた。検出面からの深さ約0.4mである。埋土から奈良時代の土器、瓦片が出土した。

SK10　発掘区中央東寄りで検出した掘形の平面円形の土坑である。径約1.8m、検出面からの深さ約1.0mである。埋土から、奈良時代前半の土器片、軒平瓦（6668A）、木片が出土した。

SE11　発掘区中央で検出した素掘りの井戸である。掘形は平面長円形で東西約1.1m、南北約1.8m、検出面からの深さ約1.6mである。検出面からの深さ約0.9mのところに段があり、下段は径約0.5mの平面円形に掘り込まれている。埋土は二層に分かれ、掘形上段は灰色砂質土で、掘形下段は暗灰色粘土である。

SX12　発掘区中央で検出した南北方向の土堤である。残存幅約0.8m、高さ約0.4mで、南北約45m分を検出した。発掘区西半で検出した旧河道に対する護岸施設であろう。上面の所々で竹の根を検出していることから、黒褐色土で土堤を築き竹を植えて補強していたと考えられる。

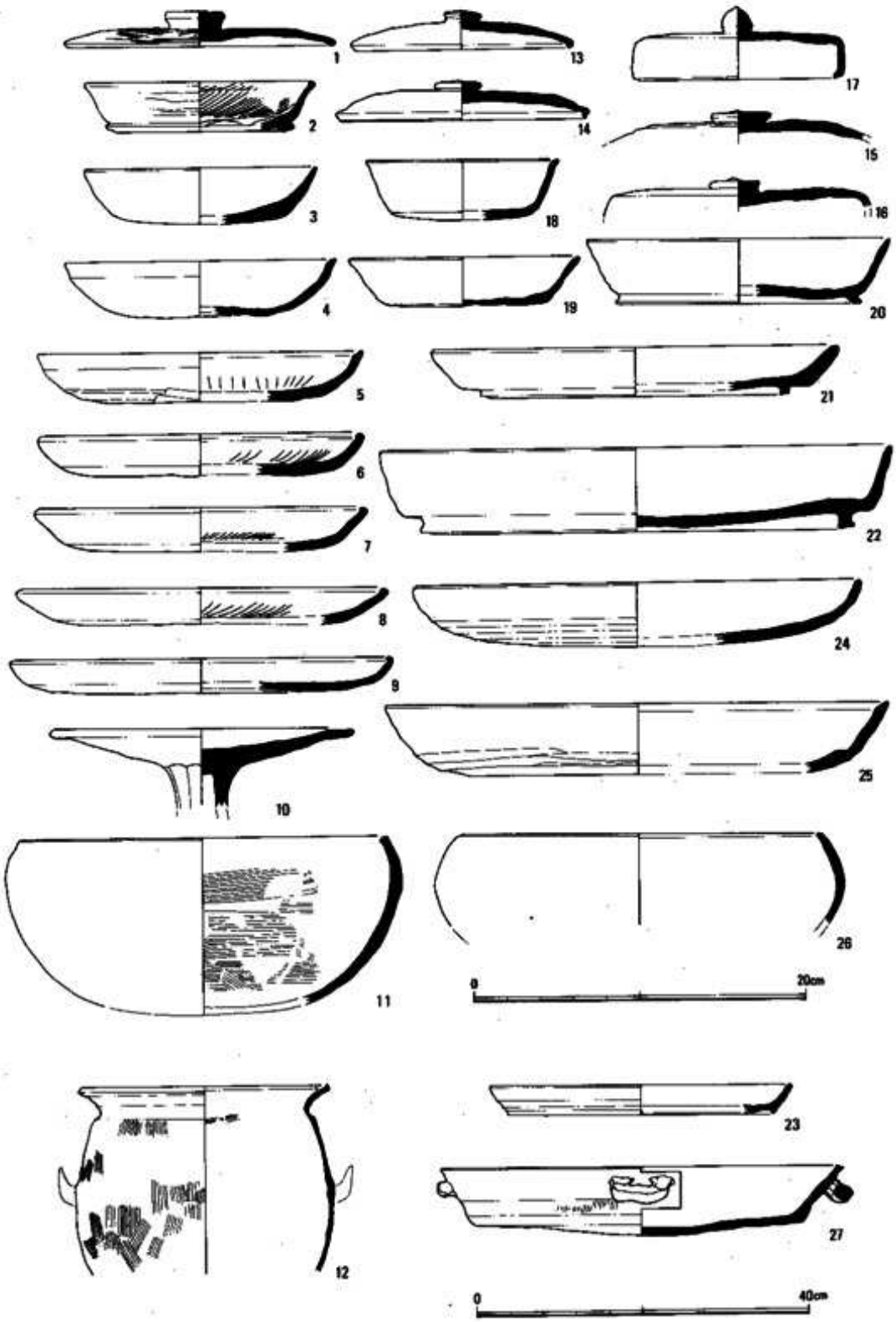
SX13　旧河道東岸で検出した木杭列である。杭は全て径0.1m、長さ1.0mほどの丸太杭で、防腐のために表面を焼いている。護岸施設であろう。

Ⅲ　出土遺物

瓦　類　瓦類のうち、軒瓦について記す。軒瓦が計6点出土した。内訳は、軒丸瓦が6291Aa 1点、巴文軒丸瓦1点、軒平瓦は6663A 1点、6663B 1点、6668A 1点、6681C 1点である。　（原田憲二郎）

土器類　土坑SK08～10、柱掘形、遺物包含層、旧河道から奈良時代の土師器・須恵器、中世の土師器・瓦器・陶器が遺物整理箱で11箱分出土した。土坑SK09から、奈良時代前半期の土器がまとまって出土しており、ここでは土坑SK09出土土器について概述する。

土坑SK09出土土器　土師器には、杯A（3）、杯B（2）、杯B蓋（1）、杯C（4・5）、皿A（6～9）、皿C、椀A、高杯（10）、鉢A（11）、甕（12）がある。2はa_1手法、5はb_2手法、4・6～9はa_2手法。11は、口縁部外面にヘラ削りののち、ヘラ磨きを密に施している。須恵器には、杯A（18・19）、杯B（20）、杯B蓋（13～15）、杯E、皿A（24・25）、皿B（21～23）、皿B蓋、高杯、鉢（26）、盤（27）、壺A蓋（16・17）、壺、甕がある。25は、底部外面を手持ちヘラ削りで仕上げている。27は、口縁部の外面に一対の半環状の把手がつく。口縁部外面下半には、ハケ目状の調整の痕跡がみられる。（三好美穂）



土坑ＳＫ09出土土器（1／4　12・23・27　1／8）

木製品　旧河道内と、その氾濫による砂層から柿経、笹塔婆、板塔婆、漆塗椀、曲物、将棋の駒、毬杖の玉などが出土した。

柿経・笹塔婆類　完形の柿経、笹塔婆が少なく、多くは細片であるが、約１万点が出土した。柿経は、檜や杉などの板を薄く剝いだ「こけら」あるいは「経木」と呼ばれる薄板に経文を書写したものであり、今回出土した柿経は概ね長さ30cm前後、幅2.5cm前後、厚さ0.3mm前後が標準である。書写経典の大半は法華経であるが、そのほかに無量義経、観普賢経、般若心経、阿弥陀経を書写したものが少数出土している。法華経書写柿経のなかには経文の同一行が書写されているものがみられることから、二束以上の柿経があったことがわかる。出土した柿経のうち、法華経の経文同定が終わったものについて、文末の

旧河道出土柿経（１／２）

一覧表にまとめた。

今回出土した柿経は頭部形態と写経方法により、3種類に分類できる。各々の特徴を以下に記す。

A－1類　頭部形態が山形で、表裏両面に経文を書写する。（1）

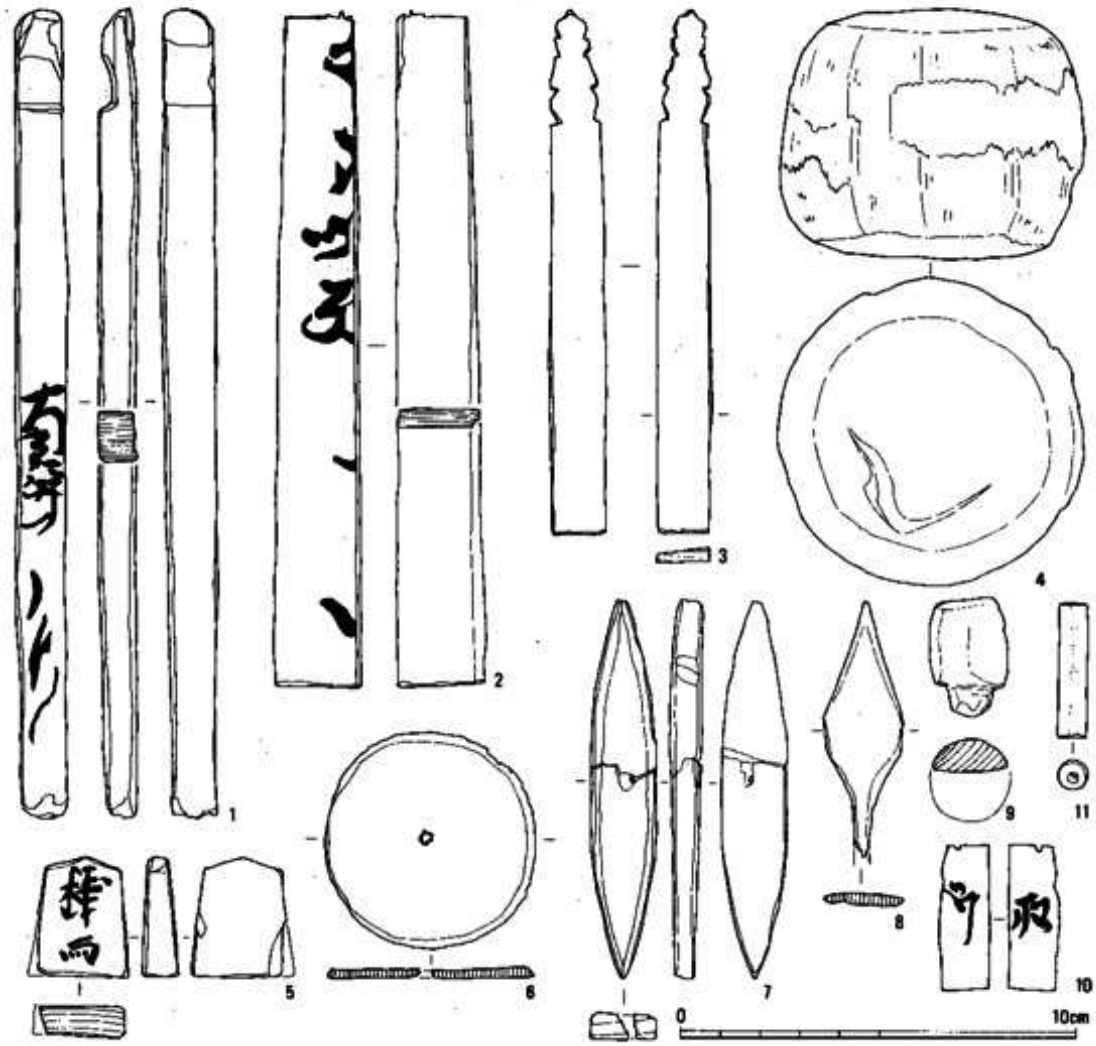
A－2類　頭部形態が山形で、片面のみに経文を書写する。（2）

B　類　頭部形態が五輪塔形で、地輪部を下方にのばし、五輪塔部表面に「𑖎𑖫𑖮𑖫𑖭」（キャカラバア）の五大種字と経文、裏面には金剛界大日如来をあらわす梵字「𑖩」（バン）あるいは荘厳点つきの「𑖩̇」（バン）を記す。

旧河道出土笹塔婆（1／2）

笹塔婆　柿経と同じように、薄板に名号、題目、種字などを書写したものである。今回出土した笹塔婆は頭部を山形にしたものと、五輪塔形のものの二種類に分類できるが、頭部を山形にし、「南無阿弥陀仏」の名号を記したもの（1）が大半である。他に頭部を五輪塔形につくり、「向」と墨書したもの（2）や、仏の像を描いたもの（3）などがある。

その他の木製品　1は墨書木製品である。長さ20.5cm、幅1.3cm、厚さ1.0cmの角棒で、上部に抉りが入った部材を再利用している。表面の墨書は「南無阿弥陀仏」と釈読できるが、一部は不鮮明である。2は墨書札である。右半を欠損しており、長さ17.0cm、残存幅2cm前後、厚さ0.5cmである。表面には「□𑖎𑖫𑖮𑖫𑖭（□ナムアミダブ）」の梵字が書かれている。3は板塔婆である。長さ13.2cm、幅1.3cm、厚さ0.3cmで頭部を五輪塔形に作り出している。赤外線カメラによる観察で、表面に「𑖎𑖫𑖮𑖫𑖭　南無阿弥陀仏」の墨書があることがわかる。4は毬杖の玉である。最大径7.8cm、高さ6.4cmの円筒形である。類似のものが第252次調査でも出土しているが、こちらの方が作りは丁寧である。5は将棋の駒である。長さ3.0cm、上部推定幅2.5cm、厚さは上部で0.5cm、下部で1.0cm、表面には「桂馬」と墨書されているが、裏面に文字は確認できない。6は蓋である。径5.5cm、厚さ0.3cmで中心に紐通しの孔があけられている。小型の曲物の蓋であったと思われる。7は用途不明の木製品であるが、製品の一部である可能性もある。8は鏃形木製品である。茎の部分は欠損しており、残存長6.5cm、最大幅2.0cm、厚さ0.6cm。9は栓である。復原径2.1cm、長さ3.0cm。竹製骨蔵器の栓であると思われ、同様のものが元興寺の中世包蔵坑から出土している。10は闘香札もしくは闘茶札である。長さ3.7cm、幅1.3cm、厚さ0.1cm。表面は「客」の略字「ウ」、裏面は「取」と読める。「取」は人名を略したものであろう。こ



旧河道出土木製品（1／2）

れまでの出土資料と比較すると、その形状から聞香札の可能性が高い。11は碧玉製管玉である。長さ3.4cm、径0.7cm、両面から穿孔している。土坑SK08出土の長頸壺内から出土した。この他、漆塗りの椀が6個体分出土している。赤漆で文様が描かれているものもあるが、破損が著しいため図示できなかった。（松浦五輪美）

Ⅳ まとめ

今回の調査では大量の柿経、笹塔婆を含む木製品が出土した。調査地の北西約120m の地点での左京三条二坊十五坪の調査[1]でも、河川の氾濫と思われる砂層から約9500点の柿経、笹塔婆を含む木製品が出土しており、上流で流されたものが、佐保川の河道が西から南へと大きく向きを変えるこの付近の氾濫原に、堆積したものと考えられる。（原田憲二郎）

1）『平城京左京三条二坊』奈良国立文化財研究所　1975

凡　　例

1　計測値の単位は長さ、幅ともにcmである。欠損しているものは括弧つきで示した。
2　分類は本文37頁に示す通りである。
3　巻名・品題・行数は数字で示した。例えば1－1－1とある場合は、法華経巻第一の序品第一の一行目であることを示す。
4　「残経文」には出土した柿経で確認できた文・文字を示し、「全経文」には該当行の全文を示した。
5　欠損文字のうち、字数が確認できるものは「□」の数で示した。
6　前後に文字の続くことが推定されるが、折損等により文字が失われているものは「×」で示した。
7　本表でいう「加字」とは、書写したあとに脱字を発見し、その部分の横に文字を加筆した場合をいう。
8　本表でいう「増字」とは、経文に関係ない文字を書き込んでいる場合をいう。
9　本表でいう「誤字」とは、経文を書写する際、誤って他の文字を書いた場合をいう。
10　備考欄の番号は、裏面に書かれた経文の番号を示す。

No.	長(cm)	幅(cm)	分類	巻－品－行	残経文	全経文	備考
1	(6.5)	(1.1)	—	1—1—40	×羅王大身×	大威德迦樓羅王大身迦樓羅王大滅迦樓	
2	29.8	(2.1)	B	1—1—122	又見□□□□□□無数恒沙嚴飾國界	又見佛子造諸塔廟無数恒沙嚴飾國界	
3	(17.4)	2.3	—	1—1—164	×羅華曼殊沙華摩	天曼陀羅華摩訶曼陀羅華曼殊沙華摩	
4	(9.6)	(2.0)	B	1—1—182	今日中×	今日中夜當入無余涅槃時有菩薩名曰德	
5	(12.0)	1.6	A—2	1—1—194	供養恭敬尊重讚歎弥勒×	供養恭敬尊重讚弥勒當知介時妙光菩	
6	(14.3)	2.6	—	1—1—197	×大乘経名妙法蓮華教菩薩法佛×	說大乘経名妙法蓮華教菩薩法佛所護念	
7	(14.0)	2.3	—	1—1—204	×趺坐三□□□量義處	佛說此経已即於法座上跏趺坐三昧名無量義處	
8	(16.2)	2.3	B	1—1—221	說是法華経滿六十小却不起於此座所說×	說是法華経滿六十小却不起於此座所說上妙法	
9	(20.0)	(1.9)	B	1—1—228	心己□通達其次當作佛号曰為淨身亦□無量衆	心己得通達其次當作佛号號為淨身亦度無量衆	
10	(15.4)	2.2	—	1—2—25	×余衆生類無有能得解	是法不可示言辞相寂滅諸余衆生類無有能得解	
11	(4.3)	(1.3)	A—2	1—2—26	國邑遂×	國邑遂到其父所止之城父每念子獨子離	
12	(23.2)	(1.7)	B	1—2—31	亦滿十方□□□如竹林斯等共一心於億無×	亦滿十方界其数如竹林斯等共一心於億無量劫	
13	(4.7)	(1.8)	—	1—2—66	一切世間諸□□人皆×	一切世間諸天及人皆当驚疑舍利弗重白	
14	(10.2)	2.2	—	1—2—126	×言辞方便力故而為說	性以種種因緣譬論言辞方便力故而為說	
15	(17.0)	2.6	A—2	1—2—142	了舍利弗汝等□□心信解受持佛語×	了舍利弗汝等當一心信解受持佛語諸佛	
16	(12.0)	2.5	B	1—2—173	無智者錯乱迷惑×	無智者錯乱迷惑不受教我知此衆生未會修善本	
17	(5.8)	2.5	—	1—2—208	×成無上道廣度無数衆	以比供養像廟見無量佛自成無上道廣度無数衆	「廣」を加字
18	(12.1)	2.7	—	1—2—219	×衆生故亦說如是法知第一寂滅×	安穩衆生故亦說如是法知第一寂滅以方便力故	
19	29.9	1.9	B	2—3—23	八十種妙好十八不共法如是等功德而我皆已失	八十種妙好十八不共法如是等功德而我皆已失	
20	(4.5)	(1.3)	A—1	2—3—68	×来過×	劫華光如来過十二小劫授堅滿菩薩阿耨	裏面は解読不可能
21	(8.5)	2.3	—	2—3—110	×令□□開各於世界講說正×	梵音深妙令人樂聞各於世界講說正法	
22	(15.0)	2.2	A—1	2—3—121	×至三十在此宅中長者見是大火	十二或至三十在此宅中長者見是大火	No.24
23	(18.5)	2.4	B	2—3—122	從四面起即大驚怖而作是念我雖能於此	從四面起即大驚怖而作是念我雖能於此	
24	(15.0)	2.2	A—1	2—3—160	×等興諸子珍寶大車寧有虛妄不舍	是長者等興諸子珍寶大車寧有虛妄不舍	No.22

出土柿経一覧表（1）

No.	長(cm)	幅(cm)	分類	巻－品－行	残経文	全経文	備考
25	28.2	2.4	A－1	2－3－287	金銀瑠璃車鉤碼碯以乘 寶物造諸大車	金銀瑠璃車鉤碼碯以乘 寶物造諸大車	No.26
26	28.2	2.4	A－1	2－3－314	更無余乘除佛方便告舍利 弗汝諸人等	更無余乘除佛方便告舍利 弗汝諸人等	No.25
27	(15.9)	(2.0)	B	2－3－367	於無數却如恆河沙生轉×	於無數却如恆河沙生轉轉 諸根不具	
28	(11.0)	2.0	A－2	2－3－387	譬論言辞説法無礙如×	譬論言辞説法無礙如是之 人乃可為説	
29	(6.0)	2.5	—	2－4－29	×息一旦終没×	倉庫強盛無有子息一旦終 没財物散失無	
30	(3.5)	2.2	—	2－4－41	×己疾走×	住此或見逼迫強使我作作 是念己疾走而	
31	(22.0)	2.5	A－2	2－4－130	或有計算金銀寶□□□□ □□□卷疏	或有計算金銀寶物出内財 産注記卷疏	
32	29.4	2.5	B	3－5－9	心所行通達無礙又於諸法 究書明了示諸	心所行通達無礙又於諸法 究書明了示諸	
33	(15.4)	2.6	A－2	3－5－26	阿□□□□應到此為聽法 故爾時無数千	阿脩羅衆皆應到此為聽法 故爾時無数千	
34	(7.0)	2.7	—	3－5－49	是之人□□□□得聞是経 ×	是之人我今亦令得聞是経 入於佛慧尒時	
35	(16.2)	2.4	—	3－5－186	×其心深入佛道即為授記 成是正覺	佛知其心深入佛道即為授 記成是正覺	
36	(24.5)	(1.6)	B	3－6－98	×寓多諸天人菩薩聲聞	華鬘遍清浄見者歓喜多諸 天人菩薩聲聞	
37	(5.6)	(1.1)	—	3－7－5	×身意清浄得×	得功徳如向所説眼耳鼻舌 身意清浄得大	
38	(5.0)	(2.5)	—	3－7－16	×方諸佛世×	共彈指是二音聲遍至十方 諸佛世界地皆	
39	(10.3)	(1.5)	—	3－7－35	×前成阿耨多羅三	十小劫諸佛之法乃現在前 成阿耨多羅三	
40	(7.2)	2.3	—	3－7－47	×此轉於法	得阿耨多羅三藐三菩提諸 佛於此轉於法	
41	(3.4)	(2.1)	—	3－7－49	×增悪趣×	不識苦書道不知求解説長 夜増悪趣減損諸天衆	
42	(24.6)	2.3	B	3－7－174	不蒙佛所化常□於悪道佛 為世間眼久遠時乃出	不蒙佛所化常墮於悪道佛 為世間眼久遠時乃出	
43	(18.1)	2.4	B	3－7－251	及我滅度後未来世中聲聞 弟子是也我滅	及我滅度後未来世中聲聞 弟子是也我滅	
44	(9.6)	2.4	B	3－7－256	佛乗而得滅度更無×	佛乗而得滅度更無余乗除 諸如来方便説	
45	26.7	2.4	A－1	3－7－281	親近便作是念佛道長遠久 受勤苦乃可得	親近便作是念佛道長遠久 受勤苦乃可得	No.46
46	26.7	2.4	A－1	3－7－286	是□来方便之力□一佛乗 分別説□如□ 彼	是如来方便之力於一佛乗 分別説三如彼	No.45 「如」の次の字は誤字らしく、「彼」を加字している。
47	(3.3)	(2.1)	—	3－7－293	×皆懐疑×	過十小劫已乃得成佛道諸 及世人心皆懐疑惑	
48	(4.0)	(1.3)	—	3－7－300	×上下亦復×	三方及四維上下亦復爾散 華奉宮殿請佛轉法輪	
49	(23.8)	2.1	—	3－7－306	×得道其数無有量万億却 算数不能得其辺	從是後得道其数無有量万 億却算数不能得其辺	
50	26.4	2.4	A－1	3－7－320	×入佛道慎勿懐驚懼譬如 險悪道遇絶多毒獸	令汝入佛道慎勿懐驚懼譬 如險悪道遇絶多毒獸	No.52
51	29.3	2.4	B	3－7－324	我等今領之於此欲退還導 師作是念此驚甚可怒	我等今領之於此欲退還導 師作是念此驚甚可怒	巻末番号 「三廿八」
52	26.4	2.4	A－1	3－7－333	×生死煩悩諸険道故以方 便力為息設涅槃	不能度生死煩悩諸険道故 以方便力為息設涅槃	No.50
53	(8.8)	(2.4)	—	4－8－32	×藐□菩提号曰法明如来 應供正×	三藐三菩提号曰法明如来 應供正遍知明	
54	(28.6)	2.3	B	4－8－70	如是无量事我今但略説	如是无量事我今但略説	
55	28.6	2.3	B	4－8－86	常説无上道故号為普明其 國土清浄菩薩皆勇猛	常説无上道故号為普明其 國土清浄菩薩皆勇猛	
56	(18.3)	2.2	A－1	4－8－86	常説無上道故号為普明其 國土清浄菩薩×	常説無上道故号為普明其 國土清浄菩薩皆勇猛	No.60
57	(15.6)	2.4	A－1	4－8－97	×念自謂已得究竟滅度今	世尊我等常作是念自謂己 究竟滅度今	No.58
58	(15.6)	2.4	A－1	4－8－104	×是言嗚哉丈夫何為衣×	友会遇見之而作是言嗚哉 丈夫何為衣食	No.57
59	(5.3)	2.0	—	4－8－114	×得滅度世尊	方便故示涅槃相而故謂為 実得滅度世尊	
60	(18.3)	2.2	A－1	4－8－115	我今乃知實是菩薩得授阿 耨多羅三藐	我今乃知實是菩薩得授阿 耨多羅三藐	No.56

出土経一覧表（2）

No.	長(cm)	幅(cm)	分類	巻—品—行	残 経 文	全 経 文	備 考
61	(9.2)	2.5	—	4—8—121	×具設諸餝飾以無價×	其家甚大富具設諸餝飾以無價寶珠纓著内衣裏	
62	(23.2)	1.9	—	4—9—20	算数□□□能得知正法住世倍於寿命像	算数校計不能得知正法住世倍於寿命像	
63	(5.6)	(1.5)	—	4—9—23	×功德爾時世尊×	所共讚歎称其功德爾時世尊欲重宣此義	
64	(4.4)	2.3	A—1	4—10—3	×無量諸天×	見是大衆中無量諸天龍王夜叉乾闥婆阿	裏面は解説不可能
65	(4.4)	2.4	—	4—10—8	×三藐三菩提佛×	授記当得阿耨多羅三藐三菩提佛告薬王	
66	(15.4)	1.9	—	4—10—72	尊重讚歎若有人得見此塔礼拜供養當知	尊重讚歎若有人得見此塔礼拜供養當知	
67	29.6	2.3	B	4—11—1	妙法蓮華経見寶塔品第十一	妙法蓮華経見寶塔品第十一	
68	(22.8)	2.3	B	4—11—3	五十由旬從地涌出住在空中種種寶物而	五十由旬從地涌出住在空中種種寶物而	
69	29.6	2.3	B	4—11—148	問其義趣是則為難若人説法令千萬億	問其義趣是則為難若人説法令千萬億	
70	(17.0)	2.7	A—2	5—13—5	讀誦説此経典後惡世衆生善根轉少×	讀誦説此経典後惡世衆生善根轉少多増	
71	(13.1)	2.5	—	5—13—18	不説汝名授阿耨多羅三藐三菩提記耶×	不説汝名授阿耨多羅三藐三菩提記耶僑	
72	(16.5)	(1.5)	—	5—13—24	×不調御大夫天人師佛世尊□曇	問解無上士調御大夫天人師佛世尊僑曇	
73	(6.3)	2.3	A—1	5—13—36	×安具足	世尊導師安穏夫人我等聞記心安具足	No.74
74	(6.3)	2.3	A—1	5—13—37	×等亦能	諸比丘尼説是偈已白佛言世尊我等亦能	No.73
75	(13.0)	1.6	A—1	5—13—60	我等敬佛故悉忍是諸惡為斯所輕言×	我等敬佛故悉忍是諸惡為斯所輕言汝等皆是佛	No.77
76	(4.3)	(1.8)	—	5—14—14	×俗文筆×	諸外道梵志尼揵子等及造世俗文筆讚詠	
77	(13.0)	1.6	A—1	5—14—24	若人佗家不興小女処女寡□等共語亦□	若入佗家不興小女処女寡女等共語亦復	No.75
78	(10.2)	2.0	A—1	5—14—99	諸如来起慈×	諸如来起慈父想於諸菩薩起大師想於十	No.79
79	(10.2)	2.0	A—1	5—14—100	方諸大菩薩常×	方諸大菩薩常應深心恭敬禮拜於一切衆	No.78
80	(6.5)	1.9	—	5—14—126	×尊重讚歎虚	人民婆羅門居士等供養恭敬尊重讚歎虚	
81	(11.4)	2.0	A—1	5—15—35	×行四名安立行□	上行二名無辺行二名浄行四名安立行是	No.82
82	(11.4)	2.0	A—1	5—15—68	×半及三四分億×	一千一百等乃至恒沙半及三四分億萬分之一	No.81
83	(17.8)	2.3	B	5—15—81	爾時釈迦牟尼佛分身諸佛從無量千萬億	爾時釈迦牟尼佛分身諸佛從無量千萬億	
84	(11.7)	2.3	B	5—15—135	得道已来×	得道已来其実未久而此大衆諸菩薩等已	
85	27.7	2.3	B	5—15—144	以此譬喩□□□□□等若能信受是語	以此譬喩説一佛乗汝等若能信受是語	
86	(12.5)	2.0	B	6—16—13	無辺百千萬億那×	無辺百千万億那由佗劫譬如五百千萬億	
87	(20.5)	(1.8)	B	6—16—49	盡□倍上数今非實滅度而便唱言×	盡復倍上数今非實滅度而便唱言當取	
88	(4.4)	2.7	—	6—16—83	×孤露無復恃×	孤露無復恃怙常懷悲感心遂醒悟乃知此	
89	(10.3)	(1.9)	—	6—16—110	×有智者勿於此生疑	寿命無数劫久修業所得汝等有智者勿於此生疑	
90	29.6	2.5	B	6—16—116	得入无上道　速成就佛身	得入无上道　速成就佛身	
91	23.7	2.0	B	6—17—5	遠時六百八十萬億那由佗恒河沙衆生得	遠時六百八十萬億那由佗恒河衆生得	「沙」を増字 巻末番号「六四上」
92	(13.2)	2.1	A—1	6—17—20	藐三菩提復有八世界微塵数衆×	藐三菩提復有八世界微塵数衆生皆發阿	No.94
93	(5.6)	1.7	—	6—17—23	×億寶樹下師×	曼陀羅華以散無量百千萬億寶樹下師子	
94	(13.2)	2.1	A—1	6—17—29	遍於九方衆寶香爐燒無價香自×	遍於九十衆寶香爐燒無價香自然周至供	No.92 「方」は誤字
95	(3.7)	1.9	A—1	6—17—35	×世尊分別×	無数諸佛子聞世尊分別説得法利者歓喜充遍身	裏面は解読不可能
96	(8.5)	(1.9)	A—1	6—17—90	説寿命長遠深×	説寿命長遠深心信解則為見佛常在耆闍	
97	(12.0)	2.3	—	6—17—105	×後聞是経	偉劫作是供養已阿逸多若我滅後聞是経	

出土柿経一覧表（3）

No.	長(cm)	幅(cm)	分類	巻—品—行	残 経 文	全 経 文	備 考
98	(10.0)	2.5	—	6—17—108	×止園林浴地	樹高廣嚴好百千比丘於其中止園林浴地	
90	(11.0)	(1.7)	—	6—17—118	×若人讀誦受持是經為佗	種智若人讀誦受持是經為佗人説若自書	
100	(29.0)	2.3	B	6—17—121	功徳又為佗人種種因緣隨義解説此法華	功徳又為佗人種種因緣隨義解説此法華	
101	(4.0)	(1.3)	A—1	6—17—123	×精進勇	無瞋志念堅固常貴坐禪得諸深定精進勇	裏面は解読不可能
102	(15.9)	2.3	A—1	6—18—26	漢道書諸有漏於深禪定皆得自在具×	漢道書諸有漏於深禪定皆得自在具八解	No.105
103	29.7	2.3	B	6—18—31	汝是人以一切薬具施於四百萬億阿僧祇	汝是人以一切薬具施於四百萬億阿僧祇	
104	(2.6)	(1.8)	—	6—18—35	×円満×	衆悉皆嚴好鼻脩高直面貌円満眉高而長	
105	(15.9)	2.3	A—1	6—18—43	釈坐処若梵天王坐処若轉輪聖王×	釈坐処若梵天王坐処若轉輪聖王所坐之	No.102
106	(15.8)	2.1	—	6—19—5	×徳八百身功徳千二	百鼻功徳千二百舌功徳八百身功徳千二	
107	(21.9)	(2.1)	—	6—19—22	鈴聲笑聲語聲男聲女聲×	鍾聲鈴聲笑聲語聲男聲女聲子聲童女	
108	(6.0)	2.7	—	6—19—41	×説諸梵天上光音×	其諸梵天上光音及遍浄乃至有頂天言語之音聲	「説」は誤字「諸」を加字
109	(3.0)	2.3	—	6—19—41	×及遍浄×	其諸梵天上光音及遍浄乃至有頂天言語之音聲	
110	(2.9)	2.3	—	6—19—103	×法生鼻×	雖未得菩薩無漏法生鼻而是持経者先得此鼻相	
111	(11.2)	2.3	—	6—19—111	×乾闥婆乾闥女阿	諸龍龍女夜叉夜叉女乾闥婆乾闥婆女阿	
112	(28.2)	2.4	B	7—20—83	聞不軽言汝當作佛以是因緣値無数佛	聞不軽言汝當作佛以是因緣値無数佛	
113	29.6	2.3	B	7—20—88	音菩薩慈諸四衆及於天龍人非人等受其	音菩薩慈諸四衆及於天龍人非人等受其	
114	(14.0)	2.1	A—1	7—21—35	×告上行等菩薩大□諸佛神力如是	爾時佛告上行等菩薩大衆諸佛神力如是	裏面は解読不可能
115	(11.4)	2.7	A—1	7—21—41	故汝等於如来滅後應当×	故汝等於如来滅後應当一心受持讀誦解	No.117
116	(25.3)	2.3	B	7—21—52	諸佛聲欬聲及弾指之聲周聞十方國地皆六×	諸佛聲欬聲及弾指之聲周聞十方國地皆六種動	
117	(11.4)	2.7	A—1	7—21—58	滅度多寶佛一切皆歓喜×	滅度多寶佛一切皆歓喜十方現在佛并過去未来	No.115
118	(20.2)	2.3	A—1	7—23—27	×檀満虚空中如雲而下又雨海此岸栴檀	栴檀満虚空中如雲而下又雨海此岸栴檀	No.119
119	(20.2)	2.3	A—1	7—23—44	×國中於浄徳王家結跏趺坐忽然化生	徳佛國中於浄徳王家結跏趺坐忽然化生	No.118
120	(8.0)	2.4	—	7—23—84	×己自然還復由斯×	臂還復如故作是己自然還復由斯菩薩	
121	(5.5)	(1.4)	—	7—23—134	×界阿弥陀佛×	於此命終即往安楽世界阿弥陀佛大菩薩	
122	(9.3)	2.2	—	7—23—156	×此経則為閻浮提人病之良薬×	所以者向此経則為閻浮提人病之良薬若	
123	(4.5)	2.2	—	7—24—22	×経彼國主	浄華宿王智佛告妙音菩薩汝莫軽彼國生	「主」は誤字
124	29.7	2.2	B	7—24—26	由旬汝身第一端正百千万福光明殊妙是	由旬汝身第一端正百千万福光明殊妙是	
125	(12.5)	2.2	—	7—24—73	×阿可三藐三佛陀國名現一切世間劫×	阿羅阿三藐三佛陀國名現一切世間劫名	
126	(4.3)	(1.5)	—	7—24—97	×以若干智	無所損減是菩薩以若干智慧明照娑婆世	
127	(10.9)	2.4	B	8—26—33	誦受持法華経●者説陀×	誦受持法華経者説陀羅尼若此法師得是	●は抹消
128	(13.4)	1.9	A—2	8—26—44	尒時毘沙門天王護世者白佛言世尊×	尒時毘沙門天王護世者白佛言世尊我亦	
129	(4.9)	2.7	—	8—27—44	×之亀値×	得値如優曇波羅華又如一眼之亀値浮木	
130	(6.0)	2.7	—	8—28—1	×普賢菩薩勤×	妙法蓮華経普賢菩薩勤発品第二十八	
131	(8.3)	2.3	A—	8—28—52	神通之力若法華経行×	神通之力若法華経行閻浮提有受持者悉	No.132
132	(15.2)	2.4	B	8—28—68	爾時釈迦牟尼佛讃言善哉善哉普賢×	爾時釈迦牟尼佛讃言善哉善哉普賢汝能	
133	(8.3)	2.3	A—1	8—28—79	道経書×	道経書手筆亦復不憙親近其人及諸悪者	No.133

出土法経一覧表（4）

4　平城京左京一条四坊四坪　第248次

Ⅰ　はじめに

本調査は奈良市法蓮町442番地の１において、西田伊佐雄氏届出の事務所ビル建設工事に伴って実施した事前発掘調査である。調査地は平城京の条坊復原では、左京一条四坊四坪のほぼ中央にあたる。発掘区は東西11ｍ、南北20ｍで、一部を拡張し面積230㎡である。調査期間は平成４年４月６日から４月27日である。

Ⅱ　検出遺構

発掘区内の層序は黒色土、黄灰色粘土、暗茶灰色砂質土、黒灰色粘質砂、暗灰色礫、茶灰色粘質土、暗茶灰色粘質土（地山）の順である。茶灰色粘質土上面で奈良時代と平安時代の遺構を、暗茶灰色粘質土上面で古墳時代の遺構を検出した。地山上面の標高は64.9ｍである。

古墳時代の遺構には、土坑２基がある。

SK01　発掘区の中央で検出した東西1.0ｍ、南北1.38ｍ、深さ0.18ｍの平面長円形掘形の土坑。埋土は暗褐色粘質土で、少量の古墳時代の土師器が出土した。

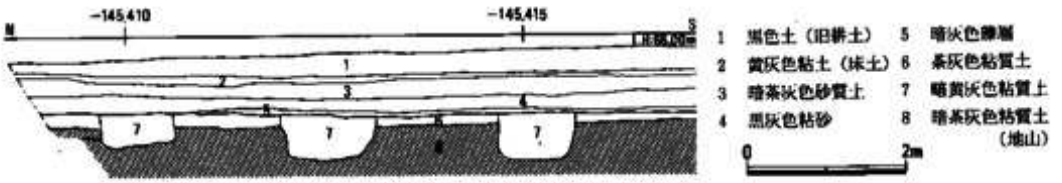
SK02　発掘区の中央で検出した東西2.0ｍ、南北1.48ｍ、深さ0.55ｍの平面長円形掘形の土坑。埋土は暗褐色粘質土で、少量の古墳時代の土師器が出土した。

奈良時代から平安時代にかけての遺構には掘立柱建物２棟、溝５条、土坑がある。

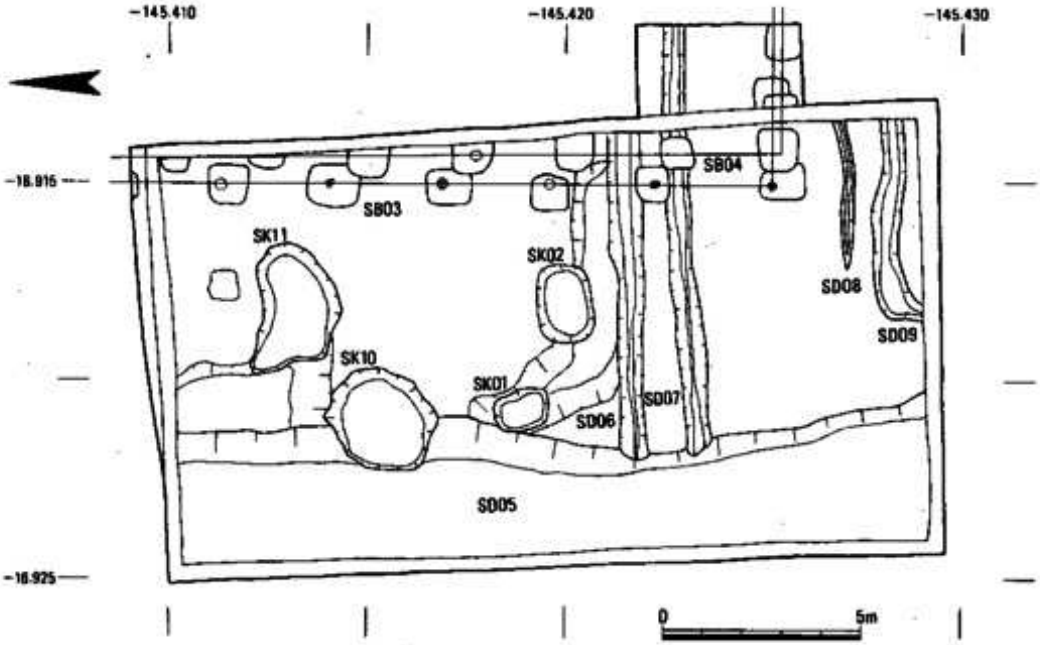
SB03　発掘区の東辺で検出した桁行６間（16.0ｍ）以上、梁間２間以上の南北棟建物。柱掘形が一辺0.9～1.3ｍ、検出面からの深さ0.5ｍと大きく径25cm前後の柱根が残るものがある。重復関係から後述する建物SB04、溝SD06・SD07より古いことがわかる。

SB04　発掘区の東辺で検出した桁行６間（15.0ｍ）以上、梁間２間以上の南北棟建物。重復関係から溝SD07より古いことがわかる。建物SB03と同位置にあり、これの建替えと考えられる。

SD05　発掘区の西辺で検出した南北方向の溝、西肩が発掘区外にあるため幅員は不明であるが、幅1.8ｍ、深さ0.4ｍ、長さ18.9ｍ分を確認した。埋土は五層に分かれ、上から灰褐色砂質土、褐灰色粘質砂、淡灰色粘質砂、灰褐色粘質土（礫含む）、灰色粘土の順でいずれの層からも、奈良時代の土器、瓦が出土した。



第248次調査　発掘区東壁土層図（１／100）



第248次調査　遺構平面図（1／200）

SD06・07　いずれも発掘区の中央南寄りで検出した東西方向の溝。幅0.8m、深さ0.18m、長さ10.8m分を確認した。溝SD05につながる。埋土は暗黄灰色砂質土で奈良時代の土器が出土した。

この2条の溝は0.6～1.1mの間隔で平行し、坪を南北にほぼ二分する位置にあることから、この間に塀あるいは坪内の道路を想定することもできる。

SD08　発掘区の南辺東寄りで検出した東西方向の溝。幅0.3m、深さ0.12m、長さ3.8m分を確認した。埋土は黄灰色砂質土で少量の土師器、黒色土器、軒平瓦（6671B）が出土した。

SD09　発掘区の南辺東寄りで検出した東西溝で、西で南へ曲がり発掘区外へつづく、幅0.73m、深さ0.4m、長さ5.6m分を確認した。埋土は黄灰色砂で少量の土師器、黒色土器、瓦が出土した。

SK10　発掘区の北半で検出した東西2.56m、南北2.85m、深さ0.5mの平面円形掘形の土坑である。埋土は灰色砂で奈良時代の土器が出土した。

このほかSK11は発掘区の北半で検出した東西2.56m、南北2.85m、深さ0.2mの平面不整形掘形の土坑。埋土は上層から灰褐色砂質土、暗褐色粘質土、灰色砂である。遺物が出土せず時期は不明である。

Ⅲ　出土遺物

遺物整理箱に5箱分の瓦、土器、埴輪が出土した。瓦は大半が溝SD05から出土した奈良時代の丸瓦、平瓦である。土器には古墳時代の土師器、奈良時代の土師器、須恵器がある。埴輪は茶灰色粘質土から出土した古墳時代中期の円筒埴輪と形象埴輪があり、形象埴輪中には鶏形埴輪の頭部や朱が塗られた家形埴輪とみられる破片がある。　（秋山成人）

5　平城京左京五条一坊十三・十四坪・柏木遺跡の調査
第249次

Ⅰ　はじめに

本調査は、奈良市柏木町721他で実施した奈良市医療検査センター建設事業に伴う事前発掘調査である。調査地は平城京の条坊復原では、平城京左京五条一坊十三坪・十四と、東一坊大路に相当する。調査は西発掘区、中央発掘区、東発掘区の三箇所の発掘区を設けて実施した。西発掘区と中央発掘区では十三坪北半の宅地内の様相の究明と十三・十四坪坪境小路の検出を、東発掘区では東一坊大路の検出を目的とした。調査期間は平成４年４月13日から同年８月18日で、発掘面積は2095㎡である。なお、今回の調査で古墳時代の遺跡の存在が明らかになった。柏木遺跡として報告する。

Ⅱ　検出遺構

発掘区内の層序は、黒色土（耕作土）の下が灰黄褐色砂、あるいは灰黄褐色粘土の地山である。灰黄褐色砂、灰黄褐色粘土の上面（標高約57.7ｍ）で古墳時代、奈良時代、中・近世の遺構を検出した。ただし、黒色土（耕作土）層と灰黄褐色砂、灰黄褐色粘土層との間に部分的に黄褐色粘土、あるいは黄褐色砂層があり、本来、奈良時代以降の遺構はこの上面から掘りこまれていたものと思われる。

古墳時代の遺構　主な遺構は、掘立柱建物９棟、掘立柱塀２条、溝６条、土坑５基である。

SD01　西発掘区の西半で検出した北北東から南南西方向の素掘りの溝。長さ32ｍ分を確認した。幅1.2～2.6ｍ。深さ0.4ｍ。古墳時代前期の土師器と石杵が出土した。

SD02　西発掘区北西隅で検出した西北西から東南東方向の素掘りの溝。東で溝SD01とつながる。長さ12ｍ分を確認した。幅0.6～0.9ｍ。深さ0.3ｍ。

SD03　溝SD02の南で検出した素掘りの溝。溝SD02とほぼ平行であり、東で溝SD01とつながる。長さ13.5ｍ分を確認した。幅0.8～1.2ｍ。深さ0.3ｍ。

SK04　西発掘区中央やや北寄りで検出した平面円形掘形の土坑。直径2.1ｍ。深さ1.1ｍ。古墳時代前期の土師器と桃の種子が出土した。

SK05　土坑SK04の南で検出した平面円形掘形の土坑。直径3.3ｍ。深さ0.95ｍ。

SK06　土坑SK05の南西で検出した平面楕円形掘形の土坑。長径1.8ｍ、短径0.9ｍ。深さ1.0ｍ。

SK07　西発掘区中央やや南寄りで検出した平面円形掘形の土坑。直径1.1ｍ。深さ0.45ｍ。

SD08　西発掘区中央やや南寄りで検出した東北東から西南西方向の素掘りの溝。東は土坑SK07と、西は溝SD04とつながる。長さ11.8ｍ。幅0.7～1.1ｍ。深さ0.1～0.3ｍ。

SD09　西発掘区北東隅から緩く弧を描きながら、南へ続く素掘りの溝。南北両端ともに発掘区外へ続く。長さ32.3m分を確認した。幅0.7～0.8m。深さ0.3m。

SK10　西発掘区中央東端で検出した平面円形の土坑。直径0.8m。深さ0.45m。

SK11　土坑SK10の南で検出した平面円形の土坑。直径0.8m。深さ0.45m。

SD12　中央発掘区北東隅と東発掘区中央とで検出した素掘りの溝。わずかに蛇行し北西から南東へ流れていたと考えられる。中央発掘区では南西の岸を、東発掘区では両岸を確認した。東発掘区では幅4.5m、深さ0.8m、中央発掘区では幅4.8m 以上、深さ1.6m以上である。両発掘区をあわせると長さは45m以上になる。溝内から古墳時代前期の土師器と石釧、木材が出土した。古墳時代前期の集落の外周を区画する溝の可能性がある。

なお、掘立柱建物SB13・SB15～SB19・SB21～SB23、塀SA14～SA20の規模などについては、以下の一覧表に記した通りである。

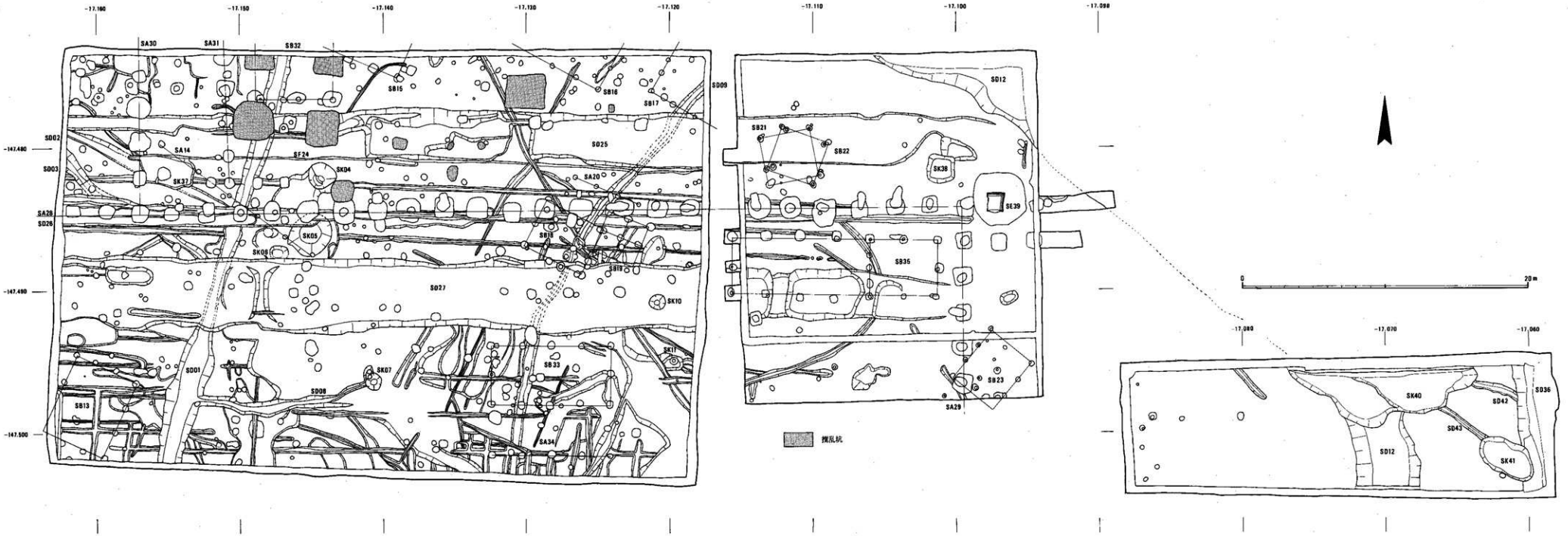
これらの遺構のうち、溝と土坑は出土した土師器の型式からみて古墳時代前期のものと考えられる。表記した掘立柱建物・塀は、柱掘形からの出土遺物がないため、正確な時期は不明であるが、棟方向が東、あるいは西に大きく振れる建物は、奈良盆地では飛鳥時代中頃以降にはみられないこと、また遺構面直上から古墳時代中期末頃の須恵器が出土していることから、古墳時代中期末頃の遺構であると考えられる。なお、建物や塀としてはまとまらない小穴が多くあり、確認はできなかったが、表に記した以外にも建物が存在したと思われる。なお、西発掘区中央南半の土坑SK07周辺は古墳時代前期には浅い窪地となっていたと思われ、古墳時代前期の土師器が多く出土した。

奈良時代の遺構　奈良時代の遺構には十三・十四坪坪境小路とその南、北両側溝、東西方向の素掘りの溝1条、東一坊大路西側溝、掘立柱建物3棟、掘立柱塀5条がある。

SF24　西・中央発掘区で検出した十三・十四坪坪境小路。西は西発掘区外へ続くが、

遺構番号	規模 東西×南北	国土方眼方位北に対する建物の振れ	柱間寸法（m） 東　西	南　北	備　考
SB13	3×3	N23°　E	1.4～1.6	1.9～2.0	
SA14	5	N53.5°　W	2.4～3.2		
SB15	2以上×？	N21.5°　E	1.8	？	
SB16	2以上×1以上	N28°　E	1.7	1.8	
SB17	2以上×1以上	N30°　E	1.8	1.5	
SB18	3×2	N63°　W	1.7～1.9	1.8	
SB19	2×2	N21.5°　E	1.5	1.5	総柱建物
SA20	3	N67°　W	1.6		SB18と同時期の塀か
SB21	2？×2？	N12°　W	？	？	建て替えの可能性あり
SB22	2？×2？	N19°　E	？	？	
SB23	2？×3	N40.5°　E	？	1.4～1.5	

古墳時代掘立柱建物・塀一覧表



第249次調査　遺構平面図（1／200）

東半は削平が著しいため、南側溝が西発掘区中央で、北側溝が中央発掘区東端付近で途切れる。削平のためか北側溝の幅には広い部分と狭い部分があり、路面の幅が一定ではないが、両側溝の心心間距離は、幅が広い部分では6.2m、狭い部分では4.9m である。道路心の国土座標は、北側溝の幅の広い部分では、X＝－147,481.400、Y＝－18,155.000、狭い部分では、X＝－147,482.075、Y＝－18,120.000である。

SD25　坪境小路SF24の北側溝。長さ64.5m分を確認した。溝幅が一定ではなく、西発掘区西半部では狭く、東半部及び中央発掘区では広い。狭い部分では幅1.0m、深さ0.3m、広い部分では幅約4.0m、深さ0.4mである。溝心の国土座標は狭い部分では、X＝－147,478.300、Y＝－18,155.000、広い部分では、X＝－147,479.650、Y＝－18,120.000である。

SD26　坪境小路SF24の南側溝。長さ30m分を確認した。幅は1.7m、深さ0.3m。溝心の国土座標は、X＝－147,484.500、Y＝－18,155.000である。

SD27　溝SD26の南でこれと並行する東西方向の素掘りの溝。長さ62m分を確認した。西は西発掘区外へ続くが、東半は削平が著しいため中央発掘区東端付近で途切れる。幅3.0～5.2m、深さ0.2～0.3mである。溝底には起伏がある。この溝とSD26との距離は約2.5mであり、両溝が同時期のものであるとすると、この間に築地を想定することもできる。その場合、溝SD27は築地を造るための土取坑であり、かつ雨落溝として利用されていたと思われる。溝心の国土座標は、X＝－147,490.100、Y＝－18,155.000である。

SA28　溝SD26と重複して検出した東西26間（62.7m）以上の掘立柱塀。西は発掘区外へ続き、東は後述する塀SA29につながる。柱間寸法は東から10間目と11間目が2.7mで、そのほかは2.4m 等間である。10間目と11間目の柱間が広いことから、そこに門などの出入口が想定できよう。重複関係から溝SD26より新しいことがわかる。

SA29　中央発掘区で検出した南北5間（12.0m）以上の掘立柱塀。南は発掘区外へ続き、北は塀SA28につながる。柱間寸法は2.4m等間である。

SA30　西発掘区北西隅で検出した南北4間（9.6m）以上の掘立柱塀。北は発掘区外へ続き、南は塀SA28の東から24間目の柱に取り付く。柱間寸法は2.4m 等間である。重複関係から溝SD25より新しいことがわかる。

SA31　塀SA30の東で検出した南北4間（8.7m）以上の掘立柱塀。北は発掘区外へ続く。柱間寸法は南から1.8m—2.4m—2.4m—2.1m。北でやや西に振れる。重複関係から溝SD25より新しいことがわかる。

SB32　塀SA31の東で検出した東西2間（5.1m）の掘立柱列で、南北棟建物の南妻柱列であると考えられる。柱間寸法は西から2.7m—2.4mである。

SB33　西発掘区南東隅で検出した桁行4間（8.4m）、梁間2間（4.1m）の掘立柱東西棟建物。柱間寸法は桁行が2.1m等間、梁間は北から2.0m—2.1mである。

SA34　建物SB33の南で検出した東西４間（8.4m）の掘立柱塀。柱間寸法は2.1m等間である。柱位置を建物SB33の桁行の柱位置と合わせており、目隠し塀であろう。

SB35　中央発掘区で検出した桁行６間（14.3m）、梁間２間（3.9m）の掘立柱東西棟建物。柱間寸法は桁行が2.4m等間、梁間が1.95m 等間である。東から2間目に３個の間仕切りの柱掘形がある。重複関係から溝SD27より新しいことがわかる。

SD36　東発掘区東端で検出した素掘りの溝。西岸のみを長さ9.9m分確認した。幅2.4m以上、深さ1.5m以上である。東一坊大路の西側溝に相当すると考えられるが、東岸を確認していないため、溝心の位置は不明である。

奈良時代の遺構は配置や重複関係から少なくとも三時期の変遷が考えられる。まず、坪境小路SF24によって十三坪と十四坪が画されていた時期、ついで坪境小路が廃され、小路の位置に塀SA28・SA29・SA30が建てられる時期、そして建物SB33、塀SA37、建物SB35が建てられる時期である。

中・近世の遺構　溝２条、井戸１基、土坑４基がある。

SK37　西発掘区北西寄りで検出した平面隅丸方形掘形の土坑。東西3.5m、南北2.0m深さである。

SK38　中央発掘区北東寄りで検出した平面隅丸方形掘形の土坑。東西1.9m、南北2.0m、深さ0.9m である。

SE39　土坑SK38の東で検出した井戸。井戸枠は縦板組隅柱横桟留である。西側と南側の枠材は崩落していた。掘形から江戸時代の磁器が出土した。

SK40　東発掘区中央で検出した土坑。発掘区の北に続き全体の形状、規模は不明であるが、検出した範囲では掘形の平面形は不整形で、東西13.0m以上、南北4.5m以上、深さ1.0m 以上。埋土は粘土と砂の互層であり、少なくとも二回掘り直されている。

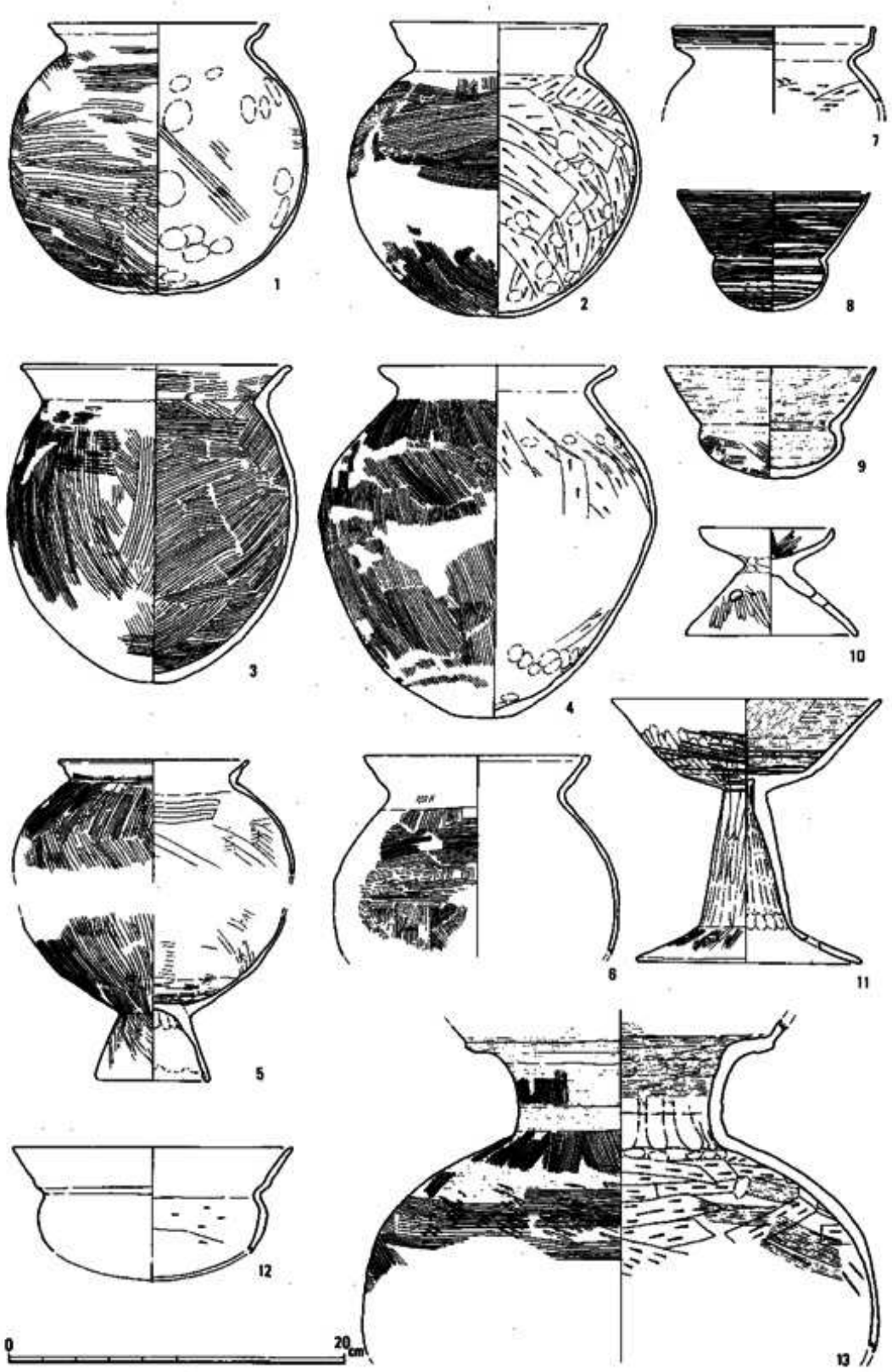
SK41　東発掘区東寄りで検出した土坑。平面楕円形掘形で、長径3.6m、短径2.1m、深さ0.8mである。埋土は土坑SK40と同様に粘土と砂の互層である。

SD42　東発掘区東寄りで検出した東西方向の素掘りの溝。西は土坑SK40とつながる。長さ4.0m分を確認した。幅0.6m、深さ0.2mである。

SD43　SD42の南で検出した北西から南東方向の素掘りの溝。西は土坑SK40と東は土坑SK41とつながる。長さ3.5m、幅0.4m、深さ0.5mである。

Ⅲ　出土遺物

出土遺物には、古墳時代の土師器、須恵器、石鋤、石杵、桃の種子、奈良時代の土師器、須恵器、瓦（うち軒丸瓦6313Ａ１点）、銅製帯金具（巡方）、平安時代の黒色土器、中・近世の瓦器、磁器がある。ここでは、古墳時代の溝SD12出土の土師器の一部と石鋤、溝SD01出土の石杵について報告する。



溝ＳＤ12出土土器（１／４）

土師器　全体に残存状態は良好である。器種は甕、壺、高杯、鉢、小型丸底壺、小型器台がある。

1～7は甕。1・2は丸底で、体部はほぼ球形である。1の口縁部は受け口状に緩やかに外上方に広がり、端部は水平である。体部内外面ともに粗いハケがみられる。体部内面には指頭圧痕が多い。近江系であろうか。2の口縁部は内彎して外方へ広がり、端部は内側に丸く肥厚する。体部外面には細かいハケ、内面にはケズリがみられる。体部内面には指頭圧痕がみられる。3・4は尖り気味の丸底であり、体部は卵形である。3の口縁部は外反気味に広がり、端部は外方につまみだされる。体部内外面ともに粗いハケがみられ、内面では口縁部にも及んでいる。外面の体部上半にタタキの痕跡がみられる。4の口縁部は外方に広がり、端部は上方につまみだされる。体部外面にはハケ、内面にはケズリがみられる。体部内面の口縁部付近と底部付近に指頭圧痕がみられる。四国系であろうか。5は台付の甕である。口縁部はS字状に緩やかに外上方へ広がり、体部は上半部に最大径があるやや肩の張った球形である。台部はほぼ真っすぐに外方に広がり、端部を折り曲げている。体部内外面ともに粗いハケがみられ、外面のハケは台部にも及んでいる。体部と口縁部との境には1条のヘラ描き沈線がみられる。東海系と思われる。6は底部を欠く。口縁部は2と類似した形態であるが、体部がやや下ぶくれである。体部外面に細かいハケがみられる。7は体部下半を欠く。口縁部は外方に広がったのち、直立する。口縁部外面には5条の櫛描沈線が、体部内面にはケズリがみられる。吉備系と思われる。

8・9は小型丸底壺。ともに口縁部が長く、体部が小さい。8は内外面ともに横方向の緻密なミガキののちナデ調整がみられ、9は体部外面にハケがみられる以外はナデ調整である。

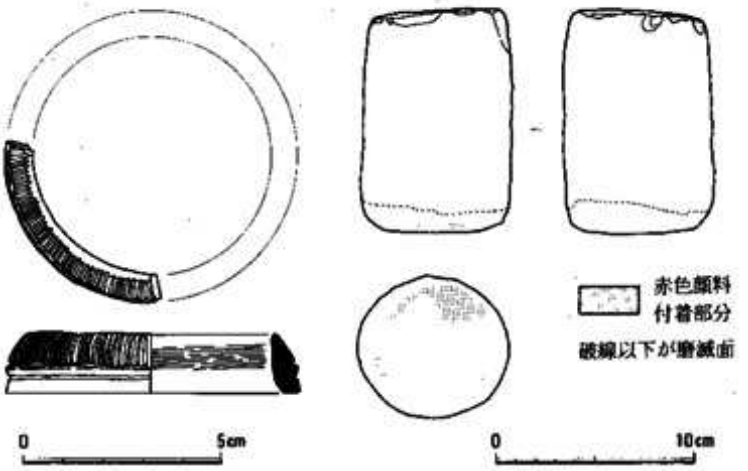
10は小型器台。受部は内彎気味に広がり、口縁は直立する。脚部はほぼ直線的に外方に広がり、端部はやや内傾する。脚部の三箇所に円形透かし孔がある。受部内面、脚部外面にミガキがみられる。

11は高杯。口縁部は外上方にほぼ真っすぐに広がり、端部は心持ち外反する。脚部は円錐形で、裾部は外方に広がる。裾部の三箇所に円形透かし孔がある。杯部内面は底部と口縁部下半をミガキ調整したのち、内面全体をナデ調整、外面は底部と口縁部下半を縦方向のケズリ、横方向のミガキ調整をしたのち、外面全体をナデ調整している。脚部外面は円錐部に縦方向のミガキ、裾部にハケがみられる。

12は二重口縁の鉢。底部を欠く。口縁部はわずかに屈曲して、ほぼ真っすぐに外上方に広がる。体部はやや肩の張った形態である。体部内面に横方向のケズリがみられる。山陰系と思われる。

13は二重口縁の壺。口縁部先端と体部下半を欠く。口縁部は外反気味に広がり、外に屈

曲してさらに外上方に広がる。体部は丸い。口縁部外面は縦方向のハケののちナデ調整、内面は横方向のナデののち、上方にナデあげている。体部外面はハケののちナデ調整、口縁部との境では縦方向のハケ、それ以下は横方向のハケである。内面は横方向のケズリののちナデ調整をしている。なお、体部外面上半にタタキの痕跡がみられる。



溝ＳＤ12出土石釧（１／２）　溝ＳＤ01出土石杵（１／４）

石釧　約四分の一の断片であるが、復原すると、外径7.4cm、上面の内径6.0cmとなる。高さ1.5cmである。外面上半部の斜面には幅１mm程度の沈線が放射状に刻まれ、また外面の上半部と下半部との境に１条、下半部に１条の沈線がめぐる。緑色凝灰岩製。

石杵　形態は円柱状である。長さ11.3cm、直径6.9cm。側面は研磨されており、滑らかである。磨り面は平坦で磨滅しており、朱が付着している。花崗岩製。

Ⅳ　まとめ

今回の調査の成果は以下のとおりである。

古墳時代前期と中期末頃の集落の存在が判明した。古墳時代前期の遺構では住居跡を検出しておらず、集落の中心は調査地外西にあると考えられるが、古墳時代中期末の遺構では掘立柱建物と塀を検出しており、調査地が集落の一部にあたると考えられる。いずれの時期の遺跡もさらに周辺に広がっていると考えられる。また、古墳時代前期の遺構から、他地域から搬入されたと考えられる土器が多く出土したこともこの遺跡の特徴かと思われる。

奈良時代の遺構では、平城京左京五条一坊十三・十四坪坪境小路を検出したことで、当初、十三・十四坪は坪境小路によってわかれていたが、その後、坪境小路が廃され、掘立柱塀SA28・SA29・SA30が小路の位置に建てられている。したがって、少なくとも十三坪と十四坪を含めた二坪以上を一括利用した宅地であったことが判明した。また、塀SA28・SA29は位置から考えて宅地内の中心部を囲む施設であったと考えられ、この宅地が十一坪と十二坪を含めた四坪利用の宅地であった可能性も考慮しなければならない。

（森下浩行　関野　豊　宮崎正裕）

柏木遺跡から出土した石杵に付着する赤色顔料物質の微量化学分析

武庫川女子大学薬学部　安田博幸　金杉直子

奈良市医療検査センター建設事業に伴い事前発掘調査において、奈良時代と古墳時代の遺構が複合して検出された。

今回、古墳時代前期の溝SD01より出土した花崗岩製の石杵に付着・残存の赤色顔料物質について、化学分析による鑑定を依頼されたので、筆者等の常法[1]とするろ紙クロマトグラフ法と検出試薬による微量化学分析を行ない、所見を得たので報告する。

Ⅰ　試料の外観および分析用試料の採取

試料：古墳時代前期の溝SD01より出土した円柱状の花崗岩製石杵（径6.9cm×長さ11.3cm）の磨り面に、なお紅赤色を保ち淡く部分的に点在して残存する赤色顔料。そのごく一部の0.1mgを母岩ごと鋼針で削りとり分析用試料とする。

Ⅱ　試料検液の作成

上記の分析用試料をガラス尖形管に移し、濃硝酸1滴と濃塩酸3滴を加え、加温して酸可溶性成分を溶解させたのち、適当量の蒸留水を加えて遠心分離機にかけ、酸不溶性成分から分離した上澄液を加熱濃縮して、ろ紙クロマトグラフ法の試料検液とする。

Ⅲ　ろ紙クロマトグラフ法と検出試薬による呈色反応からの赤色顔料成分の確認

東洋ろ紙 No.51B（2cm×40cm）を使用し、ブタノール硝塩酸を展開溶媒として、試料検液と、対照の鉄イオン（Fe^{3+}）と水銀イオン（Hg^{2+}）の標準液を同条件下で展開した。

展開の終わったろ紙を風乾してから縦に二分し、その一方は、検出試薬として1%ジフェニルカルバジドのエタノール溶液を噴霧してからアンモニア蒸気に曝し、もう一方には、検出試薬として0.05%ジチゾンのクロロホルム溶液を噴霧して、それらの際に、ろ紙上に発現するそれぞれの呈色スポットの位置（Rf値で表現する）と色調を検した。

上記試料検液ならびに対照イオンの標準液について得られたろ紙上のスポットのRf値と色調は、下記の表1、表2のとおりである。

(1)　ジフェニルカルバジド・アンモニアによる検出：（Hg^{2+}は紫色、Fe^{3+}は紫褐色のスポットとして検出される。）

表1　ジフェニルカルバジドによる呈色スポットのRf値と色調

試　料	Rf値（色調）	
試料検液	0.11（紫褐色）	0.88（紫色）
Fe^{3+}標準液	0.15（紫褐色）	
Hg^{2+}標準液		0.92（紫色）

(2) ジチゾンによる検出：（Hg^{2+}は橙色スポットとして検出され、Fe^{3+}は反応陰性のため呈色せず。）

表2　ジチゾンによる呈色スポットのRf値と色調

試　料	Rf値（色調）
読料検液	0.94（橙色）
Fe^{3+}標準液	呈色スポット発現せず
Hg^{2+}標準液	0.91（橙色）

Ⅳ　判　定

以上の結果のとおり、柏木遺跡の古墳時代前期の溝SD04より出土した円柱形花崗岩製石杵の、磨り面に残存する赤色顔料の試料検液からは、Hg^{2+}が明瞭に検出された。同時に検出されたFe^{3+}の呈色が淡いことから考えて、石杵に付着・残存していた赤色顔料の主体は、水銀朱（辰砂、HgS）であって、Fe成分は混在したかもしれない少量のベンガラ（酸化鉄、Fe_2O_3）か、花崗成分としての遊離型鉄成分に由来するものと考えられる。

（1992年7月分析）

1）安田博幸「古代赤色顔料と漆喰の材料科学」『斉藤　忠編集　日本考古学論集1　考古学の基本的諸問題』吉川弘文館　pp.389－407　1986

安田博幸「古代赤色顔料と漆喰の材質ならびに技法の伝流に関する二、三の考察」『橿原考古学研究所論集』第七　吉川弘文館　pp.449－471　1984

平城京左京五条一坊十三・十四坪・柏木遺跡の微遺体分析および樹種同定

天理大学附属天理参考館　金原正明　環境文化研究所　金原正子

平城京左京五条一坊十三坪、柏木遺跡において計20試料の花粉分析を行った。古墳時代の溝SD12では採取されていた木材10点および検出された寄生虫卵の分析も加えて行った。

花粉分析処理は試料に水酸化カリウム処理、篩別、フッ化水素酸処理、アセトリシス処理の各物理化学処理を施して分離抽出を行い、プレパラートを作製した。分析の結果は花粉総数を基数とする百分率を算出し花粉組成図に示した。

Ⅰ　東一坊大路西側溝SD36の花粉分析

試料は計12点で、各層位ごとに採取し最下層のみ4層準採取した（図4　第1・3～9・12層）。試料はいずれも灰色の泥混じりのシルトないし粘土であった。分析の結果（図1）、上位2試料を除いて樹木花粉の占める割合が多い。樹木花粉で高率なものはほとんど風媒花の樹木であり、周辺地域の樹木相を反映しているとみなされる。マツ属複維管束亜属（ニヨウマツ類）は層位的な変化があるため、近隣に生育または植えられていたとみられる。少量ではあるがムクゲの花粉が検出されているが、花粉生産量の少ない虫媒花の植物であるため近接した生育または多量の生育が考えられる。ムクゲは大陸原産の渡来植物であるため、京内に意識的に植えられていたとみなされる。他にセンダンも検出されており、同じく京内に植えられていたのであろう。

草本花粉ではイネ科が多く、ガマ属―ミクリ属・オモダカ属・タデ属サナエタデ節・フサモ属などの水湿地を好むものとヨモギ属・タンポポ亜科・キク亜科・アカザ科―ヒユ科などの乾陸を好むものとが含まれる。最も優占するイネ科は種類が多く水湿地と乾陸の植物を含む。フサモ属やヒシ属が検出されているため、溝は滞水していたとみなされる。ヨモギ属・タンポポ亜科・キク亜科・アカザ科―ヒユ科などは乾いた環境の道路周辺に生育していたとみなされる。本溝からは寄生虫卵や糞便特有の食物残渣はみられなかった。

Ⅱ　土坑SK40の花粉分析

分析に適した中層の灰色粘土（図4　第3層）より3試料採取し、分析を行った（図2）。樹木花粉の傾向は溝SD36と同様である（図2）。草本花粉ではイネ科が優占し、ヨモギ属やカヤツリグサ科と続く。ガマ属―ミクリ属・オモダカ属・タデ属サナエタデ節・フサモ属の水湿地草本が出現しており、特にフサモ属の存在からみて、土壙SK40は滞水していたとみなされる。

Ⅲ　溝SD12出土木材の樹種同定と微遺体分析

木材は破片が採取されており、切片を作成して同定した。以下のようである。

No.34　コナラ属アカガシ亜属　Quercus subgen.　Cyclobalanopsis

No.35　スタジイ　Castanopsis sieboldii Hatusima

No.48　ヒノキ　Chamaecyparis obtusa Endl.

No.62　環孔材　Ring－porous wood

No.77　ヤブツバキ　Camellia japonica Linn.

No.78・83・86　コナラ属コナラ節　Quercus sect.　Prinus

No.92　クリ　Castanea crenata Sieb. et Zucc.

分析試料は暗青灰色粘土（図4　第10層）で連続して5層準採取した。樹木花粉の占める割合が約70%と高い（図3）。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属が優占し、クリーシイ属―マテバシイ属などの広葉樹とスギを主としモミ属・ツガ属・マツ属複維管束亜属などの広葉樹が伴われる。草本花粉ではイネ属型を含むイネ科とヨモギ属がやや多く出現する。当時（古墳時代）遺跡周辺の奈良盆地低地部には水田も分布するものの、カシ類やシイ類を主としスギなどの針葉樹をまじえる照葉樹林がかなり多く分布していたとみなされる。

Ⅳ　溝SD12の寄生虫卵

本試料には寄生虫卵が含まれていたので金原（1992、「花粉分析および寄生虫」『藤原京跡の便所遺構』 奈良国立文化財研究所）に示された方法によってプレパラートを作製し、試料1×10^{-1}cm^{-3}量について検境を行ない同定計数した。

残存する卵殻のみでは、回虫（＊1）は豚回虫と、横川吸虫（＊2）はやや大きく形態の類似する高橋吸虫そして他の異形吸虫と、いずれも形態分類が難しい。ここではこれらの分類群に含めた。

回虫、鞭虫、肝吸虫、横川吸虫、肺吸虫という組成からみて人間の糞便がまじりこんだとみなされる。他に糞便特有の残渣も検出された。

分類群				試料（1×10^{-1}cm^3）				
学　名		和名	部位	1	2	3	4	5
Ascaris lumbricoides	＊1	回虫	卵殻	2	2			2
Trichuris trichiura		鞭虫	卵殻	2	5	1		
Clonorchis sinensis		肝吸虫	卵殻		2			
Metagonimus yokogawai	＊2	横川吸虫	卵殻		1			
Paragonimus		肺吸虫類	卵殻					2

溝SD12取試料寄生虫卵計数表

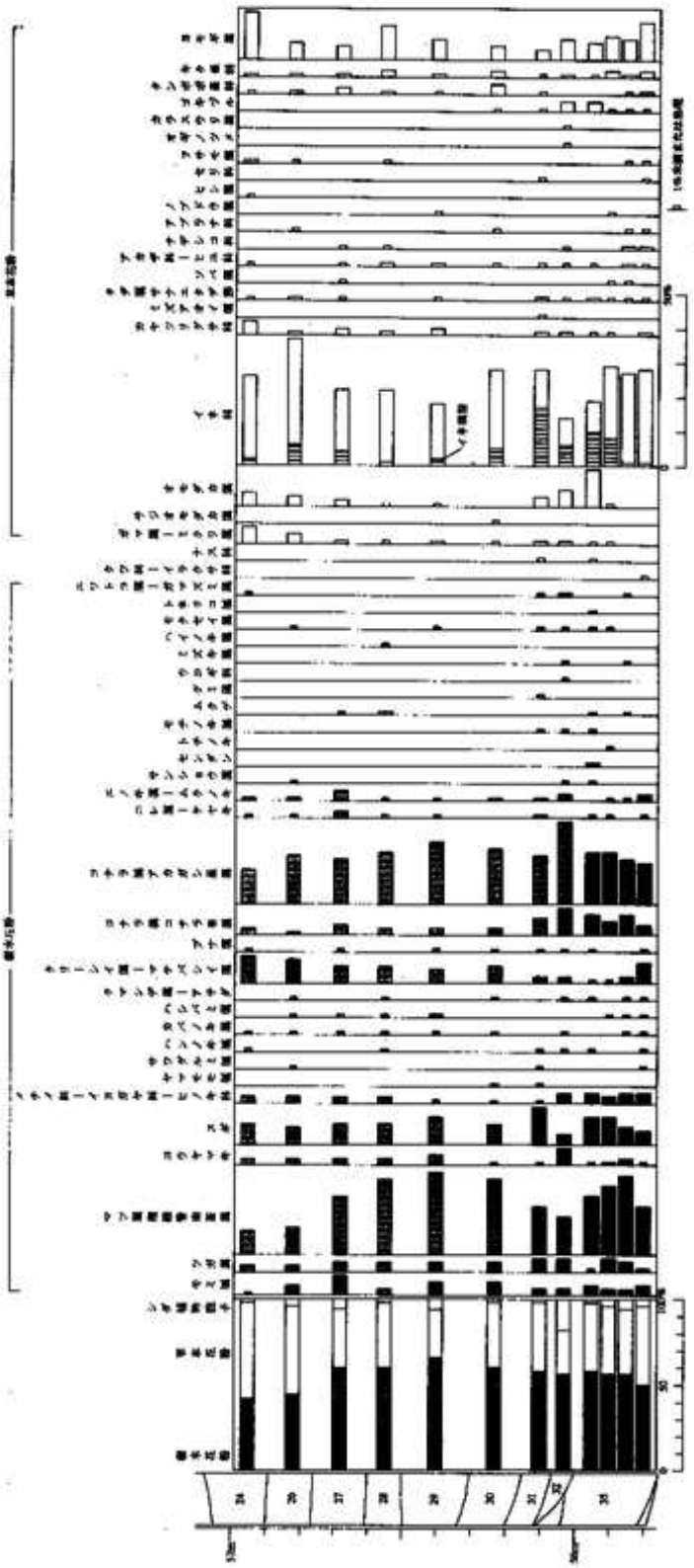


図1　東　坊大路西側溝SD36採取試料花粉組成図

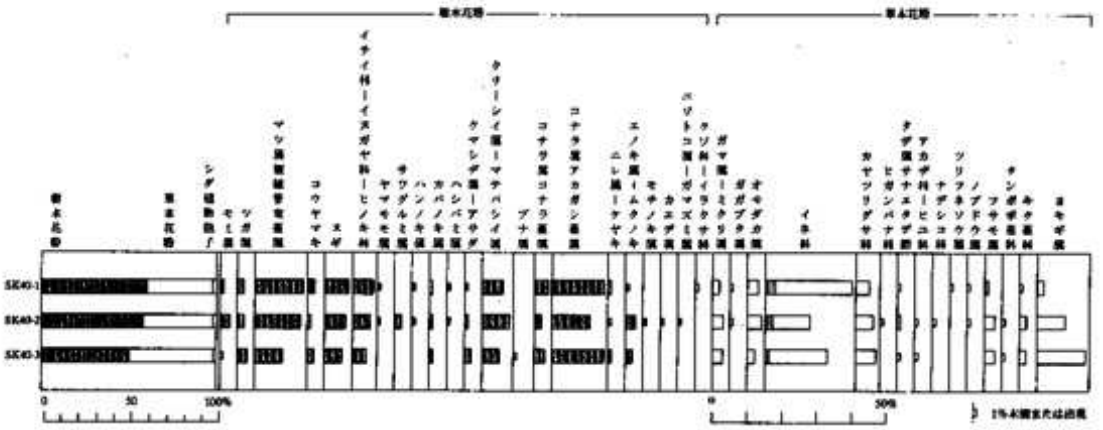


図2　土坑SK40採取試料花粉組成図

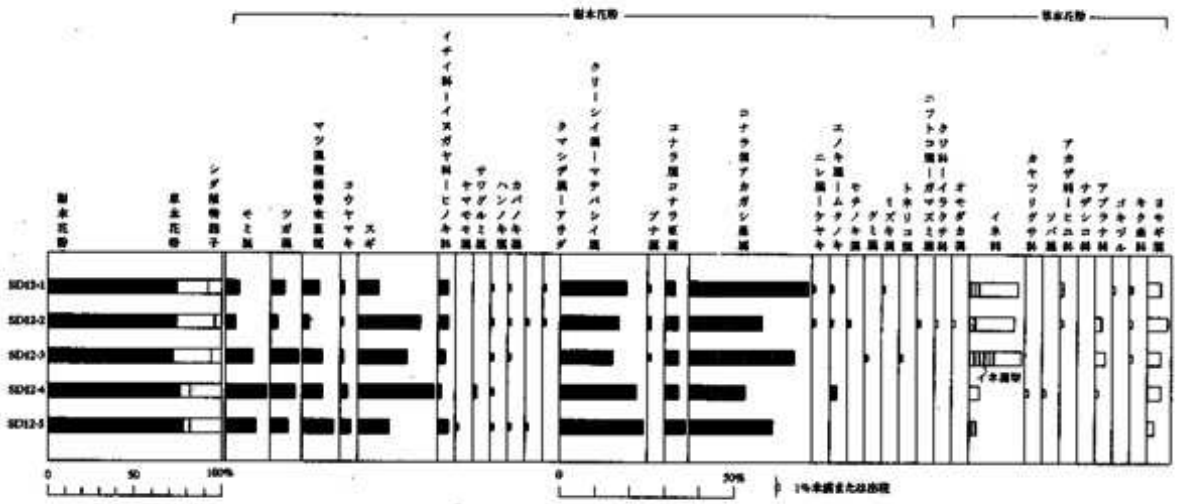


図3　溝SD12採取試料花粉組成図

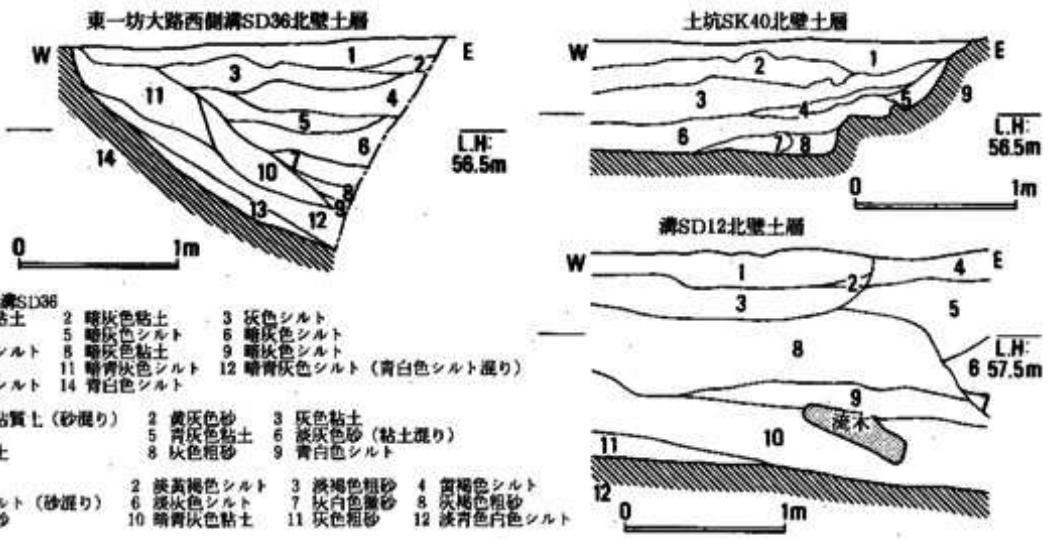


図4　溝SD36・土坑SK40・溝SD12土層断面図（1／50）

平城京東一坊大路西側溝採取の珪藻遺骸

奈良女子大学　清水　晃

東一坊大路西側溝SD36（p57 図4 溝SD36第1・3～9・12層）から採取された12試料について珪藻遺骸を調べ、遺構を流れていた水の水質を推定してみた。

約35グラムの乾燥試料中の琉藻遺骸を定法に従って分離し、プレパラート中の珪藻遺骸を約400個体カウントして、出現頻度0.25%以上で存在したもの（81種）を表のようにまとめた。表には、Hustdt.F.（1930）、Patrick. R. &C. W.Reimer（1966, 1975）、水野（1964）、小出と大西（1986）などを参考として各珪藻の生活特性を整理し加えた。また、81種の写真を図版26にあげておいた。

出現珪藻種	生態	相対出現頻度（平均値%）			
		1・3～5層	6・7層	8・9層	12層
1) Aulacoseira (Melosira) ambigua	b, , , , ,K	0.3	0.3	0.3	0.3
2) Aul. granulata	b,C, , , ,K	0.3	0.3	0.3	0.3
3) Thalassiosira bramaputrae	b,c, , , ,	2.5	1.5	0.3	0.5
4) Diatoma vulgare v. brevis				0.3	0.3
5) Fragilaria construens	a,D, ,g,J,K			0.8	0.5
6) Synedra ulna	b,D, ,g,J,K	0.3		0.5	0.3
7) Tabel laria fenestata	A,C, ,H,I,		1.5	3.8	0.5
8) Achnanthes inflata	A,D, ,H,J,K			0.3	0.3
9) Ach. japonica	A,d, ,H, ,K			0.3	0.3
10) Ach. lanceolata	A,D, ,H,J,K				0.3
11) Ach. minutissima	a,D, ,H,J,K				0.3
12) Ach. rostata					0.3
13) Amphora sp.				0.3	
14) Caloneis silicula	B,D, ,g,J,K	0.3		1.0	0.5
15) Cymbella affinis	,D, , , ,		0.5	0.5	0.3
16) Cym. ehrenbergii	,D, ,g, ,				0.3
17) Cym. lunata	B,D, , , ,				0.3
18) Cym. microcephara v. crassa	,D, ,G,J,K				0.3
19) Cym. minuta v. silesiaca	B,D, ,H, ,				0.3
20) Cym. ventricosa	A,D, , , ,K	0.8		0.5	0.3
21) Eunotia brasiliensis	,d, , ,I,	0.3	1.0	0.3	0.5
22) Eu. lunaris (Eu. curvata)	A,D, , ,J,	0.8	2.0	2.3	0.3
23) Eu. nymanniana	, , , ,I,	0.3	1.0	2.3	1.0
24) Eu. praerupta	, , , ,I,	0.3			0.3
25) Eu. soleirolii	, , , ,I,				0.3
26) Eu. sp.		0.5	0.3	0.3	
27) Gomphonema affine	a,D, ,G,J,K		0.8	3.0	1.3
28) Gom. angustatum	a,D, ,g,J,K			0.8	2.0
29) Gom. angustatum v. productum	a,D, ,g,J,K				1.3
30) Gom. globiferum	a,D, , , ,		0.3		
31) Gom. gracile	a,d, ,h,J,I				0.5
32) Gom. olivaceum				0.3	0.3
33) Gom. pseudoaugur	a,D, ,g,J,K			1.0	0.5
34) Gyrosigma sp.		0.3		0.3	0.3

表1　溝SD36の珪藻遺骸(1)

出現珪藻種	生態	相対出現頻度（平均値%）			
		1・3～5層	6・7層	8・9層	12層
35) Hantzschia amphioxys	a,D, ,g,J,K	1.5	0.3	0.3	1.0
36) Hant. amphioxys v. maior	a,D, ,g,J,K				0.3
37) Hant. sp.					0.3
38) Navicula accomoda	A,D, ,H,J,K			0.8	0.3
39) Nav. atomus	K				0.3
40) Nav. bacillum	a,d, ,g,J,K	0.3	0.3	0.3	0.3
41) Nav. confervacea			0.5	1.0	1.0
42) Nav. contenta f. biceps	a,D, ,H,J,K			5.0	2.8
43) Nav. cryptocephala v. exilis	a,D, ,G,J,K			0.8	0.5
44) Nav. elginensis	A,D, ,g,J,K		0.3	0.8	1.0
45) Nav. frugalis				0.3	0.5
46) Nav. gregaria	A,D, ,G,J,K			1.5	1.5
47) Nav. mutica	,D, ,G,J,K	0.3	0.3	0.8	0.8
48) Nav. mutica v. tropica				0.5	0.5
49) Nav. muticoides					0.3
50) Nav. pupula v. rectangularis	a,D, ,G, ,	0.3		1.3	0.8
51) Nav. radiosa	,D, ,h, ,K				0.8
52) Nav. saprophila				0.3	
53) Nav. viridula v. avenacea	a, , ,g,J,			1.0	0.5
54) Neidium iridis	A,D, ,H, ,L	0.3	0.3	0.5	0.3
55) Nitzschia brevissima		0.3	0.3	0.3	
56) Nit. frustullum v. perpucilla	B,D, ,G, ,K	0.3	0.3	0.3	
57) Nit. obtusa v. scalpelliformis		0.5		0.3	
58) Nit. ovalis			0.3		
59) Nit. palea	a,d, ,g, ,K	0.5	0.3	0.3	0.3
60) Nit. palea v. debilis		0.5	0.5	0.3	0.3
61) Nit. parvula	b,D, ,G, ,	0.5	0.3		
62) Nit. tenuis				0.5	
63) Nit. trybionella v. debilis	a,D, ,G,J,K				0.3
64) Pinnularia abaujensis	,D, , , ,			0.5	
65) Pin. biceps v.petersenii		0.5	0.5	0.3	
66) Pin. braunii v. amphicephala	a,d, ,g,I,K			0.3	0.3
67) Pin. devilis	B,D, ,g, ,	0.3		0.3	
68) Pin. divergens		0.5			
69) Pin. maior	A,D, ,H,I,L	0.3	0.3	0.3	0.3
70) Pin. maior v. transversa		0.3	0.3	1.0	0.3
71) Pin. mesolepta	,D, ,H,I,	0.5	0.3	0.5	
72) Pin. microstauron	B,D, ,G,I,K	0.5	0.3	0.8	
73) Pin. molaris	B,D, ,g, ,				0.3
74) Pin. subcapitata	, , , ,I,	0.5	0.3	2.0	
75) Pin. subcapitata v. puncistriata	,D, ,H,I,	0.5	0.3		
76) Pin. sublinearis					0.3
77) Pin. viridis	a,D, ,g,i,	0.5			
78) Stauroneis anceps v. siverica	,D, , , ,	0.5	0.3	0.5	
79) St. phoenicentron	,D,E,H,J,K	0.5	0.5		
80) Surirella angusta	A, , ,g,J,K	0.3		0.5	
81) Sur. ovata	A, , ,g,J,K	0.3			

表2　溝ＳＤ36の珪藻遺骸(2)

1）出現頻度0.25%以上のもののみを記録した。

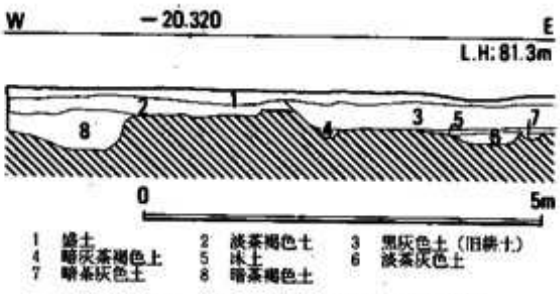
2）生活特性－A）好止水性、B）好流水性、C）浮遊性、D）底生性または付着性、E）好冷種、F）好温種、G）耐塩性、H）嫌塩性、I）好酸性、J）好アルカリ性、K）耐汚濁性、L）嫌汚濁性について、大文字記号ならば、一般にそのような性質が認められていること、小文字記号ならば、一般にそのような性質をもつが不定の場合があることを意味する。無記号は不明を意味する。例：A、c、F、G、Kであれば、この珪藻は温みのある止水に住み、浮遊性（プランクトン性）で、少々の有機的汚濁に耐える種であることを意味する（池の水はやや汚れていることが考えられるが、水が酸性かアルカリ性かは推論できない）。

6　平城京右京三条四坊四坪の調査　第250次

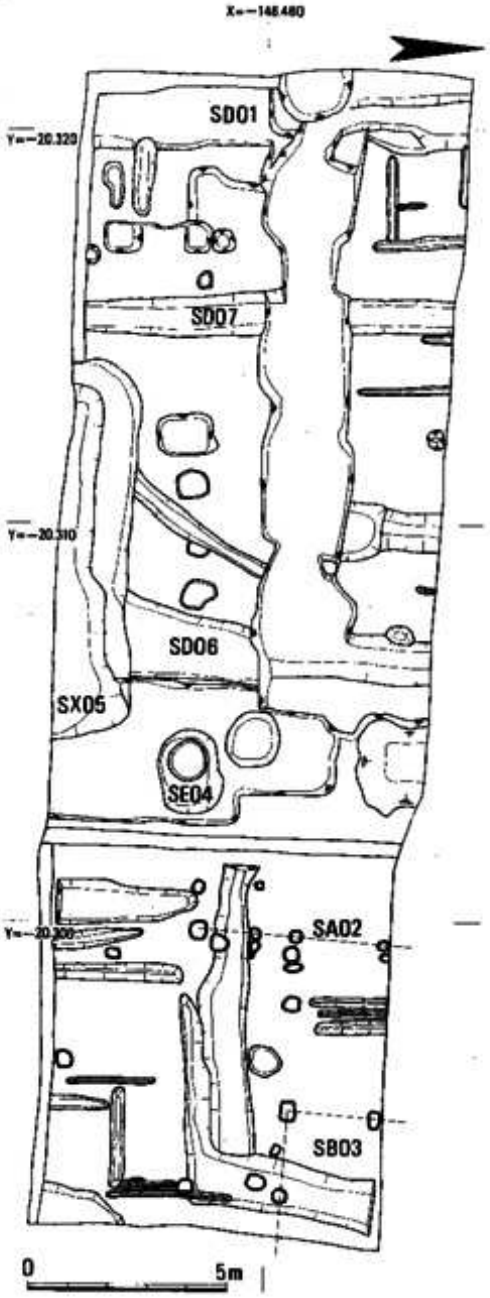
本調査は奈良市宝来三丁目9－35において、市立伏見保育園園舎改築に伴って実施した事前の発掘調査である。調査地は、西から東にむかって緩やかに下る伏見丘陵の先端部に位置する。平城京の条坊復原では右京三条四坊四坪の西辺部にあたり、四・五坪坪境小路が想定される地点である。昭和55年度に当保育園の運動場拡張に伴って発掘調査を実施しており、奈良時代の掘立柱列、12世紀後半の井戸、14～15世紀の素掘りの溝などを検出している。今回の調査では建設予定地の西南寄りに東西約30m、南北約10m（面積280㎡）の発掘区を設け、条坊遺構の検出に主眼をおいた。調査期間は平成4年4月13日から5月27日である。

発掘区内の基本層序は、盛土、黒灰色土（旧耕土）、淡灰色土、暗茶黄色土と続き、明灰黄色土の地山にいたる。遺構はすべて地山上面で検出した。調査地が西から東へ下る斜面に位置することから地山上面の標高は発掘区西端で80.2m、東端で79.6mである。土層観察で旧水田面に著しい段差があることから丘陵がひな段状に造成されたことが窺われ、遺構面がかなり削平されていることが推測された。

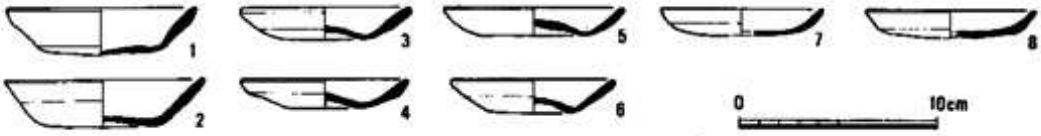
検出した遺構には掘立柱塀、掘立柱建物、井



第250次調査　発掘区北壁土層図（1／100）



第250次調査　遺構平面図（1／200）



ＳＸ05出土土器（１／４）

戸、溝、土坑、小穴がある。SD01は南北方向の素掘りの溝。西肩は未検出だが、幅1.6ｍ以上、深さ0.2～0.5ｍである。奈良時代の土師器、須恵器が出土した。SA02は南北方向の掘立柱列で、２間（4.6m）分を検出した。柱間寸法は2.3ｍ等間。SB03は東西・南北とも１間（2.3m）分を検出した。掘立柱建物の西南隅にあたるかと思われる。SE04は掘形が東西2.1m、南北1.5ｍの平面楕円形の井戸で、深さは2.7ｍ以上。枠は残存しなかったが、痕跡から径1.0ｍの平面円形であったことがわかる。枠内の埋土から出土した遺物には陶器、瓦質土器、土師器、砥石があり、いずれも16世紀のものである。SX05は東西10m、南北1.0ｍ以上、深さ1.6ｍの窪地状の遺構。底部に灰色粘土が堆積し、水が溜っていたことが窺えることから、池の一部とも考えられる。出土遺物は14世紀の土師皿（１～８）の他、陶器、瓦器、瓦質土器、塼である。SD06は幅1.4～2.0m、深さ0.2ｍの南北方向の素掘りの溝。埋土からは土師器・須恵器の他、軒平瓦（6664C）、「菅原寺」銘の軒丸瓦が出土した。遺構の時期については中世以降であろうが、出土土器が細片のため特定できない。

ここで、奈良時代の溝SD01とSD07が平城京の条坊内に占める位置について検討を加えてまとめにかえる。まず溝SD01を四・五坪坪境小路の東側溝に想定して考えてみる。溝SD01は幅員が確定できなかったため、最深部を溝心と考え、四・五坪坪境小路の幅員を、従来の京内の調査例による小路幅員20小尺（６ｍ）と仮定すると、坪境小路心の座標値はX＝－146,457.000、Y＝－20,320.700になり、坪境小路心は平城宮朱雀門心から国土方眼方位で西へ1734.390ｍの位置にあることがわかる。これを朱雀大路の国土方眼方位に対する平均の振れであるN15゜41″Ｗを勘案して修正をすると両者心心間の距離は1736.483ｍとなる。朱雀門心から坪境小路心までの造営計画距離は5400尺（3坊幅）＋450尺（一坪幅）＝5850尺であるから、得られる造営単位尺は0.2968ｍである。この１尺＝0.2968ｍという数値は従来の京内の調査で得られた造営単位尺の多くと比較した場合、妥当な数値と思われる。

次に、溝SD01の東4.8ｍの位置に時期不明の南北溝SD07があり、これを東側溝にあて溝SD01を西側溝とすることもできる。この場合の小路心の座標値はX＝－146,457.000　Y＝－20,317.700となり、得られる単位尺は0.2963ｍである。造営単位尺としては妥当な数値であろうが、側溝心心間距離は16尺となり、従来の調査成果に合致しない。いずれが正しいのかは今後の調査に委ねたいが、右京の丘陵域における条坊施行を考えるにあたり新たな資料を追加できたと考える。

（池田裕英）

7　平城京左京四条六坊一坪　第251次

Ⅰ　はじめに

本調査は奈良市下三条町８－８において、公園建設に伴い実施した事前発掘調査である。調査地は平城京の条坊復原では、左京四条六坊一坪の中央やや南寄りの一画に相当する。周辺には発掘調査例がなく、当坪内の遺構の様相が注目された。発掘区は東西約22m、南北約14m、面積約320㎡の規模で設定した。調査期間は平成４年５月12日から７月１日である。

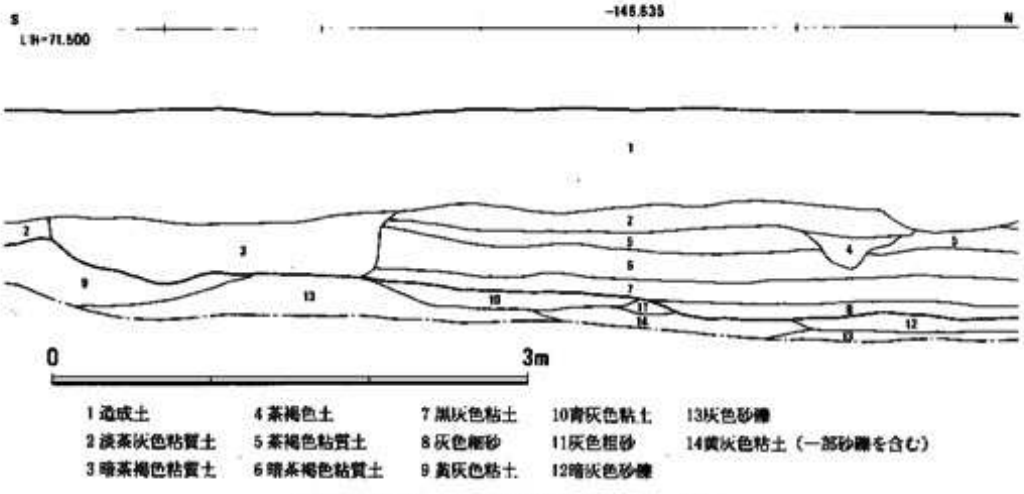
Ⅱ　検出遺構

発掘区の層序は、盛土、淡茶灰色粘質土の順であり、地表下約0.7ｍで黄灰色粘土もしくは黄灰色砂礫の地山にいたる。地山の上面の標高は概ね70.4ｍである。遺構検出作業は地山上面および後述する流路の埋土の上面で行なった。

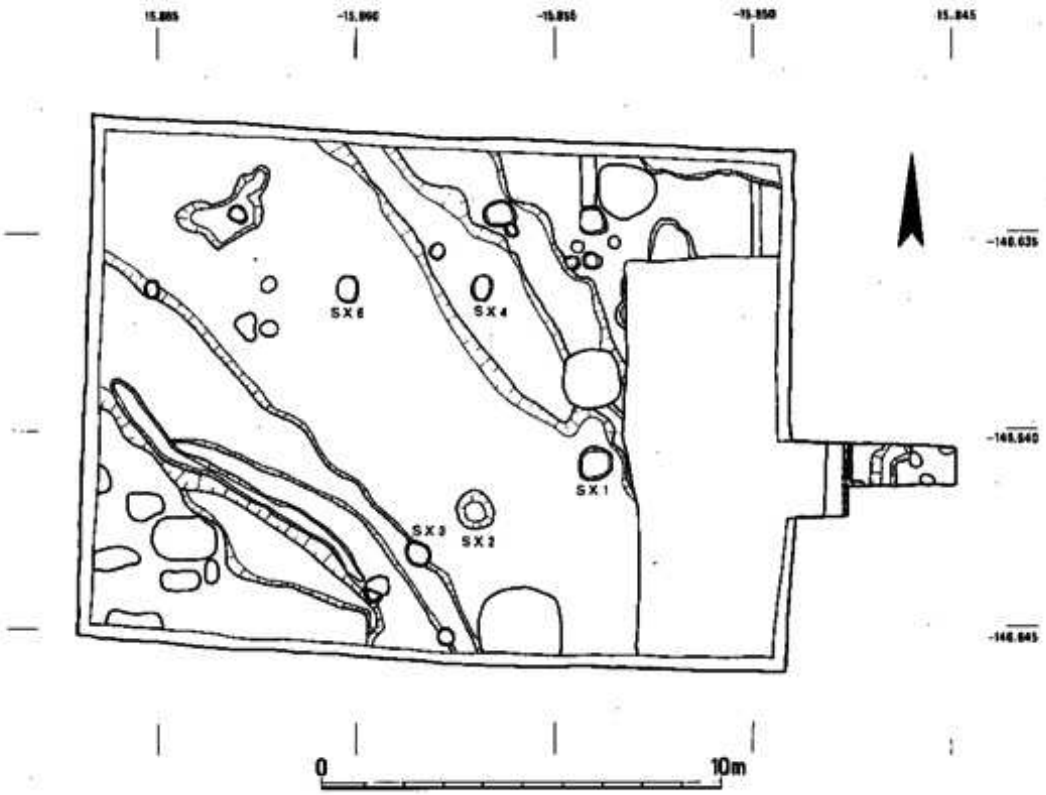
調査の結果、流路、柱掘形、小穴を検出した。

流路は発掘区南東から北西に斜行する。幅約11.0ｍ、遺構検出面からの深さ約0.5ｍである。埋土は三層に分かれ、上から暗茶灰色粘質土、黒灰色粘土、灰色細砂の順である。暗茶灰色粘質土層には平安時代の灰釉陶器、奈良時代の須恵器、土師器が含まれ、黒灰色粘土層には古墳時代の土器、埴輪片および奈良時代の須恵器、土師器が含まれていた。また、灰色細砂層は遺物が少なく、埴輪片が少量出土したのみである。

発掘区中央北側で小穴を数個検出した。各小穴とも流路の埋土である黒灰色粘土上面から掘られており、規模は径0.5～0.6ｍ程度で、平面の形状はいずれも円形もしくは隅丸方形である。SX01には柱根が残存しており、礫や奈良時代の須恵器などを柱の根固めにし



第251次調査　発掘区西壁土層図（１／50）



第251次調査　遺構平面図（1／200）

ている。また、SX05も柱根が残存していた。このことからこれら2個の小穴は柱掘形と断定できるが、他に同様の柱掘形が見当らず、建物としてはまとまらない。

流路の埋土を除去したのち、発掘区中央南側で小穴を数個検出した。各小穴とも地山面に掘られている。規模は径0.5～1.3mと一定でなく、平面の形状はいずれも円形である。SX03・SX04の埋土からは、古墳時代の土器が出土した。また、SX05の埋土中には腐蝕した木質が含まれていた。

Ⅲ　まとめ

今回の調査で検出した流路は、層序や各層に含まれていた遺物の型式から、奈良時代以前に遡ると思われる。その後、奈良時代には流路内の水流は比較的停滞していたことが推測でき、完全に埋まったのは平安時代以降である。流路の底および黒灰色粘土上面で検出した小穴の性格は不明である。また、流路の最下層の埋土から埴輪片が少量出土した。小片のため時期は決定できないが、種類は円筒埴輪の他、朝顔形埴輪、蓋形埴輪がある。このことから、付近には古墳が存在していた可能性があり、今後、周辺の調査では考慮する必要があろう。

（武田和哉）

平城京左京五条六坊十五・十六坪　第252次

Ⅰ　はじめに

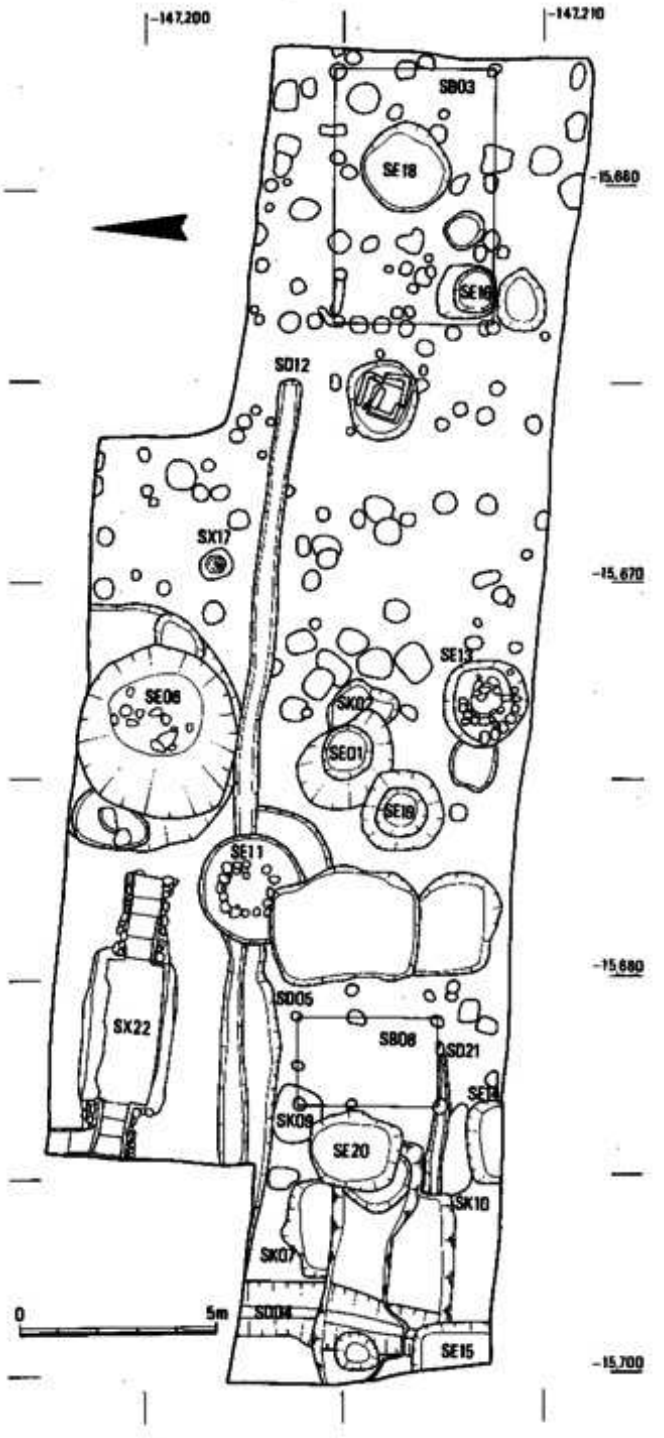
本調査は奈良市鳴川町32番地の１において奈良市芸能館建設に伴って実施した事前発掘調査である。調査地は平城京の条坊復原では左京五条六坊十五・十六坪及び東六坊大路に相当し、現在調査地の東を通る道路に、東六坊大路の地割が残っている。中世は門前郷、近世には奈良町として栄えたところでもある。調査面積は約400㎡で、調査期間は平成４年５月19日から７月８日である。

Ⅱ　検出遺構

発掘区内の層序は盛土（0.25m）以下、黒褐色土（0.3m）、暗灰褐色土（0.2m）、黄灰色砂質土（0.3m）と続き、赤褐色砂礫土（地山）に至る。地山は南東から北西方向に傾斜し、地山上面の標高は南東で79.3m、北西で78.8mである。遺構検出作業は地山面で行なった。検出した遺構には平安時代から、中世、近世、近代まで各時期のものがある。

平安時代の遺構には井戸SE01がある。井戸SE01は平面不整形掘形の素掘りの井戸で、東西1.6m、南北2.5m、深さ1.97m。埋土は暗茶褐色土で10世紀の土師器、黒色土器が出土した。

中世の遺構には掘立柱建物２棟、



第252次調査　遺構平面図（１／200）

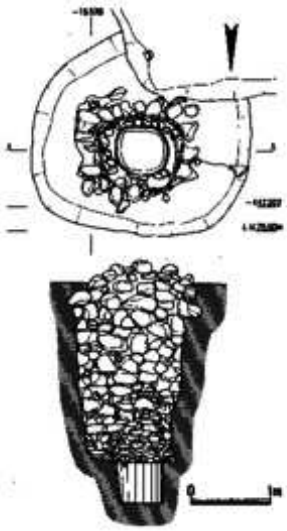
溝２条、井戸２基、土坑４基がある。建物SB03は桁行３間（6.6m）、梁間２間（4.4m）の東西棟建物。柱間寸法は桁行、梁間ともに2.2m等間である。南東隅の柱掘形には根石が据えられていた。柱掘形から13世紀の土師器が出土。建物SB08は桁行２間（3.5m）、梁間２間（2.15m）の南北棟建物。柱間寸法は桁行が南から2.0m—1.5m、梁間は東から1.25m—0.9mである。重復関係から後述する土坑SK12より古いことがわかる。

溝SD04は南北方向の素掘りの溝。幅1.7m、深さ0.85m、長さ2.5m分を確認した。溝SD05は東西方向の素掘りの溝。幅0.95m、深さ0.16m、長さ2.5m分を確認した。埋土はともに茶褐色土で、13世紀の土師器が出土した。重復関係から溝SD04は井戸SE15より古く、溝SD05は井戸SE11よりも古いことがわかる。

井戸SE06は平面円形掘形の素掘りの井戸。掘形の径6.14m、深さ2.9m。埋土はは黒灰色粘土で木製品と13世紀の瓦器が出土した。井戸SE11は平面円形掘形の石積の井戸。掘形は上下二段にわかれ、上段には内径1.15m、深さ2.5mの石積を、下段には内径0.55mの円形縦板組の枠が据えられていた。上段の石積枠内から15世紀の擂鉢と鹿の骨が出土した。土坑SK02は平面不整形掘形の土坑。掘形の径1.85m、深さ0.14m。埋土は暗褐色土で、12世紀中頃の土師器、瓦器が出土した。土坑SK09は平面円形掘形の土坑。掘形の径1.8m、深さ0.21m。埋土は茶褐色土で、13世紀～14世紀の土師器と瓦が出土した。土坑SK10は平面長円形掘形の土坑。掘形は東西2.2m、南北1.25m、深さ0.14m。埋土は茶褐色土で、13世紀から14世紀の土師器が出土した。いずれも検出面から浅く、完形の土師器皿と瓦器椀が重なった状態で大量に出土した。土坑SK07は平面不整形掘形の土坑。東西2.45m、南北1.2m以上、深さ0.28m、埋土は茶褐色土で、13世紀の土師器、青磁、白磁が出土した。

近世の遺構には溝１条、井戸７基、埋甕１基がある。

溝SD12は東西方向の素掘りの溝。幅0.95m、深さ0.16mで、長さ9.9m分を確認した。埋土は暗青灰色土で、16世紀の土師器が出土した。井戸SE13は平面円形掘形の石積の井戸。石積は内径1.5m、深さ1.93mまでを確認した。石積の一部は崩壊していた。石積の枠内から17世紀の瓦質土器が出土した。井戸SE16は平面円形掘形の素掘りの井戸。径1.4m、深さ1.83m。埋土は赤褐色土で、17世紀末頃の陶磁器と鞴の羽口、銭貨が出土した。井戸SE14・SE15は一部を検出したのみで全体の規模は不明であるが平面方形掘形の素掘りの井戸となろう。井戸SE14の掘形は東西1.9m、深さ1.3mまで確認した。井戸SE15は深さ1.89mまで確認した。ともに埋土は暗褐色土で、17世紀の陶磁器が出土した。井戸SE18・SE19・SE20は平面円形掘形の素掘りの井



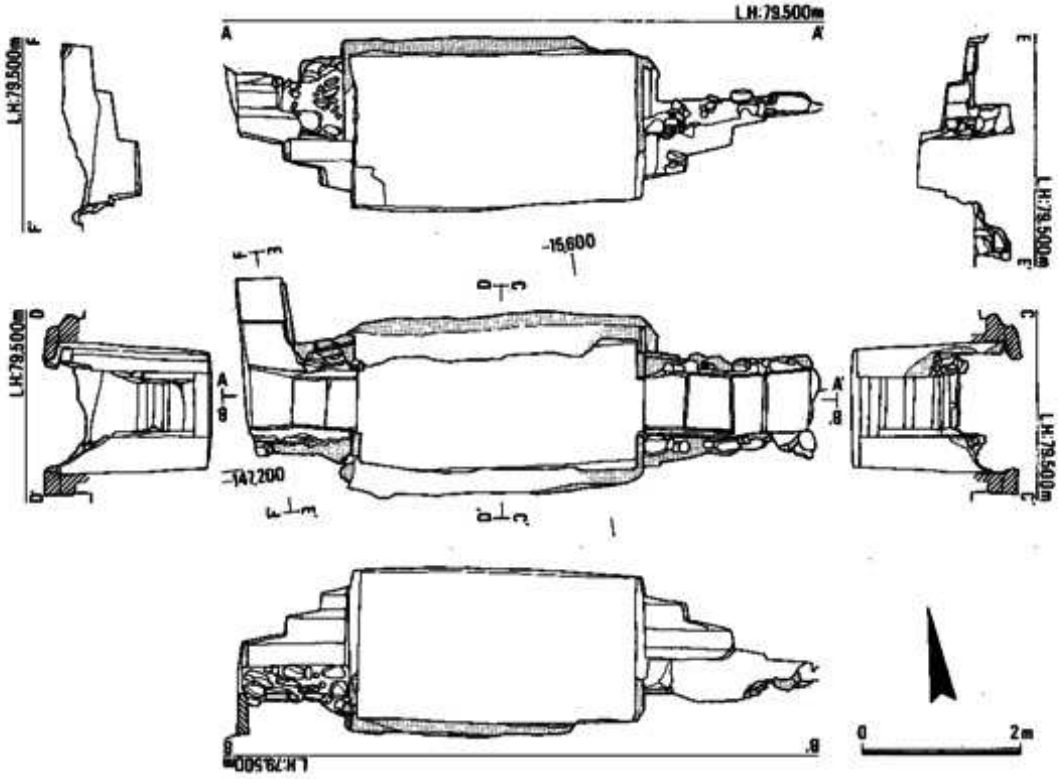
井戸ＳＥ11平面・断面図
（1／100）

戸。いずれも掘形の径2.0m～2.2m、深さ2.7m前後までを確認した。埋土は暗褐色土で18世紀の陶磁器が出土した。SX17は埋甕遺構である。大型瓦質甕を、径0.75m、検出面からの深さ0.21mの掘形に据えている。瓦質甕は上部が削平され、底部から24cmまでが残る。甕内部から18世紀の土師器皿8枚が出土した。

その他、時期の不明な遺構もある。溝SD21は東西方向の素掘りの溝で、幅0.4m、後世の削平を受け、深さ0.02mと浅い。長さ3.9m分を確認した。埋土は茶褐色土で、遺物は出土しなかった。

近代のものに防空壕SX22がある。

SX22は半地下式の防空壕で、退避室の長さ3.63m、幅1.46m、面積5.30㎡。壁の高さ1.9m。東、西に階段の出入口がある。東階段は4段で、長さ2.15m、幅1.55m。西階段は5段で、北に鉤の手に曲がる。長さは東西方向が1.45m、南北方向が1.91m。幅1.55m。退避室は平面長方形掘形内に、壁の厚みをとった型枠を組み、掘形壁との間にコンクリートを流し込み構築している。床はコンクリートの敲である。天井は煉瓦で架構されるが、崩壊し大半が退避室に落ち込んでいる。階段と階段部壁の下半はコンクリートで、塗り固められ、上半は石積みである。扉は東西の階段上に板蓋をかぶせていたようである。遺物は全く残っておらず終戦直後に埋められたものである。　　（秋山成人）



防空壕ＳＸ22平面・断面図（１／100）

Ⅲ　出土遺物

遺物整理箱に72箱分の瓦類、土器類、木製品、金属製品が出土した。

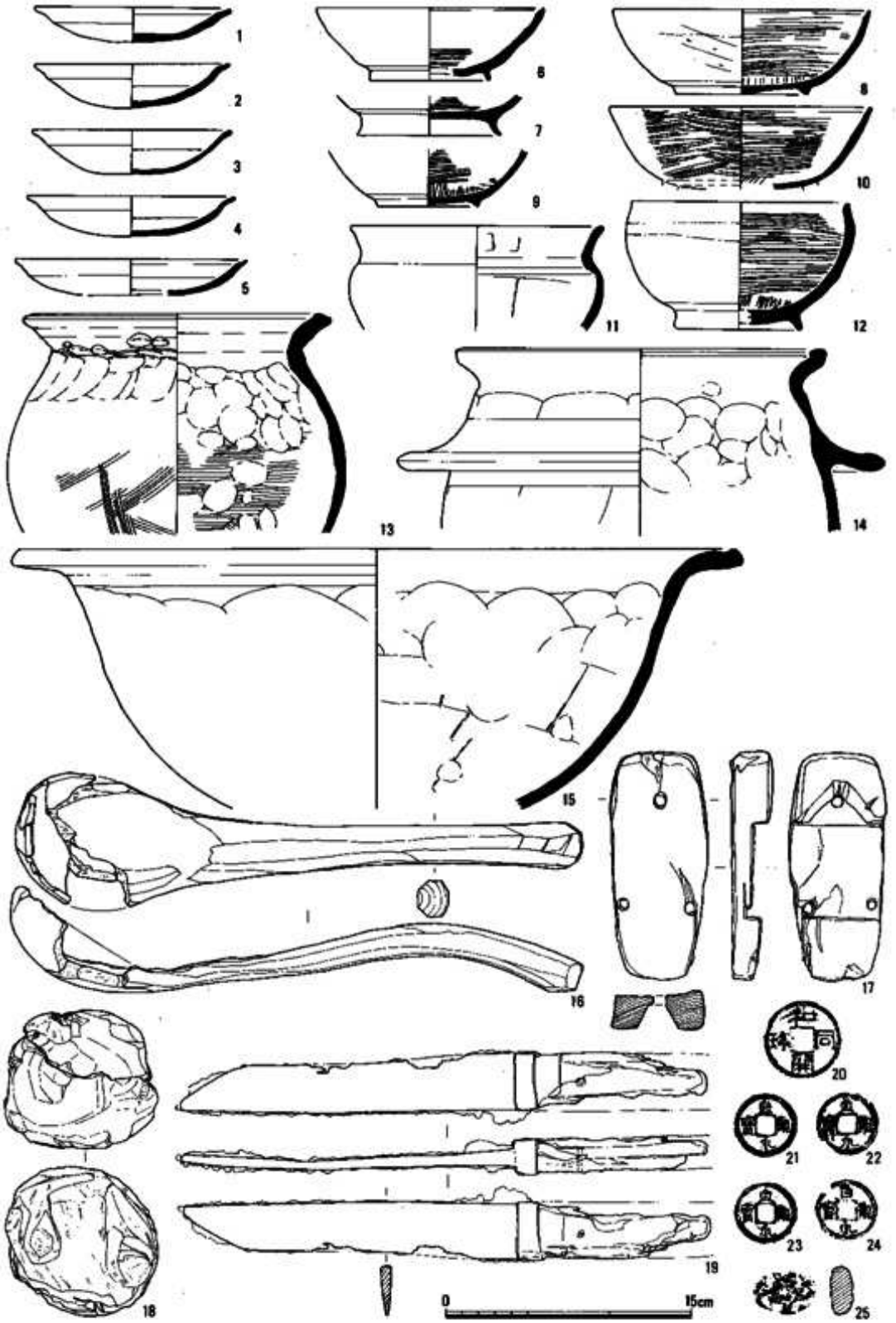
瓦類では遺物包含層から軒丸瓦6201Ab１点、塼２点が出土した。土器類は平安時代から近代までの各時期のものがある。井戸SE01からは平安時代前半から中頃にかけての土器がまとまって出土しており、それについて記す。土師器皿（１～５）・甕（13）・羽釜（14）・鍋（15）・高杯、黒色土器椀（６～10）・甕（11）・壺（12）、須恵器甕・壺が出土した。土師器皿には口径11.8cm前後のものと、13.8cm前後のものがある。土師器甕・羽釜・鍋はいずれも外面を板で押さえ、内面上半を指オサエで調整している。黒色土器にはA類（６～８、12）とB類（９～11）とがありA類の出土量が若干多い。高台が低いものと高いものとがある。これらは10世紀後半の特徴を示す。平城京外京域におけるこの時期の土器の出土例は少なく良好な資料である。　（中島和彦）

木製品、金属製品の大半は井戸から出土した。以下主なものを報告する。16は杓子である。長さ35.0cm、柄の径2.5cm前後。一木から作り、幹を皿に枝を柄にしている。17は下駄である。長さ14.0cm、幅5.8cmと小型で、連歯下駄である。18は径10cmほどの不整形な木製品で、蹴鞠の木芯か毬杖の玉かと思われる。19は短刀である。平造で刃部長10.3cm、茎部長5.4cm、反りはない。茎に柄の木質と金具が残り、目釘孔が１孔確認できる。銭貨は11点あり、20は和同開珎（708年初鋳）、21～24は貞観永寶。他に銹着したものを含め計６枚が出土した。25は豆板銀である。重さ11.231ｇで約３匁となる。表面の印は判読できない。他に文永宝（1863年初鋳）１点がある。16・18は井戸SE06、17は井戸SE18、19は井戸SE11、25は井戸SE16、他は遺物包含層から出土した。他に井戸SE06からは漆塗椀、曲物が出土した。　（松浦五輪美）

Ⅳ　まとめ

今回の調査では平安時代から近代までの多様な遺構を検出した。中でも井戸を13基検出したことにより、各時期の一括資料となる遺物を得ることができた。また、溝SD05と溝SD21は後世に削平され一部を確認したのみであるが、十五坪、十六坪を分ける坪境小路の側溝を踏襲する溝であった可能性がある。溝SD12は江戸時代の絵図をもとに作成された明治２年の「鳴川町総券地絵図」には調査地に該当する位置に４軒の宅地が描かれており、その宅地境界のひとつに相当すると思われ、溝内の出土遺物からみてこの地に町屋の区画が成立したのは16世紀初めであった可能性がある。防空壕については、コンクリート製のもので現在まで残っているものは少なく良好な資料である。内務省の指導にもとずく警防団から鳴川町の町内会への指示により、大平洋戦争末期の昭和19年秋に青年会である鳳鳴会が主体となって、町内の人々が交替で構築にあたったことが明らかになった。

（秋山成人）



出土遺物（1／4）

9　ＪＲ奈良駅周辺地区土地区画整理事業に伴う調査

昭和63年度以来継続しているＪＲ奈良駅周辺地区土地画整理事業に伴う発掘調査である。本年度は表に示した２件、計1,823㎡の調査を実施した。第253次調査については昨年度市民ホール建設予定地で実施した第234次調査区に隣接した二箇所の発掘区と、他にもう一箇所発掘区を設けた。平城京の条坊では左京四条四坊一坪と二坪にあたる。第268次調査はＪＲ奈良駅の東、左京四条五坊のうち二・四・五・六坪にわたる地域の試掘調査である。当該地域の今後の調査計画立案のための資料を得ることを目的として三箇所に発掘区を設けた。

遺跡名	次数	調査地	面積	調査期間
平城京左京四条四坊十五・十六坪	第253次	二条本町33－3 三条宮前町242－2 他	1700㎡	4・5／1～4・9／18
平城京左京四条五坊三・四・五・六坪	第268次	三条本町330－1・2	123㎡	4・10／13～4・11／16

発掘調査地一覧

調査地と周辺の条坊（枠内が土地区画整理事業範囲、数字は調査次数）

(1) 平城京左京四条四坊十五・十六坪の調査　第253次

Ⅰ　はじめに

本調査では三箇所の発掘区を設定した。平城京の条坊復原では中央・南発掘区が左京四条四坊十五坪、北発掘区が同十六坪にあたる。中央発掘区は第234次調査区の南東辺に接し、南発掘区は中央発掘区と工事用進入路を隔てた南に設定した。遺構番号は中央・南発掘区は一連で、昨年度の第234次調査からの通し番号を付して報告する。

Ⅱ　検出遺構

中央・南発掘区

発掘区の基本層序は、厚さ1～1.5mの盛土以下、黒褐色土（旧耕土）が約0.15m、暗褐色もしくは暗灰色の砂質粘土（遺物包含層）が約0.1mあり、黄灰色粘土の地山に至る。遺構検出面は地山上面で、標高は62.7～63.4mである。

検出した遺構は奈良時代の掘立柱建物17棟、掘立柱塀3条、溝1条、土坑1基である。発掘区全体に13世紀以降と考えられる粘土採掘坑があり、これにより破壊された遺構があると思われる。

SB05　東西2間（4.2m）以上、南北2間以上と推定される建物の北西隅の1間（2.4m）分のみを確認した。東西の柱間寸法は2.1m等間である。

SB06・SB07　ともに東西2間（3.6m）以上の建物で、北西隅部分のみを検出した。南北方向の柱間寸法は少なくとも1.2m以上あり、発掘区外へ続いていると考えられる。

SB08　桁行3間（4.5m）、梁間2間（3.3m）の南北棟建物。柱間寸法は桁行1.5m等間、梁間1.65m等間である。建物SB01と東側柱筋を揃えて南北に連なる。

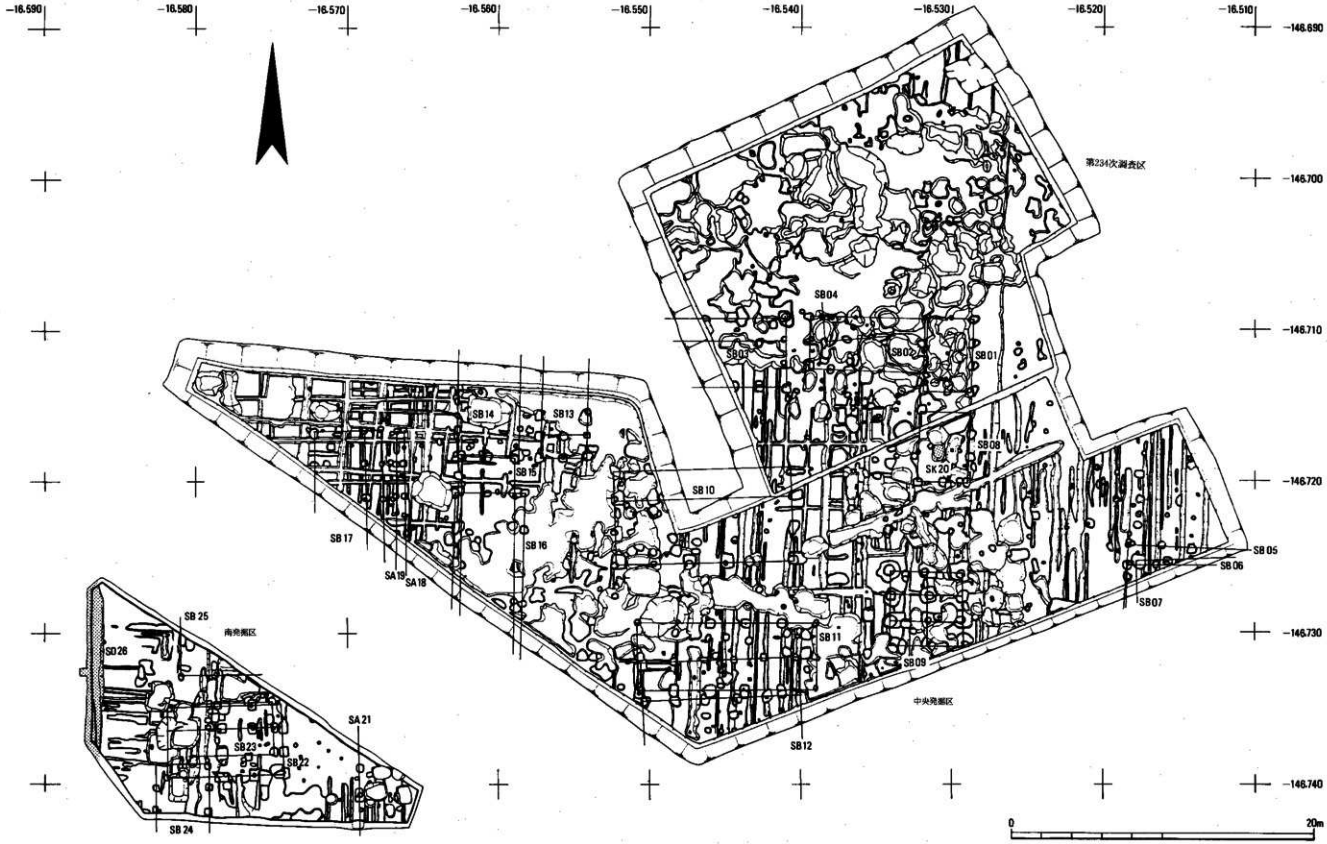
SB09　東西2間（4.8m）、南北3間（4.8m）の総柱建物。柱間寸法は東西2.4m等間、南北は1.5－1.8－1.5mと中央間がやや広い。

SB10　桁行5間（11.7m）、梁間2間（4.2m）の北廂付東西棟建物。柱間寸法は桁行が東から2.4－2.1－2.4－2.4－2.4mで2間目がやや狭い。梁間は2.1m等間で、廂の出は2.1mである。

SB11　桁行5間（12.0m）、梁間2間（4.5m）の東西棟建物。柱間寸法は桁行2.4m等間、梁間2.25m等間である。

SB12　桁行5間（10.5m）、南北2間以上の北廂付東西棟建物と推定されるが身舎の部分は確認できなかった。柱間寸法は桁行2.1m等間で、検出した南北1間分は廂部分にあたり、廂の出は2.4mと考えられる。

SB13　桁行2間（3.0m）以上、梁間2間（3.0m）の南北棟建物。柱間寸法は桁行1.5m等間、梁間1.5m等間で、桁行の南から1間目に間仕切りの柱掘形がある。



第253次調査　中央・南発掘区遺構平面図（1／250）

SB14　桁行２間（3.6m）以上、梁間２間（4.2m）の南北棟建物。柱間寸法寸法は桁行1.8m等間、梁間2.1m等間である。

SB15　桁行４間（9.6m）以上、梁間２間（3.6m）の南北棟建物。柱間寸法は桁行2.4m等間、梁間1.8m等間である。

SB16　桁行３間（7.2m）以上、梁間２間（4.8m）の南北棟建物。柱間寸法は桁行2.4m等間、梁間2.4m等間である。

SB17　桁行２間（4.5m）以上、梁間３間（4.5m）の東廂付南北棟建物。柱間寸法は桁行2.25m等間、梁間1.65m等間で廂の出は1.2mである。

SA18・SA19　両者とも南北３間（6.75m）以上の掘立柱塀。柱間寸法は2.25m等間でほぼ同位置にあり、作り替えられたものと考えられる。建物SB17と柱筋が揃うことから、SB17の目隠し塀と考えられる。

SK20　短径0.8m、長径1.1m以上、検出面からの深さ0.18mの平面長円形掘形の土坑。埋土は暗茶褐色砂質土一層のみで、埋土から奈良時代の須恵器、土師器、瓦類が出土した。

SA21　南北２間（3.6m）以上の掘立柱塀。柱間寸法は1.8m等間である。

SB22　桁行４間（7.8m）、梁間（4.5m）の北廂付東西棟建物。一部の柱掘形が破壊されているが、柱間寸法は桁行1.95m等間、梁間1.5m等間で廂の出も1.5mである。ただし西側は水田耕作によってより深く地山が削平されているため、西端では柱掘形が消失している可能性がある。したがって桁行は４間以上あった可能性も考えられる。

SB23　桁行２間（3.3m）以上、梁間２間（3.3m）の東西棟建物。柱間寸法は桁行1.65m等間、梁間1.65m等間である。

SB24　桁行２間（3.0m）以上、梁間２間（3.6m）の南北棟建物。柱間寸法は桁行1.5m等間、梁間は妻柱の柱掘形を後世の攪乱によって消失しているが、1.8m等間となろう。

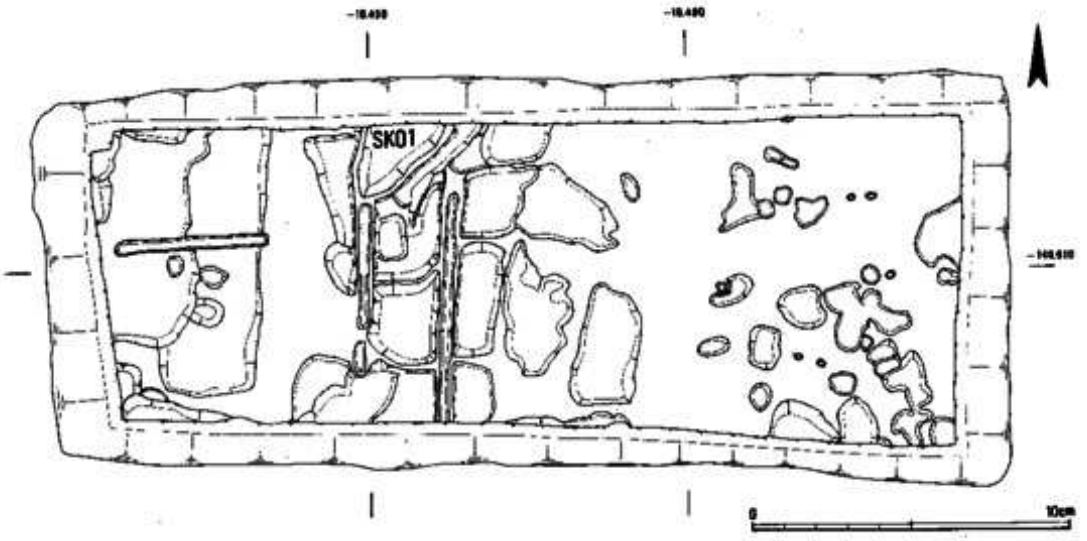
SB25　東西、南北とも２間以上と推定される建物で、南西隅の１間（2.4m）分ずつを確認した。

SD26　幅1.3m以上、検出面からの深さ0.45m前後の南北溝。東半部のみを検出し、西肩は発掘区外にある。第178次調査で検出した九・十六坪坪境小路東側溝の延長線上に位置することから、八・十五坪坪境小路の東側溝であると考えられる。最深部の座標値は次のとおりである。　X＝－146,733.000　　Y＝－16,587.260

以上の遺構のうち重複関係から、SB12→SB11、SB14→SB15→SB16、SB23→SB22の時期的な前後関係がわかる。

北発掘区

発掘区の基本層序は、厚さ1.0～1.2mの盛土以下、黒褐色土（旧耕土）が0.1～0.2m、暗茶褐色土が0.1～0.4m、黄灰色粘土（遺物包含層）が約0.2m、暗茶灰色砂土が約0.2m



第253次調査　北発掘区遺構平面図（1／250）

あり、発掘区の東半では黄灰褐色粗砂、西半では黄灰色粘土の地山に至る。地形は東から西に向って緩やかに下っている。遺構は暗茶灰色砂質土上面もしくは地山上面で検出した。検出した遺構は奈良時代の土坑1基及び粘土採掘坑群である。

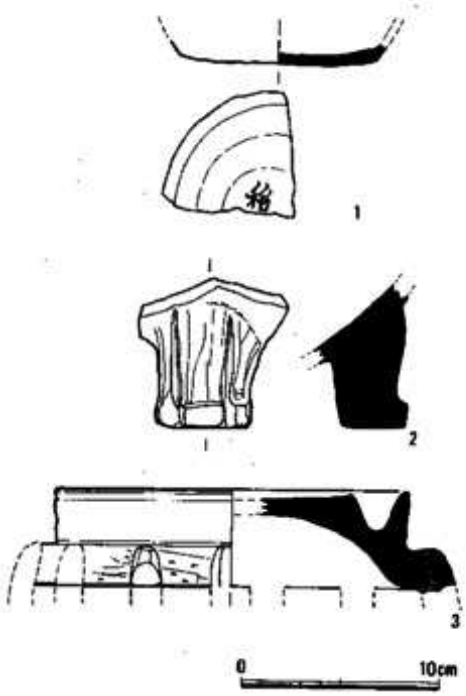
SK01　暗茶灰色砂質土上面で検出した短径1.5m以上、長径2.8m以上、深さ0.3mの平面長円形掘形の土坑。埋土は炭と灰が多量に混じる砂質土である。奈良時代末頃の土器が出土した。

粘土採掘坑群　西半に広がる土坑群は、掘形の大きさ、深さとも均一ではないが粘土層のみを掘りぬいていることから粘土採掘坑と考えられる。層位的に土坑SK01よりも古い時期のものである。同様な土坑群を本調査区南側で行なった第218次調査でも検出しており、同じく奈良時代のものと考えられる。埋土に含まれていた土器は平城宮土器編年のⅢに相当する。　（松浦五輪美）

Ⅲ　出土遺物

土器類　整理箱43箱分の土器類が出土した。大半が奈良時代のもので、その他、少量の瓦器、近世の陶磁器類がある。1は須恵器杯Aの底部である。復原径10.0cm。底部外面に「稲」の墨書がある。南発掘区の奈良時代遺物包含層から出土した。2は器種が特定できないが、須恵器壺あるいは盤に付く獣脚片である。残存高7.5cm、全体にヘラで面取りし、2条の切り込みで獣の足先を表現している。中央発掘区の粘土採掘坑から出土した。3は蹄脚円面硯の硯部である。復原径17.4cm、残存高5.0cm。海陸の区別は明瞭で、陸部と外堤部に墨が付着している。硯部の周囲に残る三箇所の痕跡から全体で11脚に復原できる。第3発掘区 溝SD26から出土した。　（秋山成人）

瓦　類　整理箱5箱分の瓦類が出土しており、そのうち軒瓦が6点ある。内訳は、軒丸瓦が6282種別不明2点、6314F 1点、軒平瓦が6667A 1点、6702A 1点、6734A 1点である。このうち6314Fは土坑SK20、6734Aは溝SD26から出土した。　（原田憲二郎）



出土土器類（1／4）

Ⅳ　まとめ

今回の調査及び昨年度の第234次調査によって平城京左京四条四坊十五坪の北西部四分の一での宅地利用状況がほぼ明らかになった。検出した建物群は、大きく二群に分けられる。

一群は、建物SB05～SB07の3棟である。各建物とも一部分しか検出できなかったため不明な点が多いが、同位置で2回の建替えが行なわれたことがわかる。

もう一群は、建物SB10を中心にとする建物群であり、少なくとも以下の三時期の変遷が認められる。

Ⅰ期：この時期に属する建物はSB04のみである。柱筋の方向が他の時期の建物と異なる。

Ⅱ期：この時期以降はSB10を中心とした建物配置である。まず、坪の西から三分の一の位置にある南北線上に桁行の中心を置いた建物SB10が建てられ、その北に建物SB03、南に建物SB12が、東妻柱筋を揃えて配される。さらに建物SB03の東には北側柱筋を揃えて建物SB02が配される。

Ⅲ期：中心建物は依然建物SB10であるが、建物SB12は建物SB11に建替えられる。建物SB10の東側に建物SB01・SB08・SB09がそれぞれの東側柱筋を揃えて南北に並んで配され、西側のほぼ対称の位置には建物SB13・SB14が配される。この後建物SB14は建物SB15に建替えられ、さらに建物SB15は建物SB16に建替えられる。

二つの建物群は、坪を東西に二分した場合、前者が東半、後者が西半の範囲にあることからそれぞれ別の宅地内にある建物群である可能性が考えられる。

またこの他の建物SB17・SB22～SB28についての時期的な前後関係は不明であるが、建物SB17は目隠し塀を隔てて建物SB10を中心とした一群のすぐ西に位置することから、この建物群に属する建物と思われる。　（松浦五輪美）

(2) 平城京左京四条五坊五・六坪の調査　第268次

Ⅰ　はじめに

ＪＲ奈良駅周辺地区土地区画整理事業の範囲のうち、ＪＲ関西本線と旧国道24号線に挟まれた一角では、これまでに第71次調査（面積25.5㎡）で小範囲の調査を行なったことがあるが、地表下1.5ｍまで軟弱な灰色粘土の堆積が続き、遺構は残存していなかった。

また、地区内数箇所に京内通有の条坊制にのった方格地割ではなく、弧状の地割があることと、仮製二万分の一地形図（旧大日本帝国陸地測量部明治18年測量）では駅東側一帯に池が記入されていることから、当該地の遺構の残存状況を把握する目的で試掘調査を実施した。発掘区は弧状の地割に囲まれる範囲で北、中、南の三箇所を設定した。

調査位置図（１／2,000）

Ⅱ　調査の概要

発掘区内の基本層序は、盛土以下、黒灰色粘土（旧耕作土）、茶灰色粘質土と続き、地表面下約1.3～1.6ｍで黄灰色粘土の地山にいたる。地山上面の標高は北発掘区で約64.9m、中・南発掘区では64.5ｍである。検出した遺構には、柱掘形、土坑がある。

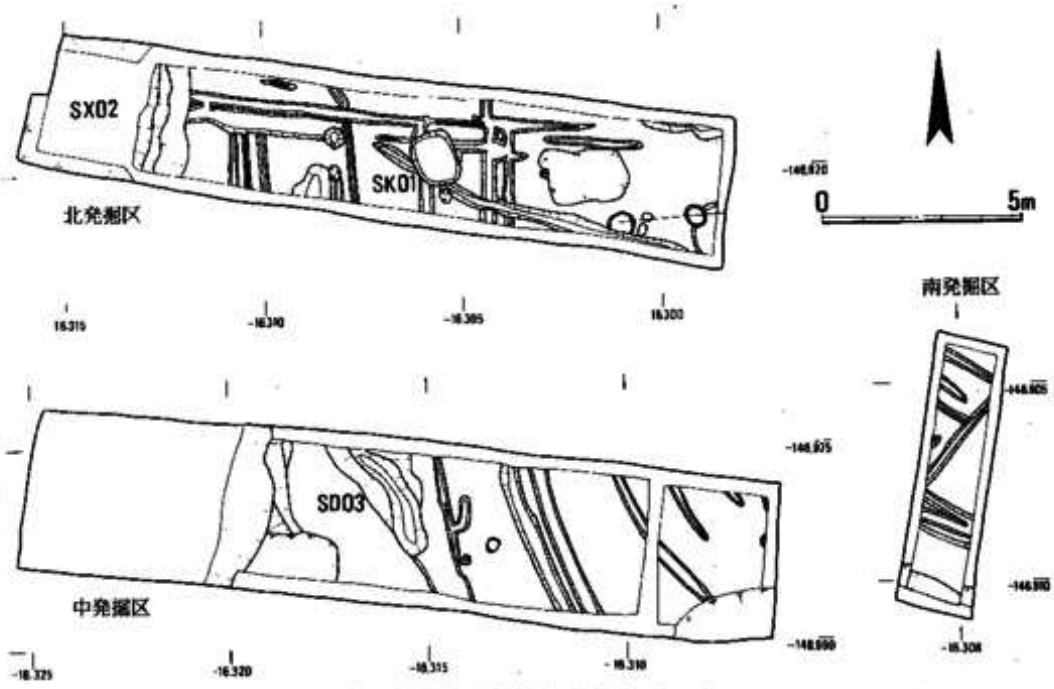
北発掘区南東隅で２個の柱掘形を検出した。掘形はいずれも平面円形で、径、深さともに0.3ｍ程度である。遺物が出土せず時期は不明。

SK01は北発掘区中央で検出した東西約1.2ｍ、南北1.4ｍ、深さ0.2ｍの平面長円形掘形の土坑である。遺物が出土せず時期は不明であるが、重複関係から耕作溝よりは新しい。

SX02は北発掘区西端で検出した窪地状の遺構である。幅2.8ｍ、深さ0.6ｍまでを検出し、西、南、北ともに発掘区外へと続く。埋土は二層に分かれ、上層が暗灰褐色粘質土、下層は灰褐色粘土である。池の一部である可能性が高い。

SD03は中発掘区中央で検出した南東から北西へ斜行する溝である。幅は約0.8～1.3ｍ、深さは約0.6ｍである。重複関係から後述の中発掘区西端と南発掘区南端で検出した流路SD04よりも古い。埋土から古墳時代後期前半の須恵器と奈良時代の土師器が出土した。

中発掘区西端と南発掘区南端で流路SD04を検出した。中発掘区では幅6.1ｍまで、南発



第268次調査　遺構平面図（1／200）

掘区では幅2.1mまでを検出し、それぞれ発掘区外へ続く。中発掘区での最深部は深さ2.3m。南東から北へ弧状に続く流路の一部にあたると考えられる。埋土は砂と礫が互層となっており、湧水が著しい。奈良時代の土師器・須恵器と瓦、中世の瓦器が出土した。

Ⅲ　まとめ

北、中発掘区の東半、南発掘区の北半では黄灰色粘土の上面で遺構を検出した。発掘区が小範囲であったので、柱掘形は建物としてはまとまらなかったが、当該地区内に遺構が残っていることが確認できた。

北発掘区で検出した窪地状の遺構SX02は、埋土の状態から池の一部であると思われるが、前述の仮製二万分の一地形図に記載されているＪＲ奈良駅東側にひろがる池とは、位置関係等からみて別のものと思われる。

中、南発掘区で検出した流路SD04は、同じ発掘区で検出した耕作溝が弧状の地割と並行していることから推測すると、南東から北へ弧を描いて菩提川につながる流路であった可能性がある。

これらの遺構や流路については、今回の調査では全容を確認するにはいたらなかった。今後、その範囲や規模のほか、時期についても確認する必要があると考える。さらに流路については、人為的に造られたものかどうか、周辺の調査を待って再検討したい。

（武田和哉）

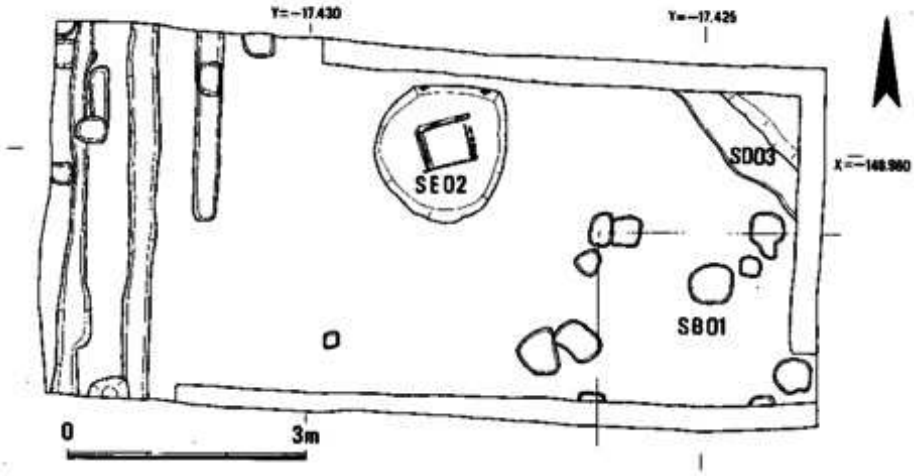
1）『奈良市埋蔵文化財調査報告書　昭和59年度』奈良市教育委員会　1985

10　平城京左京八条三坊三坪の調査　第254次

本調査は、奈良市西九条町４－６・９・10において、奥村忠司、奥村定子、奥村洋子氏届出による個人住宅建設に伴って実施した事前の発掘調査である。調査地は平城京の条坊復原では左京八条三坊三坪にあたる。左京八条三坊のうち、五・六・十一・十二坪には東市が推定されており、三坪はその西に隣接した市町の推定地である。平成２年度に本調査地の西南約10ｍの地点で実施した第202次調査では、弥生時代及び奈良時代の土坑、16世紀の溝を検出している。

今回の発掘区は東西10ｍ、南北5ｍ（面積50㎡）で、調査期間は平成４年６月１日から６月５日である。発掘区内の層序は暗黒灰色土（旧耕土）、茶褐色土（床土）、暗褐色粘質土、淡灰褐色砂質土と続き、地表下0.9ｍで淡黄灰色土の地山に至る。遺構は淡灰褐色砂質土上面で検出した。遺構面の標高は概ね55.1ｍである。

検出した遺構には掘立柱建物、井戸、小穴、溝がある。建物SB01は東西、南北とも１間分を検出した。発掘区外北、東へ続く。柱間寸法寸法は東西が2.1ｍ、南北が1.8ｍである。時期は不明である。井戸SE02は径1.7ｍの平面円形の掘形に内法一辺0.6ｍの方形の枠を据えたもの。枠は南・北面が横板、東・西面が縦板組である。隅柱はなく、東、西の縦板面にのみ横桟を当てる。南、北面の横板に枘穴をあけ、横桟の両端を挿入してささえる横造である。横桟は４～６㎝角で、長さ65～70㎝である。地山面下1.2ｍまでを検出したが、湧水が激しく、これ以上の調査を断念せざるを得なかった。枠内から奈良時代中頃から後半の時期の土師器・須恵器の他、製塩土器が出土した。　（池田裕英）



第254次調査　遺構平面図（１／100）

11　平城京右京三条三坊五坪の調査　第255次

本調査は奈良市宝来一丁目93－３において、阪口五十四氏届出の共同住宅建設工事に伴って実施した事前発掘調査である。調査地は、平城京の条坊復原では右京三条三坊五坪の南辺、三条大路にほど近い地点にあたる。調査面積は105㎡で、調査期間は平成４年６月15日から６月29日である。

発掘区内の基本層序は盛土（0.4m）以下、灰色砂質土（旧耕作土、0.2m）、茶褐色粘質土（床土、0.1m）、黄褐色砂質土（0.1m）と続き、現地表面下約0.8mで黄灰色粘質土の地山に達する。遺構はすべて地山上面で検出した。地山上面の標高は概ね74.3mである。

検出した遺構は、奈良時代の掘立柱建物４棟、掘立柱塀１条、土坑１基である。

SB01　桁行２間（5.4m）以上、梁間２間（5.2m）の東西棟建物で、発掘区外へ続く。柱間寸法は桁行が2.7m等間、梁間は2.6m等間。棟通りに、側柱よりもひとまわり小さく、浅い床束の柱掘形がある。重複関係から、建物SB02より古いことがわかる。

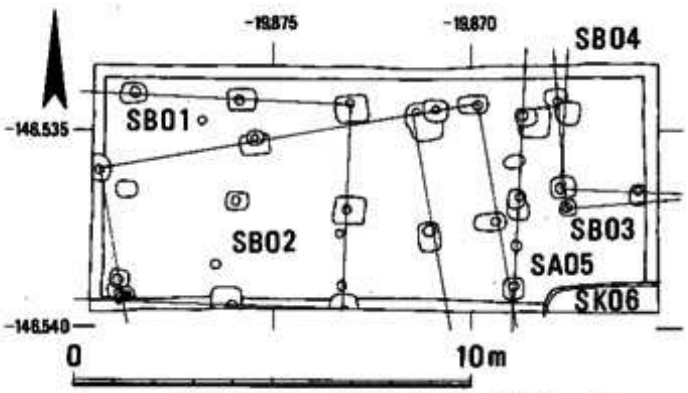
SB02　桁行２間以上、梁間２間（8.0m）の南北棟建物で、東面に廂が付く。柱間寸法は桁行が3.0m、梁間は4.0m等間で、廂の出は1.6mである。棟方向が北で西に大きく振れる。

SB03　南北２間以上の掘立柱列で、発掘区外へ続く。柱間は2.7mである。掘立柱建物の西側柱列、あるいは西妻柱列と考えられる。柱筋が建物SB02と同方位に振れており、同時期の建物と考えられる。重複関係から、建物SB04よりも古いことがわかる。

SB04　南北２間以上、東西２間以上の建物で、発掘区外へ続く。柱間寸法は2.1mである。位置からみて、建物SB03の建て替えかと思われる。

SA05　南北２間（4.2m）以上の塀で、発掘区外へ続く。柱間寸法は2.1m等間である。

SK06　東西2.8m以上、南北0.7m以上、深さ約1.6mの平面不整形掘形の土坑で、発掘区外へ続く。断面はほぼ垂直に掘り込まれており、底部は擂鉢状である。土坑内埋土は褐色砂質土で、埋土から奈良時代の土器が出土した。湧水が著しく井戸の可能性も考えられたが、井戸枠や井戸枠の抜取痕跡は認められない。（宮崎正裕）



第255次調査　遺構平面図（１／200）

12　平城京左京五条七坊六坪の調査　第258次

Ⅰ　はじめに

本調査は、奈良市井上町13－1、13－4において、仮称奈良国際交流センター建設に伴って実施した事前発掘調査である。調査地は、平城京の条坊復原では左京五条七坊六坪の南西隅にあたり、調査地の西側には、元興寺の南大門から南へのびる南北小路が推定される。また中世の門前郷、近世の奈良町と発展してきた所でもある。発掘区は面積330㎡で調査期間は平成4年7月1日から8月27日である。

Ⅱ　検出遺構

発掘区内は、厚さ0.3m前後の舗装を除去すると、すぐ明黄褐色砂礫の地山が現れる。地山の標高は発掘区の東端で84.7mで、東から西に向かい緩やかに下降している。遺構は地山上面で検出した。調査の結果、掘立柱建物、井戸、土坑、溝を検出した。これらは鎌倉時代から近代にかけての各時期のもので、大半が江戸時代以降のものである。以下、時代ごとに主要なものを記す。

鎌倉時代の遺構　掘立柱建物2棟・井戸3基・土坑を検出した。建物SB01は桁行3間以上、梁間2間（4.2m）の掘立柱東西棟建物である。側柱列の西隅以外の柱掘形には柱抜取痕跡がある。柱掘形の深さは最も深い北西隅で約0.4mである。重複関係から13世紀中頃の土坑SK06より古いことがわかり、時期はさらに遡る可能性がある。建物SB02は東西2間以上、南北は不明の建物で、北側柱列の一部を検出した。柱間寸法は2.1mで、柱掘形の深さは約0.1mである。重複関係から建物SB01より新しいことがわかる。井戸SE03は一辺2.0mの平面方形掘形の素掘りの井戸で、深さは4.5mである。底が擂鉢状に窪み曲物の破片が多く出土したことから、曲物を底に据えていたものと考えられる。井戸内から出土した多量の土器から、13世紀前半の時期と考えられる。また井戸内から古墳時代の石製合子1点と円筒埴輪片13点が出土した。両者とも古墳時代前期のもので、赤色顔料が付着しており、古墳に副葬・樹立されていたものと考えられ、周辺に前期古墳が存在していた可能性もある。井戸SE04は一辺1.2mの平面方形掘形の素掘りの井戸で、深さは2.4mである。井戸SE05は直径1.2mの平面円形掘形の素掘の井戸で、深さは3.6mである。いずれの井戸からも13世紀中頃の土器が出土した。土坑SK08は掘形が一辺1.7mの平面方形で、深さが2.6m以上あり井戸の可能性もある。地山の黄褐色土で一気に埋められている。土坑SK06・SK10・SK11は、平面方形または長方形の土坑で、いずれも13世紀中頃の土器が出土した。土坑SK06からはほぼ完形の土器が多量に出土した。土坑SK10は地山の黄褐色土で一気に埋められており、重複関係から土坑SK11より古いことがわかる。

室町時代の遺構　土坑数基がある。土坑SK12は東西約3.7m、南北4.5m以上の平面が不整形な長方形掘形の土坑で、深さは0.5mである。多量の14世紀の土器とともに、小型の鏡が出土した。土坑SK14は東西2.0m、南北0.6m以上の平面方形掘形の土坑で、深さは1.1mである。14世紀の土器が出土した。

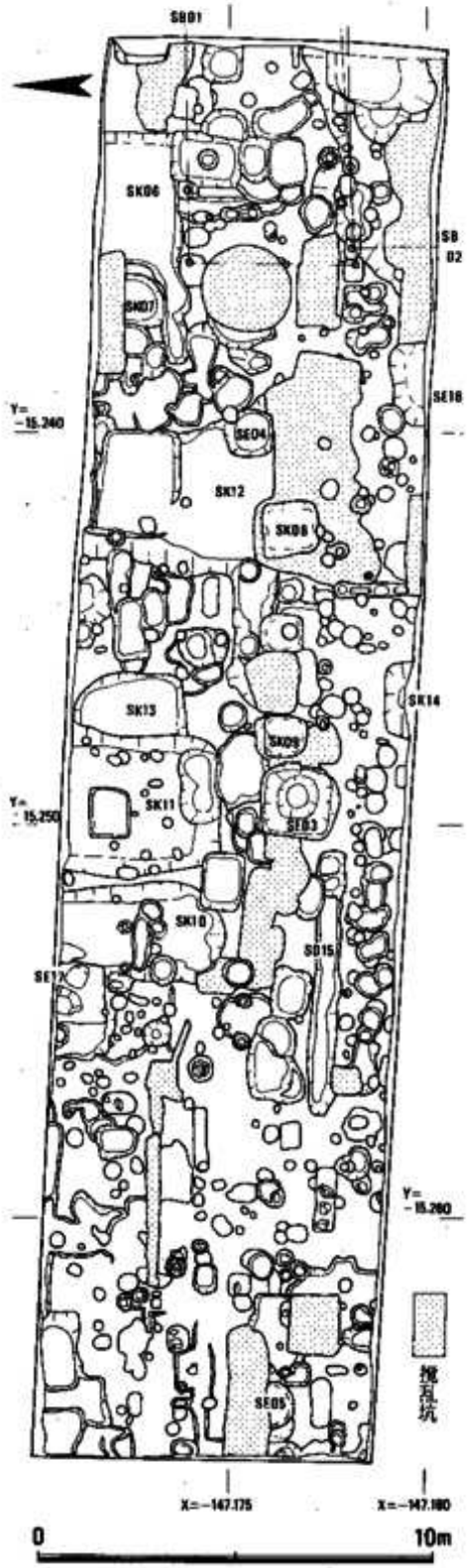
桃山・江戸時代の遺構　井戸2基、溝1条、土坑がある。溝SD15は幅0.7m、長さ6.7m、深さ0.3mの東西方向の溝で、16世紀中頃から後半の土器が出土した。井戸SE16は東西2.1m、南北0.8m以上の平面方形掘形の素掘りの井戸で、深さは約2.4mである。17世紀初頭の土器が出土した。井戸SE17は東西1.6m、南北1.2m以上の平面方形掘形の素掘りの井戸である。19世紀の陶磁器が出土した。

Ⅲ　出土遺物

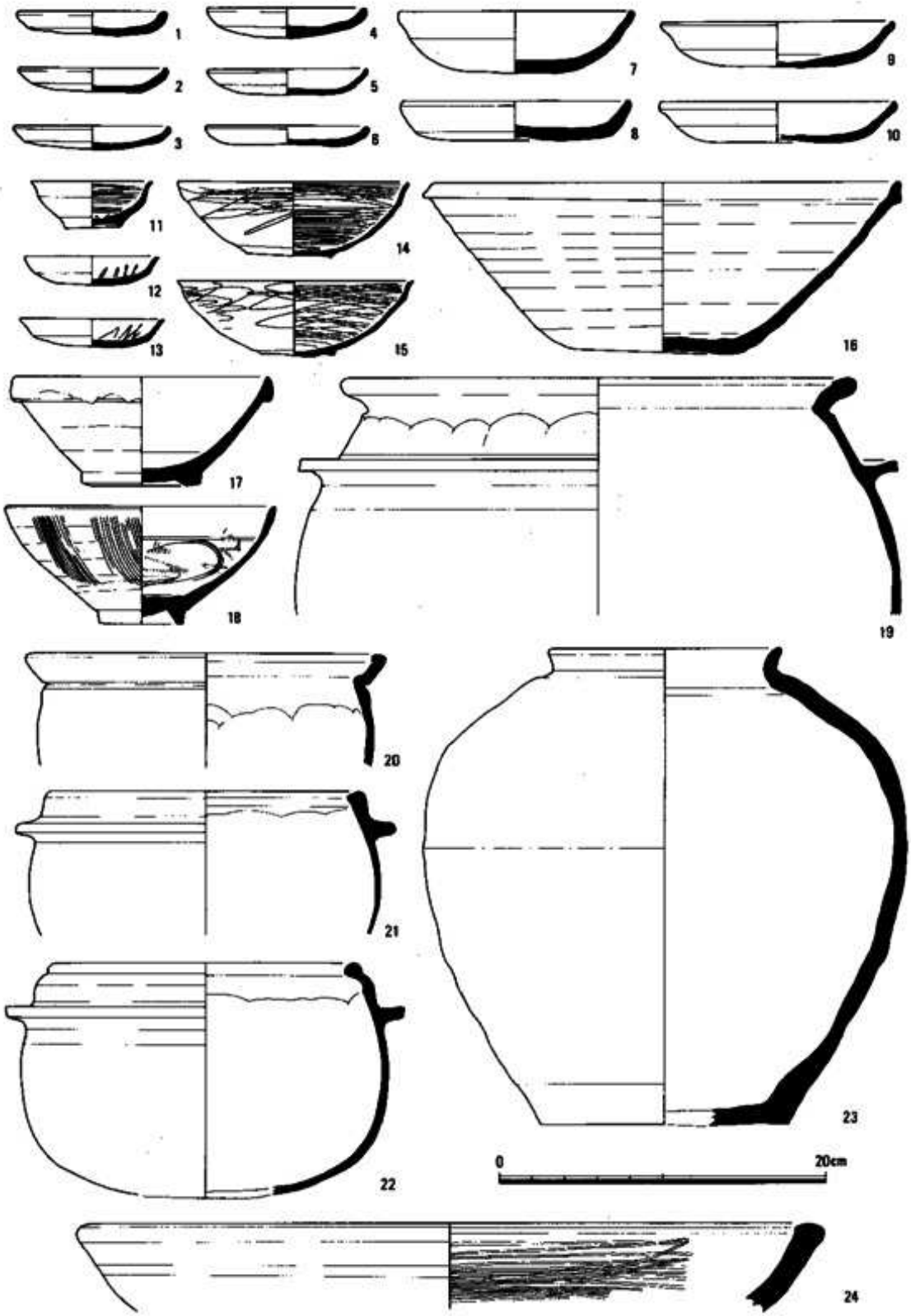
土器類　発掘区内から、古墳時代、奈良時代、鎌倉時代から近代まで各時期の土器が出土した。以下主要なものについて記す。

井戸SE03出土土器　土師器皿（1～10）・羽釜（19・21・21）・鍋（20）、瓦器椀（14・15）・小椀（11）・皿（12・13）・盤（24）、須恵器鉢（16）・壺（23）・甕、白磁椀（17）青磁椀（18）・皿が出土した。土師器皿の色調は赤褐色から茶灰色まで数種類あり変化に富む。土師器皿7はやや深手の大皿である。瓦器椀は見込み部に2～3回転の同心円暗文をもつものである。23は東海系の製品か。奈良Ⅱ－C期[12]にあたり13世紀前半のものと考えられる。

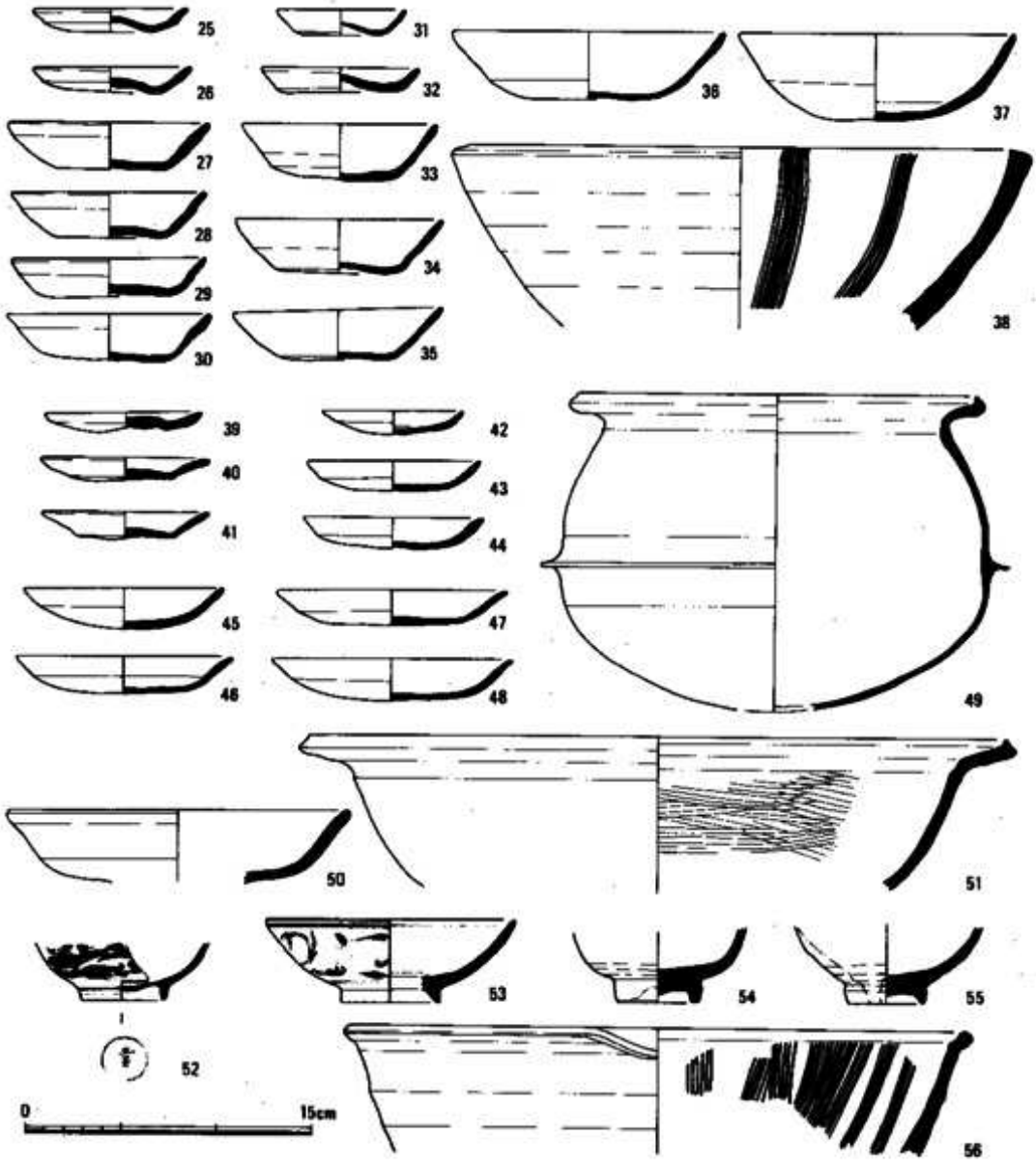
土坑SK12出土土器　土師器皿・羽釜、須恵器鉢・甕、国産陶器擂鉢・甕、瓦器鍋、瓦質土器擂鉢・浅鉢が出土した。土師器皿は、



第258次調査　遺構平面図（1／200）



井戸ＳＥ03出土土器　（1／4）

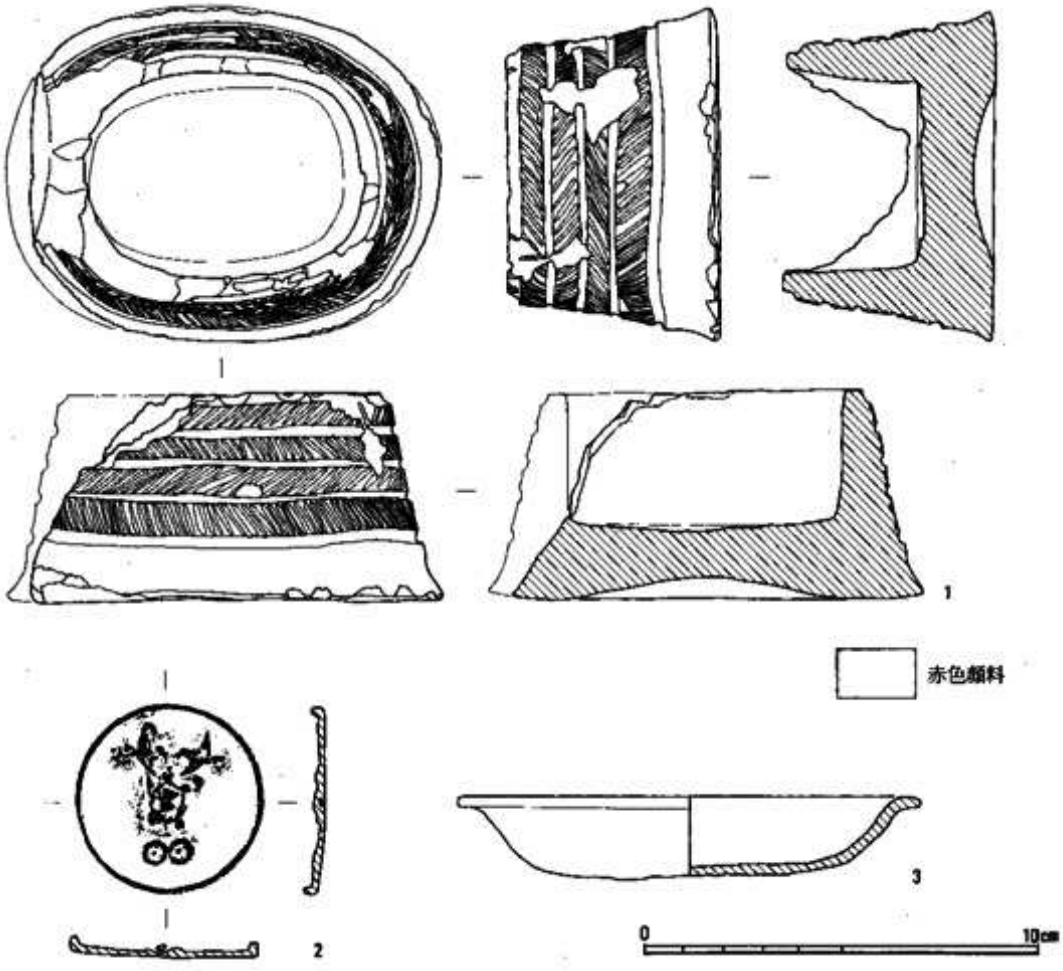


土坑ＳＫ12・井戸ＳＥ16出土土器（１／４）

色調で赤色系（25～30）と、白色系（31～37）とに分けることができる。38は備前焼の擂鉢である。奈良Ⅲ－B期[1]にあたり14世紀中頃から後半のものと考えられる。

井戸SE16出土土器　土師器皿（39～48・50）・羽釜（49）・鍋（51）、瓦質土器深鉢・浅鉢・擂鉢・壺・羽釜、青花碗（52・53）、陶器碗（54・55）・擂鉢（56）・甕が出土した。土師器皿にはへそ皿の形態を残すもの（39～41）と、精良な胎土で底が広く、外反する口縁のもの（42～48）とがある。52・53は輸入磁器、54・55は唐津焼、56は信楽焼で、他に瀬戸美濃焼の天目茶碗がある。奈良Ⅳ－C期[1]にあたり17世紀初頭のものと考えられる。　（中島和彦）

その他の出土遺物　ここでは主な遺物について記述する。



井戸ＳＥ03出土石製品・金属製品　（１／２）

石製合子（１）　緑色凝灰岩製の合子である。身のみが出土し、一部を欠損している。平面楕円形で、底部は裾が広がり、底面中央がわずかに窪む。口縁部の長径7.9cm、短径6.0cm、底部の長径10.4cm（残存値）、短径8.3cm、内口の長径7.1cm、短径5.0cm、高さ5.4cm、身の深さ3.4cmである。外面に４条の沈線を巡らせ、条間に綾杉文の線刻があり、底部外面の一部に赤色顔料が残る。古墳時代前期のものである。井戸SE03から出土した。

和鏡（２）　単圏がめぐる花鳥文背円鏡である。中央に亀を配し、上半に二羽の鳥が向かいあって飛んでいる様子を描き、下半には菊花を２つ横にならべている。鏡面は平らである。直径4.7cm、厚さ0.2cm、周縁の厚さ0.4cm、重さ24.2gである。土坑SK12から出土。

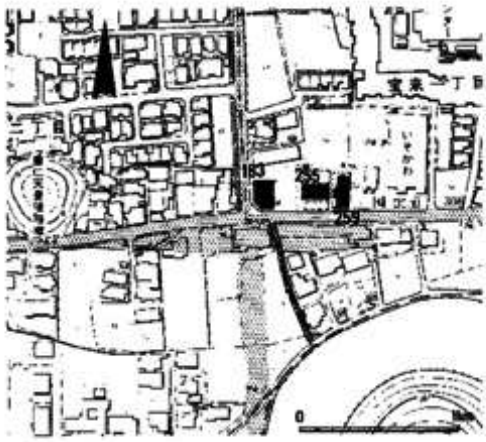
鉄製皿（３）　高台はなく、底部は平らで、口縁端部は外側に開く。口径11.7cm、器高2.1cm、器厚0.3cmである。銹化が著しく鋳造、鍛造の別は不明である。井戸SE03から出土した。

（久保邦江）

1）森上恵介・立石堅志「大和北部における中近世土器の様相－奈良市内出土資料を中心として－」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要1986』奈良市教育委員会　1987

13　平城京右京三条三坊十二坪の調査　第259次

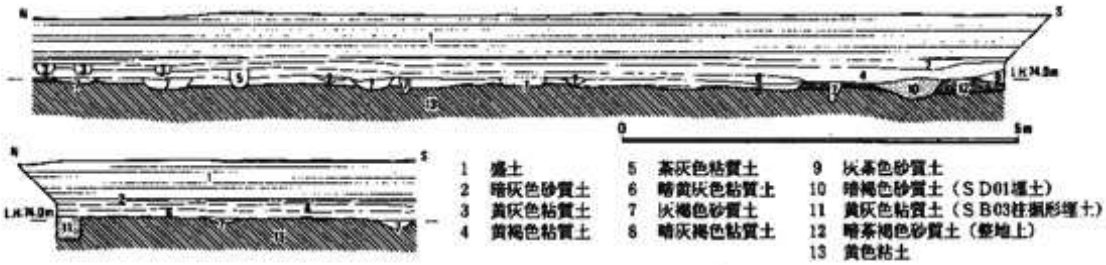
本調査は奈良市宝来一丁目97－1において実施した、奈良信用金庫届出の店舗ビル建築に伴う事前発掘調査である。当該地は平城京の条坊復原によると、右京三条三坊十二坪の南辺にあり、三条大路に面する。また、本調査地の西側隣接地では、平城京第183次調査[1]、第255次調査[2]を実施している。このうち第183次調査では三条大路北側溝想定位置を含めた発掘区を設定して調査を行なったが、三条大路想定位置で奈良時代末頃の井戸を検出し、大路は確認できなかった。これらの成果を踏まえて、宅地内の状況の把握とともに、三条大路及び十二坪の南を限る施設の確認を目的に発掘区を設定した。発掘区は、調査地の南端に、当初、東西6.5m、南北18m（面積117㎡）で設定したが、調査の進捗に応じ中央部を西に約13㎡拡張し、最終的に面積は130㎡となった。調査期間は平成4年7月1日から7月20日である。



調査位置図

発掘区内の層序は盛土、黒灰色粘質土（耕土）以下、暗灰色砂質土、黄褐色粘質土、暗黄灰色粘質土、暗灰褐色粘質土と続き、現地表下約0.9mで黄色粘土の地山に至る。遺構は、地山上面で検出したが、発掘区南端の一部は、奈良時代後半に暗茶褐色砂質土によって整地されており、整地層の上面で検出した遺構もある。検出した遺構には、溝1条、土坑5基、掘立柱建物2棟、柱掘形がある。

SD01　発掘区南端で検出した東西方向の素掘りの溝である。築地の雨落溝と考えられる。幅約0.4m、検出面からの深さ0.6m。埋土から、奈良時代の土器片が若干量出土した。この溝は、奈良時代後半の暗茶褐色砂質土による整地ののちに掘られている。



第259次調査　発掘区東壁土層図（1／100）

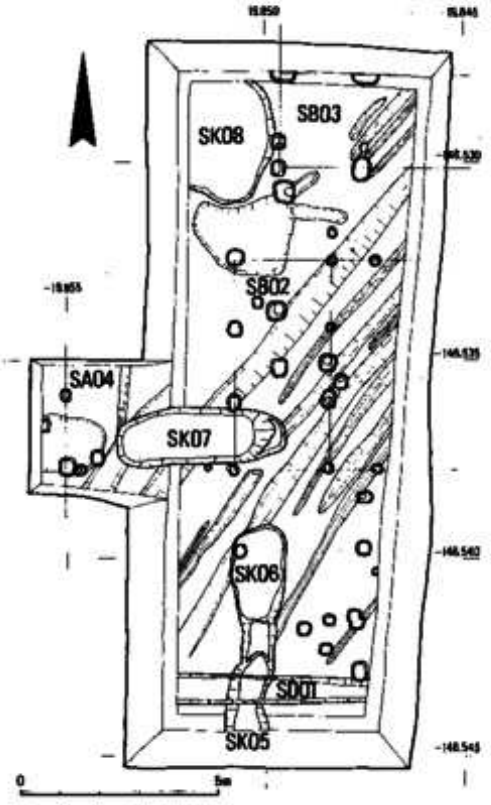
SB02　発掘区中央で検出した桁行３間（5.4m）、梁間１間以上の南北棟建物で、西に廂がつく。柱間寸法は、桁行1.8m等間、廂の出は、2.4mである。身舎部分が発掘区外にあるため、全体の規模は不明。

SB03　発掘区北端で検出した、桁行１間（2.1m）以上、梁間１間以上の掘立柱東西棟建物で、南に廂がつく。廂の出は2.4mである。

SA04　拡張部西端で検出した、柱間１間（1.8m）以上の南北方向の柱掘形列である。

SK05　発掘区南端で検出した平面隅丸長方形掘形の土坑である。東西1.0m、南北1.9m分を検出した。検出面からの深さ約0.4m。この土坑を埋めた後に、整地を行っている。

SK06　土坑SK05の北側で検出した東西1.3m、南北2.4mの平面隅丸長方形掘形の土坑である。検出面からの深さ約0.55m。SK05と同じく整地前の遺構である。



第259次調査　遺構平面図（1／200）

SK07　発掘区中央西寄りで検出した掘形の平面長円形で、断面舟底状を呈する土坑である。長径4.4m、短径1.5m、検出面からの深さ約0.6m。壁面が火を受けて焼きしまっている。土坑内には、黒色の炭が堆積した灰色粘土の床面が４面あり、坑内で焼成作業を行ったと考えられる。土坑内の各堆積土中から、奈良時代中頃の土器片が少量出土した。

SK08　発掘区西北隅で検出した平面不整形な土坑である。南北3.2m、東西2.0m、検出面からの深さ約0.1m。土坑内からは、奈良時代の土器片若干量が出土した。

以上の結果、三条大路の位置は確認できなかったが、溝SD01を検出したことから奈良時代後半には坪の南辺を限る施設が造られていたことが窺える。右京域における条坊遺構の施行状況には不明な点が多く、今回の調査でも三条大路の位置を確定することはできなかった。今後の調査例の増加に期待したい。また、土坑SK07については、鍛冶を行なう際の「舟形炉」と呼ばれる炉とすることも不可能ではないと考えるが、これも平城京内の鍛冶に関連する遺構の調査例が少なく、比較資料の増加を待ちたい。　（立石堅志）

1）「平城京右京三条三坊十二坪の調査　第183次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成元年度』奈良市教育委員会　1990
2）「平城京右京三条三坊十二坪の調査　第255次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成４年度』奈良市教育委員会　1993

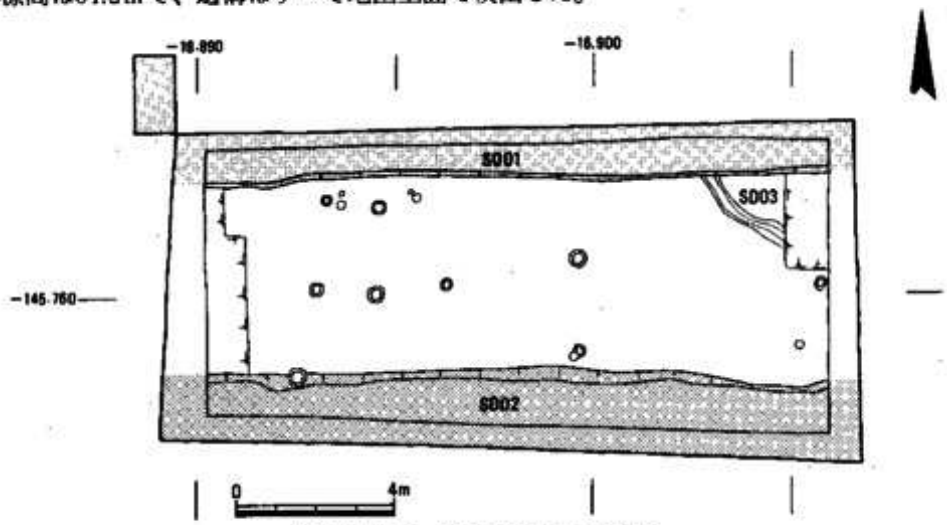
14　平城京左京二条四坊三坪の調査　第260次

Ⅰ　はじめに

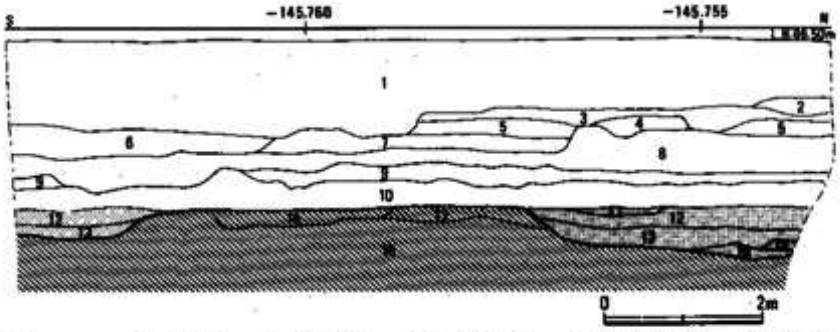
本調査は奈良市法蓮町157番地の６、173番地において、共立産業株式会社届出の事務所ビル建設に伴って実施した事前発掘調査である。調査地は平城京の条坊復原では、左京二条四坊三坪の北辺中央、二条条間路に面した地点にあたり、調査地北側の水田畦畔には二条条間路の地割がよく残っている。発掘区は東西16ｍ、南北7.7ｍ、面積12.5㎡で、調査期間は平成４年７月８日から８月12日である。

Ⅱ　検出遺構

発掘区内の層序は近年の盛土以下、黒色土（耕土）、黄褐色土（床土）、褐灰色土、灰色砂質土、灰褐色土、灰色粗砂、茶褐色砂質土、黄灰色粘土（地山）の順である。地山上面の標高は64.2ｍで、遺構はすべて地山上面で検出した。



第260次調査　遺構平面図（１／200）



1．造成土
2．黒色土（耕土）
3．黄褐色土（床上）
4．黄灰色土
5．褐灰色土
6．灰白色砂礫
7．灰白砂質土
8．灰褐色土
9．灰色粗砂
10．茶褐色砂質土
11．淡褐色砂質土
12．茶灰色粘質土
13．暗灰色粘質土
14．暗灰色砂
15．黒灰色粘土
16．暗褐色粘質土
17．灰色粘質土
18．黄灰色粘土

第260次調査　発掘区西壁土層図（１／100）

検出した遺構には溝が３条ある。

SD01　発掘区の北辺で検出した東西方向の溝、北肩が発掘区外にあるため幅員は不明だが、幅3.0m、深さ0.7mまで、長さ15m分を確認した。埋土は５層に分かれ、上から淡褐色砂質土、茶灰色粘質土、暗灰色粘質土、暗灰色砂、黒灰色粘土の順である。いずれの層からも奈良時代の土器、瓦が出土し、最下層の黒灰色粘土には植物遺体を含んでいた。全幅を確認していないので、溝心の位置は明らかでないが、本調査地の東約340mで実施している第180次調査からみて二条々間路の南側溝にあたると考えられる。

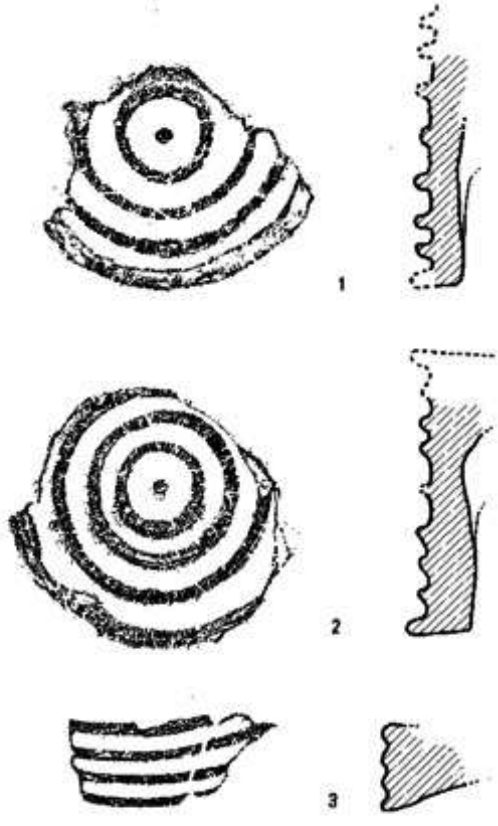
SD02　発掘区の南辺で検出した東西方向の溝。溝SD01の南4.7mの位置にある。南肩が発掘区外にあるため幅員は不明だが、幅2.0m、深さ0.35mまで、長さ15.7m分を確認した。埋土は上下２層に分かれ、上層は茶灰色粘質土、下層は暗灰色粘質土である。いずれからも奈良時代の土器、瓦が出土した。

SD03　発掘区の北東隅で検出した斜行する溝。幅0.45m、深さ0.45m、長さ2.5m分を確認した。溝の方向が国土方眼方位に対して北で西へ49°振れている。埋土は灰色砂質土である。遺物が出土せず時期は不明だが、重複関係から溝SD01よりも古いことがわかる。　（秋山成人）

Ⅲ　出土遺物

出土した遺物には遺物整理箱で18箱分の土器と瓦がある。土器は少量で大半が瓦である。

瓦　類　出土した瓦は、奈良時代のものが大半で、平安時代のものが若干ある。奈良時代の軒瓦の内訳は軒丸瓦6012新２点（１、２）と軒平瓦6661C１点、6572新１点（３）、6572種別不明１点である。



出土軒瓦（1／4）

	珠点		第1圏線		第1圏、第2圏線	第2圏線		第2圏、第3圏線	第3圏線		外縁、第3圏線	瓦当厚
	径	高さ	幅	高さ	間幅	幅	高さ	間幅	幅	高さ	間幅	
軒丸瓦6012新(1)	9.5	4.5	8.5	6.5	11	8.5	7.5	5.5	8	7.5	欠損のため不明	欠損のため不明
軒丸瓦6012新(2)	7.5	欠損のため不明	9.5	6	5.5	8	4	7.5	8	5	6.5	32

出土軒瓦計測値表（単位：mm）

1は溝SD01から出土。外縁が欠損している。いずれの圏線の断面もほぼ直立し、珠点の突出は圏線よりも若干低い。丸瓦部の取り付け位置は低い。2は遺物包含層から出土。珠点が欠損している。圏線の断面は波形であるが、圏線ごとに形状に差異がある。1、2はいずれも6012型式に分類できるが、種別はそれぞれ異なる。3は溝SD02から出土。両脇区が欠損している。4本の圏線のうち、中の2本にくらべて上縁の1本は若干太く、下縁の1本は若干細い。直線顎である。（宮崎正裕）

土器類　土器には、奈良時代の土師器壺B・甕A、須恵器杯B・杯B蓋・壺2・壺M・甕、蹄脚円面硯があるが、いずれも破片である。また遺物包含層から古墳時代の土師器高杯の杯部1点が出土した。（秋山成人）

15　平城京右京三条二坊一坪の調査　第261次

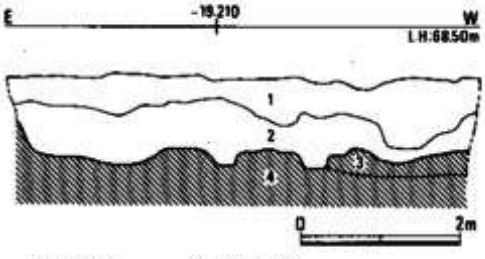
本調査は奈良市二条大路南五丁目404－1において、杉田信雄、杉田勝弘氏届出の個人住宅建設に伴って実施した発掘調査である。

調査地は平城京の条坊復原では、右京三条二坊一坪の南東の一画にあたり、現状は秋篠川東岸の自然堤防上に位置している。発掘区は東西15m、南北5m、面積75㎡で調査期間は平成4年8月18日から8月26日である。

発掘区の層序は上層から黒褐色土（0.5m）、淡茶褐色砂質土（0.5m）、黄白色細砂（0.3m）、黄白色粗砂（0.9m）、淡灰色粗砂（1.1m）、灰白色粗砂（0.45m）の順で、以下、青灰色粘土が地表下4.15mまでつづく。

今回の調査では、黄白色細砂以下、灰白色粗砂までは河道内の堆積かと思われ、発掘区が、秋篠川の旧河道か、氾濫原に位置していることがわかった。砂層から遺物が出土していないので旧河道内の堆積の時期は不明であるが、淡茶褐色砂質土から18世紀前半の伊万里染付椀が出土したことから、この時期には埋っていたものと思われる。（秋山成人）

第261次調査　発掘区位置図（1／5,000）



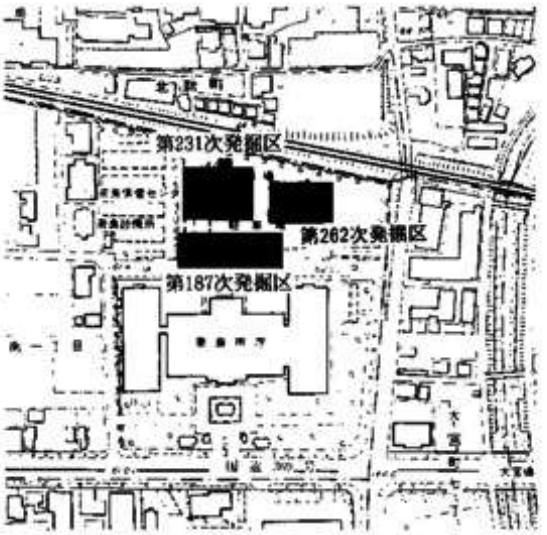
1．黒褐色土　3．黄白色細砂
2．淡茶褐色砂質土　4．黄白色粗砂

第261次調査　調査区南壁土層図（1／100）

16　平城京左京三条二坊十六坪の調査　第262次

Ⅰ　はじめに

本調査は、奈良市二条大路南一丁目1－1で実施した、奈良市庁舎立体駐車場第2期工事に伴う事前の発掘調査である。調査地は、平城京の条坊復原では左京三条二坊十六坪の南東部分に位置している。発掘面積は1000㎡、調査期間は平成4年8月24日から12月22日である。同坪内ではこれまでに2次の発掘調査を実施し、今回が3次目の調査である。平成元年度の第187次調査は、今回の発掘区の南西にある市庁舎北棟の建設に伴う調査で、十五・十六坪坪境小路と同小路北側溝、同小路に開く門2棟などを検出した。平成3年度の第231次調査は、今回の発掘区の西側にある立体駐車場の第1期建設工事に伴う調査で、南北に並ぶ掘立柱東西棟建物2棟と、それらに付属する掘立柱建物群、土器埋納土坑などを検出した。



発掘調査位置図（1／5,000）

Ⅱ　検出遺構

発掘区内の層序は、上から、盛土（1.2～1.7m）、淡灰色砂（0.5m）、灰色粘土（0.6m）の順で、さらに地山である灰色粘土（0.2m）、暗灰色粘土（0.1m）、暗灰色粘質土（0.3m以上）と続く。盛土は旧三笠中学校と奈良市庁舎の建設時のものである。淡灰色砂は江戸時代の佐保川の氾濫によるもので、2回の氾濫の堆積に分けられる。灰色粘土は室町時代の水田耕土で、水田面が4面確認できるほか、畦畔状の高まりもある。地山上面の標高は59.7～59.9mで、遺構はすべて地山の上面で検出した。

検出した遺構は、奈良時代の掘立柱建物4棟、掘立柱塀1条、溝1条、鎌倉時代の粘土採掘坑約250基である。なお、遺構番号は3次にわたるの発掘調査の通し番号であるが、鎌倉時代の粘土採掘坑には遺構番号は付けていない。

SB72　発掘区東半で検出した、桁行5間以上、梁間2間（6.0m）の掘立柱東西棟建物である。柱間寸法は桁行が2.7m等間、梁間は3.0m等間である。発掘区外へ続くため、全体の規模は不明である。

SB73　発掘区南半で検出した、桁行5間（13.5m）、梁間2間（6.0m）の掘立柱東西棟

建物である。柱間寸法は桁行が2.7m等間、梁間は3.0等間である。

SA74　発掘区中央で検出した、柱間6間以上の掘立柱南北塀である。柱間寸法は南から4間目までは2.1mで、5間目は1.8mである。

SB75　発掘区西端で検出した、桁行3間以上、梁間2間（4.4m）の東廂付掘立柱東西棟建物である。柱間寸法は桁行が2.4m以上、梁間は2.2m等間、廂の出は1.8mである。粘土採掘坑や現代の攪乱坑で、北へ続く柱掘形が破壊された可能性もあり、東廂付掘立柱東西棟建物であった可能性も残る。

SB76　発掘区南西隅で検出した、桁行4間以上、梁間1間以上の掘立柱東西棟建物の北側柱列と考えられるものである。柱間寸法は桁行が2.4m等間である。柱間4間以上の掘立柱東西塀の可能性もある。

SD77　発掘区南西で検出した、長さ6.4m以上、幅0.5～1.6m、深さ0.6～0.5mの南北方向の素掘りの溝である。重複関係から建物SB73より古く、SB76より新しいことがわかる。

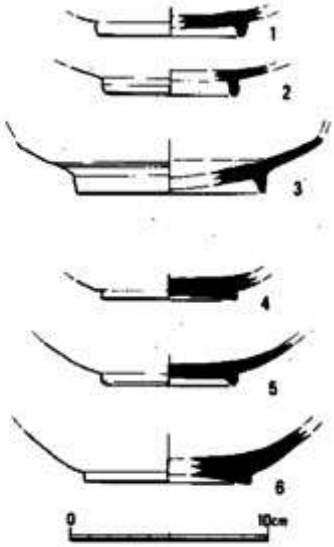
粘土採掘坑　径0.4～3.1m、深さ0.1～1.1mの平面不整形掘形の土坑である。径1.4m前後、深さ0.3m前後のものが多い。採掘坑が重複し、正確な数は不明である。主として地山の灰色粘土を、一部は下層の暗灰色粘土まで採掘し、土器あるいは瓦製作の原料としたものと考えられる。奈良時代から鎌倉時代の土器類が混在して出土した。また、これらのひとつから車形木製品が出土した。

Ⅲ　出土遺物

土器類　古墳時代および奈良時代の土師器・須恵器、平安時代の灰釉陶器・緑釉陶器・黒色土器、鎌倉時代の土師器・瓦器などが、遺物整理箱で4箱分出土した。大半が粘土採掘坑からの出土である。ここでは、平安時代の灰釉陶器、緑釉陶器について記す。

灰釉陶器（1～3）　いずれも淡緑色を呈している。口縁部内面には、刷毛で釉薬を塗布している。3の底部内面には重ね焼きの痕跡がある。これらは東海地方産と考えられる。すべて粘土採掘坑から出土した。

緑釉陶器（4～6）　いずれも暗緑色を呈している。4は蛇の目高台で、底部外面はロクロナデで仕上げるが、わずかに糸切り痕を残している。5・6は削り出し高台であるが、5は貼り付け高台の形に削り出している。6の底部内面には重ね焼きの痕跡がある。これらは京都産と考えられるが、5は産地が異なる可能性もある。すべて粘土採掘坑から出土した。



出土土器（1／4）

木製品　車形木製品がある。粘土採掘坑の一つから、車の木製ミニチュアが、上下逆転した状態で出土した。轅・前板・枠板・床板・床板留・軸木・前輪で構成され、長さ40.3㎝、20.9㎝、高さ9.7㎝であるが、後輪と、後輪の脱落を防ぐ楔を失っていた。

轅（1・2）　長さ40.3㎝、前から約26.8㎝の箇所に段があり、幅は段より前部が1.2㎝、後部は2.2㎝、厚さ0.8㎝。前部に軸木の枘を挿入する円形の小孔が1個、後部に床板留の枘を挿入する方形の小孔が3個ある。また、前部の孔の約2.0㎝後方上辺に小さな刳り込みが、床板を装着する箇所の上辺に広くて浅い刳り込みが、後端に枠板と組み合わせるための相欠きの仕口がある。段の前に前板の、相欠き部に枠板のあたりがある。

前板（3）　長さ13.3㎝、幅1.6㎝、厚さ0.8㎝。上面には樹皮を剥いだままの面が残っており、整形も他の部材と比較すると粗い。下面両端に轅のあたりがある。

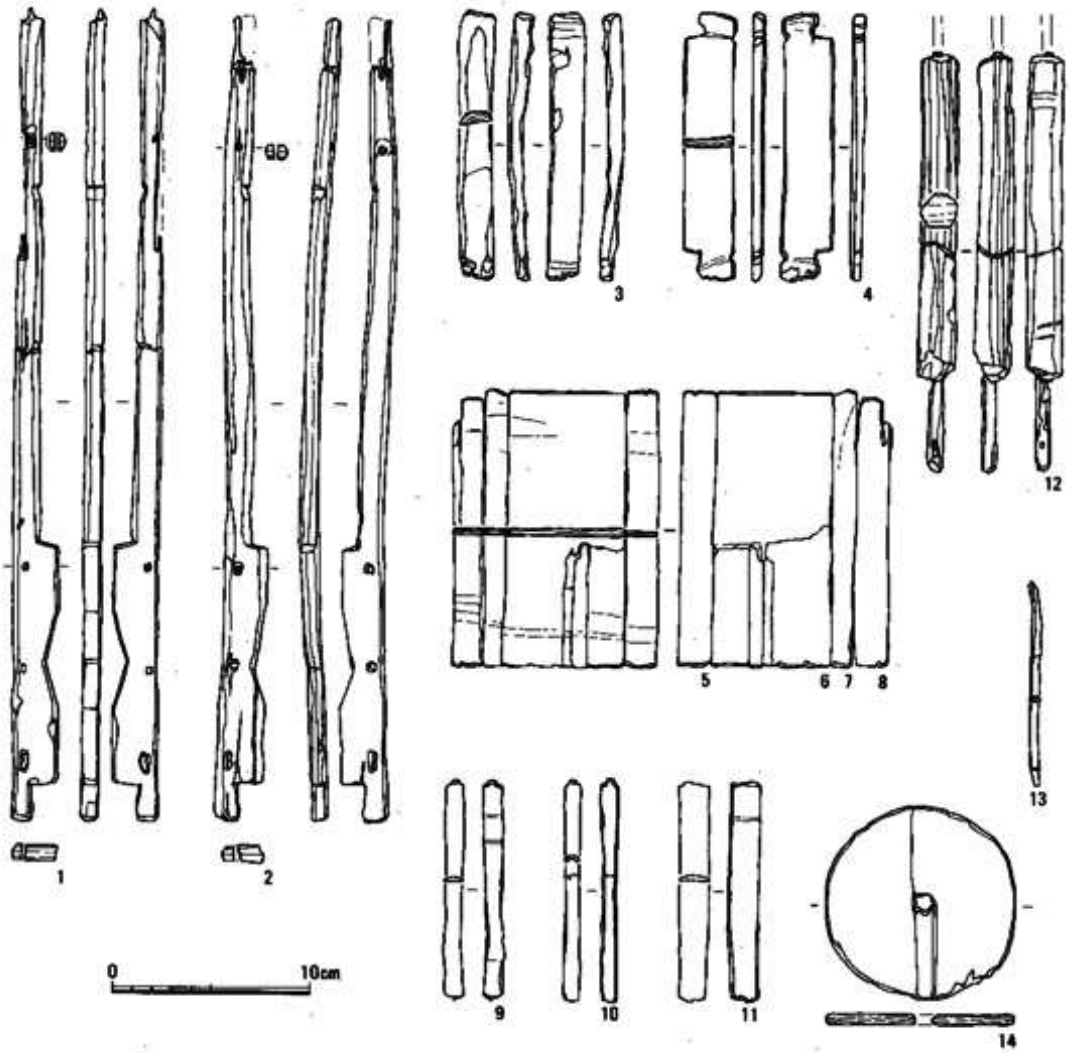
枠板（4）　長さ13.3㎝、幅2.4㎝、厚さ0.6㎝。両端に轅と組み合わせるための相欠きの仕口と、その上辺に小さな刻み目がある。相欠き部に轅のあたりがあり、紐の残欠が付着していることから、縛って固定していたと考えられる。

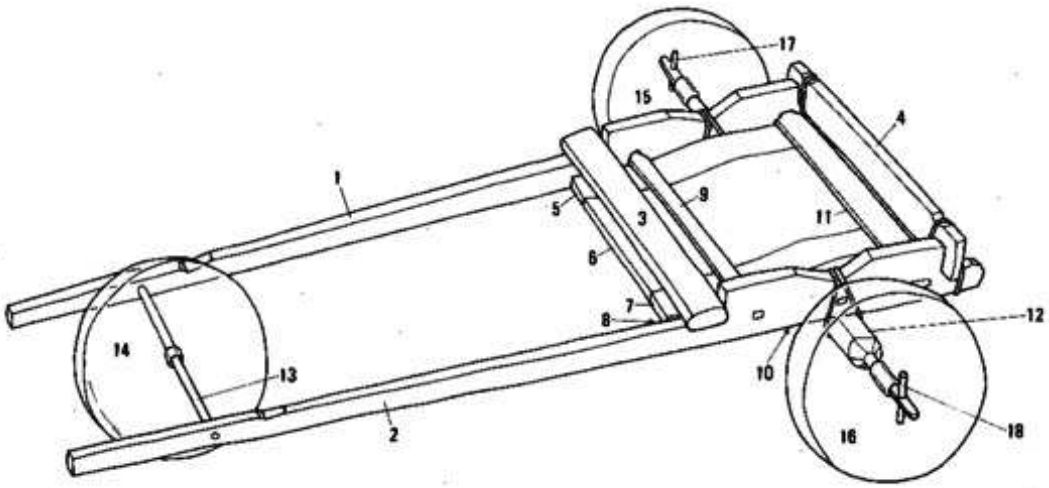
床板（5～8）　長さ13.3～13.8㎝、幅1.0～1.6㎝、厚さ0.2～0.4㎝の板を3枚、長さ13.5㎝、幅5.9㎝、厚さ0.3㎝の板を1枚、計4枚を横に並べ、長さ13.8㎝、幅10.2㎝の大きさになる。前、後端を上から、中央は下から、床板留で押さえ付けて固定しており、それぞれの部分に床板留のあたりがある。

床板留（9～11）　長さ10.9～11.1㎝、幅0.8～1.5㎝、厚さ0.2～0.3㎝であるが、轅の孔に挿入する枘をすべて欠損しているため、復原長は13㎝前後になると考えられる。これら3点のみ細い木の樹皮を使用している。

軸木（12・13）　12は後輪の軸木で、長さ20.9㎝、太さは軸木本体が1.8㎝、後輪装着部は0.7㎝。後輪装着部は一方が欠けており、復原長は24㎝前後になると思われる。先端に後輪の脱落を防ぐ楔を差し込む小孔がある。棒状の材で、先端の整形と、後輪装着部は丁寧に丸く削り出すが、それ以外はほとんど割り裂いた面のままである。軸木本体の両端に轅のあたりがある。後輪装着部の、小孔より内側の長さは3.0㎝あり、前輪と同じ厚さの後輪を通していたとみるには長すぎ、後輪はもう少し厚かったことが推定できる。13は前輪の軸木で、長さ10.2㎝、断面形は長径0.5㎝、短径0.3㎝の楕円形で、これを通す前輪の孔径よりかなり細い。両端から0.8㎝を細く削り、轅の小孔に差し込む枘にする。細い棒状の材で、枘以外の部分は割り裂いた面のままである。

前輪（14）　長径9.7㎝、短径9.4㎝とわずかに楕円形である。幅0.5㎝。中心の軸木を通す孔は直径0.8㎝で、軸木の太さよりかなり大きい。板目の板材を削り出しており、外周端面は丁寧に整形している。孔は刀子で穿たれたと考えられ、端部は整っていない。片面の外縁のすぐ内側に木取りの際の罫書線が残っている。





1・2 轅　3 前板　4 枠板　5～8 床板　9～11 床板留　12・13 軸木　14 前輪　15・16 後輪　17・18 楔
（15～18は推定復原）

車形木製品部材（1／4）・推定復原図

Ⅳ まとめ

今回の調査で坪の南東部にも比較的大きな建物が存在していたことが判明し、計3次の調査で坪内の様相がある程度解明できた。異なる発掘区で検出した遺構の時期的な関係が明らかではなく、全体の遺構の変遷には不明な点もあるが、これまでの調査成果[1]も考慮し、十六坪内の遺構には四時期以上の変遷があることがわかる。坪の南西部の大型中心建物SB33・SB34あるいはSB37が存続する時期には、塀・溝で構成される東、西の区画と、区画の南辺で十五・十六坪坪境小路に開く門SB06・SB19も存続していたと思われる。

遺構配置概念図

車形木製品は車のミニチュアであるが、いくつかの特徴がある。まず、三輪という点である。当時の車は二輪が一般的で、実際の車を忠実に縮小すれば本例も二輪になるべきである。本例では前輪の軸受孔が軸木の径よりかなり大きく、前輪は不安定な状態であることも考慮すると、車体の安定を保つため、便宜的に前輪を付加した構造であると考えられる。また、轅は本来棒状だが、本例では後部が横枠を兼ねた構造になっている。荷車を模倣して作られたにもかかわらず、横枠を轅と別に取り付けるには小さすぎるため、一体で作られたものと思われる。

文献には「車」を「祓所」で使用したことを記す例[2]や、「河臨御禊」で使用したことを記す例[3]がある。本例を祭祀に使用したという確証はないが、ミニチュアであること、実際の車とは構造に若干の違いがあること、調査地の東には佐保川が流れていることから、祭祀に使用した可能性は高く、その後粘土採掘坑に捨てられたと思われる。なお、本例は車形木製品としたが、車輪のみの出土例は他に数例[4]あり、今後の類例の増加によっては「車形」とすべきものになるかと思われる。

（関野　豊　二好美穂）

1）『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成元年度』　奈良市教育委員会　1990
　『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成3年度』　奈良市教育委員会　1992
2）「賀茂忠行道傳子保憲語第十五」『日本古典文學体系25　今昔物語集四』　岩波書店　1962
3）「親信卿記」天慶三年十二月十日　『大日本史料第一編之十四』　東京大学史料編纂所　1965
4）「仏具他」『木器集成図録』近畿古代篇　奈良国立文化財研究所　1985

平城京左京三条二坊十六坪から出土した土器に残存する脂肪の分析

帯広畜産大学生物資源化学科　中野益男
㈱ズコーシャ総合科学研究所　中野寛子　明瀬雅子　長田正宏

動植物を構成している主要な生体成分にタンパク質、糖質（炭水化物）および脂質（脂肪・油脂）がある。これらの生体成分は環境の変化に対して不安定で、圧力、水分などの物理的作用を受けて崩壊してゆくだけでなく、土の中に住んでいる微生物による生物的作用によっても分解してゆく。これまで生体成分を構成している有機質が完全な状態で遺存するのは、地下水位の高い低地遺跡、泥炭遺跡、貝塚などごく限られた場所にすぎないと考えられてきた。

最近、ドイツ新石器時代後期にバター脂肪が存在していたこと[1]、古代遺跡から出土した約2千年前のトウモロコシ種子[2]、約5千年前のハーゼルナッツ種子[3]に残存する脂肪の脂肪酸は安定した状態に保持されていることがわかった。このように脂肪は微量ながら比較的安定した状態で千年・万年という長い年月を経過しても変化しないで遺存することが判明した[4]。

脂質は有機溶媒に溶けて、水に溶けない成分を指している。脂質はさらに構造的な違いによって誘導脂質、単純脂質および複合脂質に大別される。これらの脂質を構成している主要なクラス（種）が脂肪酸であり、その種類、含量ともに脂質中では最も多い。脂肪酸には炭素の鎖がまっすぐに延びた飽和型と鎖の途中に二重結合をもつ不飽和型がある。動物は炭素数の多い飽和型の脂肪酸、植物は不飽和型の脂肪酸を多く持つというように、動植物の種ごとに固有の脂肪酸を持っている。ステロールについても、動物性のものはコレステロール、植物性のものはシトステロール、微生物はエルゴステロールというように動植物に固有の特徴がある。従って出土遺物の脂質の種類およびそれらを構成している脂肪酸組成と現生動植物のそれとを比較することによって、目に見える形では遺存しない原始古代の動植物を判定することが可能である。

このような出土遺物に残存する脂肪を分析する方法を「残存脂肪分析法」という。この「残存脂肪分析法」を用いて、平城京左京三条二坊十六坪から出土した土器の性格を解明しようとした。

Ⅰ　土壌試料　平城京左京三条二坊十六坪で検出した土坑SX38は土器埋納土坑で、坑内には須恵器の杯蓋をした土師器の甕が埋納されていた。土壌試料はこの土坑SX38内の甕内外から採取した。試料採取点を図1に示す。試料No.1は甕内の第2層、試料No.2は甕内の第3層、試料No.3は甕内の第4層、試料No.4は甕外の甕底面下の土坑内からそれぞれ採取した。

図1　土坑ＳＸ38内での土壌試料採取地点

Ⅱ　残存脂肪の抽出　土壌試料235～398gに3倍量のクロロホルム－メタノール（2：1）混液を加え、超音波浴槽中で30分間処理し残存脂肪を抽出した。処理液を濾過後、残渣に再度クロロホルム－メタノー

ル混液を加え、再び30分間超音波処理をする。この操作をさらに2回繰り返して残存脂肪を抽出した。得られた全抽出溶媒に1％塩化バリウムを全抽出溶媒の4分の1容量を加え、クロロホルムと水層に分配し、下層のクロロホルム層を濃縮して残存脂肪を分離した。

残存脂肪の抽出量を表1に示す。抽出率は0.0235～0.0761％、平均0.0506％であった。この値は出土土器を胞衣壺と判定した平城京左京（外京）五条五坊十坪から出土した胞衣壺内土壌試料の平均抽出率0.0199％[5]にやや近く、古墳時代の胞衣壺と判定した平城京右京二条三坊一坪の土師器試料の0.0039％[6]、出土土器を胞衣壺と判定した岡山県津寺遺跡の土器および土壌試料の0.0028％[7]、出土土器を胞衣壺もしくは骨壷と判定した宮城県郷楽遺跡の土器試料の0.0013％、土器内土壌試料の0.0062％[8]出土土器を胞衣壺と判定した平城京右京二条二坊十五坪の土壌試料の0.0007％[9]よりははるかに高いものであった。

残存脂肪をケイ酸薄層クロマトグラフィーで分析した結果、脂肪は単純脂質から構成され、遊離脂肪酸が最も多く、次いでグリセロールと脂肪酸の結合したトリアシルグリセロール（トリグリセリド）、ステロールエステル、ステロールの順に多く、微量の長鎖炭化水素も存在していた。

試料No.	試料名	湿重量(g)	全脂質(mg)	抽出率(%)
1	SX38土器内第2層	397.5	302.6	0.0761
2	〃　第3層	336.7	216.9	0.0644
3	〃　第4層	234.5	89.8	0.0383
4	SX38土坑内埋土	355.4	83.4	0.0235

表1　土壌試料の残存脂肪抽出量

試料No.	コレステロール(%)	シトステロール(%)	コレステロール／シトステロール
1	2.22	6.31	0.35
2	1.62	4.60	0.35
3	1.56	3.75	0.42
4	1.93	3.57	0.54

表2　試料中に分布するコレステロールとシトステロールの割合

Ⅲ　残存脂肪の脂肪酸組成　分離した残存脂肪に5％メタノール性塩酸を加え、125℃封管中で2時間分解し、メタノール分解によって生成した脂肪酸メチルエステルをクロロホルムで分離し、ヘキサン－エチルエーテル－酢酸（80：30：1）またはヘキサン－エーテル（85：15）を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで精製後、ガスクロマトグラフィーで分析した。

残存脂肪の脂肪酸組成を図2に示す。残存脂肪から11種類の脂肪酸を検出した。このうちパルミチン酸（C16:0）、ステアリン酸（C18:0）、オレイン酸（C18:1）、リノール酸（C18:2）、アラキジン酸（C20:0）、ベヘン酸（C22:0）、リグノセリン酸（C24:0）、ネルボン酸（C24:1）の8種類の脂肪酸をガスクロマトグラフィー－質量分析により同定した。

各試料中での炭素数18までの中級脂肪酸の分布割合について見てみると、いずれの試料中でも主要な脂肪酸はパルミチン酸で試料No.1で約34％、試料No.2およびNo.3で約53％、試料No.4で約

69%分布していた。次いで多いのはステアリン酸で約10～17%分布していた。一般に考古遺物にはパルミチン酸が多く含まれている。これは長い年月の間にオレイン酸、リノール酸といった不飽和脂肪酸の一部が酸化されてパルミチン酸を生成するためで、主として植物遺体の土壌化に伴う腐植物から来ていると推定される。通常の遺跡検出遺構や遺物中にはオレイン酸もパルミチン酸と並んで多く含まれている場合が多いが、今回の試料中ではオレイン酸の含量は低かった。

一方、高等動物、特に高等動物の臓器、脳、神経組織、血液、胎盤に特徴的にみられるアラキジン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸などの高級脂肪酸はそれら3つの合計で試料No.1では約54%、試料No.2では約28%、試料No.3では約35%、甕外の試料No.4では約12%分布していた。通常の遺跡出土土壌中の高級脂肪酸の含有量は4～10%であるから、試料4を除き甕内のすべての試料中での高級脂肪酸含量は大変高いものであった。このように甕内と甕外では高級脂肪酸の分布に大きな差が見られた。このことは試料中に動物の一般的な体脂肪、骨油等の脂肪ではなく、臓器、血液、胎盤等の特殊な部分の脂肪が含まれていることを示唆している。

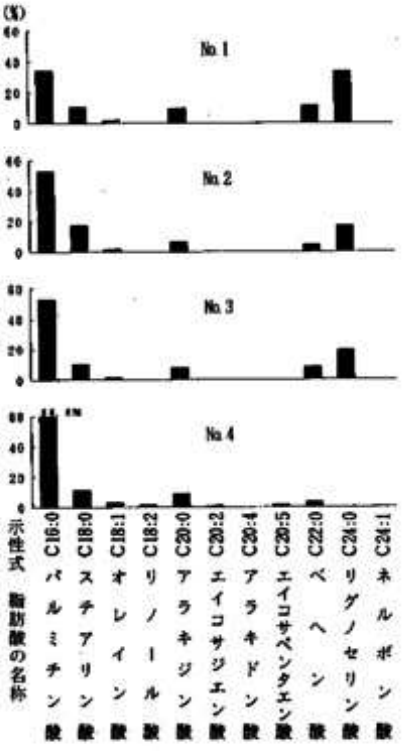


図2　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成

Ⅳ　残存脂肪のステロール組成　残存脂肪のステロールをヘキサン－エチルエーテル－酢酸(80:30:1)を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで分離・精製後、ピリジン－無水酢酸(1:1)を窒素気流下で反応させてアセテート誘導体にしてからガスクロマトグラフィーにより分析した。残存脂肪の主なステロール組成を図3に示す。残存脂肪から12～14種類のステロールを検出した。このうちコレステロール、エルゴステロール、カンペステロール、スチグマステロール、シトステロールなど7種類のステロールをガスクロマトグラフィー－質量分析により同定した。　各試料中のステロール組成をみると、動物由来のコレステロールはすべての試料中で約2%分布していた。通常一般的な植物腐植土中にはコレステロールは4～8%含まれているので、試料中でのコレステロール含量は一般植物腐植土の域を出ていなかった。これまでに平城京から出土した土器で胞衣壺と判定されたものの中には、コレステロールが約40～80%も含まれているものがある。植物由来のシトステロールはすべての試料中で約4～6%分布していた。通常の遺跡出土土壌中にはシトステロールは30～40%、もしくはそれ以上に分布している。クリ、クルミ等の堅果植物由来のカンペステロール、スチグマステロールはすべての試料中でカンペステロールが約1～4%、スチグマステロールが約5～7%分布していた。通常の遺跡出土土壌中に

はカンペステロール、スチグマステロールは約1～10%分布している。従って、試料中での植物性ステロールは通常の遺跡出土土壌中での含量よりも少ないくらいであった。微生物由来のエルゴステロールは全く検出されなかった。

一般に動物遺体の存在を示唆するコレステロールとシトステロールの分布比の指標値は土壌で0.6以上、土器・石器・石製品で0.8～23.5をとる。土壌試料のコレステロールとシトステロールの分布比を表2に示す。表からわかるように、すべての試料中で分布比は0.6以下であった。このことは試料中に動物遺体が存在しなかったことを示唆している。

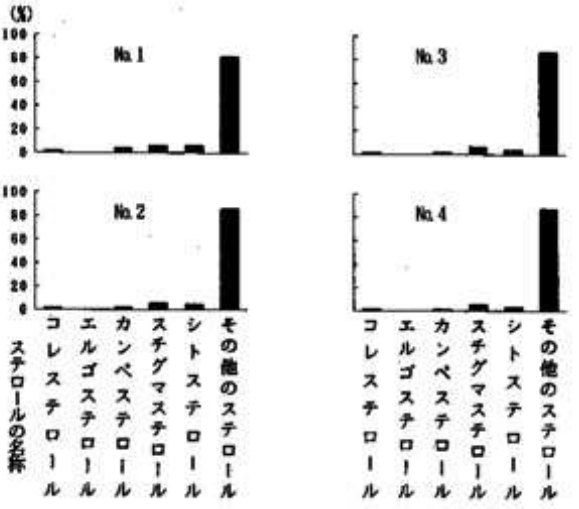


図3　試料中に残存する脂肪のステロール組成

以上のことから、試料中には動物性、植物性の特徴的なステロールがあまり含まれておらず、また甕の内外で差異がないこともわかった。これは先の動物性高級脂肪酸含量に甕内外で差がある結果とは一致しなかった。

V　脂肪酸組成の数理解析　残存脂肪酸の脂肪酸組成をパターン化し、重回帰分析により各試料間の相関係数を求め、この相関係数を基礎にしつクラスター分析を行って各試料間の類似度を調べた。同時に平城京左京（外京）五条五坊十坪から出土した胞衣壺試料、平城京右京三条三坊一坪から出土した土器試料、平城京右京三条二坊十五坪から出土した胞衣壺試料、津寺遺跡から出土した胞衣壺試料および人間の胎盤試料に残存する脂肪酸の類似度とも比較した。

各試料間の脂肪酸組成の類似度をパターン間距離にして表した樹状構造図を図4に示す。図か

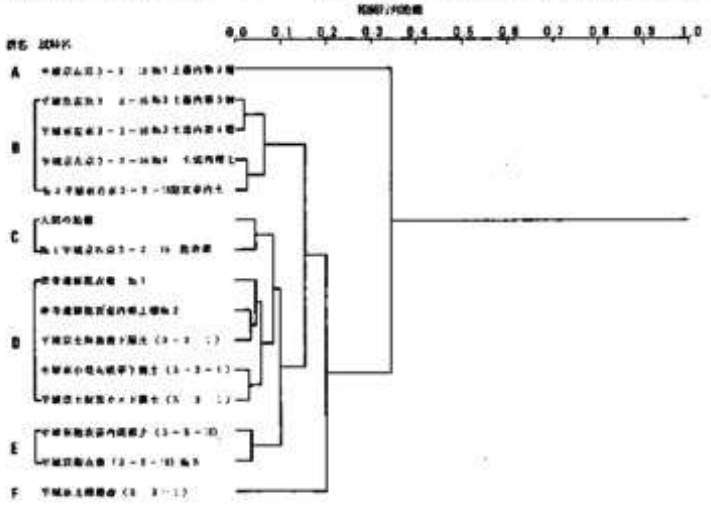


図4　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

らわかるように、試料No.1は単独でA群を形成した。試料No.2～No.4は対照試料である平城京右京三条二坊十五坪の試料と共に相関行列距離0.1以内でB群を形成した。他の対照試料はC～F群を形成した。このうちC～E群を形成した人間の胎盤や胞衣壺試料は相関行列距離0.1以内でよく類似していた。今回の平城京左京三条二坊十六坪の試料No.2～No.4が形成したB群はC～E群の胞衣壺試料と相関行列距離で0.15以内にあり類似しているが、C～E群とは若干性質を異にしているといえる。平城京左京三条二坊十六坪の試料No.1のA群はB～F群4試料とは相関行列距離で0.3以上離れており、類似していなかった。

以上のことから、平城京右京三条二坊十六坪の甕内試料No.2、No.3と甕外試料No.4は他の胞衣壺と判定した試料と類似してはいるが、若干性質を異にすることがわかった。試料No.1が全く別の性質を示したのは、おそらく甕内外の各試料と比較して試料No.1では高級脂肪酸含量が54%と特に高いことが影響していると推測される。

Ⅵ　脂肪酸組成による種特異性相関　残存脂肪の脂肪酸組成から種を特定するために、中級脂肪酸（炭素数16のパルミチン酸から炭素数18のステアリン酸、オレイン酸、リノール酸まで）と高級脂肪酸（炭素数20のアラキジン酸以上）との比をX軸に、飽和脂肪酸と不飽和脂肪酸との比をY軸にとり種特異性相関を求めた。この比例配分により第1象限の原点から離れた位置に高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等に由来する脂肪、第1象限から第2象限の原点から離れた位置にヒト胎盤、第2象限の原点から離れた位置に高等動物の体脂肪、骨油に由来する脂肪がそれぞれ分布する。第2象限から第3象限にかけての原点付近に植物と微生物、原点から離れた位置に植物腐植、第3象限から第4象限に移る原点から離れた位置に海産動物が分布する。

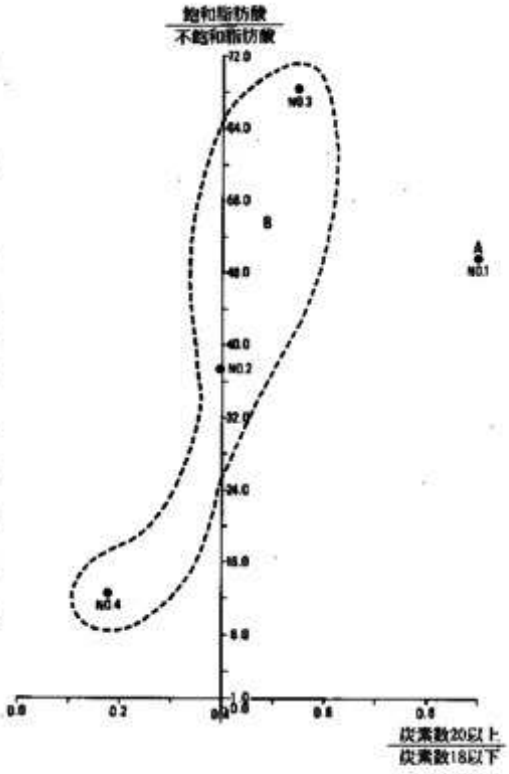


図5　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相図

試料の残存脂肪から求めた相関図を図5に示す。図からわかるように、試料No.1とNo.3は第1象限内の原点から非常に離れた位置に分布した。試料No.2は第1象限から第2象限にかけてのY軸上で原点から非常に離れた位置に分布していた。試料No.4は第2象限内の原点からかなり離れた位置に分布していた。これらの試料は通常の試料よりもY軸上で非常に広範囲に分布しているが、試料No.1が単独でA群を形成した。試料No.2、No.3、No.4は広範囲でB群を形成した。

以上のことから、試料中には高等動物に臓器、胎盤、体脂肪等の構成分全般に由来する脂肪酸

が残存していたといえる

Ⅶ　総　括　平城京左京三条二坊十六坪から出土した土器の性格を判定するために、土器埋納土坑の土師器甕内外の土壌試料の残存脂肪分析を行った。残存する脂肪酸分析の結果、試料中にはパルミチン酸が多く分布していることがわかった。また高級脂肪酸は甕外の試料№4を除き、大変多く分布していた。

脂肪酸組成の分布に基づく数理解析の結果、甕内試料№2、№3と甕外試料№4は胞衣壺と判定した試料と類似してはいるが、若干性質が異なることがわかった。試料№1はこれらの試料とは類似していなかったが、高級脂肪酸のリグノセリン酸が特に多いことから臓器に由来する遺体が埋納されていた可能性が高い。

残存するステロール分析の結果、試料中には動物性、植物性の両方のステロールがあまり含まれておらず、コレステロールとシトステロールの分布比も動物遺体の存在を示唆するものではなかった、またステロール分析では甕内外の試料に差異がなかった。

以上の成績を総合すると、土器埋納土坑SX38から出土した土師器甕は脂肪酸とステロールの結果は一致しなかったが、胞衣に多く分布する高級脂肪酸のリグノセリン酸が甕内から多く見つかることから、胞衣壺と推定される。

1）R.C.A.Rottländer and H.Schlichtherle「Food identification of samples from archaeological sites」『Archaeo.Physika.』10巻　1979　pp260

2）D.A.Priestley,W.C.Galinat and A.C.Leopold「Preservation of polyunsaturated fatty acid in ancient Anasazi maize seed」『Nature』292巻　1981　pp146

3）R.C.A.Rottländer and H.Schlichtherle「Analyse frühgeschichtlicher Gefässinhalte」,『Naturwissenschaften』70巻　pp33

4）中野益男「残存脂肪分析の現状」『歴史公論』　第10巻（6）1984　pp124

5）中野益男　中岡利泰　福島道広　中野寛子　長田正宏「平城京左京（外京）五条五坊十坪から出土した胞衣壺の残存脂肪について」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書昭和63年度』1989　pp 5

6）中野益男　長田正宏　中野寛子　福島道広「平城京右京三条三坊　坪から出土した古墳時代前期の土師器に残存する脂質について」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成元年度』1990　pp79

7）中野寛子　明瀬雅子　長田正宏　中野益男　福島道広「津寺遺跡から出土した土器に残存する脂肪の分析」『未発表』　岡山県古代吉備文化財センター

8）中野益男　福島道広　中野寛子　長田正宏「郷楽遺跡から出土した埋設土器に残存する脂肪の分析」『未発表』　宮城県教育委員会

9）中野益男　中野寛子　明瀬雅子「平城京右京三条二坊十五坪から出土した土器に残存する脂肪の分析」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成3年度』　1992　pp38

10）M.Nakano and W.Fischer「The Glycolipids of Lactobacillus casei DSM 20021」,『Hoppe－Seylers Z.Physiol.Chem.』　358巻　1977　pp1439

11）中野益男　伊賀　啓　根岸　孝　安本教博　畑　宏明　矢吹俊男　佐原　真　田中　琢「古代遺跡に残存する脂質の分析」『脂質生化学研究』　第26巻　1984　pp40

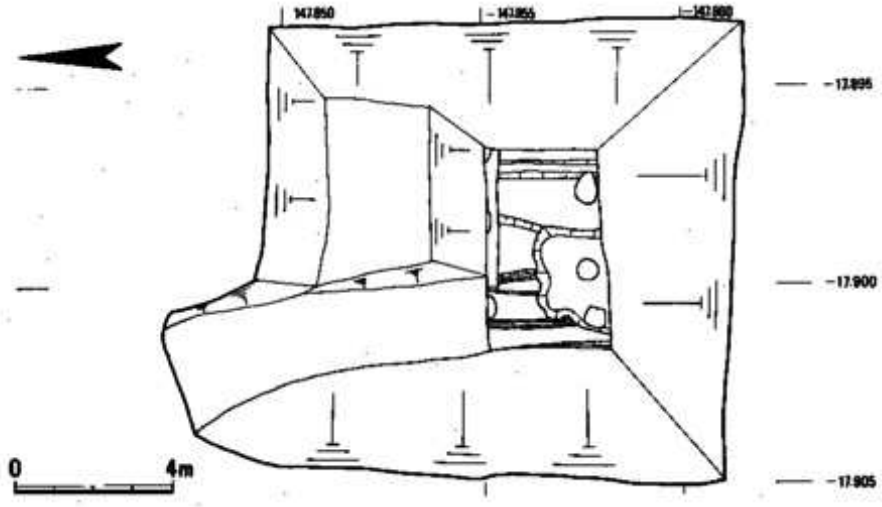
12）中野益男「真脇遺跡出土土器に残存する動物油脂」　『真脇遺跡－農村基盤総合設備事業能都東地区真脇工区に係わる発掘調査報告書』　能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団　1986　pp401

13）中野益男　根岸　孝　長田正宏　福島道広　中野寛子「ヘロカルウス遺跡の石器製品に残存する脂肪の分析」『ヘロカウルス遺跡』　北海道文化財研究所調査報告書第3集　1987　pp191

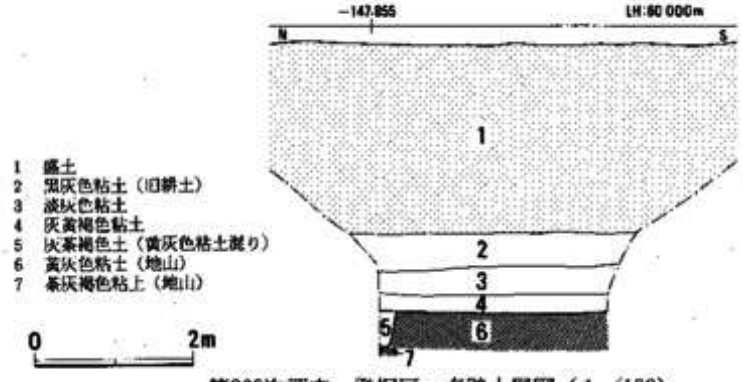
17　平城京左京六条二坊九坪の調査　第263次

本調査は、奈良市大安寺西二丁目288－1における、奈良市土木管理センター事務所改築工事に伴う事前の発掘調査である。調査地は平城京の条坊復原では、左京六条二坊九坪の西辺ほぼ中央にあたり、東二坊坊間路にほど近い場所である。南北11.6m、東西12m、面積139㎡の発掘区を設定したが、遺構検出面まで3.4mと深く、実際に遺構検出作業をしえたのは15㎡である。調査期間は平成4年9月7日から9月18日である。

発掘区内の層序は、厚さ2.4mの盛土以下、黒灰色粘土（旧耕土）、淡灰色粘土、黄灰褐色粘土と続き、現地表下3.4mで黄灰色粘土の地山に達する。検出した遺構は、奈良時代の柱掘形6個と中世の小溝である。柱掘形は建物としてはまとまらなかった。遺物は奈良時代と中世の土器が少量出土した。なお、黄灰褐色粘土下層の茶灰褐色粘土層上面まで一部掘り下げ、下層遺構の存否を追求したが、遺構、遺物ともなかった。　（久保清子）



第263次　調査遺構平面図（1／200）



第263次調査　発掘区　東壁土層図（1／100）

18　平城京左京二条五坊八坪　第264次

Ⅰ　はじめに

本調査は、奈良市法蓮町280番地の１において、奈良市立佐保小学校給食室改築工事に伴って実施した事前発掘調査である。調査地は平城京の条坊復原では、左京二条五坊八坪の北東隅にあたる。発掘区は東西6.2m、南北16.2m、面積約100㎡で、調査期間は平成４年９月８日から10月２日である。

Ⅱ　検出遺構

発掘区内の層序は近年の盛土（0.8m）以下、黒色土（0.2m）、暗赤褐色土（0.05m）、灰褐色土（0.1m）、茶褐色土（0.3m）と続き地表下約1.5mで、黄灰色粘質土の地山に達する。地山上面の標高は71.1mである。遺構はすべて地山上面で検出した。

検出した遺構は弥生時代の自然流路、古墳時代、奈良時代のものである。

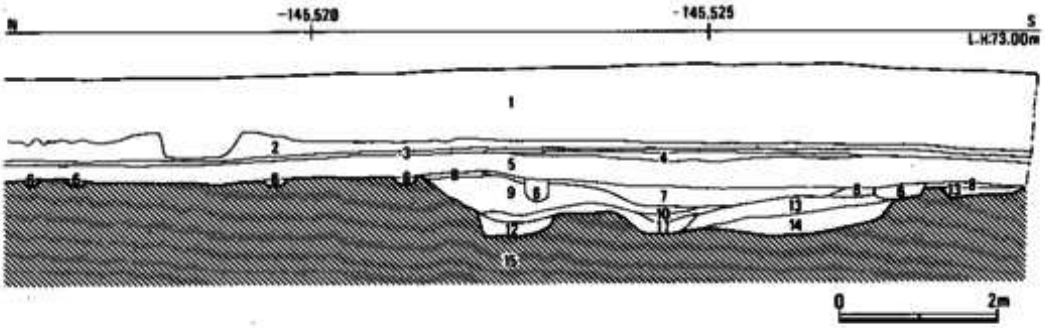
自然流路　発掘区の中央南寄りで検出した東西方向の流路。幅3.5m、深さ0.8m、長さ5.9mまでを検出した。埋土は上層から暗灰色砂質土、灰色砂、褐灰色砂質土、暗灰色細砂、淡黄灰色粘質土、暗灰色粘土の順で、暗灰色細砂から弥生時代後期末の器台が出土した。

古墳時代のものには、掘立柱塀、掘立柱建物２棟、溝４条がある。

SA01　発掘区の東辺北寄りで検出した掘立柱塀。桁行４間（2.7m）以上、柱筋が北で西へ40°振れる。

SB02　発掘区の東辺北寄りで検出した掘立柱建物。桁行３間（2.1m）以上、梁間２間以上、棟方向が北で西へ45°振れる。柱間寸法は0.7m等間。柱掘形から少量の古墳時代の土師器が出土した。重複関係からSD07より古いことがわかる。

SB03　建物SB02の西側で検出した掘立柱建物。桁行３間（2.25m）以上、梁間２間以



1　盛土　2　黒色土（旧耕土）　3　暗赤褐色土（床土）　4　灰褐色土　5　茶褐色土　6　灰色土　7　褐灰色土（整地土）　8　淡灰色砂　9　暗灰色砂質土　10　灰色砂　11　褐灰色砂質土　12　暗灰色細砂　13　淡黄灰色粘質土　14　暗灰色粘土　15　黄灰色粘質土（地山）

第264次調査　発掘区東壁土層図（１／100）

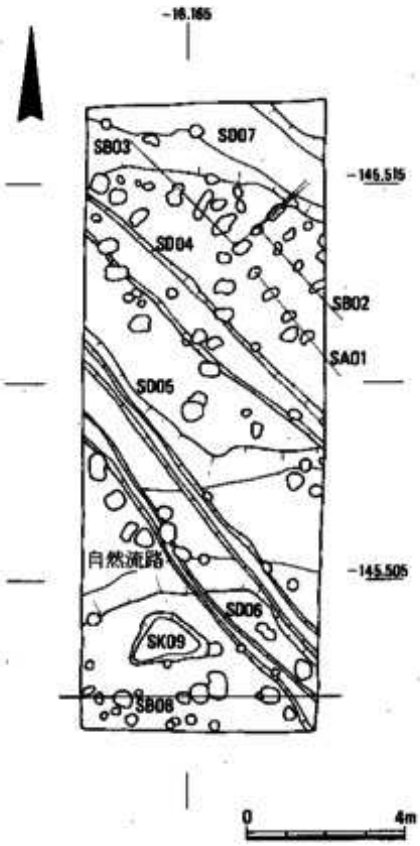
上、棟方向が北で西へ45°振れる。柱間寸法は桁行が0.75m等間、梁間1.0mである。重復関係から建物SD07より古いことがわかる。

SD04・SD05・SD06　発掘区の中央から南半にかけて斜行する溝。いずれも幅0.4～1.1m、深さ0.04m、長さ7.7～8.6mまでを確認した。溝の方向が北で西へ40°～45°振れている。埋土は灰色砂で少量の古墳時代土師器、須恵器が出土した。

SD07　発掘区の北辺で検出した斜行する溝。幅2.2m、深さ0.3m、長さ6mまで確認した。埋土は上層から褐灰色土、暗灰色土、灰色砂質土の順で、少量の古墳時代の土師器、埴輪片が出土した。

奈良時代のものには掘立柱建物、土坑がある。

SB08　発掘区の南辺で検出した掘立柱建物。東西ともに発掘区外へ続く。2間分を確認した。柱間寸法は1.85m等間で、塀になる可能性もある。柱掘形から奈良時代の土器が出土した。



第264次調査　遺構平面図（1／200）

SK09　発掘区の南半で検出した平面不整形掘形の土坑。東西2.0m、南北1.3m、深さ0.24m、埋土は褐灰色土で奈良時代の土器が出土した。

その他、径0.4m、深さ0.05mほどの平面不整円形掘形の小穴がある。埋土は暗灰色土と褐灰色土のものがある。古墳時代か奈良時代の柱掘形かと思われるものもあるが、建物としてはまとまらない。

Ⅲ　出土遺物

遺物整理箱で2箱分の土器と埴輪が出土した。土器には弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器、奈良時代の土師器・須恵器がある。弥生土器は畿内第Ⅴ様式のもので、流路から出土した。埴輪はSD03から72点出土した。大半が小片であるが、中には盾形埴輪の盾面の文様がわずかに確認できるものがある。

Ⅳ　まとめ

今回の調査で検出した遺構は大半が古墳時代中期から後期にかけてのものである。これまでに、今回の調査地周辺で古墳時代の遺物が出土した例はあるものの明確な遺構を検出したのは今回が初例となった。また、自然流路から弥生土器が出土したことにより、周辺に弥生時代後期の遺跡がある可能性も考えられる。今後のこの地域の調査成果の蓄積により遺跡の全体が明らかになるものと考える。

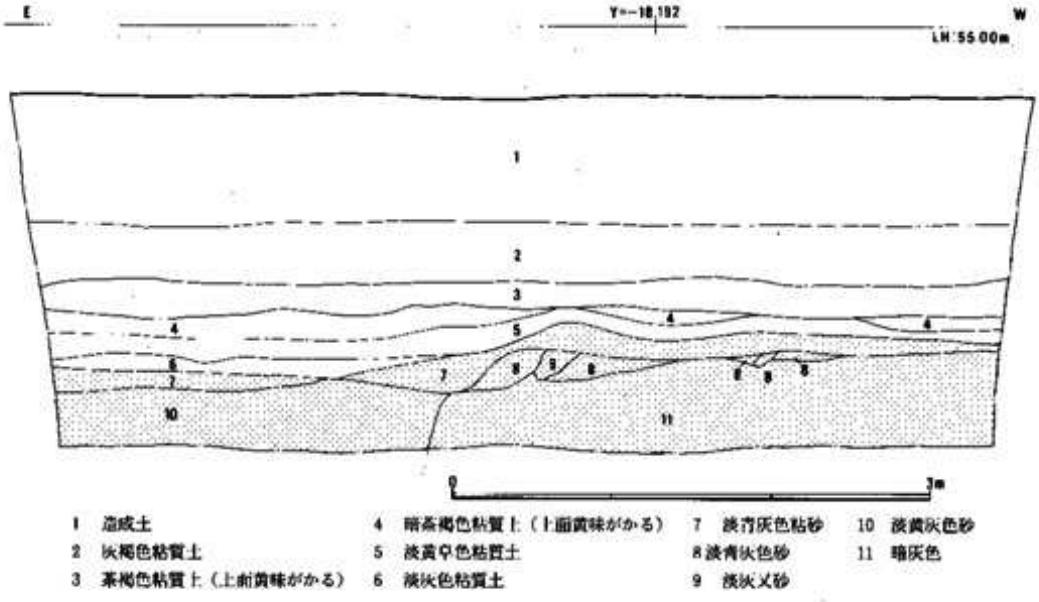
（秋山成人）

19　平城京左京八条一坊十六坪の調査　第265次

本調査は奈良市杏町275－4、279－4番地において実施した、市営駐車場造成に伴う事前の発掘調査である。調査地は平城京の条坊復原では左京八条一坊十六坪の西南隅付近に該当し、北方約70mには岩井川が西流している。発掘区は、東西約7.5m、南北約6m、面積約45㎡の範囲で設定した。調査期間は平成4年10月1日から10月9日である。

発掘区内の層序は、盛土、灰褐色粘質土、茶褐色粘質土、暗茶褐色粘質土、淡黄灰色粘質土、淡灰色粘質土、淡青灰色粘砂と続き、地表下約1.6～1.9mで淡黄灰色砂層もしくは暗灰色砂層にいたる。この砂層は地表下3.5m以下もつづく。

調査の結果、遺構はなく、茶褐色粘質土層から奈良時代の瓦片がごく少量出土した。この付近では、過去に今回の調査のほか、第13次[1]、第175次[2]、第216次[3]の3次の調査を行なっているが、いずれも、水田化される以前は滞水した低湿地であったとの成果を得ている。今回の調査結果もこれらとほぼ同様であることから、調査地付近は、かつて岩井川の氾濫原であった時期があるものと推測される。　（武田和哉）



第265次調査　発掘区南壁土層図（1／50）

1）『奈良市埋蔵文化財調査報告書昭和56年度』奈良市教育委員会 1982
2）『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成元年度』奈良市教育委員会 1990
3）『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成2年度』奈良市教育委員会 1991

20　平城京左京四条四坊五坪の調査　第266次

Ⅰ　はじめに

本調査は奈良市大森西町216－1・4、219－1において、大西善次郎氏届出の倉庫建設に伴って実施した事前発掘調査である。調査地は平城京の条坊復原では左京四条四坊五坪の南半中央にあたり、調査地南端には四条大路が想定される地点である。調査面積は350㎡で、調査期間は平成4年10月1日から11月16日である。

Ⅱ　検出遺構

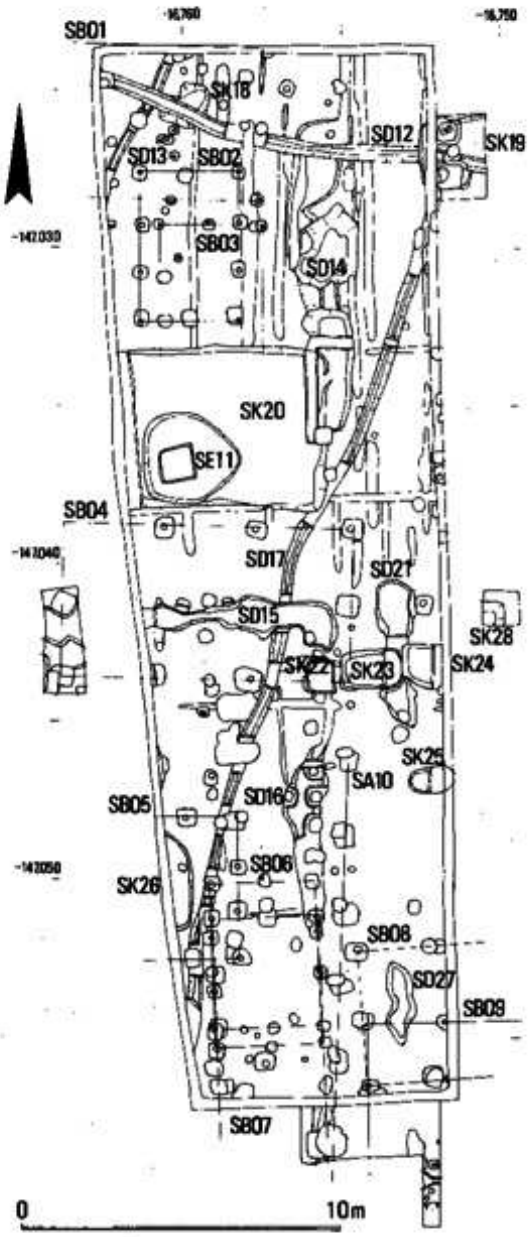
発掘区内の基本的な層序は、暗灰色土（耕土0.2m）、灰褐色砂質土（床土0.05m）、褐色土（0.05m）と続き、地表下約0.3mで黄灰色土の地山に達する。地山上面の標高は概ね62.0mである。遺構は地山上面で検出した。

検出した遺構には奈良時代のものと弥生時代のものがある。奈良時代の遺構は掘立柱建物9棟、掘立柱塀1条、井戸1基、溝8条、土坑9基である。

SB01　桁行2間以上、梁間2間（4.8m）の東西棟建物で、発掘区外へ続く。柱間寸法は桁行が2.7m、梁間は2.4m等間である。

SB02　桁行3間（4.7m）、梁間2間（3.0m）の南北棟建物である。柱間寸法は桁行が北から1.6－1.5－1.6mで、梁間は1.5m等間である。

SB03　桁行3間以上、梁間2間（3.2m）の南北棟建物である。柱間寸法は桁行が北から1.6－1.5mで、梁間は1.6m等間である。重複関係から土坑SK20よりも古いことがわかる。



第266次調査　遺構平面図（1／250）

SB04　桁行３間（9.0m）、梁間２間（4.8m）の東西棟建物である。柱間寸法は桁行が3.0m等間、梁間は2.4m等間である。重複関係から土坑SK23よりも古い。

SB05　桁行３間（4.5m）、梁間２間以上の南北棟建物で、発掘区外へ続く。柱間寸法は桁行が1.5m等間、梁間は1.6mである。

SB06　桁行３間（5.1m）、梁間２間（3.4m）の南北棟建物である。柱間寸法は桁行、梁間ともに1.7m等間である。

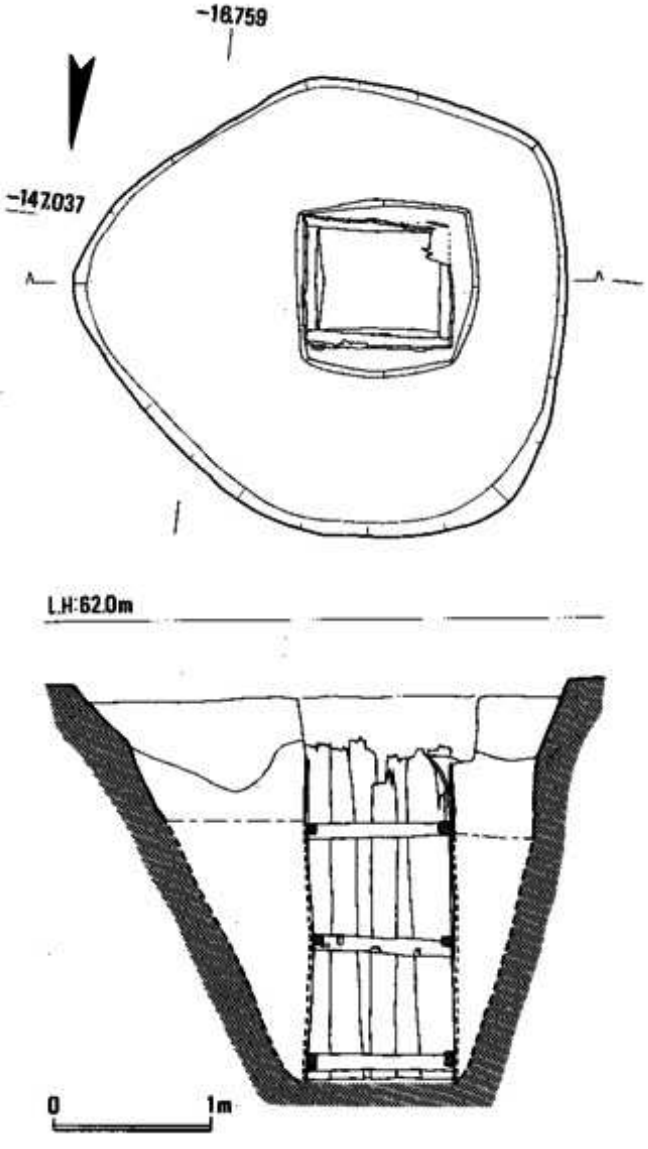
SB07　桁行４間以上、梁間２間（3.4m）の南北棟建物で、発掘区外へ続く。柱間寸法は桁行が1.8m等間、梁間は1.7m等間である。

SB08　桁行２間以上、梁間２間（4.2m）の東西棟建物で、発掘区外へ続く。柱間寸法は桁行が2.2m等間、梁間は2.1m等間である。

SB09　南北２間以上、東西２間以上の建物。発掘区外へ続く。柱間寸法は東西、南北とも2.4m。重複関係から建物SB08よりも古いことがわかる。

SA10　南北５間（12.0m）以上の塀である。柱間寸法は2.4m等間である。

SE11　南北約2.8m、東西約3.0mの平面不整形な掘形に、方形縦板組横桟留の枠を据えた井戸。井戸枠は内法東西0.75m、南北0.65m、検出面からの深さ2.5m。横桟は３段分が残る。掘形と枠内から出土した土器はともに奈良時代中頃のもので、枠内からは斎串２点も出土した。



井戸ＳＥ11平面・断面図（１／50）

重複関係から土坑SK20よりも古いことがわかる。

SD12　東西方向の素掘りの溝で、幅約0.5m、深さ約0.3mである。断面U字形で、溝内の埋土は二層に分かれ、上層は暗褐色土、下層は黄灰色土である。奈良時代の土器が出土した。重複関係から建物SB01、土坑SK19よりも古いことがわかる。

SD14　南北方向の素掘りの溝で幅1.0～1.8m、深さは0.1～0.3mで溝底に凹凸がある。奈良時代の土器が出土した。重複関係から建物SB01、土坑SK19よりも古い。

SD15　南北方向の素掘りの溝で、幅0.7～1.0m、深さ0.1m前後。奈良時代の土器が出土した。重複関係から建物SB04よりも古いことがわかる。

SD16　南北方向の素掘りの溝で、幅0.5～1.2m、深さ0.2m前後。奈良時代の土器が出土した。重複関係から建物SB06・SB07よりも古いことがわかる。

SK18　南北約1.5m、東西約1.5m、深さ0.1～0.3mの平面不整形掘形の土坑。重複関係から溝SD12よりも古いことがわかる。

SK19　南北約2.0m、東西2.0m以上。深さは東端で0.1m、西へ深くなり西端では0.4m。発掘区外へ続く。

SK20　南北約5.0m、東西6.5m以上、深さ約0.2mの平面長方形掘形の土坑。発掘区外へ続く。埋土は上層が灰褐色土、下層は灰褐色粘質土である。軒丸瓦と奈良時代中頃の土器が出土した。

SD21・SD27　いずれも南北方向の素掘りの溝で、幅1.0m前後、深さ0.2m前後。途切れてはいるが、一連の溝であると考えられる。宅地内の区画溝であろう。重複関係から土坑SK23・SK24よりも古いことがわかる。

SK22・SK23・SK24・SK28　いずれも掘形の平面隅丸長方形、断面箱形の土坑。土坑SK22は南北約1.0m、東西約0.9m、深さ約0.3m。土坑SK23は南北約1.2m、東西約1.9m、深さ約0.5m。土坑SK24は南北約1.3m、東西1.5m、深さ約0.5m。土坑SK28は南北0.9m以上、東西0.6m以上、深さ約0.5m。重複関係から土坑SK23は土坑SK24よりも古い。

SK25　南北約0.8m、東西約1.4m、深さ約0.2mの土坑。奈良三彩が出土した。

SK26　南北約3.2m、東西1.0m以上、深さ約0.1mで、発掘区外へ続く土坑。

弥生時代の遺構には溝2条がある。

SD13　北東から南西に斜行する素掘りの溝。幅約0.3m、深さ約0.2m、断面U字形で、埋土は黄褐色土である。弥生土器片とサヌカイト剥片が出土した。

SD17　北東から南西に斜行する素掘りの溝。幅0.3m、深さ約0.3m。断面V字形で、埋土は黒褐色土である。弥生土器片とサヌカイト剥片が出土した。　（宮崎正裕）

Ⅲ　出土遺物

大半が奈良時代の土器で、なかに奈良三彩３点がある。他に銅鏡が褐色土層（遺物包含層）、軒丸瓦6227Ａ１点が土坑SK20、斎串２点が井戸SE11枠内から出土した。弥生時代のものには、溝SD13・SD17出土の弥生土器片とサヌカイト剥片がある。

奈良三彩　奈良三彩杯２点と小壺蓋１点がある。小壺蓋は表面の剥離が著しく、釉がわずかに残るだけであるが、頂部から縁部の外面に緑、褐、白釉を、内面全体には緑釉を施しているようである。胎土はきめ細く、色調は淡橙褐色である。杯はいずれも破片であるため復原できない。（三好美穂）

土坑ＳＫ25出土奈良三彩（1/2）

銅　鏡　鏡背の文様は、四弁の唐花と蕾とを蔓で連ね、花座に縁どられた素円鈕を中心に巡らせた唐花六花鏡である。地は魚々子地である。縁の断面は蒲鉾形で、厚さ0.55cm。全体の十分の一ほどの断片ではあるが、東大寺金堂跡出土の同型鏡をもとに復原すると、径９cm前後になる。褐色土層（遺物包含層）出土。

出土銅鏡

Ⅳ　まとめ

今回の調査で検出した奈良時代の遺構には、重複関係から三時期以上の変遷があることがわかる。また、坪のほぼ中央での調査であったにもかかわらず、建物が小規模で、区画施設とみられる塀や溝を検出していることから、五坪がいくつかの区画に分けて利用されていた可能性が高い。これらの遺構を覆う遺物包含層から小片ではあったが銅鏡一面が出土した。国内で出土あるいは伝世する唐式鏡は多いが、うち唐花六花鏡は今回の出土例を含めて７例が知られる。また、京内出土の唐式鏡は今回出土例で10例となった。京内出土例のうち６例は寺院のものであり、２例が条坊道路の側溝から出土している。道路側溝出土例は大祓の遺物であるともされる。宅地内出土例は今回出土例を含めて２例である。うち１例は右京八条一坊十二坪出土例で、井戸から出土している。この坪と北隣の十四坪では鋳造関係の遺構と遺物が発見されており、金属製品などの工房が存在した可能性が指摘されている。一方、本調査地にはこうした鋳造関係の遺構や遺物はなく、鏡が破片で出土したこととともあわせて特異である。

なお、弥生時代の溝を検出しており、この地点に弥生時代の遺跡が存在する可能性がある。

（森下浩行　宮崎正裕）

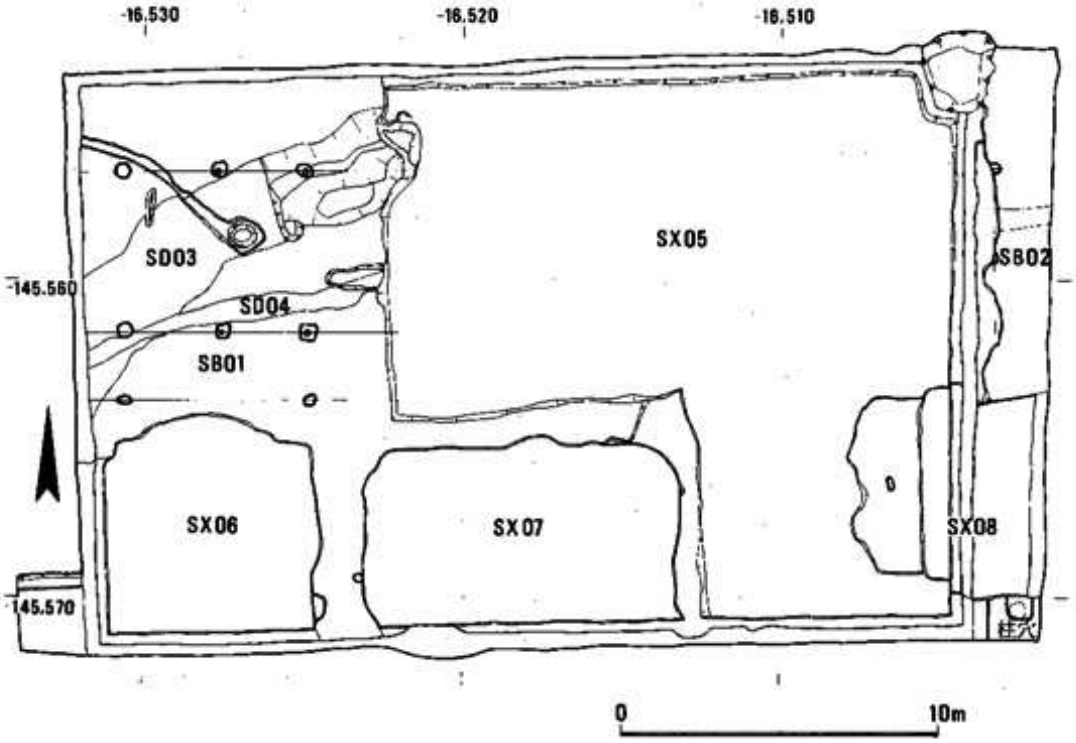
21　平城京左京二条四坊十六坪　第267次

本調査は、奈良市法蓮町347他において、寺田政治、廣岡良太郎両氏届出の店舗建設に伴って実施した事前発掘調査である。調査地は平城京の条坊復原では、左京二条四坊十六坪にあり、坪のほぼ中央部に位置する。調査地の北西で行った小規模確認調査（90－9次調査）で、一条大路の南側溝を確認している。敷地の南半に東西31.2m、南北18.8mの発掘区を設定し、面積376.5㎡を調査した。調査期間は平成4年10月13日から11月25日である。

発掘区の層序は黒灰色土（0.15m 旧耕土）、灰色土（0.15m 旧耕土）であり、地表下約0.3mで赤褐色砂質土の地山となる。地山上面の標高は概ね68.0mである。遺構はすべて地山上面で検出した。以下、主な検出遺構について概要を記す。

SB01　桁行4間以上、梁間3間（7.1m）の掘立柱東西棟建物で、南廂が付く。西妻柱筋は発掘区外にあり、東妻柱筋はSX05によって破壊されている。柱間寸法は桁行が2.9m等間、梁間は2.5m、廂の出は2.1m。柱掘形の深さは身舎が0.1～0.2m、廂は0.05mと浅く、中には削平されて残っていないものもある。

SB02　発掘区北東隅で検出した掘立柱建物である。柱掘形1間分のみを確認し、柱間



第267次調査　遺構平面図（1／250）

寸法は2.9mである。北側の柱掘形は建物SB01の北側柱筋の延長線上にある。東は発掘区外に続き、南はSX05によって破壊されている。柱掘形の深さは0.2mである。

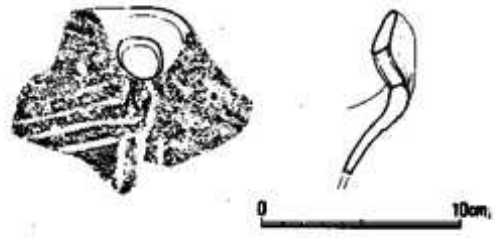
SD03　発掘区北西部で検出した北東から南西方向の素掘りの溝である。幅約2.5m、深さ約1.3m。埋土は灰褐色土、灰色砂礫で遺物は出土せず時期は不明である。重複関係から建物SB01よりも古いことがわかる。

SD04　東西方向の素掘りの溝。西で南にわずかに斜行する。幅約0.7m、深さ0.3m。埋土は上から暗赤紫色粘質土、褐灰色砂礫、明灰青色砂である。遺物は出土しなかった。重複関係から溝SD03よりは新しく、SX05よりも古いことが分かる。

SX05・SX06・SX07・SX08　発掘区のほぼ全面に広がる性格不明の遺構。いずれも発掘区外へ続き全体の規模は不明。掘形平面の各辺はわずかに出入があるが、全体としては隅丸方形かそれが組み合った形状で、断面は箱形である。深さ1.5～1.6m。埋土は、SX05は濁暗灰褐色土（0.5m）、暗青灰褐色砂質土（1.0m）、SX06は淡灰褐色土（0.5m以下不明）、SX07はブロック状の灰色砂・青灰色粘土・黄橙色粘土が混在（1.5m）、SX08は濁茶灰色土（1.6m）である。遺物は古墳時代の埴輪から、江戸時代の染付磁器、国産陶磁器まで各時代のものが混ざっており、SX07からは縄文時代の土器片も出土した。重複関係からSX08がSX05より新しいことがわかるが、他は切り合いがなく、幅0.4～0.8mの畦を残すように掘られていることから同時期のものと考えられる。これらの遺構は掘形の形状に共通点があること、一気に埋められていること、深さがほぼ同じであることから同様の性格のものであると考えられる。

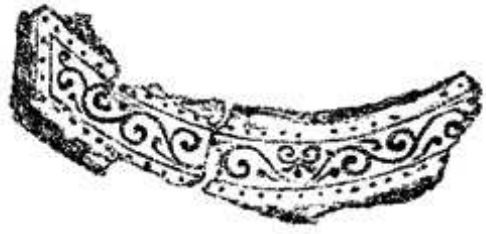
出土遺物について主なものを記述する。

土　器　縄文時代後期のものと考えられる深鉢の波状口縁部である。磨耗のため縄文の有無は確認できない。口縁部下に横方向の、波頂部下に縦方向の3条の沈線がある。SX07から出土した。　（久保邦江）



出土土器（1／2）

瓦　類　軒瓦について記す。軒瓦は全部で19点出土。内訳は軒丸瓦が6131A 1点、6228A 1点、6282Ba 1点、型式不明4点であり、軒平瓦は6663A 1点、6663B 1点、6671種別不明1点,6691A 1点、6712新種6点、6721C 1点、6721D 1点である。6712新種は、これまでに知られている6712A～D種とは中心飾りと唐草の形状が異なる。　（原田憲二郎）



出土軒平瓦（6712新　1／4）

22　平城京左京三条六坊五坪の調査　第269次

本調査は、奈良市上三条町18において、浄教寺住職島田和麿氏届出の庫裏建築に伴って実施した事前発掘調査である。調査地は、江戸時代に当地に移った浄教寺の境内であり、また平城京の条坊復原では左京三条六坊五坪の南端にあたる。調査面積は86㎡で、調査期間は平成４年11月30日から12月24日である。

発掘区の層序は、中央部で、盛土（0.3m）、暗灰褐色土・灰オリーブ褐色土・灰色土の近世の整地層（0.6m）、暗灰色砂質土の中世遺物包含層（0.1m）、暗黄褐色土の古墳時代遺物包含層（0.3m）と続き、黄褐色砂礫層の地山となる。地山の標高は73.4mである。地山は北から南に向かい緩やかに下降してゆくが、南端に0.3mほど南へ落ちる段がある。

検出した遺構には溝、井戸、土坑、柱掘形がある。古墳時代と平安時代後半から江戸時代までの各時期のものである。以下主なものを記す。

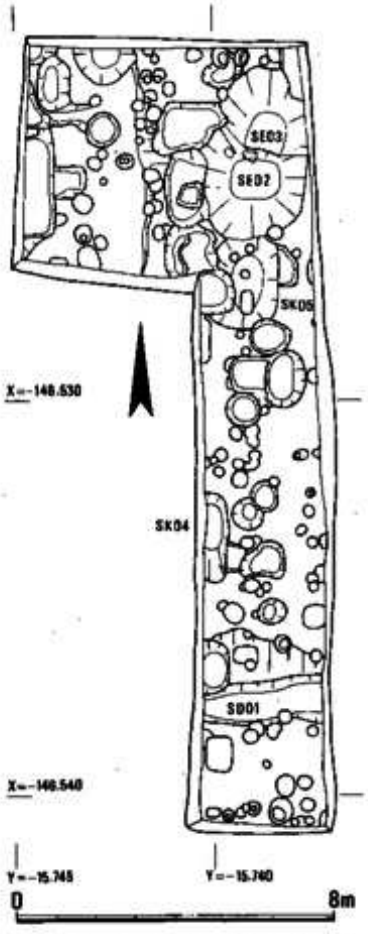
SD01　幅1.2m、深さ0.2mの東西方向の素掘りの溝で、発掘区外の東、西へ続く。溝の埋土から13世紀中頃の土器が出土した。

SE02　一辺2.5mの平面隅丸方形掘形で、深さ3.0mの素掘りの井戸である。11世紀後半の土器が出土した。

SE03　東西2.0m、南北2.2m以上、深さ1.7mの平面楕円形掘形の素掘りの井戸である。埋土には大量の土器が含まれ、遺物整理箱18箱分の土器が出土した。出土遺物から13世紀中頃のものである。

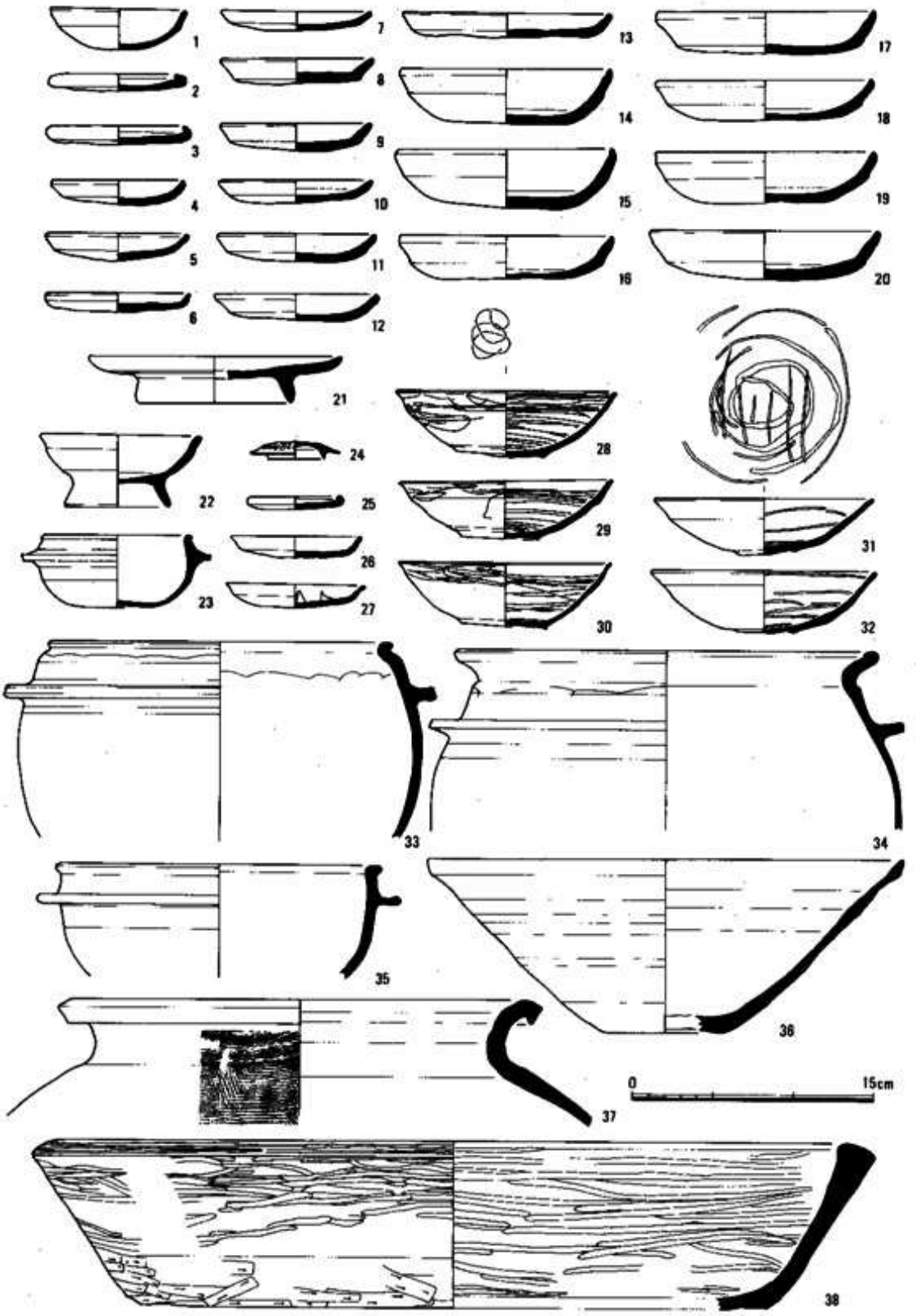
SK04　南北2.1m、東西0.6m以上、深さ0.6mの平面楕円形掘形の土坑である。埋土は20cm前後の石を多く含む。13世紀中頃の土器が出土した。

SK05　南北2.4m、東西1.7m以上の平面楕円形掘形の土坑である。円筒埴輪と蓋形埴輪の笠部と立飾部の破片が出土した。蓋形埴輪は、線刻によって笠部と立飾部の文様を表現するものである。埴輪は黒斑を持つ。また発掘区内の他の中近世の遺構にも、同時期の埴輪片が出土したものがある。



第269次調査　遺構平面図（1／200）

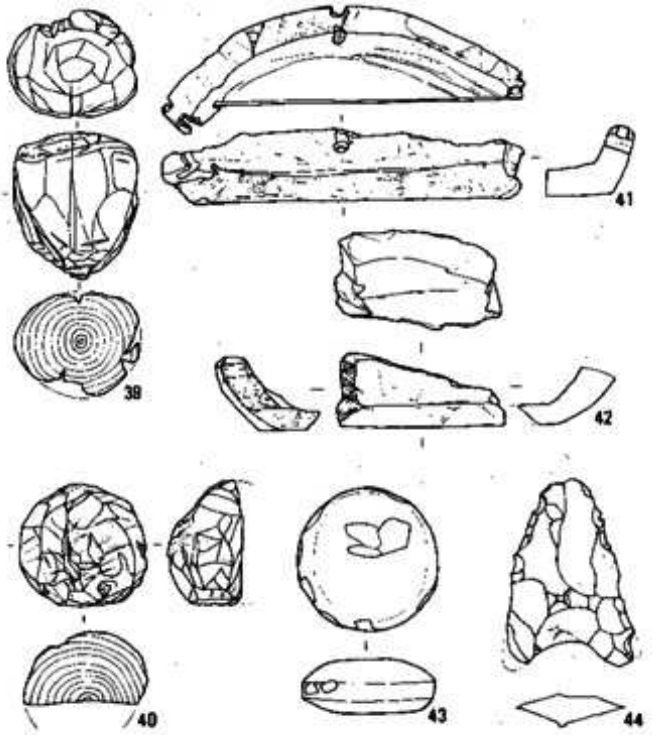
出土遺物には、古墳時代、平安時代後半から江戸時



井戸ＳＥ03出土土器（１／４）

代までの各時期のものがある。以下井戸SE03出土遺物について記す。

井戸SE03出土土器　土師器皿（1～20）・高台付皿（21・22）・羽釜（23・33～35）、瓦器椀（28～32）・皿（25～27）・小椀・盤（38）、須恵器鉢（36）・甕（37）、白磁碗・壺、青磁碗・皿、青白磁蓋（24）、混入品として陶棺または墳輪円筒棺片がある。土師器皿には橙色を呈するものが多い。1・14・15はやや深手の皿。瓦器椀には、見込み部に同心円暗文を施すもの（28）と、体部から連続の渦巻状暗文を施すもの（29・30）と



井戸SE03出土木製品・石製品（39～42　1/4　43・44　1/1）

がある。31・32は和泉型の瓦器椀で、31は見込み部に平行線状暗文を施すが、32は6回転の渦巻状暗文のみである。他に破片で2個体分の和泉型瓦器椀が出土した。25は口縁端部を内側に折り曲げた瓦器の皿で、胎土は和泉型瓦器椀と似ている。盤（38）は、底部に三ないしは四足がつく。内外面ケズリの後ナデ、その後幅約4㎜の粗いヘラミガキを施す。これらは奈良Ⅱ—D[1]）にあたる。

木製品　独楽（39）、毬杖の玉（40）がある。39は横断面形が楕円形で、上面がわずかに膨らみ、下端に突起がある。心持ち材である。40は歪な球形である。

石器・石製品　石鍋（41・42）、石製平玉（43）、石鏃（44）がある。41は使用後、体部の下端から約3cmを残して鋸で切断されており、切断面の外周八等分の位置に凹字形の孔がある。孔が僅かに摩滅し、紐状のものを通していたと思われる。転用後の用途は不明。その後底面を鋸で切断し、平滑な方形の石材をとり不用部を廃棄したものと思われる。42も切断されており、41と同一個体であった可能性もある。43は丁寧に研磨され、一面がわずかに膨らみ、他面中央には小さな平面がある。色調は暗緑色である。以上の遺物は共伴する土器から13世紀中頃のものである。44は弥生時代のものと思われる。　（中島和彦　関野　豊）

1）森下恵介　立石堅志「大和北部における中近世土器の様相—奈良市内出土資料を中心として—」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要1986』奈良市教育委員会　1987

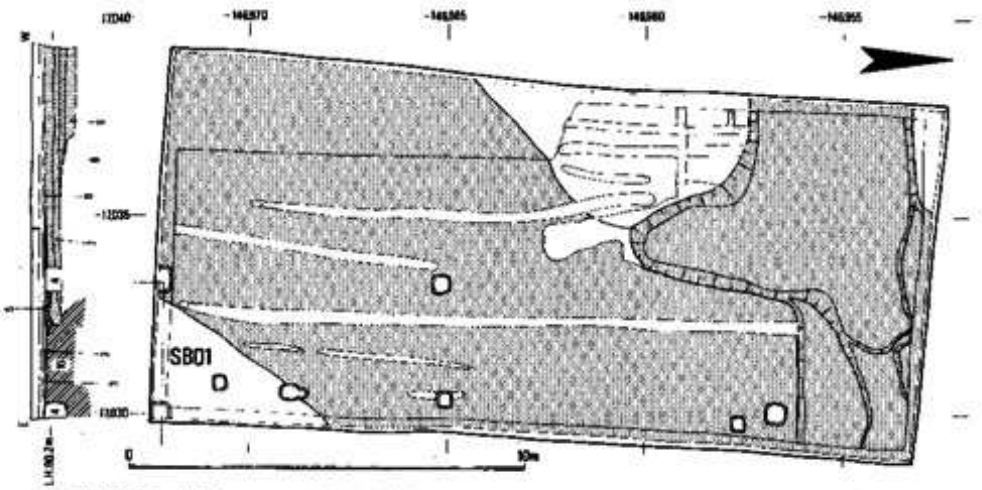
23　平城京左京四条三坊十三坪の調査　第270次

本調査は奈良市三条桧町396－1において実施した、大西基世氏届出の共同住宅建設に伴う事前発掘調査である。当該地は、平城京条坊復原によると、左京四条三坊十三坪の北東隅にあたる。この共同住宅建設では建物の基礎掘削は盛土内に納まるものの、地下駐車場が計画されているため、地下駐車場の計画位置に東西10m、南北20m（面積200㎡）の範囲で発掘区を設定した。調査期間は、平成5年1月11日から1月22日である。

発掘区内の層序は、黒褐色粘質土（耕土）、茶灰色粘質土の下、遺物包含層である黄褐色粘質土と続き、現地表下約0.4mで、黄褐色粘土の地山となる。しかし、発掘区中央のほぼ三分の二の範囲で茶灰色の砂礫を主とする河川による堆積が見られ、発掘区の北東から南西方向にかけて河川が流れていたことが明らかとなった。この堆積土中にはなんら遺物は含まれておらず、この河川の時期については明らかでない。

奈良時代の中頃になって、この河川の流路痕跡上は、全面にわたって暗茶灰色粘土ないしは、暗黄灰色粘質土によって整地されている。奈良時代の遺構は、黄褐色粘土の地山上面もしくは、この整地土上面で検出した。検出した遺構には掘立柱建物1棟があるが、他には建物としてまとまる柱掘形や、遺構はなく、発掘区内の遺構密度は極めて粗であった。建物SB01は、発掘区南端で検出した掘立柱建物である。東西方向の1間分を検出した。柱間寸法は3.6mである。建物は発掘区外に続くと考えられ、全体の規模については明らかでない。

（立石堅志）

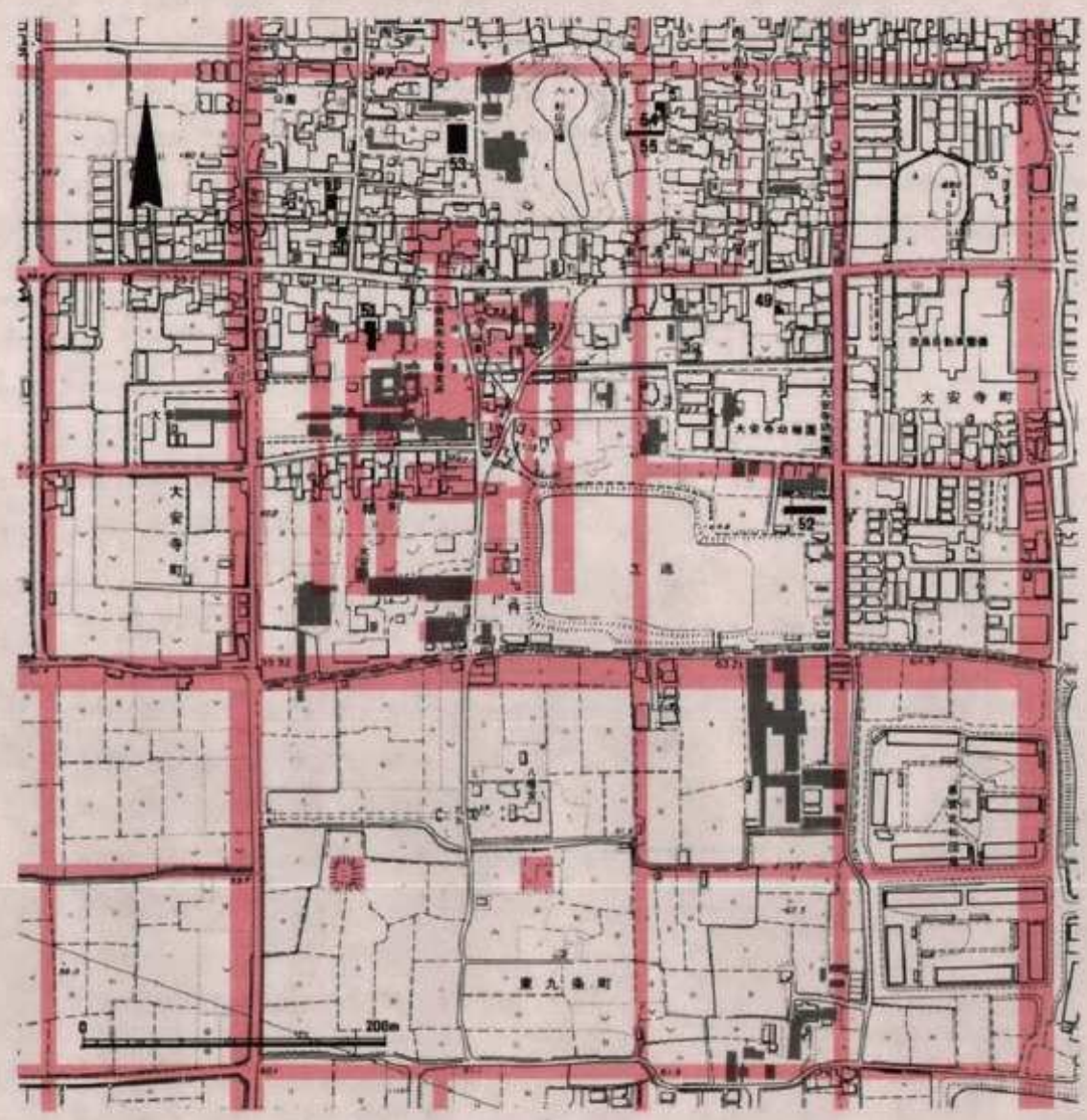


第270次調査　遺構平面図・発掘区南壁土層図

II　寺院跡の調査

1　史跡大安寺旧境内の調査

史跡大安寺旧境内では、本年度、第49次～第56次の８件の発掘調査を実施した。保存整備事業に伴なう第53次調査以外は、いずれも現状変更許可申請に関わるものである。第49・第52次調査は食堂并大衆院推定地区で実施したが、いずれも伽藍に関わる遺構は確認できなかった。第51次調査では、昨年度の第46次に続き北西太房を確認した。第54・55次調査は杉山古墳東側の濠と外堤部の調査であり、周濠と外堤の葺石を検出している。なお、第53次調査の成果は保存整備事業完了時に報告する予定である。



史跡大安寺旧境内発掘調査位置図（１／5,000）

（1）　第49次の調査

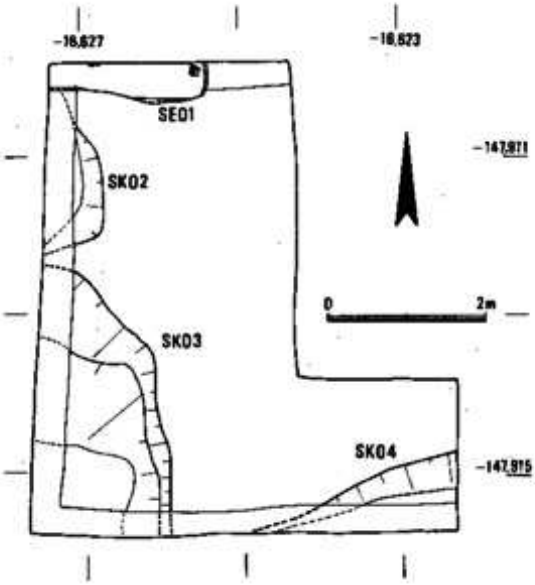
本調査は奈良市大安寺一丁目1166番地において実施した、楠下重郎氏提出の史跡大安寺旧境内の現状変更許可申請に関わる発掘調査である。調査地は、大安寺の伽藍復原では主要伽藍の東側、賤院跡推定地の中央やや北東寄りに該当する。調査地の南隣では、昭和54年に奈良県立橿原考古学研究所が発掘調査を実施しており、奈良時代の礎石建物などが検出されている[1]。調査期間は平成４年４月６日から４月13日まで、調査面積は約22㎡である。以下、層序と検出した遺構の概要を記す。

発掘区内の基本層序は、盛土、黒灰色粘土と続き、地表面下約0.7ｍで黄灰色粘土の地山に至る。地山上面の標高は約62.9ｍである。遺構検出作業は、地山上面で実施した。検出遺構は奈良時代の井戸１基と、土坑２基、時期不明の土坑１基である。

SE01　発掘区北西隅で検出した奈良時代の井戸である。一部を検出しただけで全体の規模は不明。掘形は一辺1.9ｍ以上の平面方形になると思われ、検出面から深さ約0.7ｍまでを確認した。井戸枠は隅柱２本を検出したが、部材の残存状態が悪く、全体の構造は不明である。隅柱間の寸法は約1.2ｍある。掘形内の埋土や枠内の上層の埋土からは、奈良時代の土器や瓦の破片が若干量出土したが、小片のため詳細な時期は不明である。

SK02　発掘区西端で検出した東西0.8ｍ以上、南北2.1ｍ以上の掘形の平面不整形な土坑。埋土から土器片が少量出土した。重複関係から、井戸SE01よりも古いことがわかる。

SK03　発掘区南西端で検出した東西1.8ｍ以上、南北3.5ｍ以上の掘形の平面不整形な土坑。埋土から奈良時代の土器片、瓦片が少量出土した。



第49次調査　遺構平面図（１／50）

SK04　発掘区東南端で検出した掘形の東西2.6ｍ以上、南北1.0ｍ以上の土坑。遺物が出土せず、他の遺構との重複関係もないので、時期を決定することはできない。

今回の調査では、奈良時代の井戸と土坑を検出した。井戸は、発掘区の制約があって全体を明らかにすることはできなかったが、検出した遺構の残存状態から、調査地の周辺には奈良時代の遺構が比較的良好に残存していることがうかがえる。　（武田和哉）

1）『大安寺旧境内発掘調査概報』奈良県立橿原考古学研究所 1977

（2）　第50次の調査

本調査は奈良市大安寺町1053番地の１で実施した、平尾綱男氏提出の現状変更等許可申請に関わる発掘調査である。調査地は『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』に記載されている「禅院食堂并大衆院」に推定される地区の一画で、食堂推定地の西側にあたる。東西７ｍ、南北６ｍの発掘区を設定し、約38㎡を調査した。調査期間は平成４年７月11日から７月29日である。

発掘区内の基本的な層序は礫を含む暗灰色土（0.05m～0.1m）の表土を除くと直下に礫を含む黄灰色の地山が露呈する。遺構は地山の上面で検出した。遺構検出面の標高は概ね60.5ｍである。調査の結果、検出した遺構は溝、土坑、小穴である。

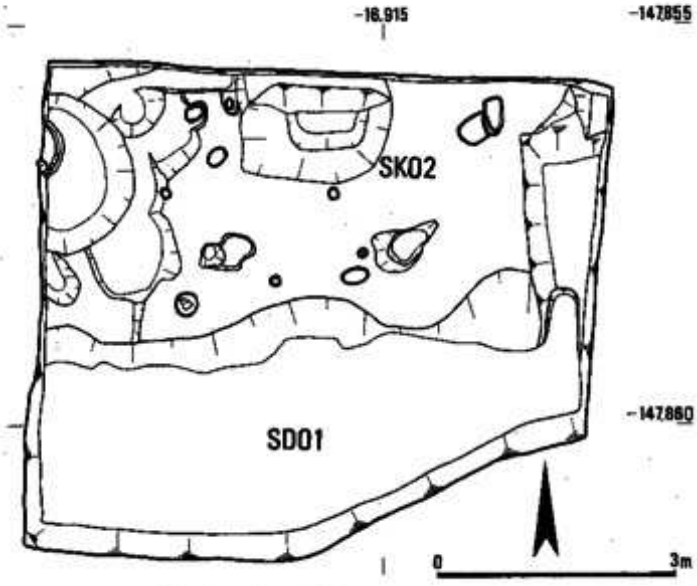
SD01は東西方向の素掘りの溝である。北肩のみを検出し、南半は発掘区外にあると考えられる。幅3.3ｍ以上、深さ0.9ｍまでを確認した。溝内の埋土は上から灰色粘質土、灰色砂礫土である。溝内の埋土からは、奈良時代から近世まで各時期の土器が出土した。瓦は、軒丸瓦（6138E、6308I）、軒平瓦（6664A、6712A、6712C、6716E）、鬼瓦（南都七大寺式IB_2）が１点ずつ出土した。発掘区の南に、現在でもコンクリートで護岸した水路があるが、検出した溝はこの前身の水路であったと考えられる。

SK02は発掘区の北端で検出した土坑である。掘形は東西1.8m、南北0.9ｍ以上、深さ0.9ｍで、発掘区外へ続く。埋土は上から灰色土、礫を含む灰色土、灰色粘質土である。坑内からは18世紀初頭の土器が出土した。

その他、径0.1～0.3ｍの小穴を数個確認した。深さはいずれも0.1～0.2ｍと浅く、削平されているのかもしれない。埋土は暗褐色土である。遺物はなく時期は不明。これらの中には柱掘形と思われるものも含まれるが、建物としてはまとまらない。

今回の調査では近世の遺構を検出した。奈良時代の大安寺の遺構は検出できなかったものの、この地区の変遷を知る上で一資料を追加できたと考える。

（久保邦江）



第50次調査　遺構平面図（１／100）

（3） 第51次調査

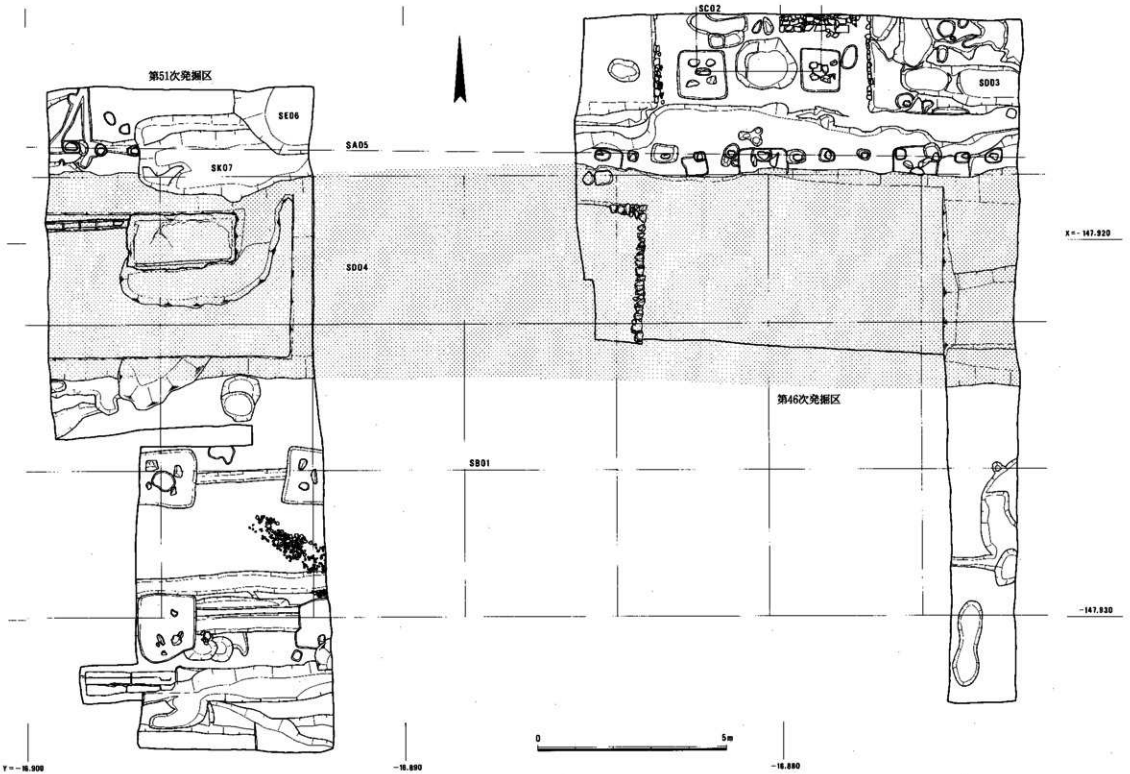
Ⅰ はじめに

本調査は、奈良市大安寺町1145番地の1において、増田善一氏提出の現状変更許可申請に関わって実施した。調査地は、大安寺の伽藍復原では北西太房（僧房）に相当する。天平19年（747年）の『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』には僧房13棟が記載されているが、北太房については東、西の2棟があり、各々、長（桁行）12丈5尺、広（梁間）3丈9尺、高1丈5尺の建物であったと記されている。昨年度に実施した第46次調査で北西太房の一部を検出しており、今回の調査地はその西隣に位置する。調査期間は平成4年8月3日から8月31日、発掘面積は約106㎡である。

Ⅱ 検出遺構

発掘区内の基本的層序は、南半で約0.15mの表土、その下に約0.2mの茶灰色土、約0.2mの褐灰色土と続き、地表下約0.5mで太房の基壇築成土及び地山となる。北半では溝SD04が掘り込まれているため層序が異なり、その埋土が幾層にも重なる。

今回検出した北西太房（SB01）の遺構は、従来の伽藍復原からみて桁行の西から2間目の基壇南半部分にあたる。基壇北半は溝SD04、塀SA05、井戸SE06、土坑SK07によって破壊されており遺存しなかった。しかし、第46次調査で北側柱列の礎石据付穴を確認しており、この成果と合わせて建物の梁間を復原することが可能である。その結果、梁間3間で約11.7m、柱間寸法が約3.9m等間となり、『資財帳』の記録と一致する。また、桁行9間で柱間13.8尺とする復原案から、検出した桁行の柱間寸法約4.1mを13.8尺とみると、『資財帳』記載の数値にほぼ合致しよう。礎石据付穴は、一辺約1.5mの隅丸方形の掘形内にサイコロの五の目形に石を配したもので、基壇築成土の上から掘り込まれている。地山の標高は、発掘区北端で約61.6m、南端で約61.1m、基壇南辺の延石基底面の標高が約61.4mであることから、基壇の築成にあたっては北側で地山を削り出し、南側では盛土を行っていることがわかる。基壇築成土は版築されておらず、地山との間には一部に瓦片を敷き並べていた。基壇外装は凝灰岩切石の壇上積で、その延石と地覆石が2.4m分遺存していた。延石3箇の寸法は西から長さ1.06m、0.88m、0.4m以上で、幅0.3m、厚さ0.15m。地覆石2箇は同じ寸法で、長さ1.2m、幅0.34m、厚さ0.15m。地覆石には羽目石をはめ込むための幅0.15m、深さ0.04mの段をつけ、一部に手斧削りの痕跡が残る。さらに東側の地覆石では束石をはめ込むために長さ0.3m、幅0.09m、深さ0.05mの枘穴をあける。束石の位置は、梁間柱列とほぼ南北に揃う。また、南側柱から地覆石の南辺までを基壇の出として計測すれば約1.8mとなる。基壇南辺にそって18世紀頃に南北溝が掘削されており、延石、地覆石の多くがこれによって取り除かれたものとみられる。



第46次調査・第51次調査　遺構平面図（1／100）

北西太房の北半を破壊して掘削された東西溝SD04は、幅約5.5m、深さ約0.7mで18世紀には埋没している。溝SD04の北に平行する塀SA05はこれと同時期の遺構と考えられ、一辺0.4m前後の方形の柱掘形内には扁平な石を1箇ずつ据えて礎盤としている。第46次調査でも確認しており、溝SD04、塀SA05の全長は26m以上に及ぶ。発掘区の北側に溝と塀で囲まれた区画を想定できよう。

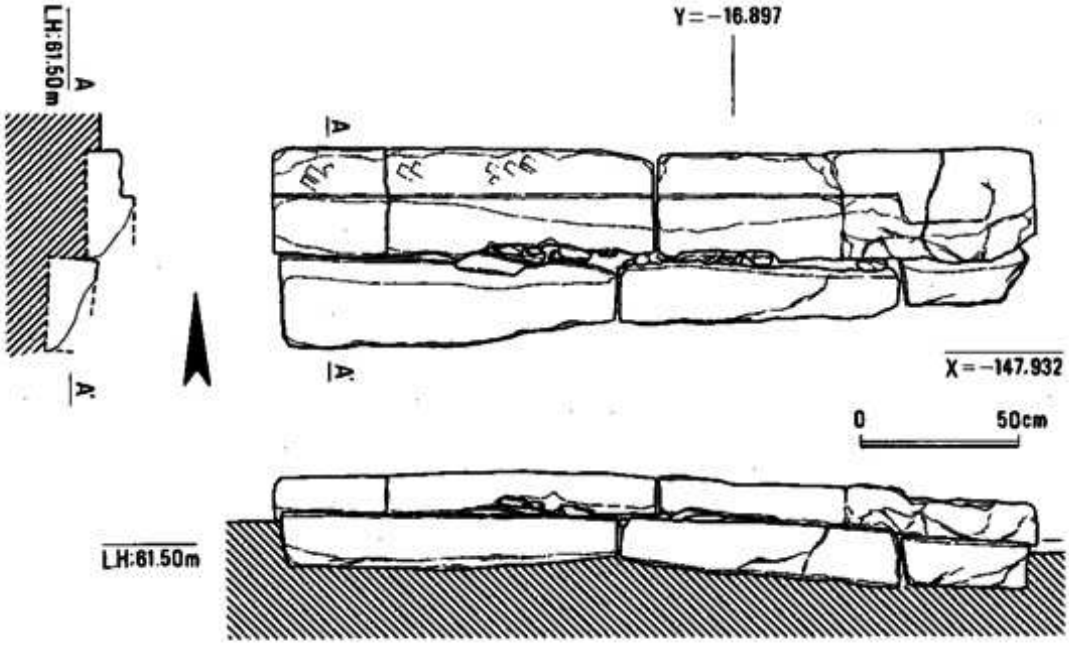
SE06は、直径2m以上の平面円形掘形で、深さ1.3m以上の井戸である。完掘していないため井戸枠の構造については不明。溝SD04が埋没した後に掘削されており、18世紀頃の陶磁器類が出土した。

SK07は、掘形の東西4.7m以上、南北約2.1m、深さ約0.7mの土坑である。二次的に火を受けたとみられる瓦片が大量に投棄されており、19世紀以降の陶磁器片が若干混在していた。井戸SE06が埋没した後に掘削されている。

Ⅲ　出土遺物

出土遺物のほとんどが瓦類であり、この中に奈良時代の軒瓦が70点出土している。内訳は軒丸瓦6091A 1点、6137A 1点、6138C 5点、6138E 1点、6138種別不明1点、6304D 3点、型式不明2点、軒平瓦6644C 1点、6661B 6点、6661種別不明1点、6664A 4点、6682B 1点、6699A 2点、6712A22点、6712B 6点、6716C 4点、6717A 7点、型式不明2点である。この他に鬼瓦が1点出土しており、南都七大寺Ⅰ式B_2に分類できる。

（鐘方正樹　宮崎正裕）



北西太房ＳＢ01基壇延石と地覆石（1／25）

（4）　第52次の調査

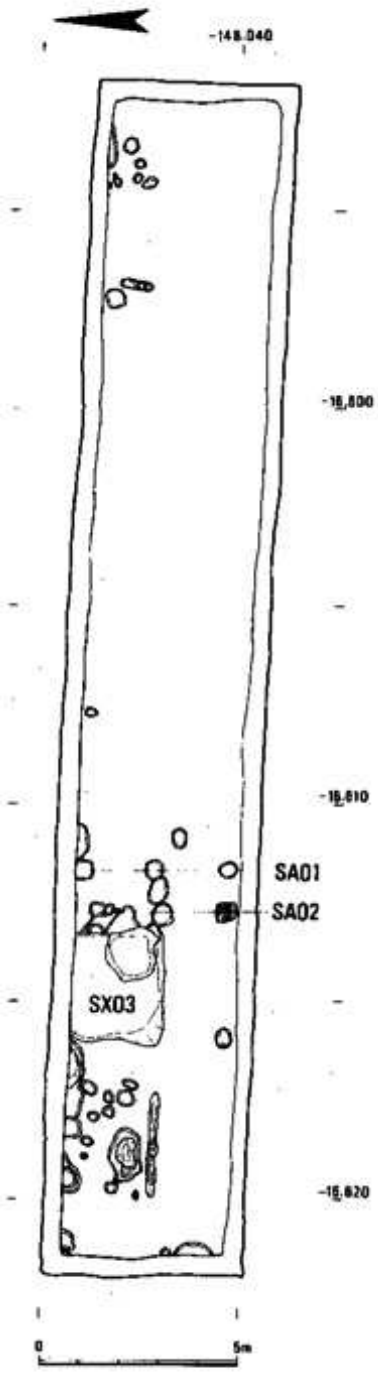
本調査は奈良市大安寺一丁目1240－1で実施した、山本勇氏提出の現状変更等許可申請に関わる発掘調査である。調査地は苑院跡推定地の北東部にあたり、今回の調査では、旧境内の東辺を限る施設を確認することを目的とした。東西30m南北5mの発掘区を設定し、150㎡を調査した。調査期間は平成4年8月17日から8月29日までである。

発掘区内の層序は、上から暗灰色土（0.2m 耕土）、灰色土（0.15m）、灰褐色土（0.1m）と続き、地山に至る。地山は西半では黄褐色土で、東半では礫を含む灰色土である。遺構は地山の上面で検出した。遺構検出面の標高は概ね62.0mである。検出した遺構は掘立柱塀2条、土坑である。掘立柱塀は、いずれも南北塀で東西に約1mの間隔をおいて検出した。うちSA01は2間分確認した。柱間寸法は6m等間である。SA02も2間分確認しており、柱間寸法は1.5m等間である。SX03は発掘区の西よりで検出した平面方形掘形の土坑である。東西0.3m、南北2.0m以上、深さ0.2mである。埋土は暗灰色である。奈良時代の須恵器の小破片が数点出土した。その他、径0.1m～0.4m程度の小穴があるが、いずれも深さ0.1～0.2mときわめて浅く、上部が削平されている可能性もある。

出土遺物はほとんどが小片で時期のわかるものは少なかったが、塀SA02の柱掘形からは奈良時代の瓦が出土し、土坑SX03からは奈良時代の須恵器が出土した。

以上、今回の調査で検出した塀SA01、SA02は規模から考えて、旧境内の東端を限る施設とは考えがたく、おそらくは寺域内の区画のためのものであろう。

（久保邦江）

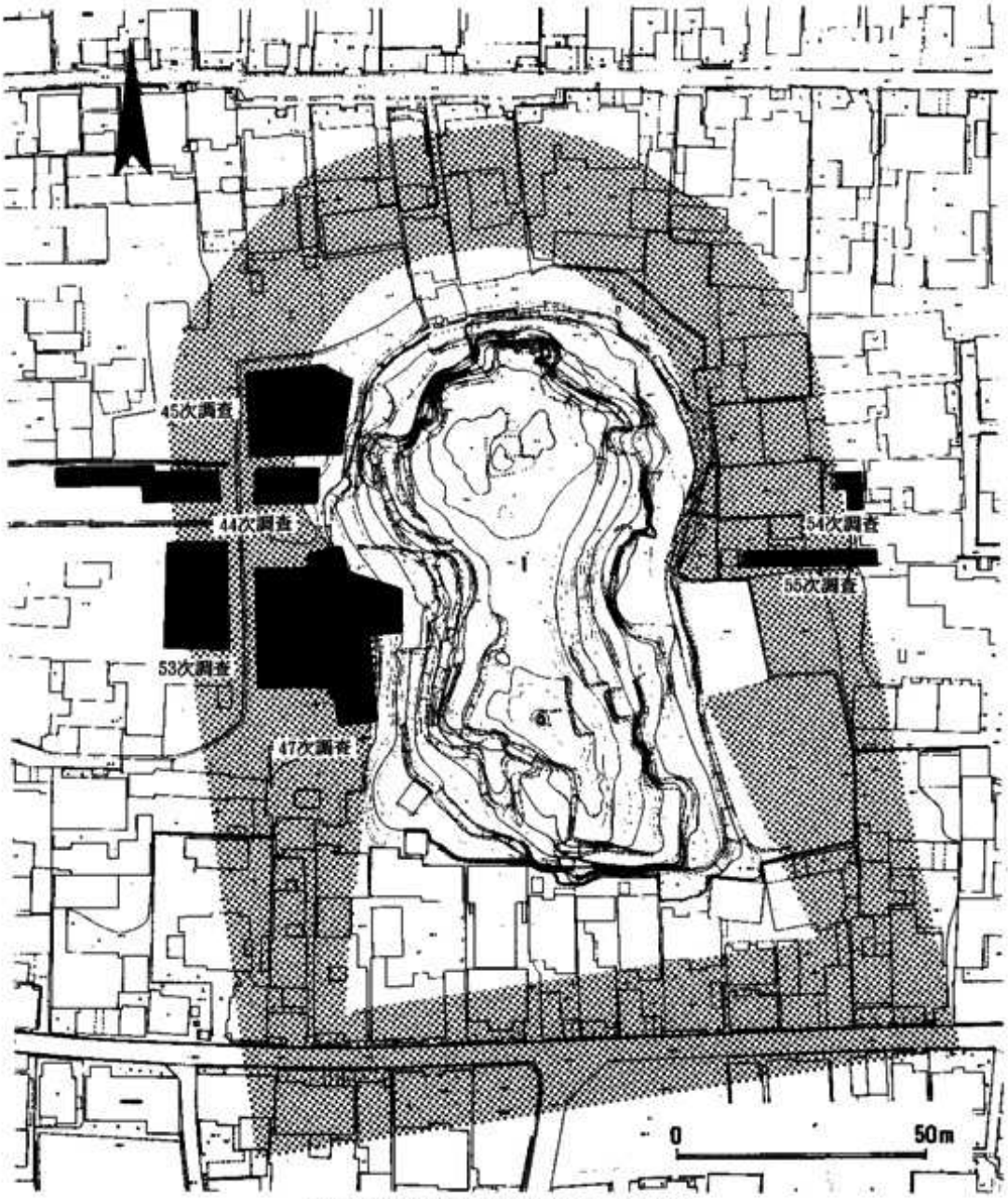


第252次調査　遺構平面図

(5) 第54・55次の調査

I はじめに

第54次調査は松本勝氏提出の現状変更許可申請（奈良市大安寺町四丁目７－３）、第55次調査は中島信男氏提出の現状変更許可申請（奈良市大安寺町四丁目1117－5、1097）に



杉山古墳と発掘調査位置図（1／1,500）

関わって実施した。調査地が隣接するためここにまとめて報告する。調査地は、史跡大安寺旧境内のうち杉山古墳の東側周濠と外堤が推定される位置にあり、その確認を目的として調査を実施した。調査期間及び調査面積は、第54次調査が平成4年11月30日から12月21日で約24㎡、第55次調査が平成4年11月24日から12月18日で約62㎡である。

なお、これまでに実施した発掘調査（第44・45・47・53次調査）の成果から、杉山古墳は墳丘全長約150m、後円部径82m、周濠を含めた古墳の全長約200mの大型前方後円墳に復原できる。ただし、全長に関しては前方部及び周濠の南端部分が未確認であるため、周辺の調査成果からの推定である。また、遺存する地割から、前方部の東側に造り出しの存在が想定できる。

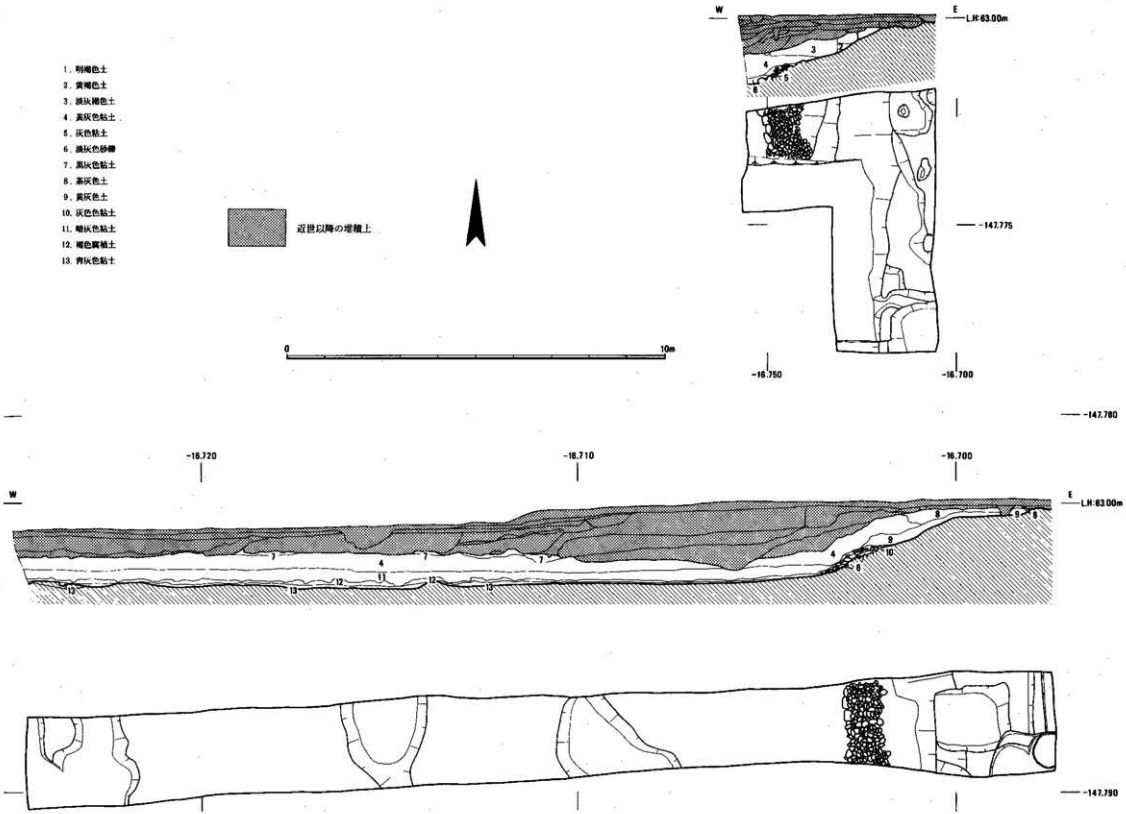
また、天平19年（747年）の『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』には、大安寺の寺地「十五坊」のうち「一坊池并岳」という記載があり、これが杉山古墳に相当すると考えられている。すなわち、大安寺の造営に伴って古墳が寺地内に取り込まれたことがわかる。池は周濠、岳は墳丘にあたり、この記載から古墳を利用した園池の存在を想定することもできるが、これまでに実施した墳丘西側の周濠の調査ではそれを確認できない。今回の調査地が墳丘の東側の周濠にあたることから、西側と異なって奈良時代に利用されていた可能性もあり、調査にあたって留意した。

Ⅱ　第54・55次調査の概要

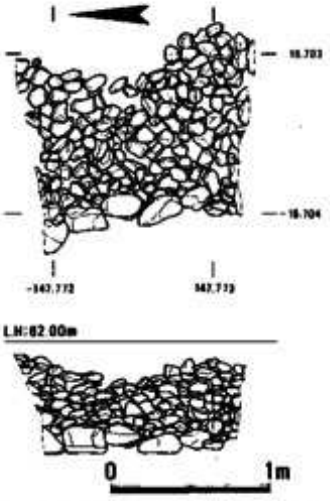
調査の結果、墳丘東側の周濠及び外堤の一部を検出した。外堤の斜面には比較的良好に葺石が遺存していた。

周濠内の基本的な層序は、地表下約0.7mまで近世以降の埋め立て土が堆積し、その下に旧表土の黒灰色粘土（約0.1m）、黄灰色粘土（約0.4m）、暗灰色粘土（約0.3m）、褐色腐植土（約0.1m）、青灰色粘土（約0.1m）と続いて青灰色砂礫の地山となる。周濠底の標高は概ね60.8～60.9mである。

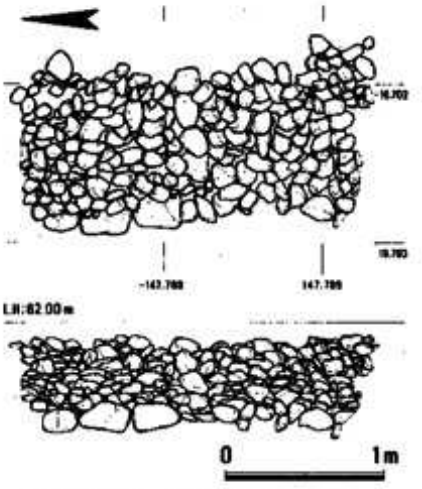
周濠の底は若干の凹凸がみられるもののほぼ平坦で、凹部には全く遺物を含まない青灰色粘土が堆積する。この青灰色粘土は外堤の葺石の下へと続いており、古墳築造時における濠底及び外堤斜面の凹凸の整地を意図したものかと思われる。この上には、古墳時代から奈良時代にかけて褐色腐植土が堆積する。褐色腐植土層には多量の植物遺体とともに木製品や埴輪片が含まれる。墳丘西側の周濠内でもこの層を確認しているが、大安寺の造営に伴い壊された外堤の排土で一部が埋め立てられたことが判明している。このような状態から、大安寺の造営以前には古墳の周辺で自然の環境が維持されていたものと考えられよう。また外堤の葺石の上にまでは褐色腐植土層の堆積が及ばず、高い水位は想定できない。水が流れていた痕跡もなく、周濠はほとんど空濠の状態であったとみられる。奈良時代以降は、古墳の周辺の環境の変化とともに周濠内が富栄養化して、近世に至るまで灰色系粘土が堆積する。近世以降、周濠は東側から少しずつ埋め立てられるが、この中には埴輪片



第54・55次調査　遺構平面図・発掘区北壁土層図（1／100）



第54次調査　外堤葺石（1／50）



第55次調査　外堤葺石（1／50）

を多く包含する層も認められ、墳丘東側の土取り跡はこの頃のものと思われる。

外堤の葺石は、高さ約0.5mまでが遺存していた。基底石の下端の標高は概ね61.3mであり、両調査区の葺石は基底がほぼ水平に揃っている。基底石には大きめの石を配し、その上に小ぶりの石を積み上げる。第55次調査区では区画石列を確認しており、区画ごとに石積みが行われている。第54次調査区では貼り付けるように石が葺かれているのに対して、第55次調査区では石を小口積にする箇所も認められた。遺存している葺石面の角度から外堤の傾斜角は概ね27°である。葺石に使用された石材の岩石種は花崗岩が大半を占め、他に片麻岩、チャート、安山岩が認められた。

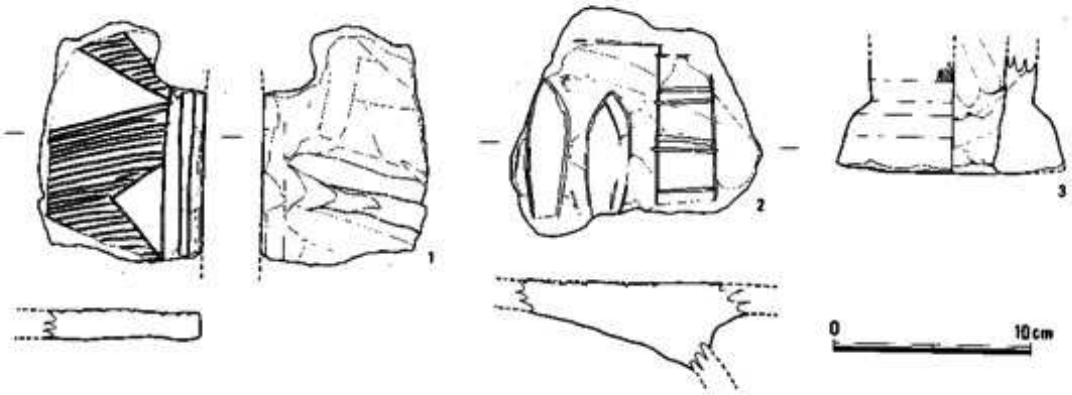
外堤斜面の堆積土からは、多くの円筒埴輪片とともに盾形埴輪、靫形埴輪、動物埴輪の破片が出土しており、外堤上に埴輪が樹立されていたことが知れる。この中には埴輪の基底部の破片もみられることから、埴輪列は後世の削平によって遺存していないと思われる。そのため外堤には盛土が確認できないが、東から西に向かって傾斜する地形からみて、東側外堤は地山を削り出して構築された可能性が高かろう。また、葺石の基底石が周濠底から外堤斜面にそって約0.4m上がった位置にあり、これを基底する残存する外堤の高さは約1.6mである。外堤の幅は未確認のため不明である。

なお、第55次調査区は造り出しの推定位置に近接しているが、それに関わる知見を得ることはできなかった。

Ⅲ　出土遺物

出土遺物には、埴輪、須恵器、土師器、陶磁器、瓦、木製品がある。このうち埴輪、瓦、木製品について主なものをとりあげて記述しておく。

埴　輪　円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪がある。埴輪はすべて無黒斑で、須恵質のものもある。円筒埴輪にはB種ヨコハケが認められることから、川西編年のⅣ期に相当す



出土形象埴輪（1／4）

る。出土遺物全体の整理が完了していないので、ここでは形象埴輪についてその概要を記す。1は盾形埴輪の破片である。盾面には三条の沈線で縁どりした後に鋸歯文が線刻される。裏面にはこれを支えるための凸帯が貼り付けられている。2は靫形埴輪の破片である。柳葉式の鉄鏃を背板と同一面に描き、鏃部を囲む矩形の線刻がみられる。3は動物埴輪の脚部の破片と思われる。他に寄棟造の家形埴輪の破片が出土している。

瓦　類　奈良時代の丸瓦、平瓦、塼とともに軒平瓦6664A 1点、平安時代以降の軒丸瓦1点が出土している。

木製品　褐色腐植土層から多くの自然木が出土したが、その中に一部を加工したものが1点ある。長さ207cm以上、直径7cmの自然木の一端を尖らせ、そこに長さ7cm、深さ2cmの刳り込みが施されているものである。また、長径20.3cm、短径19.4cmの円板形木製品が1点出土している。厚さ0.6cmの板目材を使用したもので、周縁にそって四箇所に径0.2～0.3cmの小孔があけられている。第53次調査を実施した墳丘西側の周濠内からも類似した円板形木製品が2点出土している。曲物の底板の可能性がある。

Ⅳ　まとめ

杉山古墳では、墳丘の西側において整備に伴う4次の調査を実施し、墳丘裾、周濠、外堤を確認している。しかし、後世に著しい改変を受けた本墳の正確な規模を復原するまでには至っていない。今回の調査で墳丘東側の外堤を初めて確認し、周濠の形態を復原する上で良好な資料を得ることができた。またこの調査によって、古墳の現状に至るまでの変遷を具体的に知ることができるようになった。前方部南端が大安寺造営時の南側周濠の埋立て、整地、瓦窯の構築によって破壊されたと考えられるのに対し、後円部は近世以降の畑地の造成等に伴う土取りによって破壊された可能性が高いものと思われる。後円部東北側の周濠内で実施した第35次調査においても周濠が16世紀末から17世紀初頭以降に埋め立てられたことが判明しており、今回の調査成果と矛盾しない。なお、奈良時代に周濠が何らかの形で利用されていた痕跡を認めることはできなかった。　（鐘方正樹　久保邦江）

(6) 第56次の調査

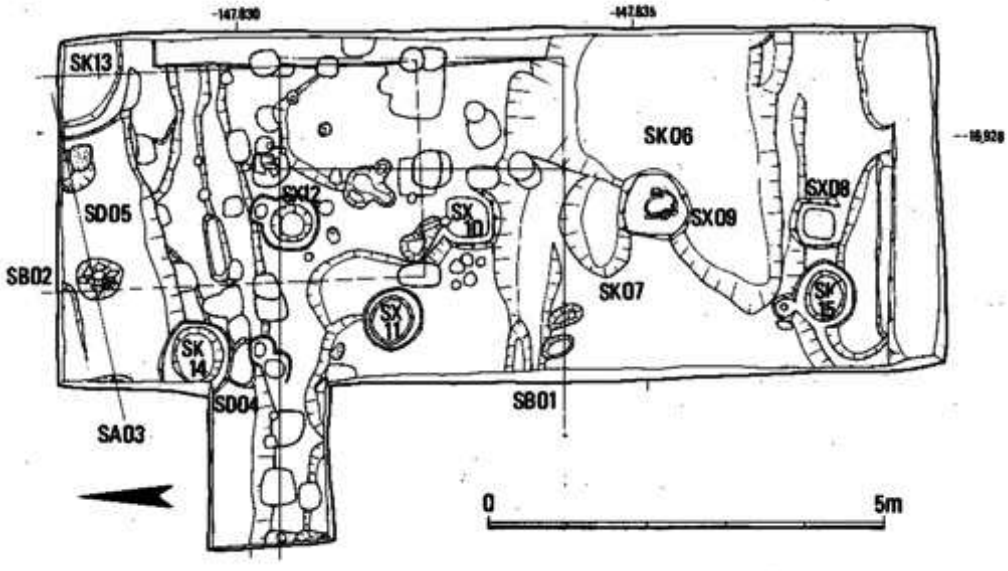
本調査は、奈良市大安寺四丁目1051、1053－3で実施した、大西敬晧氏提出の現状変更許可申請に関わる発掘調査である。調査地は、金堂跡の北170m、大安寺の伽藍復原によると食堂并大衆院に推定される地区の一画である。同地区内では、これまでに10次の調査を行っているが、大安寺に関する遺構の検出例はない。調査は、約53㎡の発掘区を設定し、平成5年2月10日から2月25日に行った。

発掘区内の層序は、現在の住宅建設時の整地土の下に瓦片や14世紀の土師器、瓦器片を包含する暗褐色土（約0.2m）があり、現地表下約0.3mで黄褐色粘土の地山に達する。地山上面の標高は概ね60.9mである。暗褐色土上面と地山上面の二面で遺構を検出した。

暗褐色土上面では、小穴、土坑を検出した。小穴SX08～SX12は、柱掘形であるものもあると考えられるが、発掘範囲が限られていることもあり建物としてはまとまらない。小穴からの出土遺物が少なく、時期は決定できないが、小穴SX09には、柱を取り巻くように配された軒平瓦（6712A）1点、平瓦7点が残っていた。

地山上面では、掘立柱建物SB01・SB02、掘立柱塀SA03、溝SD04・SD05、土坑SK06・SK07、小穴を検出した。建物SB01は全体の規模は明らかではないが、東廂付東西棟建物に、建物SB02は南北棟建物になると考えられる。溝SD05からは奈良時代の軒瓦（6138C、6712A）、平安時代以降の軒丸瓦、11～14世紀の瓦器、土師器が、溝SD04、土坑SK06・SK07からは、塼、奈良時代の軒瓦（6231種別不明、6661B）及び平安時代以降の軒丸瓦が出土した。

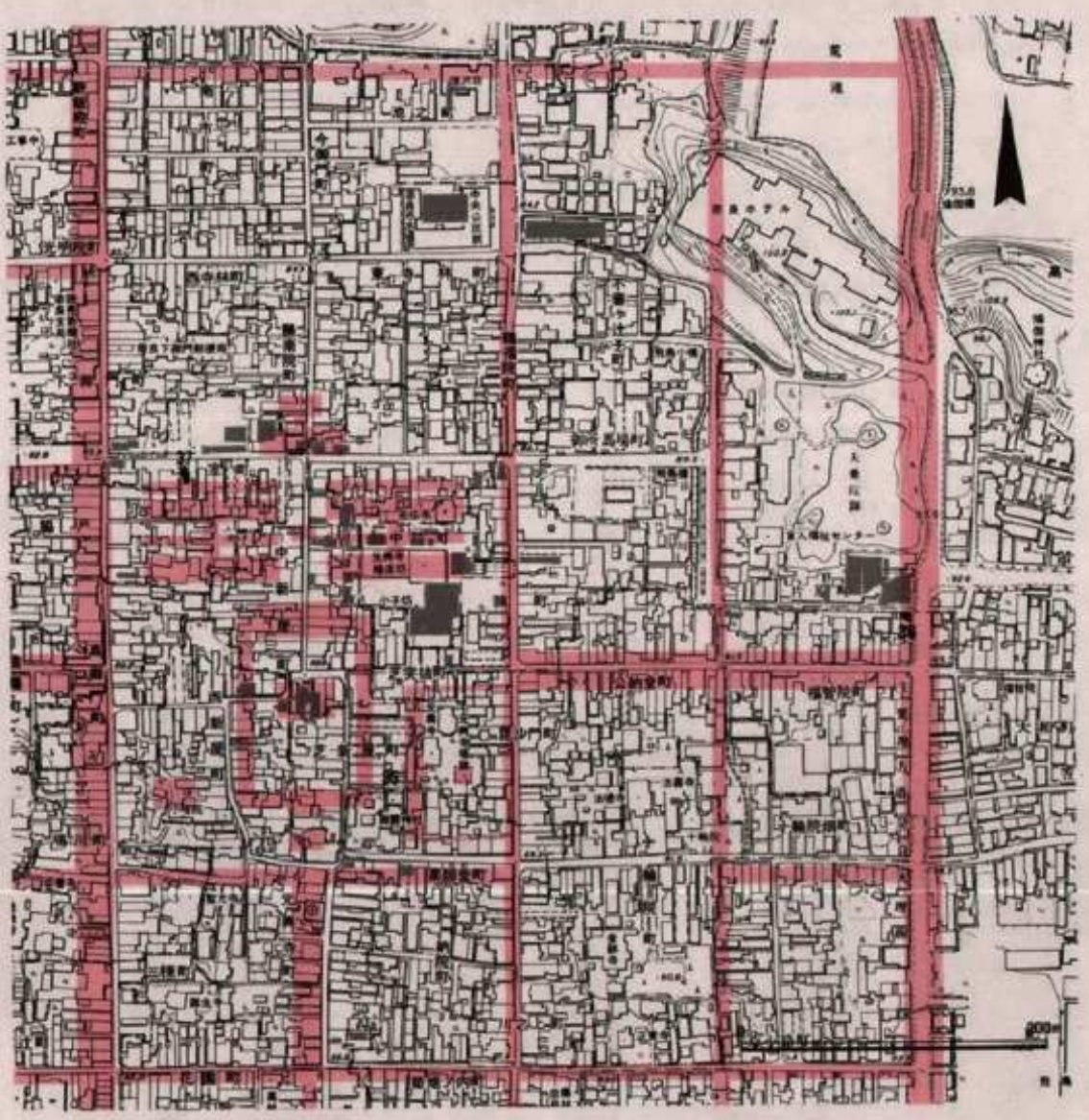
（三好美穂）



第56次調査　遺構平面図（1／100）

2　元興寺旧境内の調査

元興寺旧境内では、第35次～第37次の３件の発掘調査を実施した。第35次、第37次調査は個人住宅の建て替え、第36次調査は都市計画道路建設に伴う調査である。第35次調査は東回廊推定地のすぐ東で、第36次調査は禅定院推定地区の一画、名勝旧大乗院庭園の南約30ｍの地点で実施した。いずれも小規模な調査であり、伽藍、園池に関わると考えられる遺構は検出できなかった。第37次は西北行小子坊推定地で実施した。小子坊の遺構は確認できなかったが、明治時代頃の水琴窟を検出し、地域の変遷史に一資料を追加した。



元興寺旧境内発掘調査位置図（１／5,000）

（1）　第35次の調査

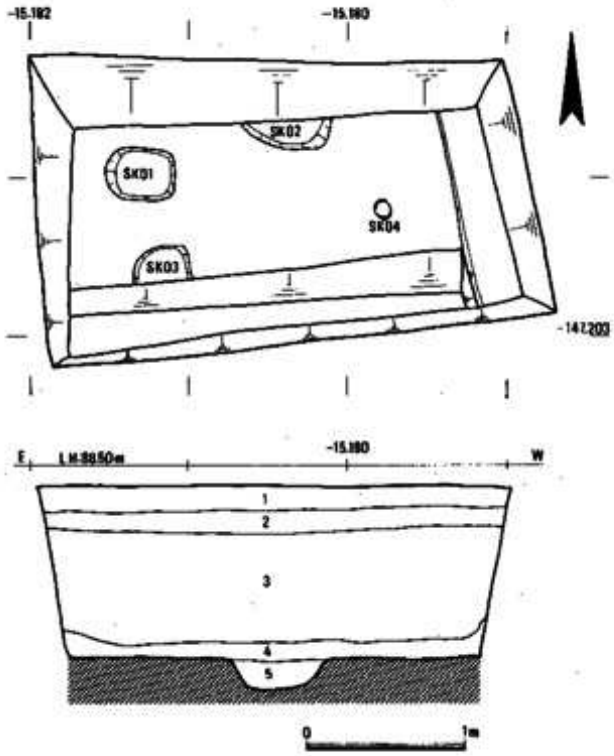
本調査は奈良市芝新屋町12－1番地において実施した、前田功二氏届出の個人住宅改築に伴う発掘調査である。調査地は、元興寺の伽藍復原では東回廊の南東隅付近に該当している。また、調査地の東北東約40mには塔の基壇跡があり、元興寺に関わる遺構の確認が期待された。発掘区は東西約3m、南北約2m、面積約6㎡の規模で設定した。調査期間は平成5年5月6日から5月13日である。

発掘区内の層序は、地表から約1.0mは近世以降の造成土で、その下に暗茶褐色粘質土が約0.2mあって、黄灰色礫土の地山に至る。地山上面の標高は概ね87.4mである。遺構検出作業は地山上面で実施した。

調査の結果、検出した遺構は土坑4基で、当初想定していた元興寺の東回廊の遺構は検出できなかった。土坑SK01・SK02・SK03・SK04はそれぞれ径0.1～0.6m程度の平面円形掘形の土坑で、深さは0.05～0.15mと浅い。埋土からはそれぞれ少量の遺物が出土したが、いずれの土坑も時期は明らかにしえなかった。

ところで、今回の調査で検出した地山上面の標高は、塔の基壇跡上面の標高に比べると約2.4m低くなっている。奈良時代の塔基壇の高さを参考にすると、この高低差は大き過ぎると考えられる。安政6年（1859）に塔が焼失した後に、基壇上に土が盛られたとは考えがたく、さらに過去に周辺で実施した各調査において検出した地山の上面の標高と比較しても、今回の調査地の標高の方がやや低い。こうしたことから、発掘区の周辺では地山が削平されている可能性が指摘できる。

本調査では、面積上の制約もありこれ以上の追求は困難であり、今後の周辺での調査を待って再検討したい。　　（武田和哉）



1　造成土
2　黒灰色土（土器・瓦を大量に含む）
3　暗褐色土（瓦・礫を含む）
4　暗茶褐色粘質土
5　明灰色粘質土

第35次調査　遺構平面図・発掘区北壁土層図（1／50）

（2） 第36次の調査

Ⅰ はじめに

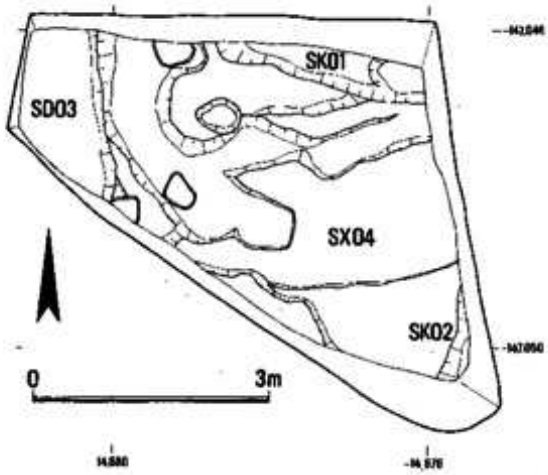
本調査は奈良市福智院町2番地の3において実施した、都市計画道路杉ケ町高畑線建設に伴う事前の発掘調査である。調査地は、元興寺の伽藍復原によると禅定院推定地区の東南隅にあり、また名勝旧大乗院庭園にも隣接している。調査地のすぐ北では、元興寺旧境内第25次・第29次・第32次・第34次調査で、大乗院庭園の園池が現在の園地よりも南に広がることを確認し、庭園の南限にあたると思われる東西溝を検出するなどの成果を得ている。調査は、約18㎡の発掘区を設定し、平成4年10月1日から10月7日に行った。

Ⅱ 検出遺構

発掘区内の層序は攪乱のため均一ではないが、基本的にはかつての住宅建設時の整地土以下、土師器片を包含する黒褐色土（約0.4m）、淡灰色砂質土（約0.1m）、褐色礫土（約0.5m）があり、現地表下約1.2mで黄褐色砂礫の地山に達する。地山上面の標高は概ね90.7mである。褐色礫土上面と黄褐色砂礫上面で鎌倉時代以降の土坑や柱掘形を検出したが、禅定院に直接かかわる遺構はなかった。

褐色礫土上面では、柱掘形、土坑を検出した。柱掘形は、いずれも一辺0.3m前後の小さなもので深さ0.1mと浅く、建物としてはまとまらない。埋土から土師器片が出土したものもあるが、細片のため時期は不明。土坑SK01・SK02は、いずれも一部を検出したのみで、大半が発掘区外へ続く。埋土からは鎌倉時代初めの瓦器椀・皿、土師器皿が出土。

地山である黄褐色砂礫上面では、溝を検出した。溝SD06は、南北方向の素掘りの溝である。東西幅1.0mまでを確認したが、西半は発掘区外へ続くため未検出である。深さは0.1m程度と浅い。溝内には、淡灰色細砂が堆積していた。遺物が出土せず、時期は不明である。この他、発掘区の南東から北西に向かって下る溝状の窪みSX04がある。SX04の堆積土は、上、下二層に分けられ、上層は灰色細砂、下層は茶褐色砂礫である。下層からは、平安時代初めの須恵器壺片、鎌倉時代前半の土師器皿、室町時代前半の土師器片が出土した。小範囲の調査であるため、溝SD03、SX04ともに部分的にしか明らかでなく、性格は不明である。 （三好美穂）



第36次調査 検出遺構平面図（1／100）

（3）　第37次の調査

Ⅰ　はじめに

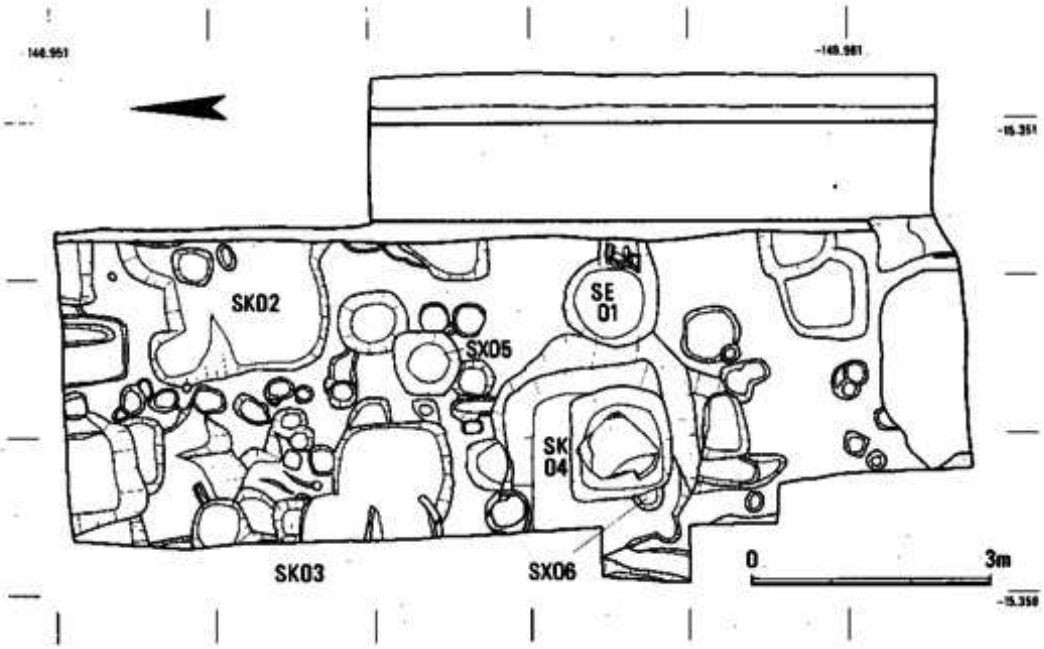
本調査は、奈良市北室町８－１において実施した、秦英子氏届出の個人住宅改築に伴う事前の発掘調査である。調査地は元興寺旧境内の一画にあり、僧坊（西室北階小子坊）が推定される場所である。元興寺の僧坊は、講堂の北に東室と西室が各４棟ずつ、計８棟があったとされる。西室僧坊については、過去に調査例がなく、西室僧坊の遺構の検出を目的として、東西約6.4m、南北約11.5m、面積約58㎡の規模で発掘区を設定した。調査期間は平成５年１月20日から2月5日である。

Ⅱ　検出遺構

発掘区内の基本的な層序は、地表面から0.6～0.5ｍまでは盛土で、その下は春日野台地通有の含礫黄灰色粘土の地山である。発掘区内での地山上面の標高は、概ね88.1ｍである。遺構検出作業は地山上面で実施したが、発掘区の東半部では戦時中につくられたコンクリート地下道のために破壊され、遺構は残存していなかった。検出した遺構は、井戸１基、土坑、溝、水琴窟２基である。

SE01　発掘区中央で検出した平面円形掘形で、径約1.2ｍ、深さ約1.7ｍの素掘りの井戸である。埋土から出土した遺物は少ないが、16世紀初頭の土器類が含まれている。

SK02　発掘区北寄りで検出した東西1.9ｍ以上、南北約2.6ｍの平面が不整形な掘形の土



第37次調査　遺構平面図（１／100）

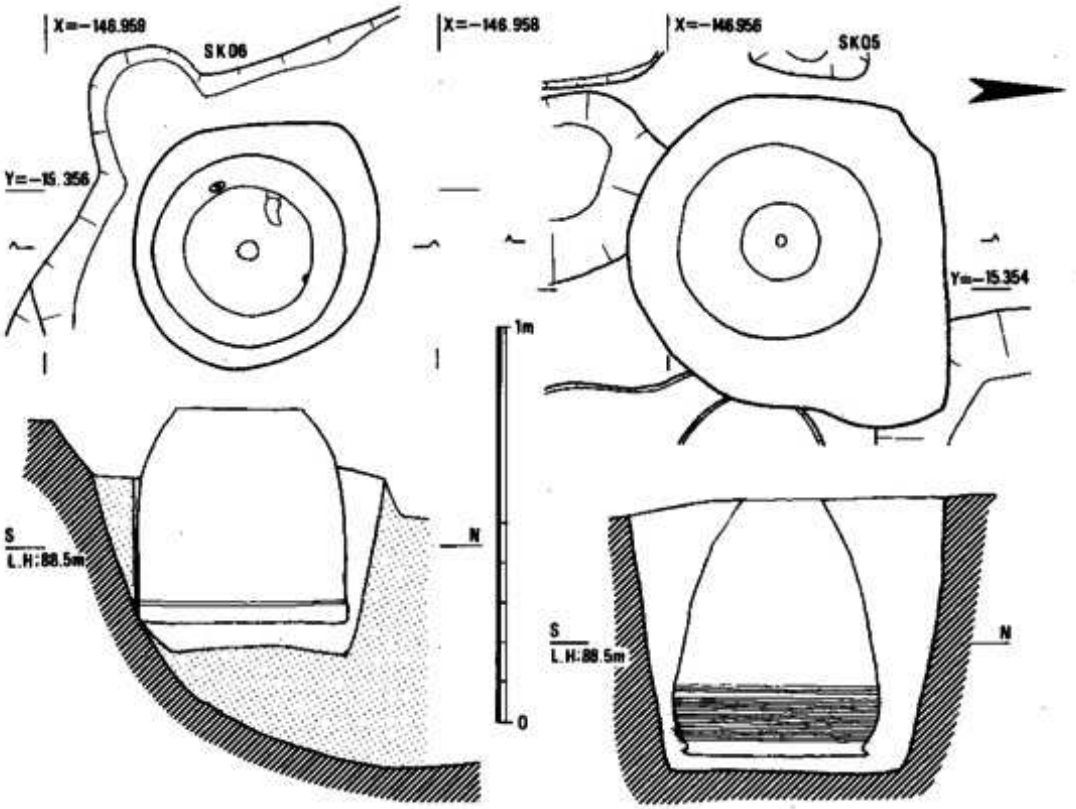
坑で、深さは約0.1mと浅い。埋土からは、18世紀の土器とともに、奈良時代、平安時代の軒丸瓦・軒平瓦および奈良時代の丸瓦・平瓦が多数出土した。

SK03　発掘区西側で検出した土坑である。大半を近世以降の土坑によって破壊されているが、確認した規模は東西0.6m以上、南北0.4m以上、深さ約0.5mである。埋土から13世紀中頃の土器とともに、奈良時代、平安時代の軒丸瓦・軒平瓦および奈良時代の丸瓦・平瓦が多数出土した。この中には元興寺創建時に使用された軒丸瓦も含まれている。

SK04　発掘区中央西側で検出した東西約2.8m、南北約2.6m、深さ約1.9mの平面隅丸方形掘形の土坑。底から長辺約1.0m、短辺約0.8m、厚さ約0.25mの石が出土した。石材は斑糲岩であるが加工の痕跡はない。埋土からは奈良時代の瓦と13世紀の土器が出土した。

SX05　径約0.8m、深さ約0.7mの平面不整形な掘形に、底部を穿孔した甕を上下逆に据えた遺構。掘形の底に厚さ0.1m程度玉砂利を敷き、径約50cm、器高約60cmの甕を伏せ、周囲を玉砂利で埋めている。玉砂利の中から明治時代以降のガラス片や陶磁器片が出土した。

SX06　径約0.6m、深さ約0.65mのほぼ平面円形の掘形に、底部に穿孔した甕を上下逆に据えた遺構。SX04の埋土に掘り込まれており、SX05と同様に径約50cm、器高約55cmの甕を伏せて置き周囲を玉砂利で埋めているが、SX05に比べ周囲の玉砂利の範囲が狭い。



水琴窟SX05・SX06平面・断面図（1／20）

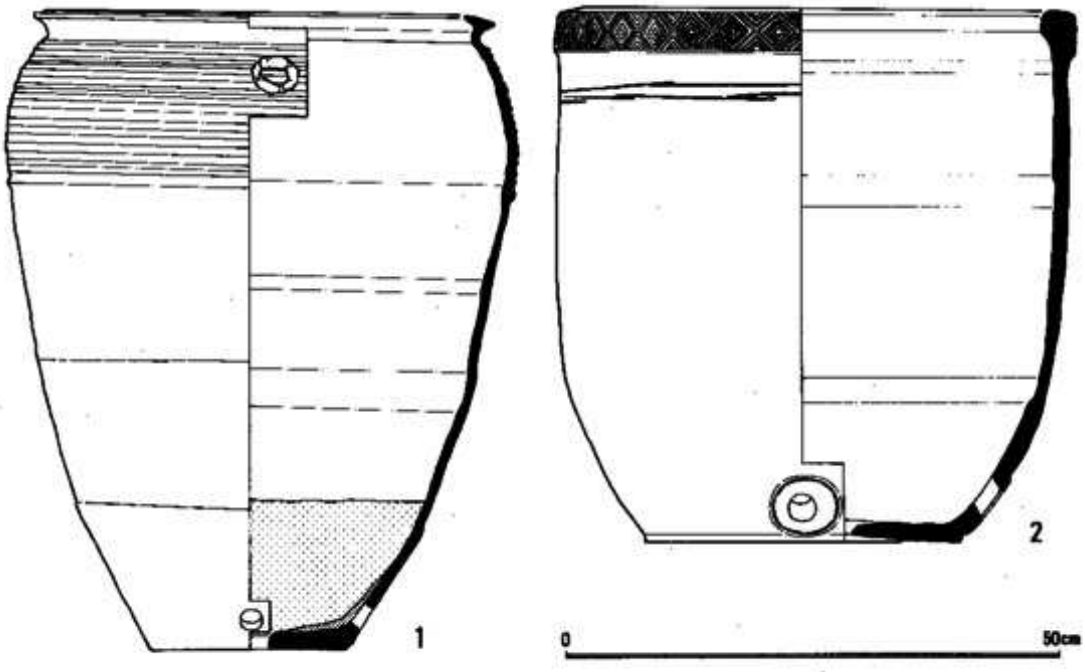
SX05、SX06はいずれも、底部に穿孔した甕を伏せて置いていること、甕の周囲を玉砂利で埋め、音響効果を増す工夫を施していることなどからみて水琴窟であったと考えられる。これらの水琴窟が構築された時期は、玉砂利の中に含まれていた遺物や出土した甕の型式からみて、明治時代以降であると考えられるが、両者の新旧関係や庭内で占める位置については不明である。（武田和哉）

Ⅲ　出土遺物

瓦　類　瓦類は遺物整理箱20箱分出土した。大半が奈良時代の丸・平瓦である。軒丸瓦には、6201A（元興寺創建瓦）１点、平安時代以降の軒丸瓦１点、型式不明１点がある。軒平瓦には、東大寺式軒平瓦１点、平安時代以降の軒平瓦8点、型式不明１点がある。他に塼の破片が３点出土した。（原田憲二郎）

土器類　水琴窟SK08・SK06出土の土器類について概略を記す。

水琴窟SK08の伏甕に用いられていた陶器大甕（１）は、口径44cm、器高64.8cm。底部近くに径２cmの注口がある。底部外面以外の全面に鉄泥を塗る。当初は醤油容器等に用いられていたものと考えられるが、体部にひび割れが生じたため内面に漆喰を塗り、漏れを防ぐと共に注口をも塞いでしまっている。その後に伏甕に転用したとみられ、底部中央に外面から径３cmの穴をあける。信楽窯の製品とみられ、時期的には18世紀代のものと考えられる。伏甕以外に伏甕の裏込め上から出土した磁器染付椀片などがあるが、これらは全



水琴窟ＳＸ05・ＳＸ06出土土器（１／８）

て19世紀後半頃のものと考える。水琴窟SK06の伏甕に用いられた陶器大甕（2）は、口径45cm、器高54cm、底部近くに径3cmの注口がある。口縁部周帯に花菱文を連続して押印する。全面に鉄泥を塗る。やはり当初は醤油容器等に用いられていたものであろう。伏甕に転用する際に、底部中央に外面から径6.5cmの穴をあける。底部外周近くにもう一箇所、径4cm程度の穴をあけているが、穿孔の際に大きく欠けている。常滑窯の製品とみられ、19世紀末以降のものと考える。伏甕以外に裏込め上から磁器染付片などが出土したが、これらも19世紀後半以降のものと考える。（立石堅志）

Ⅳ まとめ

今回の発掘調査では、元興寺創建時の軒丸瓦や、奈良時代の丸・平瓦片が多数出土したが、当初に目的とした元興寺西室僧坊の遺構は確認できなかった。

今回の調査では水琴窟を2基検出した。水琴窟とは、地中に小洞窟もしくは伏甕を設け、その中に水が流れ込むよう細工を施し、それにより生ずる滴水音を地上に反響・漏洩させて音色を楽しむ洞水門のことである。江戸時代に考案され、明治時代頃までは造られていたといわれるが、それ以後はほとんど造られていない。詳細は不明な点が多く、近年になって復原研究が行なわれるようになった。今回の検出例は奈良市内では初例である。

水琴窟は基本的には排水施設であるが、滴水音を発生させるために窟内に適当量の水が溜まるよう工夫されている。その方法はいくつかあり、窟内に水受け用の小型の鉢を入れる例や、伏甕の下に山土を入れて水の浸透を遮断し、水が溜まるようにした例などがある。今回検出した水琴窟には、ともにこうした工夫はみられなかった。ただ、本例が構築されている土層は黄灰色粘土の地山もしくは暗灰色粘土であって、いずれも透水性の乏しい土質である。したがって、上記のような工夫をしなくても事前に一定量の水を注入することによってその機能が得られた可能性がある。また、いずれも窟内に泥などがほとんど堆積していないことから、実際に使用されていた期間は短かったものとみられる。

江戸時代の水琴窟は城郭跡や武家屋敷跡から発見される場合がほとんどであることから、一部の限られた階層に普及していたと考えられている。明治時代以降になると、現存例の分布からみて、比較的幅広く普及していったことがうかがわれる。今回検出した水琴窟が構築されたのは明治時代頃と推定されるが、今回の調査地はいわゆる奈良町の一画にあたり、しかも水琴窟を検出した位置は、伝統的な奈良町の住宅家屋では、坪庭があったと考えられる位置にほぼ該当する。こうしたことから、奈良においても明治時代以降になると、水琴窟が町衆などの階層にも取り入れられたことが推察できる。（武田和哉）

1） 東京農業大学造園学科編『造園用語辞典』 彰国社 1985
2） 「郡山城三ノ丸跡」『奈良県遺跡調査概要』奈良県立橿原考古学研究所 1985
3） 『幻の音風景 水琴窟』日本リゾートセンター 1991

3　新薬師寺旧境内推定地の調査

新薬師寺旧境内推定地では、本年度、第４次と第５次調査の２件の調査を行った。いずれも個人住宅の建て替えに伴う小規模な調査である。新薬師寺については、これまでの調査では、寺域や伽藍配置は明らかになっていないが、現在の新薬師寺を含めてその南西の台地一帯を旧境内地とすることは大方の述べるところである。本年度の調査地は、現在の新薬師寺の北、推定地の北辺にあたる地点である。

これまでの第１次～第３次調査では13～18世紀の遺構を検出し、中・近世のこの地域に関する資料を得ている。本年度の調査では、18世紀、近世の高畑村の遺構を検出したものの新薬師寺に直接関わると考えられる遺構は検出できなかった。

新薬師寺旧境内推定地発掘調査位置図（１／5,000）

（1）　第４次の調査

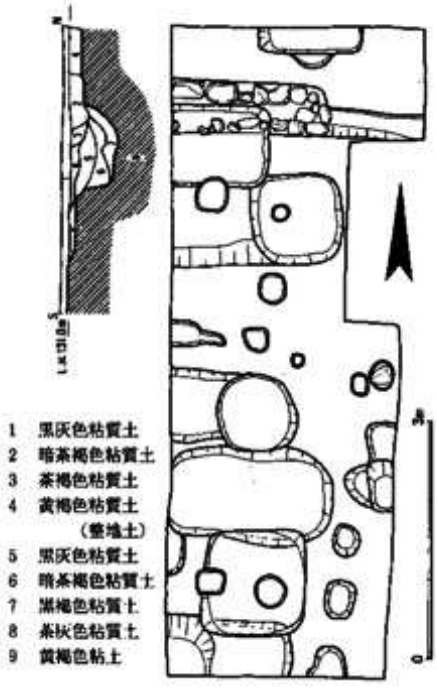
本調査は奈良市高畑町1364－１において実施した、森井義則氏届出の個人住宅建設に伴う事前発掘調査である。

当該地は、新薬師寺旧境内推定復原によれば境内地の北東隅にあたると考えられ、寺域の北及び東を限る築地等の施設の存在が想定された。現在、当調査地の南には奈良時代末に建られたと考えられている本堂が残っており、創建当時は南面して伽藍が建立されていたことが知られているが、従来の周辺の調査では、奈良時代の堂塔に関連すると考えられる遺構は確認されていない。また、調査地の北を東西に通る道路は、近世になると柳生方面への街道として利用されており、近世期の街道に面する町屋の構造についても明らかにすることができるものと期待された。ただ、調査地周辺は東から西へ下る傾斜地にあたり、当調査地と西側の隣家の敷地には約１ｍの段差があり、近世に町並みが形成される際の宅地造成のため、奈良時代の地形が大きく改変されている可能性も考えられた。調査にあたっては、これらのことを考慮し、調査地南西寄りに東西３ｍ、南北８ｍ（面積24㎡）の発掘区を設定した。調査期間は平成４年６月22日から６月29日である。

発掘区内では、表土を除去すると地表下約0.1ｍで、ただちに黄褐色粘土の地山に達するが、部分的には全く覆土がなく、地山が露呈する所も見られた。遺構は基本的にこの地山上面で検出したが、一部近世以降に整地されているところもあり、整地土上面で検出した遺構もある。

検出した遺構には、柱掘形、井戸、溝、土坑がある。これらは出土した遺物から見て、いずれも近世以降に構築されたものである。溝は、整地土上面で検出した宅地内排水用の石組みの溝である。当初想定した寺域を限る築地などの施設はなかった。また井戸、土坑から出土した遺物のほとんどは、18世紀以降のものと考えられる手づくねで作られた粗製の土師器皿で、高杯状に作られたものもある。これらは日常の供膳に用いられたものではなく、多くは寺院において、仏教法要に伴い多量に使用され、ただちに廃棄されるものである。このことから、近世における当地と新薬師寺との関連を想定することができよう。

（立石堅志）



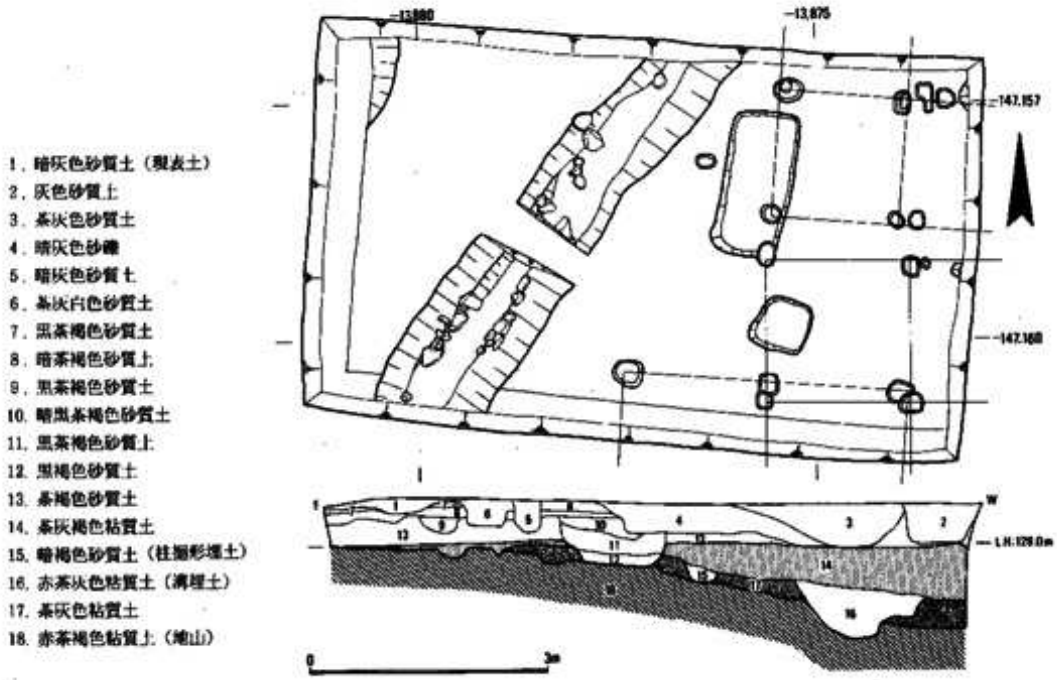
第４次調査　遺構平面図・
発掘区西壁土層図（１／100）

（2）　第５次の調査

本調査は、奈良市高畑町1349番地において実施した太田頼壽氏、太田威夫氏届出の個人住宅建設に伴う事前発掘調査である。当該地は新薬師寺旧境内推定復原によれば、境内地の北端にあたる。発掘区は東西８ｍ、南北５ｍ(面積40㎡）である。調査期間は平成４年９月18日から10月１日である。

発掘区内の層序は、発掘区東端では表土以下、黒茶褐色砂質土、暗茶褐色砂質土、茶褐色砂質土、茶灰褐色粘質土、茶灰色粘質土の順で、現地表下約0.5ｍで砂礫を含む赤茶褐色粘質土の地山に達する。この地山面は西に向かい徐々に下降し、発掘区西端では現地表から1.6ｍまで下がる。発掘区内では、近世から近代にかけて二時期の整地面があり、検出した遺構には礎石建物、掘立柱建物、溝、土坑、柱掘形がある。近世の遺構面は、茶灰色粘質土の整地土上面である。この面で検出した遺構には、溝、柱掘形がある。近代の遺構面は、茶灰褐色粘質土の整地土上面である。ほぼ発掘区東端の地山面の高さに揃うように斜面を埋め、平担面を造成している。この面で建物３棟を検出した。この茶灰褐色粘質土から、18世紀後半の土器類が出土しており、この時期に当該地が宅地として平担に造成されたらしいことが窺えた。

（立石堅志）



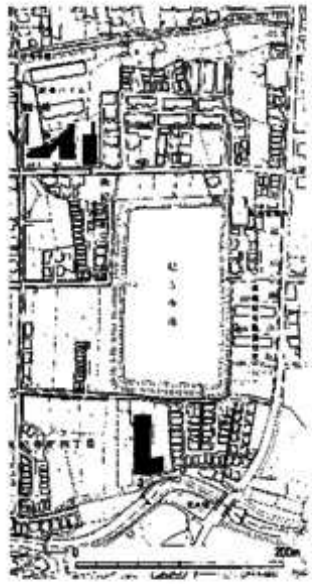
第５次調査　遺構平面図・発掘区南壁土層図（１／100）

Ⅲ　その他の調査

1　南紀寺遺跡の調査　第３次

Ⅰ　はじめに

本調査は、奈良市南紀寺町四丁目130他において、株式会社全日空ビルディング届出の共同住宅建設に伴って実施した事前発掘調査である。調査地は能登川と岩井川とにはさまれた扇状地で、東から西へ緩やかに下降する斜面上に位置している。これまでに能登川南岸で実施した第１次・第２次調査で、古墳時代の岸斜面に石積みのある濠を確認している。今回の調査地はこれまでの調査地から南へ約250ｍのところで、岩井川の北岸に位置し、遺跡の東端にあたる。調査期間は平成３年12月９日から平成４年２月19日で、調査面積は952㎡である。



南紀寺遺跡発掘調査位置図
（1/7,500 数字は調査次数）

Ⅱ　検出遺構

発掘区内の層序は、発掘区東辺では盛土、黒色の耕作土、床土、礫を含む暗灰褐色土と続き、標高99.3ｍ付近で黄褐色土の地山に至る。発掘区中央北寄りで西に向かって緩やかに下降する谷地形となり、そこでは盛土、耕作土、床土、暗灰色土、暗灰褐色土、砂礫を含む暗灰色土と続き、標高98.0ｍ付近で砂礫を含む灰色土の地山に至る。

検出した遺構は、古墳時代の竪穴住居４棟、掘立柱建物２棟、溝７条、土坑５基、飛鳥時代の掘立柱塀１条、溝１条、土坑１基、奈良時代の溝１条である。

SB01　発掘区西辺で検出した平面方形の竪穴住居。南辺と西辺とを確認した。規模は南北2.7ｍ以上、東西3.1ｍ以上で、床面までの深さ0.1ｍが残っていた。周壁溝は確認できなかった。床面で小穴２個を確認した。５世紀後半の須恵器、土師器が出土した。

SB02　SB01の南で検出した平面方形の竪穴住居。東辺を除く三辺を確認した。規模は南北3.2m、東西1.5ｍ以上で、床面までの深さ0.05ｍが残っていた。西辺と南辺に沿って部分的に幅約0.25ｍの周壁溝を確認した。また、西辺から東へ約１ｍのところで間仕切り溝かとも思われる南北方向の溝を長さ0.8ｍ分確認した。幅0.15m、床面からの深さ0.05ｍである。床面の二箇所に炭混じりの焼土があり、そのうち、北側の焼土は、深さ0.1ｍほどのくぼみに堆積している。５世紀後半から６世紀前半までの須恵器、土師器が出土した。

SB03　SB02の南西で検出した平面方形の竪穴住居。南辺を除く三辺を確認した。規模は南北3.5ｍ以上、東西3.7ｍであり、床面までの深さは0.1ｍが残っていた。北辺と東辺に

沿って周壁溝を確認した。北辺の溝は幅0.55m、東辺の溝は幅0.20mであり、北辺の溝からは細かく破砕された土師器が多く出土した。床面中央で炭混じりの焼土を確認した。また小穴1個を床面中央で確認した。6世紀前半の須恵器、土師器が出土した。

SB04　発掘区中央東寄りで検出した平面方形の竪穴住居。削平が著しく、西辺を除く三辺の周壁溝のみを確認した。規模は南北4.2m、東西2.4m以上である。周壁溝は幅0.15～0.25mが残る。

SB05　SB04の北で検出した東西、南北ともに2間（3.0m）の掘立柱建物で、中央に床束と思われる小穴がある。柱間寸法はともに1.5m等間である。建物の振れは国土方眼方位北に対しN15°Wである。（以下、建物・塀の振れは国土方眼方位北に対してのものである。）

SB06　発掘区北半の東寄りで検出した桁行3間（3.5m）以上、梁間2間（3.5m）の掘立柱建物。後世の破壊のため南妻柱列を欠くが、桁行4間、梁間2間の建物になると考えられる。柱間寸法は桁行の東側柱列が北から1.2m—1.8m—1.8mで、西側柱列は北から1.8m—1.6m—1.6mである。梁間は西から1.9m—1.6mである。建物の振れはN17°Wである。

SA07　発掘区南半で検出した掘立柱塀。振れはN25°Eで、南は発掘区外へ続く。5間（14.8m）分を確認した。柱間寸法は北の4間が2.8m等間、南の1間が3.6mである。

SD08　SB06の東で検出した東西方向の素掘りの溝。長さ2.2m分を確認した。幅0.6m、深さ0.28mである。重複関係から建物SB03より新しいことがわかる。

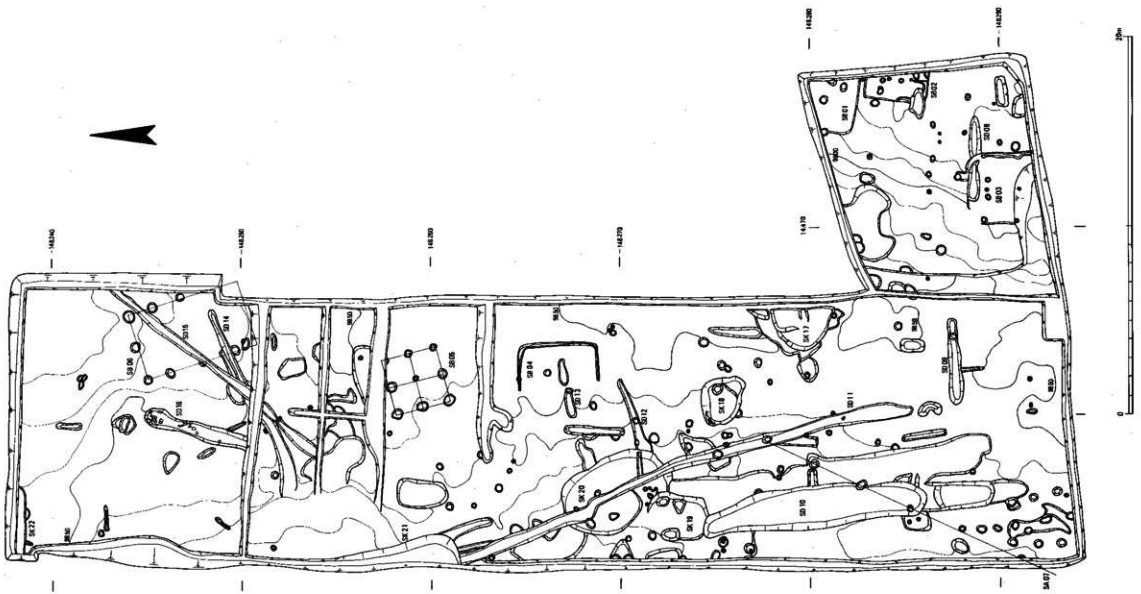
SD09　発掘区南半で検出した東西方向の素掘りの溝。長さ4.5m分を確認した。幅0.8m、深さ0.2mである。

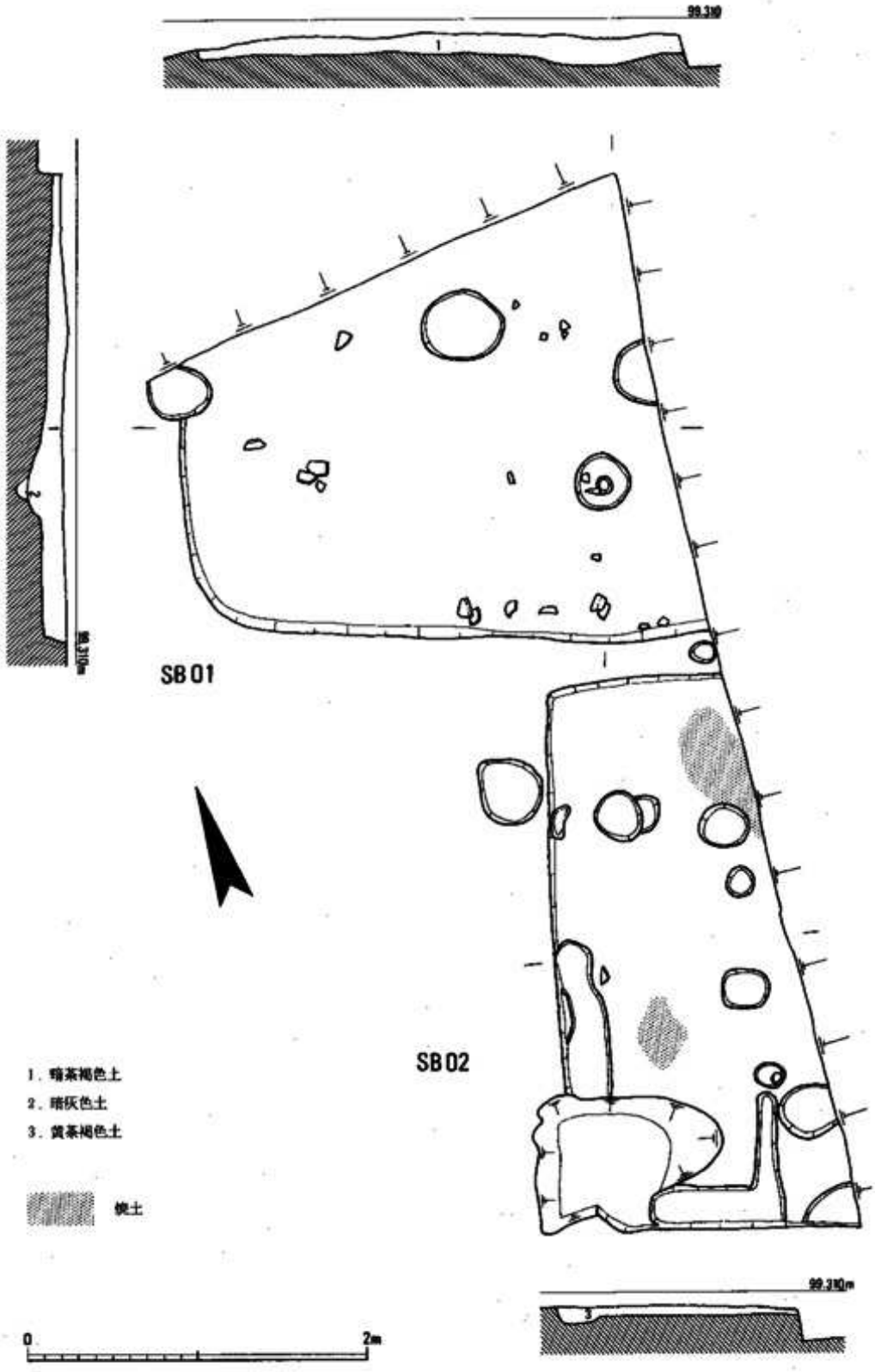
SD10　発掘区南半で検出した南北方向の素掘りの溝。北でやや西に振れる。長さ17.3m、幅2.4m、深さ約0.3mである。南端から5mのところにやや浅い部分がある。埋土は上、下二層に分かれ、下層から5世紀後半の、上層から6世紀の須恵器、土師器が出土した。また上層には、土器と一緒に大量の河原石が投棄されていた。重複関係から塀SA07より古いことがわかる。

SD11　発掘区中央で検出した南南東から北北西方向の素掘りの溝。北は発掘区外へ続く。長さ26m分を検出した。幅0.9m、深さ約0.3mである。南端から約18mのところで鉤手状に曲がる。5世紀後半の須恵器、土師器が出土した。重複関係から塀SD07より古いことがわかる。

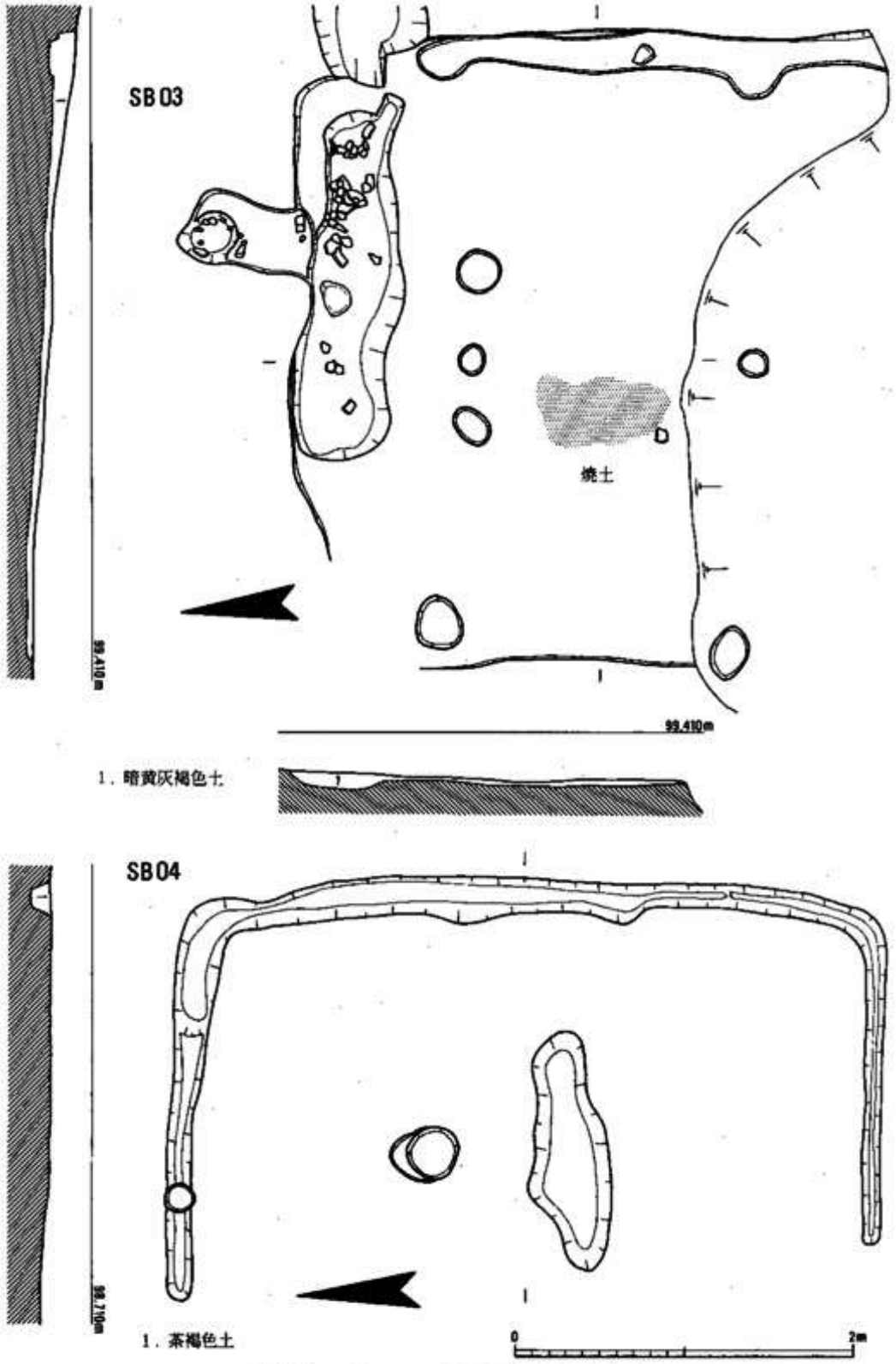
SD12　SD11の東で検出した東北東から西南西方向の素掘りの溝。西は溝SD11につながるものと思われるが、後述する土坑SK20で破壊されており、確認できない。長さ4m分を確認した。幅0.7m、深さ0.05mである。

SD13　溝SD12の北で検出した東北東から西南西方向の素掘りの溝。西は溝SD11につ


SK02
SK01
SK18
SK03
SK40
SK41
SK42
SK43
SK44
SK45
SK46
SK47
SK48
SK49
SK50
SK51
SK52
SK53
SK54
SK55
SK56
SK57
SK58
SK59
SK60
SK61
SK62
SK63
SK64
SK65
SK66
SK67
SK68
SK69
SK70
SK71
SK72
SK73
SK74
SK75
SK76
SK77
SK78
SK79



竪穴住居ＳＢ01・ＳＢ02平面・断面図（１／40）



竪穴住居ＳＢ03・ＳＢ04平面・断面図（1／40）

ながるものと思われるが、これも後述する土坑SK20で破壊されており確認できない。長さ6m分を確認した。幅0.7m、深さ0.05mである。5世紀後半の須恵器、土師器が出土した。

SD14　発掘区北半で検出した東北東から西南西方向の素掘りの溝。長さ10.5m分を確認した。幅0.8m、深さ0.15mである。6世紀後半の須恵器、土師器が出土した。溝の方位は建物SB05・SB06の方位に近いが、重複関係から建物SB06より新しいことがわかる。

SD15　発掘区北半で検出した北東から南西方向の素掘りの溝。北東端は発掘区外へ続く。長さ12.5m分を検出した。幅0.6m、深さ0.15mである。6世紀末～7世紀初頭の須恵器、土師器が出土した。溝の方位は塀SA07の方位とほぼ一致する。重複関係から建物SB06、溝SD14より新しいことがわかる。

SD16　溝SD15の西で検出した北北東から南南西方向の素掘りの溝。長さ5.5m分を確認した。幅1.0m、深さ0.15mである。8世紀の須恵器、土師器が出土した。

SK17　発掘区中央南寄りの東端で検出した平面不整円形掘形の土坑。東は発掘区外へ続く。南北3.4m、東西2.2m以上、深さ0.25mである。6世紀末頃の須恵器、土師器と鉄滓が出土した。

SK18　発掘区中央南寄りで検出した平面不整円形掘形の土坑。南北2.15m、東西2.55m、深さ0.6mである。6世紀後半の須恵器、土師器が出土した

SK19　溝SD10の北で検出した平面不整円形掘形の土坑。南北3.3m、東西2.4m、深さ0.2mである。5世紀後半～6世紀前半の須恵器、土師器が出土した。重複関係から溝SD10より新しいことがわかる。

SK20　土坑SK19の北で検出した平面不整円形掘形の土坑。南北5.6m、東西4.5m、深さ0.3mである。5世紀後半～6世紀前半の須恵器、土師器が出土した。重複関係から溝SD11・SD12・SD13より新しいことがわかる。

SK21　発掘区中央西辺で検出した土坑。東端のみを確認した。南北7.3m以上、東西1.5m以上、深さ0.3mである。5世紀後半～6世紀前半の須恵器、土師器と石臼が出土した。重複関係から溝SD11より新しいことがわかる。

SK22　発掘区北西隅で検出した土坑。南端のみを確認した。南北0.5m以上、東西3.4m以上、深さ0.3mである。5世紀後半頃の土師器が出土した。

これらの遺構は出土遺物と重複関係からみて大きく五期に分けられる。五期の時期、それに属する遺構を以下に示す。

Ⅰ期（5世紀後半）	SB01・SD10・SD11・SD12・SD13・SK22
Ⅱ期（6世紀前半）	SB02・SB03・SB04・SB05・SB06・SK19・SK20・SK21

Ⅲ期（6世紀後半）　SD08・SD09・SD14・SK18

Ⅳ期（6世紀末～7世紀）　SA07・SD15・SK17

Ⅴ期（8世紀）　SD16

Ⅲ　出土遺物

出土遺物には、縄文時代の石器（石匙）・サヌカイト剥片、弥生時代の土器・石器（石包丁）・サヌカイト剥片、古墳時代の土師器・須恵器・製塩土器・埴輪・石臼・棒状石製品、飛鳥時代～奈良時代の土師器・須恵器・瓦・鉄滓がある。

これらのうち、古墳時代の土器について主要なものを報告する。1・2・9・13～15・18～22は溝SD11から、6～8・10・11・16・17は溝SD10下層から、3～5・12は遺物包含層から出土した。

須恵器　全体に破片が多く、完存しているものは少ない。また、窯壁の付着したものや焼け歪みのあるものがあり、焼成の際に自然釉が付着したものも多い。器種は、蓋杯、高杯、壺、器台、甕、甑がある。

高杯　1・2は無蓋高杯、3は有蓋高杯の蓋である。2は形態、技法ともに須恵器の特徴をもつが、通常の須恵器のような堅緻な還元焔焼成でなく、淡い褐色を呈する。

器台　3～5はともに口縁部の破片である。5は端部が残存しており、やや外反する。4・5は外面に櫛描波状文がみられる。3の外面にはいわゆる組紐文の一部か、あるいは振幅の大きい波状文がみられる。

蓋杯　7は蓋、8～10は身である。9・10は口縁端部に内傾する面がある。8は受部が小さく、たちあがりが長い。端部は丸い。

土師器　全体に器壁が剥落しており、調整不明のものが多い。器種は、杯、高杯、鉢、壺、甕、甑があり、そのうち、高杯、杯の出土量が多い。

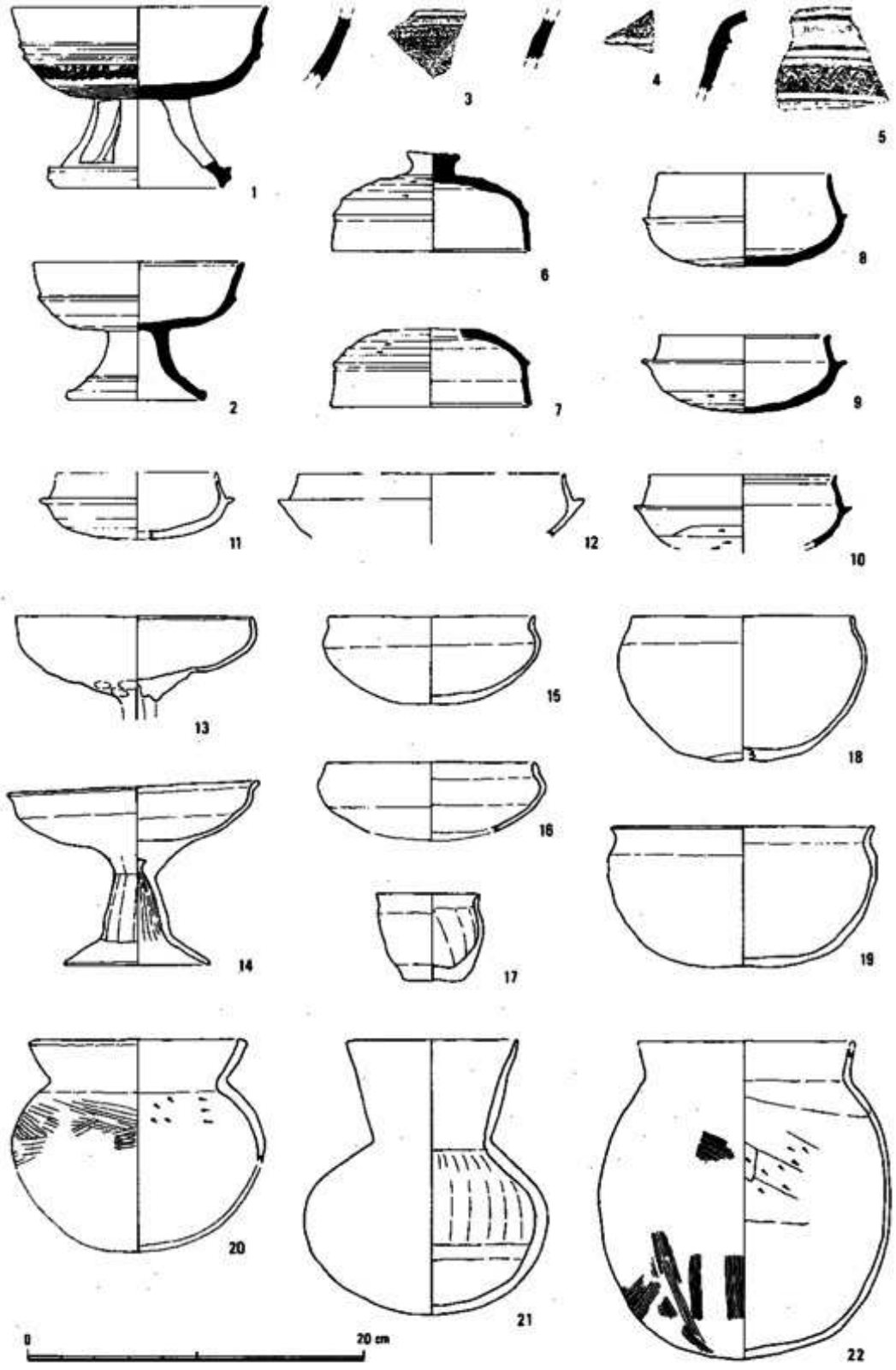
杯　11・12は須恵器の杯を模倣して作られたものである。胎土、焼成、色調はいずれも土師器の特徴をもつが、形態や回転ケズリなどの技法は須恵器の特徴をもつ。11は同時期の須恵器よりひと回り小さい。15は丸底で、口縁端部がやや外反し、16は口縁端部がやや肥厚し、内傾する。

高杯　13は口縁端部が内彎し、14は口縁端部が外反する。14の脚部外面には縦方向の面取りがみられる。

鉢　17は小型品。平底で、内面をタテナデののち、口縁部をヨコナデしている。18・19は大型品。ともに丸底で、18は口縁部が内傾し、19は口縁部が外反する。

甕　20は体部外面に粗いハケ、内面にケズリを施す。22はやや長胴の甕で、体部外面にハケ、内面にケズリを施す。

壺　21は口縁が長く、端部は丸い。体部内面の上部三分の二にはタテナデがみられる。



出土土器（1／4）

Ⅳ まとめ

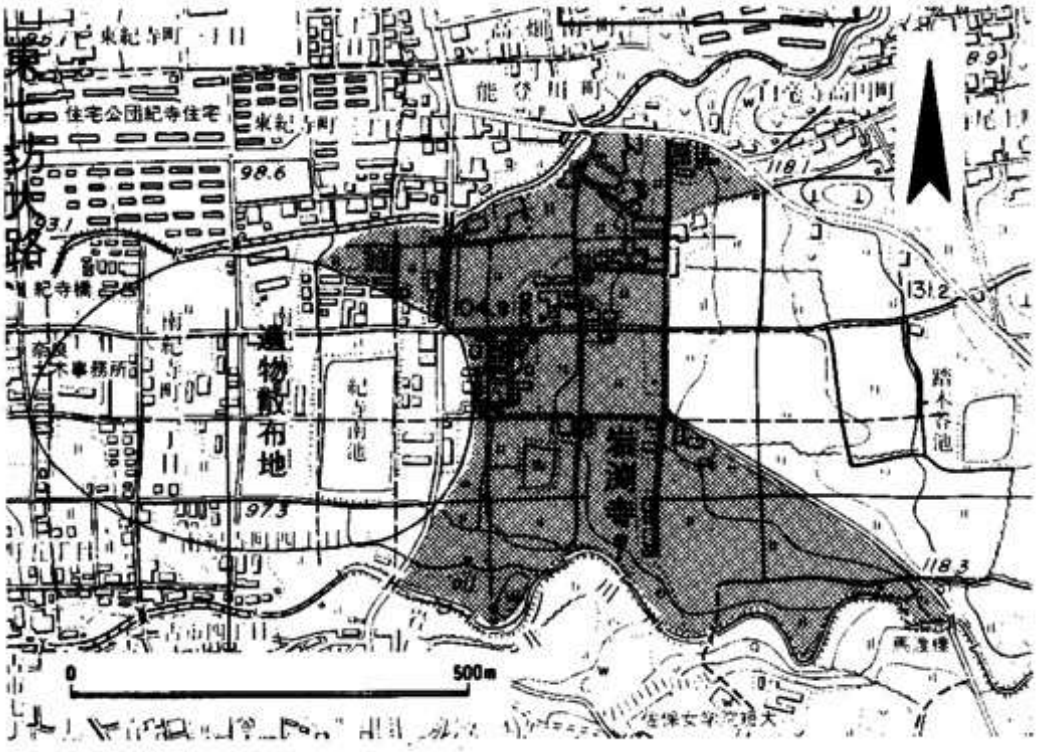
今回の調査では、古墳時代、飛鳥時代、奈良時代の遺構を確認した。そのうち、古墳時代から飛鳥時代の遺構については、竪穴住居、掘立柱建物・塀、溝、土坑を検出したことから、集落跡とすることができよう。

古墳時代から飛鳥時代の須恵器には、窯壁が付着したものや焼け歪みのあるものがあり、調査地の近辺に窯跡が存在した可能性があると考えられる。さらに、須恵器の形態を模した土師器や逆に須恵器であるけれども焼成が良好でなく、いわゆる生焼けの状態となっているものがあり、窯跡や古墳の副葬品以外にはあまり出土例がない須恵器器台も出土していることから、この集落が須恵器製作工人の集落である可能性もある。今後、出土品の型式学な研究や科学分析を行えば、集落の実態がより明らかになると考える。また、第1・2次調査で確認した濠との関係も今後の検討課題である。

（森下浩行）

付 章

今回の調査で、遺跡の範囲がさらに東に広がる可能性があることが判明した。そこで、平成4年6月3日に周辺の分布調査を実施した結果、下図に網目表示した範囲で古墳時代を中心として弥生時代から江戸時代まで各時代の遺物を採集した。



分布範囲図（1／10,000）

Ⅳ　小規模確認調査・試掘調査・工事立会

1　小規模確認調査・試掘調査

本年度、既述の発掘調査以外に、奈良県教育委員会文化財保存課、奈良県立橿原考古学研究所とともに20件の小規模な確認調査と試掘調査を行なった。各調査の概要は表に示した。このうち92－2次調査については本調査の必要があると判断し、奈良県教育委員会の指示のもと、現在届出者と協議中である。

なお、調査図面、写真類は奈良市埋蔵文化財調査センターで保管している。

次数	遺跡名	調査地	届出者・届出内容	調査日	備考
92－1	左京五条七坊十五坪	紀寺町955	米田年男／店舗・共同住宅付住宅建設	4・5／7	地山確認　17～18C土坑検出
92－2	左京四条一坊十六坪	三条添川町123－1 130－1	松出多津子／共同住宅建設	4・5／28	時期不明の柱穴・溝・土坑検出　本調査指示
92－3	右京四条三坊七・十坪坪境小路	八条二丁目952－1 955－1，956－1	川西敏雄／住宅造成・店舗建設	4・6／2	地山確認　遺構なし
92－4	左京五条六坊五坪	西木辻町131－1	羽下ヨシノ／共同住宅建設	4・6／26	地山確認　遺構なし
92－5	左京二条六坊七坪	高天市町11－1	飯田保定／事務所ビル建設	4・6／29	近世土坑・小ピット検出
92－6	右京三条三坊十六坪	芝辻町四丁目 6－18	㈱圭真／事務所・共同住宅建設	4・7／8	地山確認　遺構なし
92－7	興福寺花園推定地	樽井町11，12	㈱三楽堂／店舗付住宅建設	4・7／9	中世土坑など検出
92－8	左京二条一坊十坪	二条大路南二丁目 1－13	日吉晴雄／事務所ビル建設	4・7／17・18	奈良時代土坑　時期不明の溝検出　磨製石斧出土
92－9	左京五条六坊四坪	西木辻町146－5	小林信次／店舗付共同住宅建設	4・9／7	地山確認　土坑状の地山の落み確認
92－10	薬師寺旧境内	五条町～西の京町	奈良市水道事業管理者／配水管改良工事	4・9／16・17	北門推定地　溝もしくは濠確認
92－11	右京北辺三坊五坪	秋篠新町265	植松敬久／共同住宅建設	4・9／18	地山確認　遺構なし
92－12	左京三条四坊三坪	大宮町三丁目 5－39	㈱やまと建設／事務所ビル建設	4・9／25	中世以降の自然流路確認
92－13	右京北辺四坊一坪	西大寺赤田町 674－1	宇山製帽㈱／共同住宅建設	4・10／6	地山確認　遺構なし
92－14	左京八条三坊　坪	八条町849－1	小橋豊子／事務所付倉庫建設	4・11／5	旧河道・地山確認　盛土の増加・工事立会指示
92－15	右京四条二坊十坪	平松町一丁目 11－1・4	福田秀夫／共同住宅建設	4・12／7	地山確認　遺構なし
92－16	史跡大安寺旧境内	大安寺町	奈良市長／公共下水道築造	4・12／14・15	路線上13箇所試掘　土層確認
92－17	左京四条二坊十六坪	四条大路一丁目 720－1	柳田弘之／青空駐車場造成	4・1／19・20	小路側溝・溝・柱穴・土坑検出
92－18	左京二条一坊十坪	二条大路南二丁目 1－19	林出晃三／店舗建設	4・2／16	柱穴検出
92－19	左京四条二坊十坪	四条大路一丁目 750－1	森田幾雄／駐車場造成	5・3／17・18	奈良時代柱穴検出
92－20	左京四条二坊九坪	四条大路一丁目 3－6	久保田美和子／事務所付共同住宅建設	5・3／30	小路側溝検出

2　工事立会

本年度は、奈良県教育委員会の指示にもとずき以下の154件の立会を行った。

番号	遺跡名	調査地	届出者・届出内容	調査日	備考
1	左京五条七坊六坪	築地之内町12	安立須佐三／個人住宅建設	4．4／3	掘削は盛土内におさまる
2	左京八条東一条坊間路	杏町262－1	東雲克之／青空駐車場造成	4．4／4	掘削は遺構面におよばず

工事立会一覧（1）

番号	遺跡名	調査地	届出者・届出内容	調査日	備考
3	左京八条四坊六坪	東九条町620－1	中田正宏／個人住宅建設	4・4／7	掘削は耕作土まで
4	左京四条四坊十坪	三条宮前町244－1, 245	松田光弘／青空駐車場造成	4・4／8	地山面まで土層確認　遺構なし
5	左京九条東二坊坊間路	西九条町三丁目2－26	大西正晴／共同住宅建設	4・4／6・8・21	掘削は遺構面におよばず
6	左京二条四坊十二坪	芝辻町106－7	中田安雄／個人住宅建設	4・4／13	土層確認　遺構なし
7	西隆寺旧境内	西大寺東町一丁目28－40	堂土俊和／個人住宅建設	4・4／13	掘削は盛土内におさまる
8	左京五条一坊三坪	柏木町610－1	林　俊一／個人住宅建設	4・4／13	掘削は遺構面におよばず
9	左京四条一坊六坪	四条大路三丁目906－1, 986－5	福井言重／共同住宅建設	4・4／14	土層確認　遺構なし
10	右京五条四坊一坪	平松三丁目472－4	嶋田吉紘／個人住宅建設	4・4／16	過去の造成時に地山削平
11	左京一条三坊五・六坪坪境小路	法華寺町1276－1	山本二郎／個人住宅建設	4・4／17	掘削は盛土内におさまる
12	左京三条二坊五坪	四条大路一丁目736－3	桜井　武／青空駐車場造成	4・4／17	盛土工事のみ
13	左京二条七坊十六坪	東包永町7－2, 8－2 9－1・2	山本明子／共同住宅建設	4・4／20	掘削は盛土内におさまる
14	右京七条四坊十二坪	七条西町一丁目627－243	今川正裕／個人住宅建設	4・4／23	過去の造成時に地山削平
15	左京一条六坊十六坪一条大路	法蓮町1203－5	久保田康之／個人住宅建設	4・4／23	掘削は盛土内におさまる
16	左京四条二坊一坪	四条大路一丁目814－3	渡文㈱／店舗建設	4・4／28	掘削は盛土内におさまる
17	左京五坊二条大路	芝辻町858－31	荒木かづ江／個人住宅建設	4・5／8	掘削せず
18	左京二条五坊十坪	法蓮町986－1・89	岡本友三郎／個人住宅建設	4・5／18	掘削は盛土内におさまる
19	左京二条四坊七坪	法蓮町381－1	植村俊一／青空駐車場造成	4・5／19	掘削は遺構面におよばず
20	左京七条四坊三坪	東九条町1190－3	畑田至孝／農業用倉庫建設	4・5／25	掘削は盛土のみ
21	左京五条一坊九坪	大安寺町552－2	染川幸三／店舗建設	4・5／25	発掘済　土層確認遺構なし
22	右京六条四坊十坪	六条二丁目1456－5	小林麻造／個人住宅建設	4・5／26	掘削は盛土内におさまる
23	右京一条四坊八坪	西大寺野神野町一丁目590－1・2, 591	桐木　勝／個人住宅建設	4・5／27	土層確認　遺構なし
24	左京四条六坊十六坪	橋本町38, 餅殿町30－2, 31－1	㈱スポーツ館ミツハシ／店舗・事務所付住宅建設	4・5／28	掘削は盛土内におさまる
25	右京三条四坊七坪	宝来町	奈良市水道事業管理者／水道工事（仕切弁設置）	4・5／29	水道配管済再掘削　土層確認　遺構なし
26	左京二条三坊一坪	法華寺町371－8	鮫島邦親／個人住宅建設	4・6／1	掘削は遺構面におよばず
27	元興寺旧境内	公納堂町31	中井敏明　中井隆浩／個人住宅建設	4・6／1	掘削は遺構面におよばず
28	左京九条二坊十坪	西九条町二丁目13－6	辻ノ内久徳／倉庫建設	4・6／2	奈良時代土坑検出　基礎掘削を浅くするよう指示
29	西大寺旧境内・西二坊大路	西大寺新田町519－1・2, 521－1	西口正己／駐車場造成	4・6／5	掘削は遺構面におよばず
30	三条大路・東一坊坊間路	三条大路二丁目561－1地先～大宮町七丁目360－1	関西電力㈱奈良支店／電気工事（地中線管埋設）	4・6／5	掘削は盛土内におさまる
31	元興寺旧境内	高畑町	奈良市長／河川復旧工事	4・6／9	河床・擁壁復旧　影響なし
32	左京九条三坊十坪	東九条町419－1	興野十二郎／配送センター建設	4・6／15	掘削は遺構面におよばず
33	左京六条四坊十五坪東西坊大路	大安寺町980－1	永保徳之／共同住宅建設	4・6／15	掘削は盛土内におさまる
34	左京四条一坊四坪	四条大路三丁目964－1	吉岡安信／個人住宅建設	4・6／15・29	掘削は盛土内におさまる
35	左京六条四坊十六坪	大安寺五丁目973－4・5・7	大西眞一／個人住宅建設	4・6／16	掘削は盛土内におさまる
36	左京二条六坊八坪	法蓮町1007－2・5	加藤　太／個人住宅建設	4・6／18	掘削は盛土内におさまる
37	右京四条二坊七坪	尼辻中町400－1・2・3	田中秀市／個人住宅建設	4・6／24	掘削は盛土内におさまる
38	右京四条四坊四坪	平松三丁目180－1・2	米澤照二／共同住宅建設	4・6／24	土層確認　遺構なし
39	左京六条四坊十五坪	大安寺町929－1	興住宅㈱／共同住宅建設	4・6／25	土層確認
40	西大寺旧境内	西大寺小坊町302－2	松本隆之／個人住宅建設	4・6／25	掘削せず
41	宝来山（垂仁陵）古墳外堤	宝来一丁目101－1	大西　光／個人住宅建設	4・7／2	掘削は盛土内におさまる
42	右京一条西二坊大路	西大寺野神一丁目623－1	岡田光弘／駐車場造成	4・7／7	掘削は遺構面におよばず

工事立会一覧（2）

番号	遺跡名	調査地	届出者・届出内容	調査日	備考
43	左京一条三坊五・六坪坪境小路	法華寺東町1277	川崎健治郎／共同住宅建設	4・7／9	掘削は盛土内におさまる
44	佐伯院推定地	北京終町30－1・11	三田善嗣／個人住宅建設	4・7／16	土層確認　遺構なし
45	池田遺跡	池田町203－4	奈良県総合卸商業団地協同組合／倉庫建築	4・7／20	掘削は遺構面におよばず
46	左京一条三坊十二坪	法華寺町133	アレックスウエル㈱／店舗建設	4・7／22	掘削は盛土内におさまる
47	薬師寺旧境内	西の京町459－1・3・4	中野旦雄／離れ建設	4・7／23	掘削は遺構面におよばず
48	左京五条二坊三坪	大安寺町517－1	昭和シェル石油㈱大阪支店／給油所建設	4・7／29	過去の工事で遺構面削平
49	右京四条一坊七坪	四条大路四丁目1040－1	吉田正一郎／個人住宅建設	4・8／3	掘削は盛土内におさまる
50	右京北辺三坊八坪	西大寺北町二丁目452－2，455－2	松田芳一　㈱三芳／店舗付共同住宅建設	4・8／6	掘削は盛土内におさまる
51	広大池遺跡	池田町287－1	吉田　正／個人住宅建設	4・8／7	土層確認　遺構なし
52	左京四坊二条大路	芝辻町二丁目172－10	㈱富士住建／事務所建設	4・8／7	掘削せず
53	左京四条三条十四坪	三条町622－1	㈱富士住建／事務所建設	4・8／7	掘削せず
54	右京北辺三坊三・四・五・六坪坪境小路	西大寺北町三丁目151－1	㈱富士住建／事務所建設	4・8／7	掘削せず
55	左京五条七条十四坪	紀寺町765－3	榎本忠平／個人住宅建設	4・8／20	掘削は盛土内におさまる
56	右京六条一坊十三坪	六条町102－1	医療法人康仁会／病院建設	4・8／20	掘削は遺構面におよばず
57	右京北辺二坊三坪	山陵町108	加藤敏治／共同住宅建設	4・8／20・21	土層確認　遺構なし
58	右京二坊二条大路	尼ケ辻北町2271－1他	近畿日本鉄道㈱／通信施設建設	4・8／28	土層確認　遺構なし
59	右京二条二条十二坪	西大寺国見町二丁目296－35	上田　浩／個人住宅建設	4・8／28	掘削は盛土内におさまる
60	右京三条二坊三坪	三条大路五丁目263－1・8	吉田秀雄／個人住宅建設	4・9／7	掘削は盛土内におさまる
61	右京六条三坊十五坪	六条一丁目845－1，880－5	森岡敬二郎／個人住宅建設	4・9／9	掘削は盛土内におさまる
62	左京七条四坊三坪	東九条町1192－5	小橋敏治／共同住宅建設	4・9／18	掘削は遺構面におよばず
63	左京五条四坊六坪	大安寺七丁目715	岡田富子／個人住宅建設	4・9／14	掘削は遺構面におよばず
64	新薬師寺旧境内	高畑町626－1	松尾和男／個人住宅建設	4・9／16	土層確認　遺構なし
65	東大寺旧境内	今在家町16－2	西田晴彦／個人住宅建設	4・9／16	掘削は盛土内におさまる
66	左京一条七坊六坪	北半田西町11－1	森川倫秀／住宅増築	4・9／18	掘削は遺構面におよばず
67	右京二条二坊五坪	尼ケ辻北町2270	近畿日本鉄道／事務所建設	4・9／18	土層確認　遺構なし
68	紀寺旧境内推定地	西紀寺町15－3	児玉一博／個人住宅建設	4・9／22	掘削は遺構面におよばず
69	左京八条三坊三坪	杏町594－1	藤谷幸治／共同住宅建設	4・9／24	掘削は遺構面におよばず
70	左京五条四坊十三坪	大安寺町	奈良市長／公共下水道築造	4・10／1	土層確認　遺構なし
71	右京六条四坊一坪	六条一丁目1001－1	中島美登　中島春枝／共同住宅建設	4・10／5	掘削は盛土内におさまる
72	左京六条三坊十三坪	大安寺二丁目38－5	廣岡優佶／共同住宅建設	4・10／6	掘削は遺構面におよばず
73	右京五条四坊十五坪	五条畑一丁目606	大西スマ／宅地造成・共同住宅建設	4・10／7	掘削は盛土内におさまる
74	左京二条三坊六坪	法華寺町197－1	川崎裕久／青空駐車場造成	4・10／9	掘削は遺構面におよばず
75	右京北辺二坊一・二三・四坪	山陵町101，137，136－1～3	西口清司／青空駐車場造成	4・10／12	掘削は遺構面におよばず
76	右京二条三坊十四坪	青野町106－2	仲井正廷／共同住宅建設	4・10／13	掘削は盛土内におさまる
77	左京一条四坊七坪	法連佐保田町523－10	岩野正久／個人住宅建設	4・10／16	掘削は遺構面におよばず
78	左京八条四坊十坪	東九条町817－5	小田広子／個人住宅建設	4・10／20	掘削は盛土内におさまる
79	右京二条二坊十三坪	西大寺国見町二丁目296－43	田出　實／個人住宅建設	4・10／22	掘削は盛土内におさまる
80	左京三条五坊九・十坪	芝辻町～油阪町	奈良市水道事業管理者／水道工事（配水管布設）	4・10／26	水道管配管済再掘削
81	鶯塚山古墳	佐紀町3241－4	永坂孝和／個人住宅建設	4・10／27	土層確認　遺構なし
82	左京八条三坊二坪	杏町543－2	山口吉則／共同住宅建設	4・10／27	掘削は遺構面におよばず
83	左京五条五坊十六坪	大森町6－1・8	㈱テクノケア／事務所建設	4・10／30	掘削は盛土内におさまる
84	薬師寺旧境内	西の京町	奈良市水道事業管理者／水道工事（配水管改良）	4・10／30・31	水道管配管済再掘削　土層確認
85	左京六条三坊十一坪	大安寺二丁目49－1，50	大西良弘／共同住宅建設	4・11／2	土層確認

工事立会一覧（3）

番号	遺跡名	調査地	届出者・届出内容	調査日	備考
86	左京三条三坊二坪	大宮四丁目465	尾家　芳／事務所建設	4・11／4	掘削は盛土内におさまる
87	左京五条六坊九坪	陰陽町10－1	吉田栄嗣／個人住宅建設	4・11／5	掘削は盛土内におさまる
88	左京四坊七条条間路	東九条町	奈良市長／公共下水道築造	4・11／5	既設管再掘削　土層確認
89	右京五条三坊三・六坪	五条二丁目601－58	芝本ユキノ／個人住宅建設	4・11／5	土層確認　遺構なし
90	左京二条三坊五坪	法華寺町226他	隈下商事㈱／店舗建設	4・11／10	掘削は盛土内におさまる
91	右京五条二坊六坪	五条町	奈良市長／公共下水道築造	4・11／10	土層確認　遺構なし
92	唐招提寺旧境内	五条町438	奈良市水道事業管理者／水道工事（配水管改良）	4・11／11	水道管配管済再掘削
93	左京五条一坊九坪	四条大路南町482－42	田中安弘／個人住宅建設	4・11／12	掘削は盛土内におさまる
94	右京七条四坊十一坪	七条西町一丁目609－47	松田圭介／個人住宅建設	4・11／12	土層確認　遺構なし
95	右京六条一坊二坪	六条町167－1	小川又次／青空駐車場造成	4・11／12	掘削せず
96	平城宮松林苑跡	歌姫町1143－2	木下守人／個人住宅建設	4・11／18	掘削は盛土内におさまる
97	左京三条六坊五坪	林小路町39－10, 41－7・8	脇阪昌巳／事務所ビル建設	4・11／18	土層確認　一部で中世以降の遺構確認
98	左京二条五坊十二坪	芝辻北町866－2	村尾敏雄／個人住宅建設	4・11／24	過去の造成時に地山削平
99	右京一条四坊十六坪西四坊大路	西大寺竜王町一丁目1634－1	岡本武雄／共同住宅建設	4・11／25	掘削は盛土内におさまる
100	左京六条四条十四・十五坪坪境小路	大安寺町	奈良市長／公共下水道築造	4・11／30 12／1・2・7	既設管再掘削　土層確認
101	左京五条五坊十五坪	鳴川町25	宗教法人徳融寺／堂舎建設	4・12／2	土層確認　遺構なし
102	左京五条二坊十二坪	大安寺西一丁目350	北側　實／青空駐車場造成	4・12／4	掘削せず
103	平城京宮北方・松林苑跡	佐紀町	奈良市長／公共下水道築造	4・12／9 ～5・3／9	土層確認
104	左京五条二坊九坪	四条大路南町473－7・12	竹田禮二郎／個人住宅建設	4・12／14	掘削は盛土内におさまる
105	左京一条三坊十一坪	法華寺町1351	奈良市長／防球ネット・渡廊下建設	4・12／18	土層確認　遺構なし
106	左京八条四坊十五坪東四坊大路	東九条町718－7	保田正憲／病院建設	4・12／18	掘削は盛土内におさまる
107	右京四条一坊六坪	四条大路四丁目136－2	石田　寿／共同住宅建設	4・12／18	工事先行
108	左京二条四坊二坪	青野町151－1	仲井清司／共同住宅建設	4・12／21	掘削は盛土内におさまる
109	左京二条四坊十六坪	法蓮町357－7	安倉一誠／個人住宅建設	4・12／21・22	土層確認　遺構なし
110	秋篠寺旧境内	秋篠町622－1	上野直司／個人住宅建設	4・12／24	土層確認　遺構なし
111	五社神（神宮皇后陵）古墳外堤	山陵町565－1	片岡章美　片岡時子／個人住宅建設	4・12／25	土層確認　過去の工事で削平
112	左京五条二坊十六坪	恋の窪町	辰巳伊之松／宅地造成	4・12／28	工事先行
113	左京二条三坊八坪	法華寺町343－6	本田勝康／個人住宅建設	5・1／11	掘削は盛土内におさまる
114	二条大路	芝辻町508	㈱辻萬／共同住宅建設	5・1／12	土層確認　遺構なし
115	右京六条三坊六坪	六条一丁目604, 611－2, 612－1・4・5, 613－2	津田アイコ／個人住宅建設	5・1／21	掘削は盛土内におさまる
116	右京四条三坊大路	平松一丁目104－1	福山ウメノ／共同住宅建設	5・1／25	掘削は盛土内におさまる
117	黄金塚古墳隣接地	窪之庄町702	吉本博次　吉本富朗／個人住宅建設	5・1／28	掘削は遺構面に達せず
118	右京五条一坊十六坪	五条町272－1	山本俊夫／個人住宅建設	5・2／2	掘削は遺構面に達せず
119	史跡大安寺旧境内	大安寺四丁目	徳本義憲／塀建設	5・2／3	掘削は遺構面に達せず
120	右京八条一坊一坪	七条町9－1, 10	武田越知雄／資材置場造成	5・2／4	掘削は遺構面に達せず
121	平城宮松林苑跡	佐紀町	奈良市長／公共下水道築造	5・2／4 ～3／19	土層確認　遺構なし
122	左京二条七坊十四坪	川久保町1－1・3	今西克巳／個人住宅建設	5・2／5	掘削は遺構面に達せず
123	左京四条三坊六坪	三条松町167－1	中村鈴子／青空駐車場造成	5・2／5	掘削は遺構面に達せず
124	史跡大安寺旧境内	大安寺四丁目	奈良市長／公共下水道築造	5・2／8	
125	右京四条一坊十六坪	四条大路二丁目99－3	上杉弘一　上杉マサノ／個人住宅建設	5・2／9	掘削は遺構面に達せず
126	左京二条三坊十五・十六坪坪境小路	法華寺町46－5	岡林利彦／個人住宅建設	5・2／9	掘削は盛土内におさまる
127	南紀寺遺跡	南紀寺四丁目	奈良市長／公共下水道築造	5・2／15 ～3／18	土層確認　遺構なし

工事立会一覧（4）

番号	遺跡名	調査地	届出者・届出内容	調査日	備考
128	左京五条一坊七・八坪坪境小路	柏木町35－5,4－1	関西電力㈱奈良支店長／送電線立替	5・2／22	過去の工事で掘削
129	円城寺境内	忍辱山町1273	田畑祐弘／護摩堂建替	5・2／22	土坑確認　工法を協議
130	右京五条三坊九坪	平松一丁目12－19	森田浩正／共同住宅建設	5・2／24	掘削は遺構面に達せず
131	元興寺旧境内	公納堂町14	木村　弘／共同住宅建設	5・2／24	掘削は盛土内におさまる
132	薬師寺旧境内	西ノ京町206	稲葉和功／個人住宅・納屋建設	5・2／25	掘削は遺構面に達せず
133	唐招提寺旧境内	五条町	奈良市長／河川改修工事	5・3／1	既設水路の改修
134	右京三条一坊七・八・九坪　西一坊坊間路	二条大路南四丁目	奈良市長／公共下水道築造	5・3／8～3／22	土層確認
135	左京三条二坊七・八・九坪	二条大路南四丁目	奈良市長／公共下水道築造	5・3／9～3／26	土層確認　遺構なし
136	左京三条五坊十五坪	芝辻町1－18	吉川雅章　吉川　豊／個人住宅建設	5・3／8	掘削は盛土内におさまる。
137	右京四条六坊十一坪	六条町二丁目1473－11	白井史朗／診療所建設	5・3／8	土層確認　遺構なし
138	西大寺旧境内	西大寺北町一丁目365	杉澤一夫／個人住宅建設	5・3／9	掘削は遺構面に達せず
139	右京四条四坊三坪	平松一丁目108－1	中西道夫／共同住宅建設	5・3／10	掘削は盛土内におさまる
140	朱雀大路	六条町335	左野光男／資材置場造成	5・3／12	掘削は遺構面に達せず
141	秋篠寺旧境内	秋篠町	奈良市長／水路改修工事	5・3／12	既設水路の改修
142	左京五条二坊六坪	四条大路南町385－62、385－64	吉岡一郎　吉岡泰子／個人住宅建設	5・3／15	掘削は盛土内におさまる
143	右京三条二坊一坪	二条町三丁目90－10	山本己規男／個人住宅建設	5・3／15	土層確認　遺構なし
144	右京六条三坊十五坪	六条一丁目793	室谷邦和／個人住宅建設	5・3／17	掘削は遺構面に達せず
145	左京六条三坊十二坪	大安寺二丁目42－1 43－1	増田忠彦／共同住宅建設	5・3／18・19	遺構確認記録
146	三条大路	宝来二丁目800－1	岸田金治／個人住宅建設	5・3／19	土層確認　遺構なし
147	右京三条四坊八坪	菅原町612－5・6	伊藤義明　伊藤正典／個人住宅建設	5・3／19	掘削は盛土内におさまる
148	左京五条二坊十坪	四条大路南町420－7	吉川照彦／個人住宅建設	5・3／22	掘削は盛土内におさまる
149	史跡大安寺旧境内	大安寺町	奈良市長／水路修繕	5・3／23～3／31	既設水路の修繕
150	特別史跡平城京左京三条二坊宮跡庭園	三条大路一丁目690－1	奈良市長／パリカー設置	5・3／25	掘削は盛土内おさまる
151	左京三条二坊七坪	三条大路一丁目7－27	十販吉之／個人住宅建設	5・3／26	土層確認　遺構なし
152	右京六条一坊十六坪	六条町254－2・4	紀ノ村威夫／個人住宅建設	5・3／29	掘削は盛土内におさまる
153	右京六条一坊十五坪	六条東町259	上田　實／共同住宅建設	5・3／29	掘削は盛土内におさまる
154	左京一条四坊十二坪	法蓮町706、707－4	井田英一／共同住宅建設	5・3／29	掘削は盛土内におさまる

工事立会一覧（5）

図　版

1　第236・236－2次発掘区全景（垂直写真　左が北）

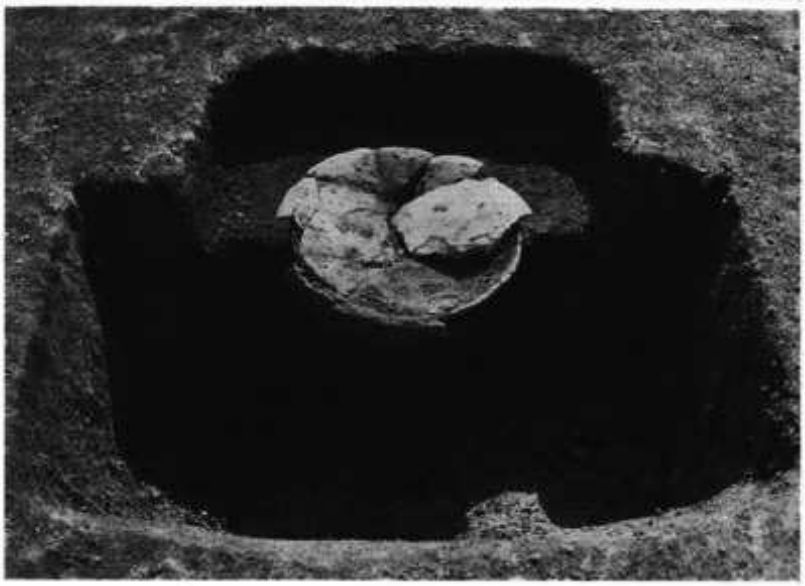
2　第236次発掘区全景
（西から）

3　第236－2次第1発掘区
全景　（北から）

4　第236－2次第2発掘区
全景　（北から）

5　第236－2次第3発掘区
全景　　（東から）

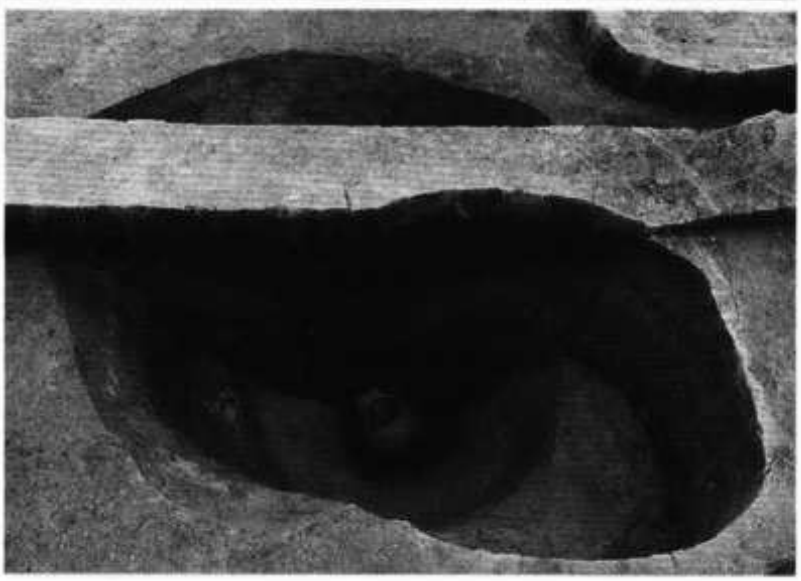
6　井戸ＳＥ111（東から）



7　土器埋納土坑ＳＸ156
（北から）

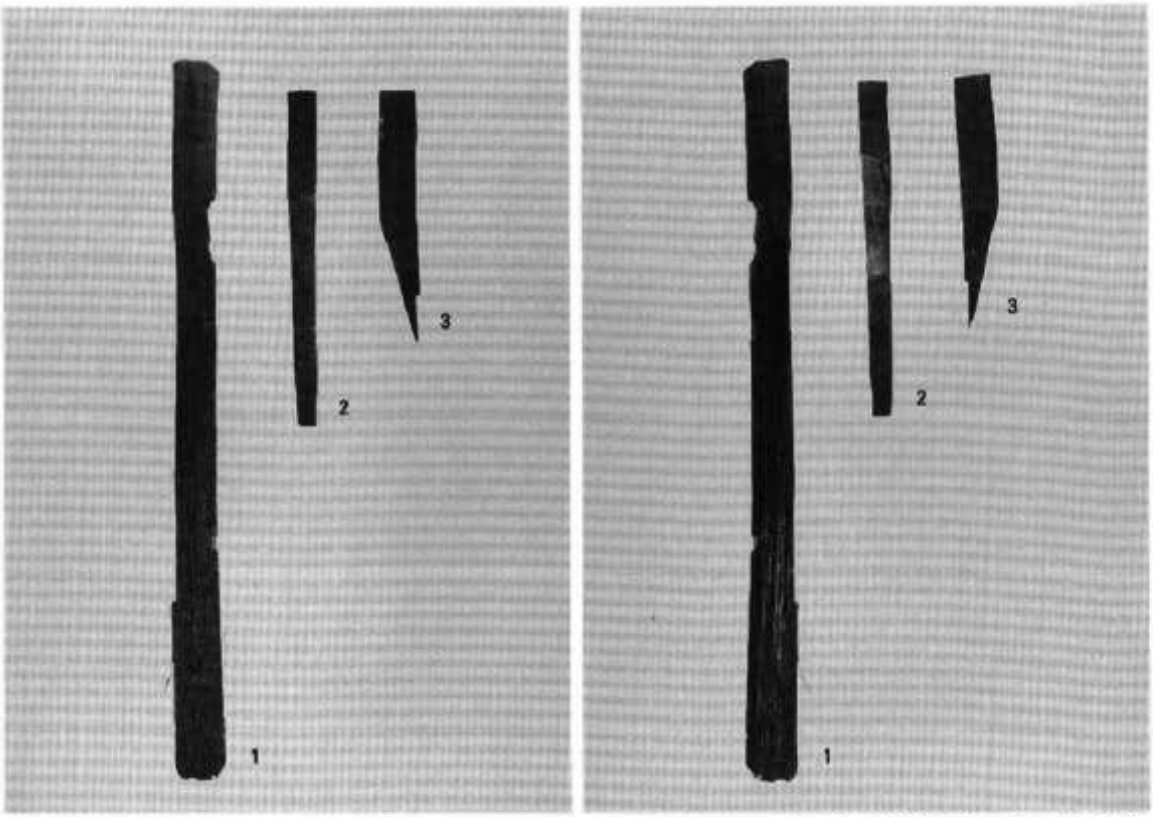
8　土坑ＳＫ02（北から）

9　土坑ＳＫ07（北から）

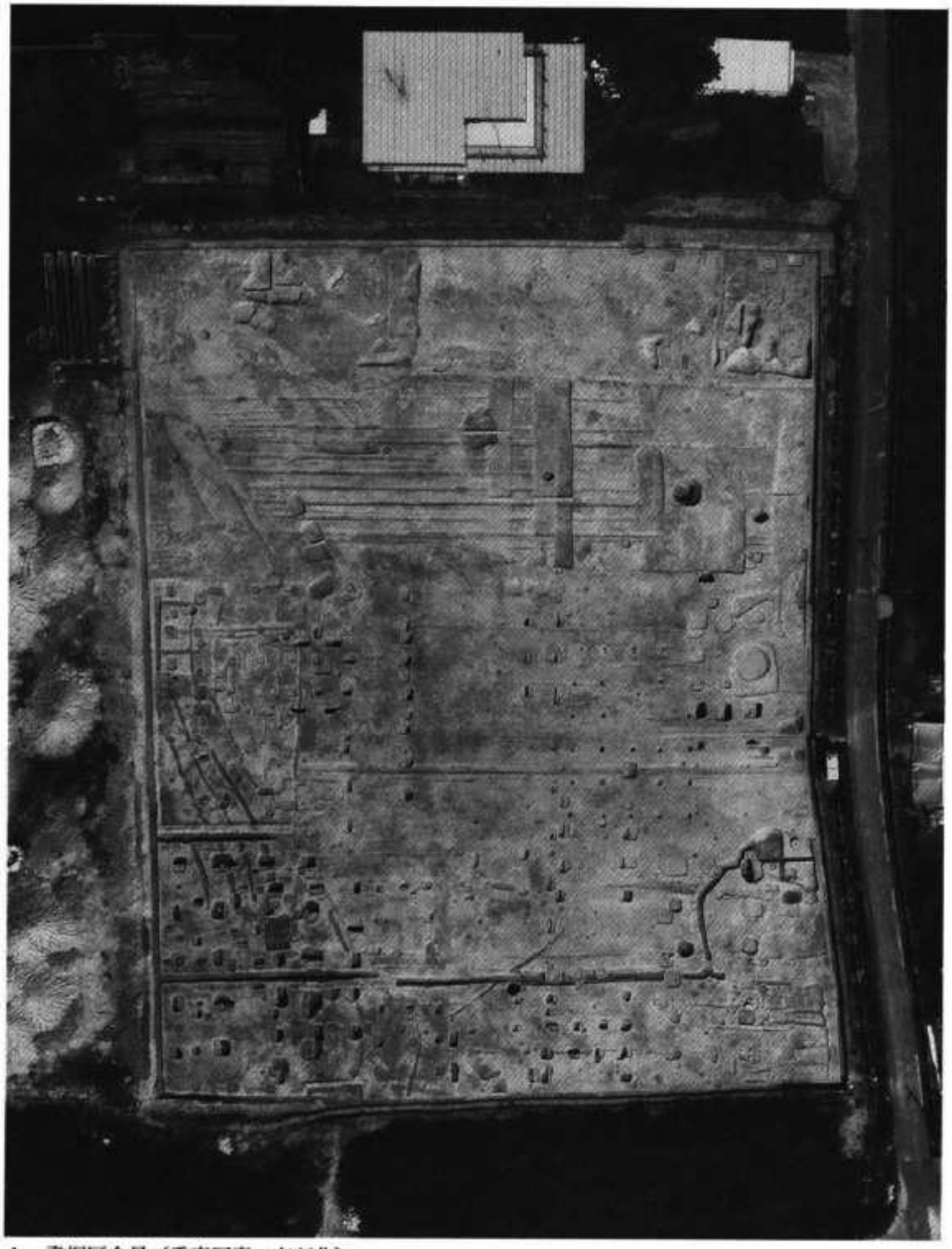


10　土坑ＳＫ08（南から）

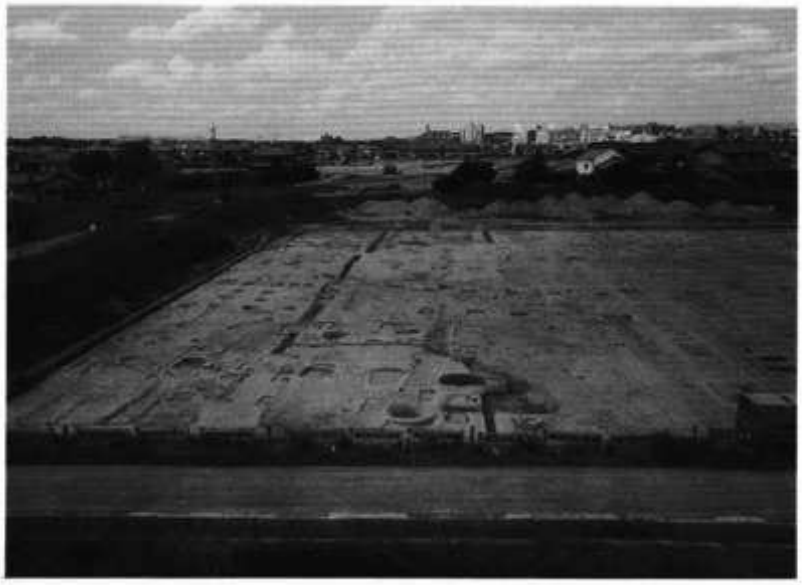
11　出土土器（古墳時代）



12　出土木簡（左：表　右：裏）



1　発掘区全景（垂直写真　左が北）



2　発掘区西半（南から）

3　発掘区東半（南から）

4　発掘区北西隅建物群
（南西から）

5　発掘区南東隅建物群（北から）

6　建物ＳＢ113・ＳＢ131・ＳＢ132　（西から）

7　建物ＳＢ113・ＳＢ131・ＳＢ132柱掘形（北から）

8　濠ＳＤ19
（垂直写真　上が北）

9　濠ＳＤ19（北東から）

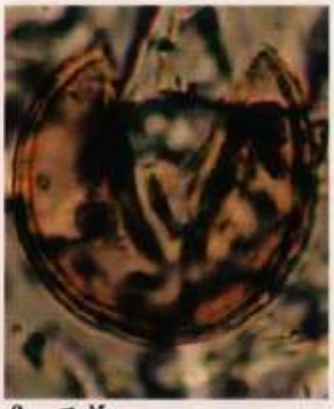
10　濠ＳＤ19（南西から）

11　土坑ＳＫ16（北から）

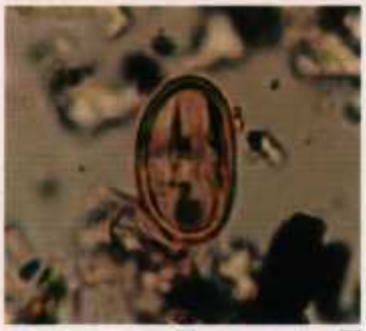
12　土坑ＳＫ170（北から）

13　土坑ＳＸ162（北から）

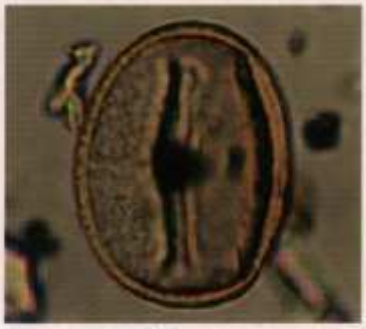
1　マツ属複維管束亜属


2　スギ

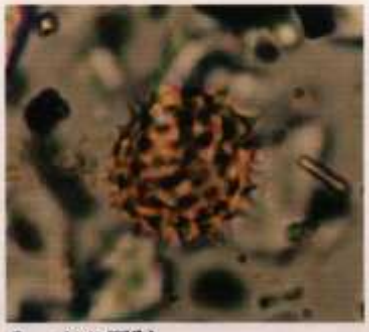
3　ソバ属


4　クリーシイ属―マチバシイ属

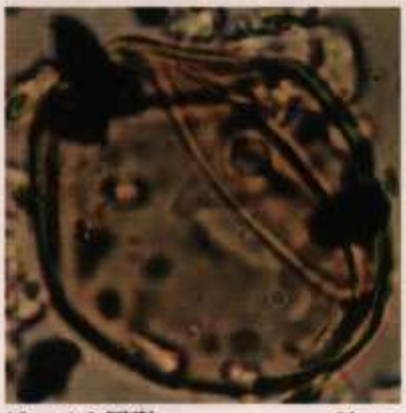
5　アカガシ亜属

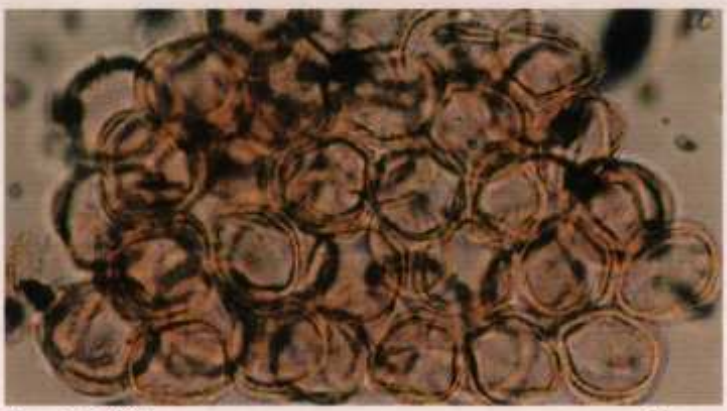

6　コナラ亜属

7　カヤツリグサ科


8　キク亜科

9　ヨモギ属


10　イネ属型 ―――― 20μm


11　ヨモギ属 ―――― 30μm

1　北発掘区全景（南から）

2　北発掘区全景（北西から）

3　北発掘区朱雀大路東側溝ＳＤ02（北から）

4　北発掘区土坑ＳＫ04（南から）

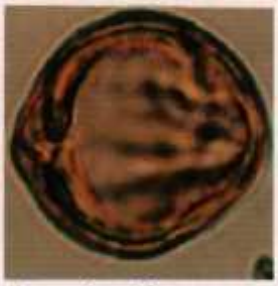
5　南発掘区全景（北から）

6　南発掘区朱雀大路東側溝ＳＤ02・ＳＤ03（北から）

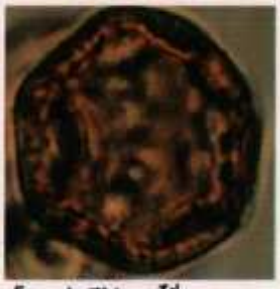
1 マツ属複維管束亜属 ―――― 50μm

2 カキノキ属

3 アカガシ亜属

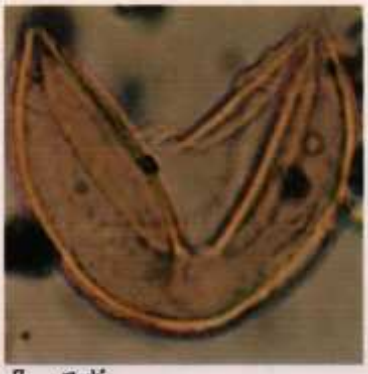


4 アカメガシワ

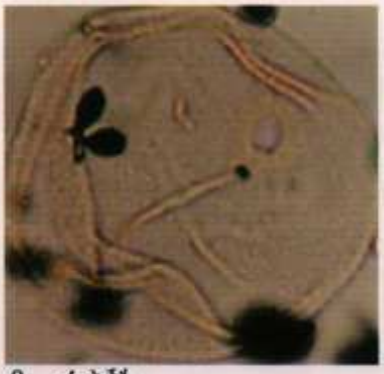


5 ナデシコ科

6 ヨモギ属



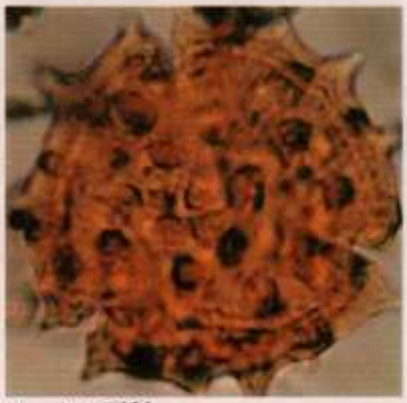
7 スギ



8 イネ科

9 オギノツメ

10 ソバ属



11 キク亜科

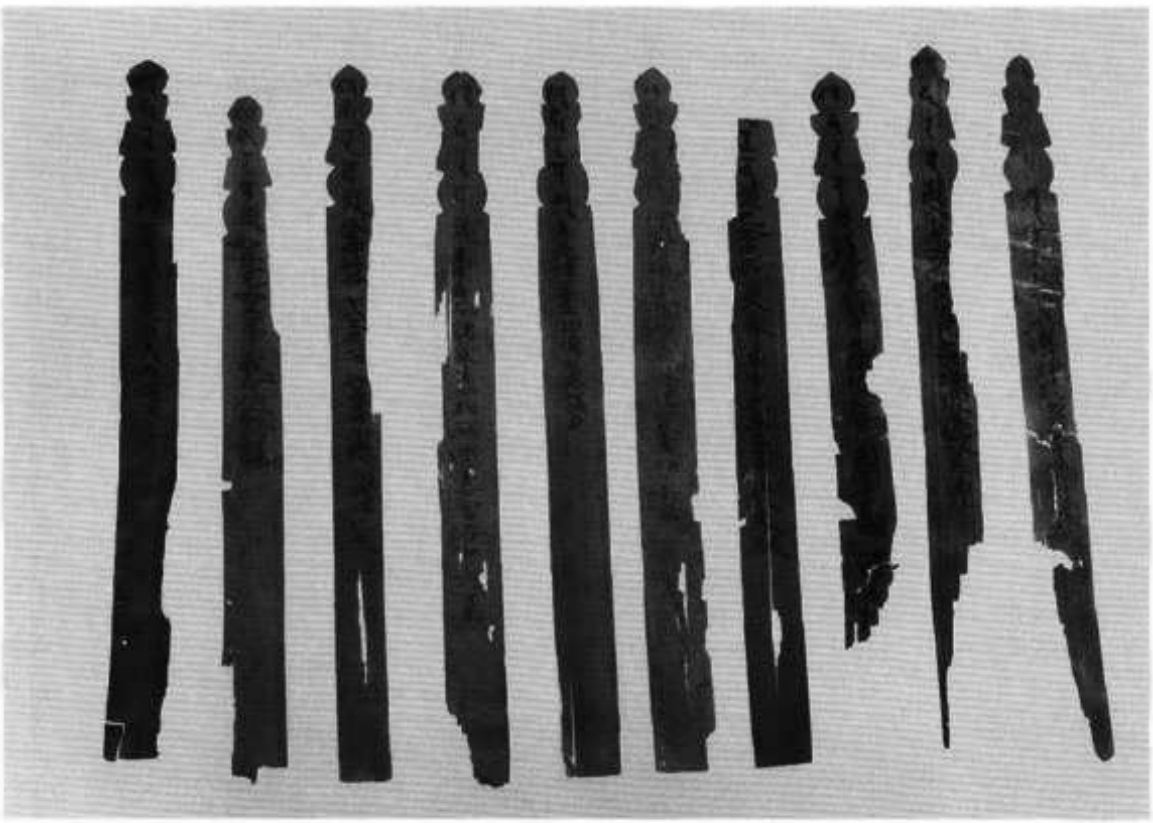
12 鞭虫卵

1　発掘区全景（北から）

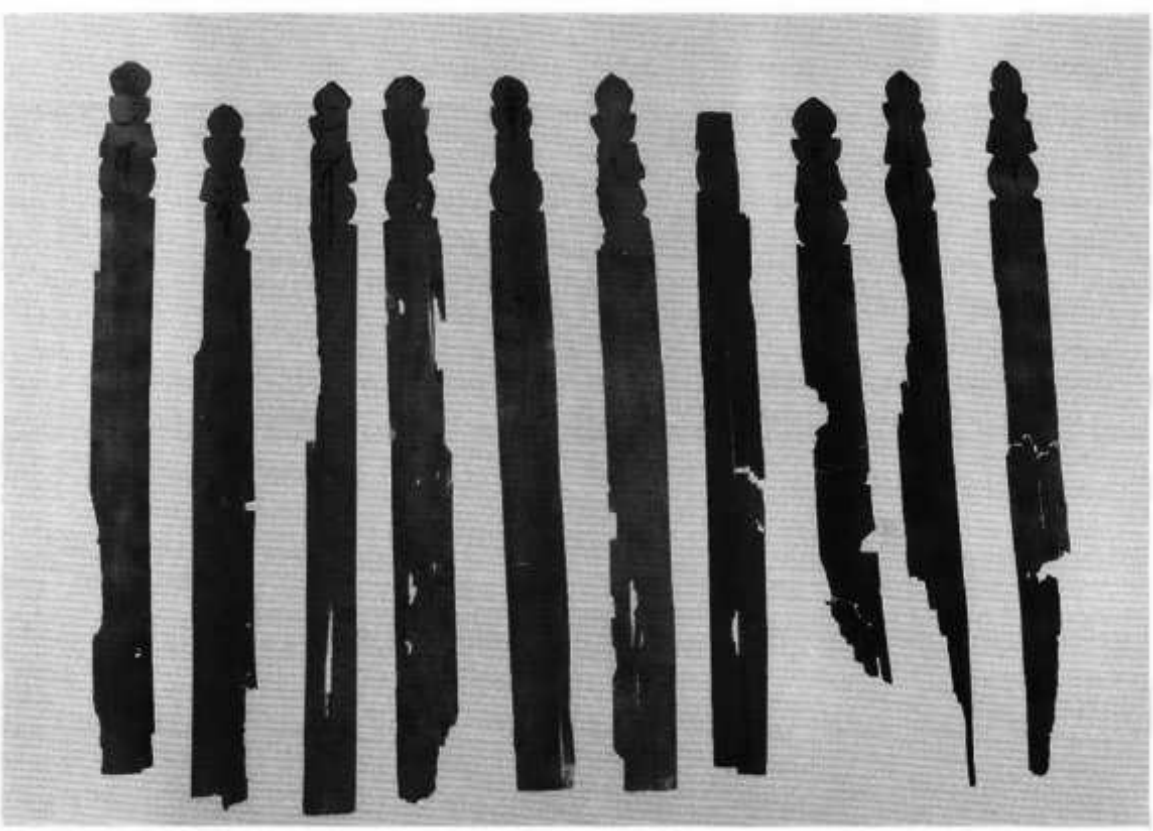
2　発掘区全景（南から）

3　建物ＳＢ02、土坑ＳＫ08（南から）

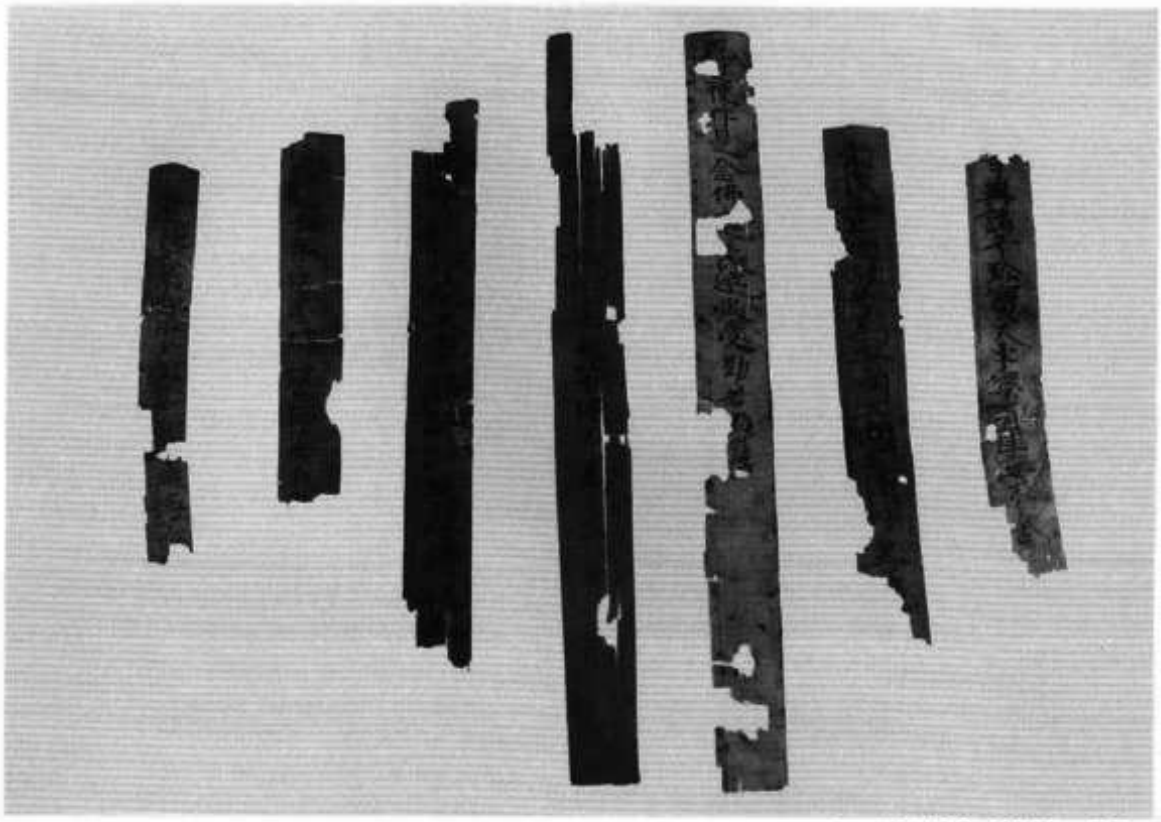
4　建物ＳＢ03、土坑ＳＫ09（南から）



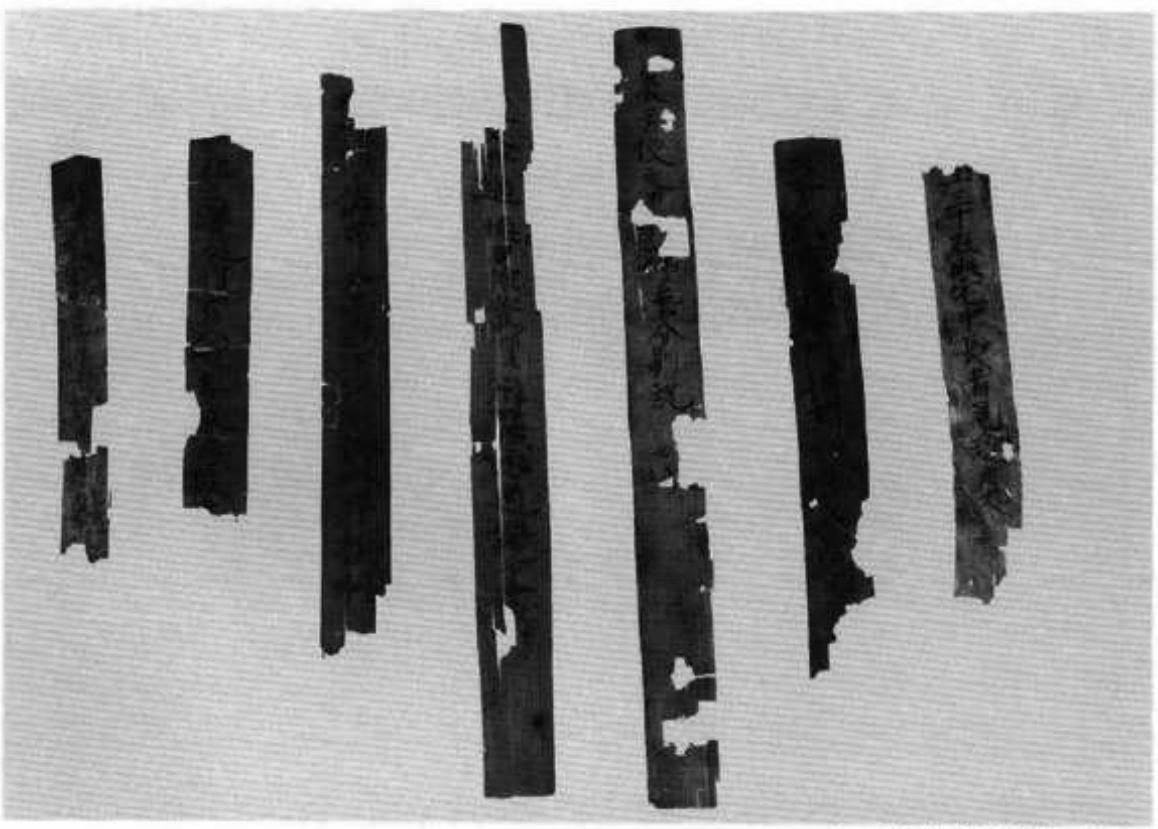
5　旧河道出土柿経1（表）



6　旧河道出土柿経1（裏）



7 旧河道出土柿経2（表）



8 旧河道出土柿経2（裏）

1　発掘区全景（北から）

2　発掘区全景（南から）

1　西発掘区全景（東から）

2　西発掘区全景（西から）